

青森市埋蔵文化財発掘調査報告書 第36集

桜峯(1)遺跡

発掘調査報告書

平成9年度

青森市教育委員会



桜峯 (1) 遺跡 (S → N)

序

青森市は、文化・産業の拠点として栄える、本県はもとより北東北の中核都市であります。遠く縄文時代から、我々の祖先が生活の舞台とし、数多くの文化が花開いたところでもあります。

当委員会では、国道103号横内バイパス道路改良工事事業の実施に先立ち、当該路線内に所在する桜峯（1）遺跡について、平成7、8年度の2ヵ年にわたり発掘調査を実施してまいりました。

調査の結果、竪穴式住居跡や土坑等を検出し、縄文時代前期末葉から中期初頭の集落跡の一部等を確認しており、本書はこれら調査成果をまとめたものであります。

本書が、今後、文化財の保護と活用にいささかでも役立つことができれば幸いと存じます。

最後になりましたが、調査実施から報告書作成作業にわたっての、調査員、関係機関並びに各位からのご指導、地元各町会からのご協力、さらに工事主体者であります青森県土木部のご理解に対しまして、厚くお礼申し上げます。

平成10年3月

青森市教育委員会

教育長 池 田 敬

例 言

1. 本書は、平成6年度に試掘調査及び、平成7年度と同8年度に発掘調査を実施した青森市大字横内字桜峯ほかに所在する桜峯(1)遺跡の発掘調査報告書である。なお、平成7年度、同8年度刊行の「桜峯(1)遺跡発掘調査概報」「桜峯(1)遺跡発掘調査概報Ⅱ」は、各年度の調査成果について速報的にまとめたものであり、記載内容については、本書が優先する。
2. 本遺跡の遺跡番号は01207である。
3. 本報告書の執筆ならびに編集は、青森市教育委員会が行い、執筆者名は依頼原稿では、文頭に、他は文末に記している。
4. 各遺構の計測値については長軸・短軸及び壁高については確認面を起点として、遺構内ピットについては床面・底面を起点とした計測値である。
5. 遺構番号は、各調査区毎の遺構の種別に検出順に番号を付した。
6. 図版番号及び表番号は、原則的に「第〇図」「第〇表」とし、順番に通し番号を付したが、依頼原稿については「図〇」「表〇」とし、個々に番号を付した。
7. 土層の注記については「新版標準土色帖」(小山正忠、竹原秀雄1993)に準拠した。
8. 挿図の縮尺は各図ごとに示し、各種遺構平面図での方位は磁北を示した。
9. 資料・試料の鑑定及び同定、分析について次の方々々に依頼した(敬称略、順不同)。

遺跡周辺の地形及び地質	青森県教育センター指導主事	工藤 一彌
石器の石質鑑定	〃	〃
火山灰、須恵器の胎土分析	奈良教育大学教授	三辻 利一
黒曜石の産地同定	京都大学原子炉実験所	藁科 哲男
放射性炭素年代測定	八戸工業大学助教授	村中 健
10. 引用・参考文献は巻末に収めている。文中で引用・参考にした文献については、文中に著者名、編集機関名と刊行西暦年で示している。なお、依頼原稿ではその都度文末に記している。
11. 発掘調査における出土遺物、実測図、写真等は、現在、青森市教育委員会で保管している。
12. 発掘調査及び報告書の作成にあたって次の各機関・各氏からご指導・ご教示・ご協力を賜った。記して感謝の意を表する。(順不同・敬称略)

青森県教育庁文化課・青森県埋蔵文化財調査センター・青森県立郷土館・秋田県埋蔵文化財センター・鹿角市教育委員会・京都大学原子炉実験所・札幌市立埋蔵文化財センター・富山県埋蔵文化財センター・奈良教育大学・能都町教育委員会・函館市教育委員会・八戸工業大学・八戸工業高等専門学校・氷見市立博物館・南部二区連合町会・南部四区連合町会・蝦名 純・大野 究・太田原潤・小笠原雅行・岡田康博・小山浩平・葛西 勵・加藤三千雄・木村鐵次郎・小島俊彰・小林 淳・斎藤岳・櫻田 隆・笹森一朗・佐藤智雄・鈴木 徹・高橋潤・茅野嘉雄・長尾正義・中嶋友文・中村哲也・成田滋彦・羽賀憲二・藤井安正・福田友之・古屋敷則雄・水田政雄

凡 例

1. 本報告書内で使用する、略称・表現方法・スクリーントーンは以下のとおりである。

(1) 図中で使用したアルファベット

P…土器 S…石器 c…文化遺物 LB…ロームブロック Pit…ピット

(2) 図中・表中で使用した略称

「第○号竪穴式住居跡」→「○住」

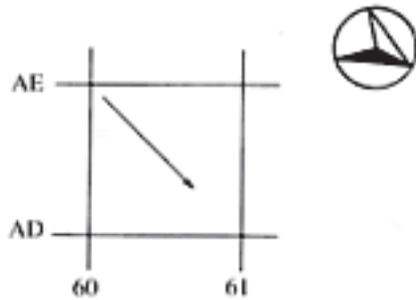
「第○号土坑」→「○土」

「第○号埋設土器遺構」→「○埋」

「第○号溝状遺構」→「○溝」

遺構内のピット番号と深さ「第○号ピット深さ 30cm」→「Pit ○ (ー 30)」

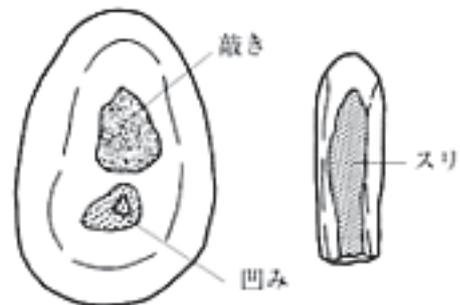
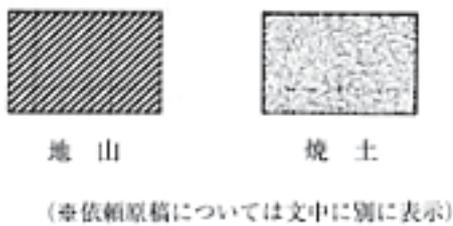
(3) グリッドの呼称 (例) AE - 60 グリッド



(4) 遺構及び石器で使用したスクリーントーン

[遺構でのスクリーントーン]

[石器でのスクリーントーン]



(5) 石器実測図については、A～J群については1/1.5、L～P群については1/4、Q群については1/8の縮尺とした。また、石器実測図の原礫面については、剥片石器においてはドットを用い、礫石器については、基本的に稜線を、平坦な面で稜線での表現が困難なものについてはドットを用いた。

(6) 観察表の中の石質の略称

「珪質頁岩」 → 「珪・頁」	「頁岩」 → 「頁」	「チャート」 → 「チャ」
「玉髓」 → 「玉」	「黒曜岩」 → 「黒」	「安山岩」 → 「安」
「流紋岩」 → 「流」	「石英安山岩」 → 「石・安」	「変朽安山岩」 → 「変・安」
「凝灰岩」 → 「凝」	「粘板岩」 → 「粘」	「輝緑凝灰岩」 → 「輝・凝」
「輝緑岩」 → 「輝」	「閃緑岩」 → 「閃」	「溶結凝灰岩」 → 「溶・凝」

2、遺物の分類

(1) 土器

本遺跡出土の土器は、次のとおりに分類した。

第Ⅰ群 縄文時代前期末葉～中期初頭に属する土器

- 1類 円筒下層 d₁ 式土器期に相当する資料
- 2類 円筒下層 d₂ 式～円筒上層 a₁ 式土器期に相当する資料

第Ⅱ群 縄文時代中期初頭～中葉に属する土器

- 1類 円筒上層 a₂ 式土器期に相当する資料
- 2類 円筒上層 c 式土器期に相当する資料

第Ⅲ群 縄文時代後期初頭～中葉に属する土器

- 1類 蛭沢3群・沖附(2) 式土器期に相当する資料
- 2類 十腰内ⅠA 式土器期に相当する資料
- 3類 十腰内ⅠB 式土器期に相当する資料
- 4類 十腰内Ⅱ 式土器期に相当する資料

第Ⅳ群 縄文時代晩期に属する土器

第Ⅴ群 続縄文時代に属する土器

第Ⅵ群 平安時代に属する土器

注. 出土土器の分類にあたっては、縄文時代前期・中期については江坂輝彌 1970『石神遺跡』、村越潔 1974『円筒土器文化』を、縄文時代後期については成田滋彦 1989「入江・十腰内式土器様式」『縄文土器大観』4を参考にした。

(2) 石器

石器の分類については、出土したすべての石器を村象とし、次のとおりに分類し、形態により細分した。

A群 石鏃

- 1類 凹基無茎鏃
- 2類 尖基有茎鏃
- 3類 平基有茎鏃
- 4類 凸基有茎鏃

B群 石槍

C群 石錐

- D群 石匙
 - 1類 縦型石匙
 - 2類 横型石匙
- E群 石篋
- F群 楔形石器
- G群 不定形石器
 - 1類 直線状の刃部を有するもの
 - 2類 弓状の刃部を有するもの
 - 3類 鋸歯状の刃部を有するもの
 - 4類 円形・方形の刃部を有するもの
 - 5類 不整形の刃部を有するもの
 - 6類 欠損により刃部形態の特定が困難なもの
- H群 縁辺に微細剥離を有しスクレイパーとして機能したと思われるもの
- I群 その他の剥片石器
- J群 石核
- K群 剥片
- L群 石斧
 - 1類 擦切り磨製石斧
 - 2類 1類以外のもの
- M群 敲磨器類
 - 1類 スリ痕、敲打痕、凹み痕をそれぞれ単独で有するもの
 - 2類 スリ痕、敲打痕、凹み痕を複合して有するもの
 - 3類 スリ痕とそれを打面とした剥離を有するもの
 - 4類 敲打痕とそれを打面とした剥離を有するもの
 - 5類 スリ痕、敲打痕とそれを打面とした剥離を有するもの
 - 6類 著しい擦痕を有するもの
- N群 半円状扁平打製石器あるいはそれに類似する形状のもの
 - 1類 扁平な礫を用いスリ幅の狭いもの
 - 2類 扁平な礫を用いスリ幅の比較的広いもの
 - 3類 厚みのある礫を用い剥離により底面の厚みを減じスリ面としているもの
 - 4類 底面にスリ面を有さないもの
- O群 擦切具
- P群 搬入礫
- Q群
 - 1類 石皿
 - 2類 台石

目 次

序	
例言	
凡例	
目次	
函版目次	
表目次	
第 I 章 調査の概要	
第 1 節 調査に至る経緯	1
第 2 節 調査要項	2
第 3 節 調査の方法	4
第 4 節 調査経過	5
第 II 章 遺跡の環境	
第 1 節 遺跡の位置	11
第 2 節 周辺の遺跡	12
第 3 節 遺跡周辺の地形と地質	15
第 4 節 基本層序	18
第 III 章 検出遺構と出土遺物	
第 1 節 A 区の調査	20
1. 土坑	20
2. 出土遺物	21
1) 土器	21
2) 石器	24
第 2 節 B 区の調査	25
1. 土坑	25
2. 溝状遺構	27
3. 出土遺物	29
1) 土器	29
2) 石器	34
3) 土製品	37
第 3 節 C 区の調査	38
1. 竪穴式住居跡	38
2. 土坑	70
3. 埋設土器遺構	112
4. 埋設土器遺構	123
5. 遺物集中ブロック	126
6. 出土遺物	140

1) 土器	140
2) 石器	150
3) 土製品	168
第4節 D区の調査	172
1. 出土遺物	172
1) 土器	172
2) 石器	172
第IV章 自然科学的分析	
桜峯(2)遺跡出土火山灰の蛍光X線分析	173
桜峯(1)遺跡出土火山灰と須恵器の蛍光X線分析	176
桜峯(1)遺跡出土の黒曜石製遺物の原材産地分析	179
放射性炭素年代測定結果報告	185
第V章 分析と考察	
北陸系土器(第I群2類g土器)について	186
出土石器の素材とされた岩石の分布について	191
半円状扁平打製石器の機能面について	193
搬入礫について	197
十腰内I式土器に伴う垂飾品について	198
まとめ	200
引用・参考文献	202
写真図版	203

図版目次

第1図	グリッド配置図	7
第2図	遺構配置図1	8
第3図	遺構配置図2	9
第4図	遺構配置図3(C区拡大)	10
第5図	遺跡位置図	11
第6図	桜峯(1)遺跡周辺の遺跡位置	14
第7図	基本層序	19
第8図	A区第1号土坑及び出土土器	20
第9図	A区遺構外出土土器1	22
第10図	A区遺構外出土土器2	23
第11図	A区遺構外出土石器	24
第12図	B区第1～3号土坑及び出土土器・土製品	26
第13図	B区第1号溝状遺構	28
第14図	B区遺構外出土土器1	31
第15図	B区遺構外出土土器2	32
第16図	B区遺構外出土石器1	35
第17図	B区遺構外出土石器2	36
第18図	C区第1号竪穴式住居跡	39
第19図	C区第1号竪穴式住居跡出土土器・土製品	40
第20図	C区第2号竪穴式住居跡	43
第21図	C区第2号竪穴式住居跡出土土器1	45
第22図	C区第2号竪穴式住居跡出土土器2	46
第23図	C区第2号竪穴式住居跡出土石器	47
第24図	C区第3・4号竪穴式住居跡	49
第25図	C区第3号竪穴式住居跡出土土器1	51
第26図	C区第3号竪穴式住居跡出土土器2	52
第27図	C区第3号竪穴式住居跡出土土器3	53
第28図	C区第3号竪穴式住居跡出土土器4	54
第29図	C区第3号竪穴式住居跡出土土器5・石器1	55
第30図	C区第3号竪穴式住居跡出土石器2	56
第31図	C区第4号竪穴式住居跡出土土器・石器	58
第32図	C区第5・6号竪穴式住居跡	60
第33図	C区第5号竪穴式住居跡出土土器	61
第34図	C区第6号竪穴式住居跡出土土器1	62
第35図	C区第6号竪穴式住居跡出土土器2	63
第36図	C区第6号竪穴式住居跡出土土器3・石器・土製品	64

第 37 図	C 区第 7 号竪穴式住居跡	66
第 38 図	C 区第 7 号竪穴式住居跡出土土器 1	67
第 39 図	C 区第 7 号竪穴式住居跡出土土器 2	68
第 40 図	C 区第 7 号竪穴式住居跡出土石器	69
第 41 図	C 区第 1～4 号土坑	86
第 42 図	C 区第 5～8 号土坑	87
第 43 図	C 区第 9～12 号土坑	88
第 44 図	C 区第 22～25 号土坑	89
第 45 図	C 区第 28～30 号土坑	90
第 46 図	C 区第 32・34・35 号土坑	91
第 47 図	C 区第 36・41・45 号土坑	92
第 48 図	C 区第 46・48～51 号土坑	93
第 49 図	C 区第 52～54 号土坑	94
第 50 図	C 区第 55～57 号土坑	95
第 51 図	C 区第 59～61・65・66 号土坑	96
第 52 図	C 区第 67～70 号土坑	97
第 53 図	C 区第 71～74・81 号土坑	98
第 54 図	C 区土坑出土土器 1	99
第 55 図	C 区土坑出土土器 2	100
第 56 図	C 区土坑出土土器 3	101
第 57 図	C 区土坑出土土器 4	102
第 58 図	C 区土坑出土土器 5	103
第 59 図	C 区土坑出土土器 6	104
第 60 図	C 区土坑出土土器 7	105
第 61 図	C 区土坑出土石器 1	107
第 62 図	C 区土坑出土石器 2	108
第 63 図	C 区土坑出土石器 3	109
第 64 図	C 区土坑出土石器 4	110
第 65 図	C 区土坑出土土製品	111
第 66 図	C 区埋設土器遺構	115
第 67 図	C 区第 1 号埋設土器遺構出土土器・石器	116
第 68 図	C 区第 2・3 号埋設土器遺構出土土器	117
第 69 図	C 区第 4 号埋設土器遺構出土土器	118
第 70 図	C 区第 5・6 号埋設土器遺構出土土器	119
第 71 図	C 区第 7・8 号埋設土器遺構出土土器	120
第 72 図	C 区第 10・16 号埋設土器遺構出土土器	121
第 73 図	C 区第 13 号埋設土器遺構出土土器	122
第 74 図	C 区柱穴状ピット	124

第 75 図	C 区柱穴状ピット及び出土土器	125
第 76 図	C 区遺物集中ブロック出土土器 1	127
第 77 図	C 区遺物集中ブロック出土土器 2	128
第 78 図	C 区遺物集中ブロック出土土器 3	129
第 79 図	C 区遺物集中ブロック出土土器 4	130
第 80 図	C 区遺物集中ブロック出土土器 5	131
第 81 図	C 区遺物集中ブロック出土土器 6	132
第 82 図	C 区遺物集中ブロック出土土器 7	133
第 83 図	C 区遺物集中ブロック出土石器 1	135
第 84 図	C 区遺物集中ブロック出土石器 2	136
第 85 図	C 区遺物集中ブロック出土石器 3	137
第 86 図	C 区遺物集中ブロック出土石器 4	138
第 87 図	C 区遺物集中ブロック出土土製品	139
第 88 図	C 区遺構外出土土器 1	144
第 89 図	C 区遺構外出土土器 2	145
第 90 図	C 区遺構外出土土器 3	146
第 91 図	C 区遺構外出土土器 4	147
第 92 図	C 区遺構外出土土器 5	148
第 93 図	C 区遺構外出土石器 1	155
第 94 図	C 区遺構外出土石器 2	156
第 95 図	C 区遺構外出土石器 3	157
第 96 図	C 区遺構外出土石器 4	158
第 97 図	C 区遺構外出土石器 5	159
第 98 図	C 区遺構外出土石器 6	160
第 99 図	C 区遺構外出土石器 7	161
第 100 図	C 区遺構外出土石器 8	162
第 101 図	C 区遺構外出土石器 9	163
第 102 図	C 区遺構外出土石器 10	164
第 103 図	C 区遺構外出土石器 11	165
第 104 図	C 区遺構外出土石器 12	166
第 105 図	C 区遺構外出土石器 1	170
第 106 図	C 区遺構外出土土器・石器	172
第 107 図	文様の要素及び施文の順序	187
第 108 図	石質組成比	191
第 109 図	スリ面残存状況	195
第 110 図	スリ面と剥離の新旧関係	196

表 目 次

第 1 表	周辺の遺跡	13
第 2 表	A区第 1 号土坑出土土器観察表	20
第 3 表	A区遺構外出土土器観察表	23
第 4 表	A区遺構外出土石器観察表	24
第 5 表	B区第 1 号土坑出土土器観察表	27
第 6 表	B区第 2 号土坑出土土器観察表	27
第 7 表	B区遺構外出土土器観察表	33
第 8 表	B区遺構外出土石器観察表	36
第 9 表	C区第 1 号竪穴式住居跡出土土器観察表	40
第 10 表	C区第 1 号竪穴式住居跡出土土製品観察表	40
第 11 表	C区第 2 号竪穴式住居跡出土土器観察表 1	45
第 12 表	C区第 2 号竪穴式住居跡出土土器観察表 2	46
第 13 表	C区第 2 号竪穴式住居跡出土石器観察表	47
第 14 表	C区第 3 号竪穴式住居跡出土土器観察表 1	51
第 15 表	C区第 3 号竪穴式住居跡出土土器観察表 2	52
第 16 表	C区第 3 号竪穴式住居跡出土土器観察表 3	53
第 17 表	C区第 3 号竪穴式住居跡出土土器観察表 4	54
第 18 表	C区第 3 号竪穴式住居跡出土土器観察表 5	55
第 19 表	C区第 3 号竪穴式住居跡出土石器観察表	57
第 20 表	C区第 4 号竪穴式住居跡出土土器観察表	58
第 21 表	C区第 4 号竪穴式住居跡出土石器観察表	58
第 22 表	C区第 5 号竪穴式住居跡出土土器観察表	61
第 23 表	C区第 6 号竪穴式住居跡出土土器観察表 1	62
第 24 表	C区第 6 号竪穴式住居跡出土土器観察表 2	63
第 25 表	C区第 6 号竪穴式住居跡出土土器観察表 3	64
第 26 表	C区第 6 号竪穴式住居跡出土石器観察表	64
第 27 表	C区第 6 号竪穴式住居跡出土土製品観察表	64
第 28 表	C区第 7 号竪穴式住居跡出土土器観察表 1	67
第 29 表	C区第 7 号竪穴式住居跡出土土器観察表 2	68
第 30 表	C区第 7 号竪穴式住居跡出土石器観察表	69
第 31 表	C区土坑出土土器観察表	106
第 32 表	C区土坑出土石器観察表	110
第 33 表	C区土坑出土土製品観察表	111
第 34 表	C区第 1 号埋設土器遺構出土土器観察表	116
第 35 表	C区第 1 号埋設土器遺構出土石器観察表	116
第 36 表	C区第 2・3 号埋設土器遺構出土土器観察表	117

第 37 表	C 区第 4 号埋設土器遺構出土土器観察表	118
第 38 表	C 区第 5・6 号埋設土器遺構出土土器観察表	119
第 39 表	C 区第 7・8 号埋設土器遺構出土土器観察表	120
第 40 表	C 区第 10・16 号埋設土器遺構出土土器観察表	121
第 41 表	C 区第 13 号埋設土器遺構出土土器観察表	122
第 42 表	C 区柱穴状ピット観察表	123
第 43 表	C 区柱穴状ピット出土土器観察表	125
第 44 表	C 区遺物集中ブロック出土土器観察表	134
第 45 表	C 区遺物集中ブロック出土石器観察表	139
第 46 表	C 区遺物集中ブロック出土土製品観察表	139
第 47 表	C 区遺構外出土土器観察表	149
第 48 表	C 区遺構外出土石器観察表 1	166
第 49 表	C 区遺構外出土石器観察表 2	167
第 50 表	C 区遺構外出土土製品観察表	171
第 51 表	D 区遺構外出土土器観察表	172
第 52 表	D 区遺構外出土石器観察表	172

第 I 章 調査の概要

第 1 節 調査に至る経過

「八甲田・十和田ゴールドライン」とも呼ばれる国道 103 号は、青森市を起点とし、八甲田・十和田湖を経由し秋田県大館市まで続く、いわば観光のメインストリートである。路線、いくつかある交差点の中でも、市内から幸畑・野木・雲谷方面へと分岐する通称横内十文字は、郊外住宅地の拡大に伴い朝夕に交通渋滞が起り、通勤・通学等へ支障をきたしていた。

このような状況のもと、青森県土木部（以下県土木部とする）は、交通渋滞の解消、さらには青森公立大学へのアクセスの利便性向上のため、国道 103 号横内バイパス建設を計画し、既に一部完工・供給を開始している。

県土木部は、残る建設予定地内についても、県教育委員会に対し埋蔵文化財の所在の有無の確認を行った。

これを受けた県教育庁文化課（以下県文化課とする）は、当委員会とともに区間内での遺跡の所在について分布調査を実施したところ、数地点において遺物の散布地を確認した。そこで、県文化課は、県土木部と協議し、遺物の散布が薄い地点について遺跡の所在確認のために試掘調査を実施した。その結果、トレンチから縄文時代前・中・後期の土器が出土するとともに遺構が検出され、その地点を埋蔵文化財包蔵地であるとして桜峯(2)遺跡（遺跡番号01208）として登録した。同時に他方の散布地についても桜峯(1)遺跡（遺跡番号01207）として登録した（青森県教育委員会 1994、青森市教育委員会 1994）。改めて県文化課は、県土木部への試掘調査結果の報告ならびに協議の結果、区間内に所在する遺跡の発掘調査による記録保存が図られることになった。

しかしながら、発掘調査の実施にあたって、当初調査を担当する予定であった県教育委員会では激増する調査件数のため対応不可能という状況であったことから、県土木部と県文化課との協議により工事の遅延を避けるため遺跡所在地の管轄である青森市教育委員会に調査を依頼することとなった。

そこで、県土木部では、平成 5 年 12 月 9 日付青道建第 358 号「平成 6 年度国道 103 号横内バイパス道路改良事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査について（依頼）」において当市教育委員会へ調査を依頼した。

これを受け当委員会では、県土木部と県文化課との両者から経緯の説明を受け、当該路線の早期完成の趣旨を検討するとともに、当委員会における他の調査事業との調整を図った結果、文化財保護と開発事業の円滑な調整を図るため調査依頼を受託することとなり、平成 5 年 12 月 20 日付青市教委社第 439 号において県土木部へ受託の旨を回答した。

それにより、平成 6 年度に試掘区域、全面発掘区域とに分かれる桜峯(2)遺跡の調査と試掘先行全面発掘の調査である桜峯(1)遺跡の一部の調査を実施し、桜峯(2)遺跡からは縄文時代中期を主体とする遺構・遺物が検出された（青森市教育委員会 1995『桜峯(2)遺跡発掘調査報告書』）。

桜峯(1)遺跡については引き続き平成 7・8 年度の両年度にわたり発掘調査を実施することとした。

（木村淳一）

第2節 調査要項

1. 調査目的

国道103号道路改良工事に先立ち、予定地内に所在する埋蔵文化財包蔵地の発掘調査を実施し、遺跡の記録保存を図り、地域社会の文化財の活用に資する。

2. 遺跡名及び所在地

桜峯(1)遺跡

青森市大字横内字桜峯81-10ほか

3. 事業実施期間

平成7年5月2日～平成8年3月19日

(発掘調査期間 平成7年5月15日～平成7年10月31日)

平成8年4月8日～平成9年3月25日

(発掘調査期間 平成8年5月13日～平成8年10月25日)

平成9年6月16日、平成9年3月20日

4. 調査対象面積

12,000m² (調査実施面積 12,343m²)

5. 調査委託者

青森県土木部

6. 調査受託者

青森市教育委員会

7. 調査担当機関

青森市教育委員会生涯学習部社会教育課埋蔵文化財対策室

8. 調査協力機関

青森県教育庁文化課

9. 調査体制

調査指導員	村越 潔	青森大学考古学研究所所長兼教授	(考古学)
調査員	小山 陽造	八戸工業高等専門学校名誉教授	(分析化学)
	高島 成侑	八戸工業大学教授	(建築史学)
	市川 金丸	青森県考古学会会長	(考古学)
	赤沼 英男	岩手県立博物館主任専門学芸員	(保存科学)

調 査 員	工 藤 一 彌	青森県立弘前高等学校教諭 (現青森県教育センター指導主事)	(地質学)
〃	長 崎 勝 巳	青森市立久栗坂小学校教諭 (現青森市立長島小学校教諭)	(考古学)
〃	徳 差 義 男	青森市立浪打小学校教諭	(考古学)
調査協力員	今 正 秀	南部二区連合町会長	
〃	白 鳥 弘 明	南部四区連合町会長	
調査事務局	青森市教育委員会		
	教 育 長	池 田 敬	
	生涯学習部長	矢 野 順 平 (現 青森市総務部長)	
		永 井 勇 司	
	社会教育課長	津 川 久 善 (現 青森市総務課参事兼課長事務取扱)	
		山 田 章	
	埋蔵文化財対策室長	遠 藤 正 夫	
	室長補佐兼埋蔵文化財係長	川 村 省 三 (現 青森市勤労青少年ホーム館長)	
	室 長 補 佐	福 士 敦	
	埋蔵文化財係長	石 岡 義 文	
	主 査	武 田 均 (現 青森市産業振興課主査)	
	指 導 主 事	長 沼 圭 一 (調査担当、現 大野小学校教諭)	
	主 事	田 澤 淳 逸	
	〃	上 野 隆 博 (現 青森市都市整備課主事)	
	〃	小 野 貴 之 (調査担当)	
	〃	木 村 淳 一 (〃)	
	〃	児 玉 大 成	
	〃	沼宮内 陽一郎 (〃)	
	〃	設 楽 政 健	

第3節 調査の方法

グリッドの設定は、工事用中心杭No. 3540 と No. 3600 とを結ぶ直線を調査区長軸方向の基準線（AEライン）とし、工事用中心杭No. 3600 でこれに直交する線を短軸方向の基準線（60ライン）として、調査区域に4m×4mのグリッドを組んだ。

グリッド杭の表示は、工事用中心杭No. 3600（AE－60）を起点として、北へ61、62、63…、南へ59、58、57…、の順に算用数字を付し、また、東へAD、AC、AB…、西へAF、AG、AH…、の順にA～Tまでを組み合わせ、アルファベットを付した。

各グリッドの呼称は、アルファベットと算用数字を組み合わせで示した（凡例参照）。具体的には南西隅のグリッド杭の表示によるものとした。南北方向の調査区長軸の基準線は磁北より西偏27°である。

なお、桜峯(1)遺跡は、平成6年度に青森市教育委員会が発掘調査を実施した桜峯(2)遺跡発掘調査と並行し、一部試掘調査を実施している。試掘調査時におけるグリッドの設定は、桜峯(2)遺跡での設定を拡張するものであったが、桜峯(1)遺跡の直線的な調査区に対し、若干不都合であること、及び、試掘調査実施範囲がさほど広範でなく、試掘調査における、遺物の出土がごく僅かであったことから、平成7年度の全面調査開始時点において上記のようにグリッド設定の変更を行った。

調査区域での測量原点（B.M.）は、水準点（標高117.24m）を基準とし、ここから原点移動を行い、標高121.000mの原点（B.M.1）を設置した。これを基準として調査区全域に対処するため適宜十数箇所に設置した。

調査対象区域は約700mの長さに渡るため、便宜上、南からA、B、C、Dの4区に分け呼称することとした。B区、C区については、全面調査を原則として実施したが、南北の調査区端にあたるA区、D区においては、遺跡の縁辺部にあたるため、試掘調査を先行した。また、調査区内で盛土等により、原地形が不明な地点においては、トレンチを設定し、状況の把握に努めた。

粗掘りは、土層の堆積状況を観察するため、適宜セクションベルトを設定し、グリッド単位で調査にあたった。近現代の盛土等については一部重機を併用した。なお、同じく土層の堆積状況を観察するため、調査各区において、適宜、深掘のグリッドを設定した。

遺物の取り上げについては、遺構内は、必要に応じて微細図、分布図等を作成し、遺構外は、適宜位置、標高を記録し、それ以外については各層一括で取り上げた。

遺構の精査は、原則として竪穴式住居跡は四分法を、土坑等では二分法を用いることとした。

実測は、基本的に簡易遣り方測量で行い、必要に応じ平板測量も行った。縮尺は20分の1を原則とし、微細図に関しては10分の1とした。

写真撮影は、主として35mmのモノクロームとカラーリバーサル各フィルムを併用し、作業の進展に伴い必要に応じて行った。

（小野貴之）

第4節 調査経過

桜峯(1)遺跡の発掘調査は平成7年5月15日から開始した。未買収の調査区が多く、調査開始当初は、B区のほぼ南半分とC区の西半分が実際に調査にあたる個所であった。

初日は器材運搬と器材の整理を行い、翌16日、平成6年度に一部試掘を実施していたB区から調査にあたることとし、草刈り等環境整備とグリッド設定の後、粗掘りを開始した。

調査区周辺には適当な排土置場を確保できなかったため、B区調査区内の南北に2カ所、一時の排土置場を設け、中央部から調査にあたった。粗掘りの進行に伴い土器片等の遺物が出土し始めたが小破片が点在する状況であった。22日、土坑を確認し、精査にあたった。

6月に入って、C区の伐採が終了した。先行していたB区の調査と併せ、以後B、C区の調査を並行しておこなった。C区は、付近の地形と異なり、不自然に平坦であったため、原地形等、状況把握のためトレンチを設定し、掘り下げた。

掘り下げるに伴い、およそ103ライン以南のC区の大部分は、第IV層、第V層まで削平を受けていること、またその上に20～40cm、近現代の盛土を確認した。特に88ライン付近は小さい沢状の地形で、最大の比高差は約2mに及び、コンクリートブロック等の廃材が大量に廃棄されていた。人員での盛土の除去は困難と思われたため、重機によりC区の盛土を除去した。

B区は、中央部を主体に粗掘りを進行した。中旬に、2基目の土坑を確認し、精査を進めた。

6月下旬、B区中央の粗掘りが終了し、重機により排土移動を行い、現道の東側の調査に取り掛かった。トレンチを設定し、掘り下げると、ほぼ全体に、機械によると思われる削平を確認した。遺構確認のため、一部、重機を用い粗掘りを進めた。

7月から8月に渡ってB区残部分の粗掘りを進めた。現道の東側調査区では調査区端で断面形がフラスコ状を呈する土坑を1基検出した。

C区は、盛土されていなかった北側斜面にトレンチを設定し、堆積状況を確認した後、粗掘りを開始した。調査区脇の畑で遺物が大量に見られることから、ある程度の遺物の出土が予想されていた。掘り下げると横転し、潰れた状態で出土するものや、同一個体と思われる土器片がまとまり出土する状況を確認した。また埋設土器遺構も確認された。

8月上旬には、住居跡を確認し精査を開始した。B区と比較し、遺構、遺物とも濃密に分布する可能性が高いと思われたため、遺構の見落としがないよう、トレンチを設定し、掘り下げることとした。

盆休み後の8月下旬、トレンチより土坑を確認した。周囲の盛土の除去が不十分と思われたため、盛土を除去したところ、遺構と予想される落込みが点々と現れてきたため、精査に取り掛かった。大半がフラスコ状、袋状を呈する土坑であった。

9、10月はB区の残部の粗掘りと、C区の遺構精査を続行した。

10月1日には、現地見学会を開催した。

10月31日 平成7年度における現地での発掘調査を終了した。検出遺構数は、竪穴式住居跡1軒、土坑30基、埋設土器遺構8基であった。出土遺物量は段ボール換算で約50箱であった。

平成8年度は5月13日から発掘調査を開始した。初日は器材運搬及び整理を行い、B、C区のAEラインを中心としてグリッド杭の杭打ちを開始した。

翌14日、草刈り等環境整備をおこなった。また同日、委託者側と調査面積や調査範囲の変更等について打ち合わせを行った。特に調査区内を走る現道部分の調査については付近の状況を把握して判断することとした。

15日からB区北側の未調査部分について粗掘りを開始した。

5月下旬、A区の杭打ちの後、試掘箇所を設定し、粗掘りを開始した。C区の残る東側については、昨年度の調査で削平、盛土の状況がある程度予測されていたので、調査区東端の状況を確認した後、重機により盛土を除去した。以後、ABC各区の調査を並行しておこなった。

6月下旬にはD区の伐採と上物の処理が終了したので、7月上旬からB.M. 設定等行い、中旬から試掘を開始した。

7月下旬、現道部分の状況を把握するためA区の道路際に試掘箇所を設定した。粗掘りの結果、道路面以下1.5～2mは工事の際、盛土されていたことがわかった。

8月8日、県土木部、青森土木事務所、県文化課、調査指導員、調査員、事務局が一同に会して、調査打ち合わせ会議を開催した。

打ち合わせ会議において、A区は全面調査することとし、現在の道路下部分については、工事が道路下の盛土の範囲内で行われるため、調査を実施しないこととした。

8月下旬、A区で土坑を1基確認し、精査を進めた。

9月6日にはB区の粗掘りが終了した。

9月上旬、C区は、遺構精査から遺物集中ブロックの未調査部分に重点を移した。D区北半は、盛土されている事を確認したので、南半部分の試掘を進めた。C・D区間の谷状の地形に上位層が流れ込んでいると思われ、10～20cm掘り下げると、ローム層が現れた。

9月下旬、A区の粗掘りを終了した。

10月に入り、C区の残る遺構精査と遺物集中ブロックの遺物の取り上げが主体となった。

D区に関して粗掘りを進めたが、遺構は確認できなかった。また出土遺物も土器片が数片出土したに留まった。

9月1日、現地見学会を開催した。生憎の雨天であったが、約30名が訪れた。

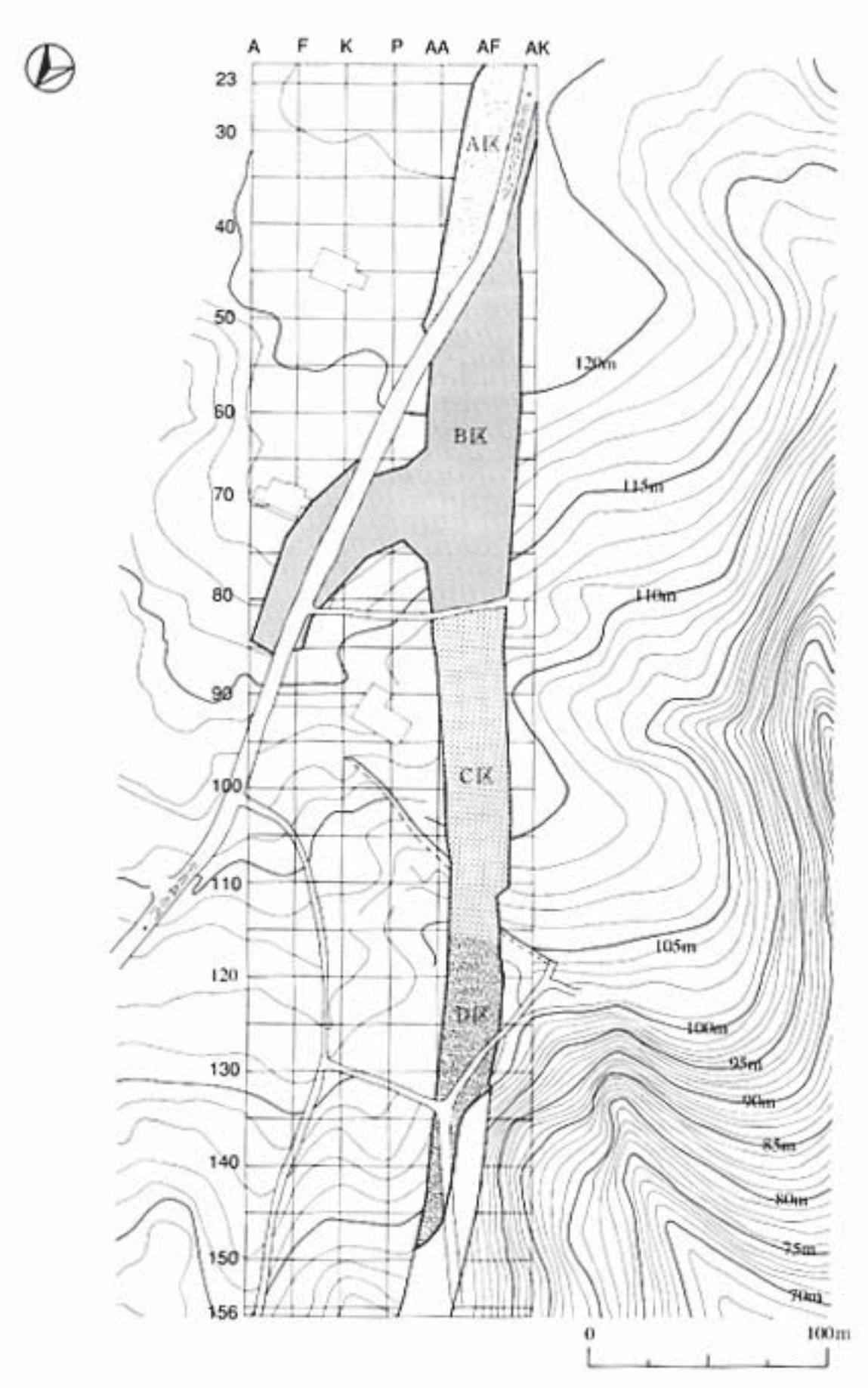
10月25日現地での発掘調査を終了した。

平成8年度の検出遺構数は、竪穴式住居跡6軒、土坑24基、埋設土器遺構3基であった。

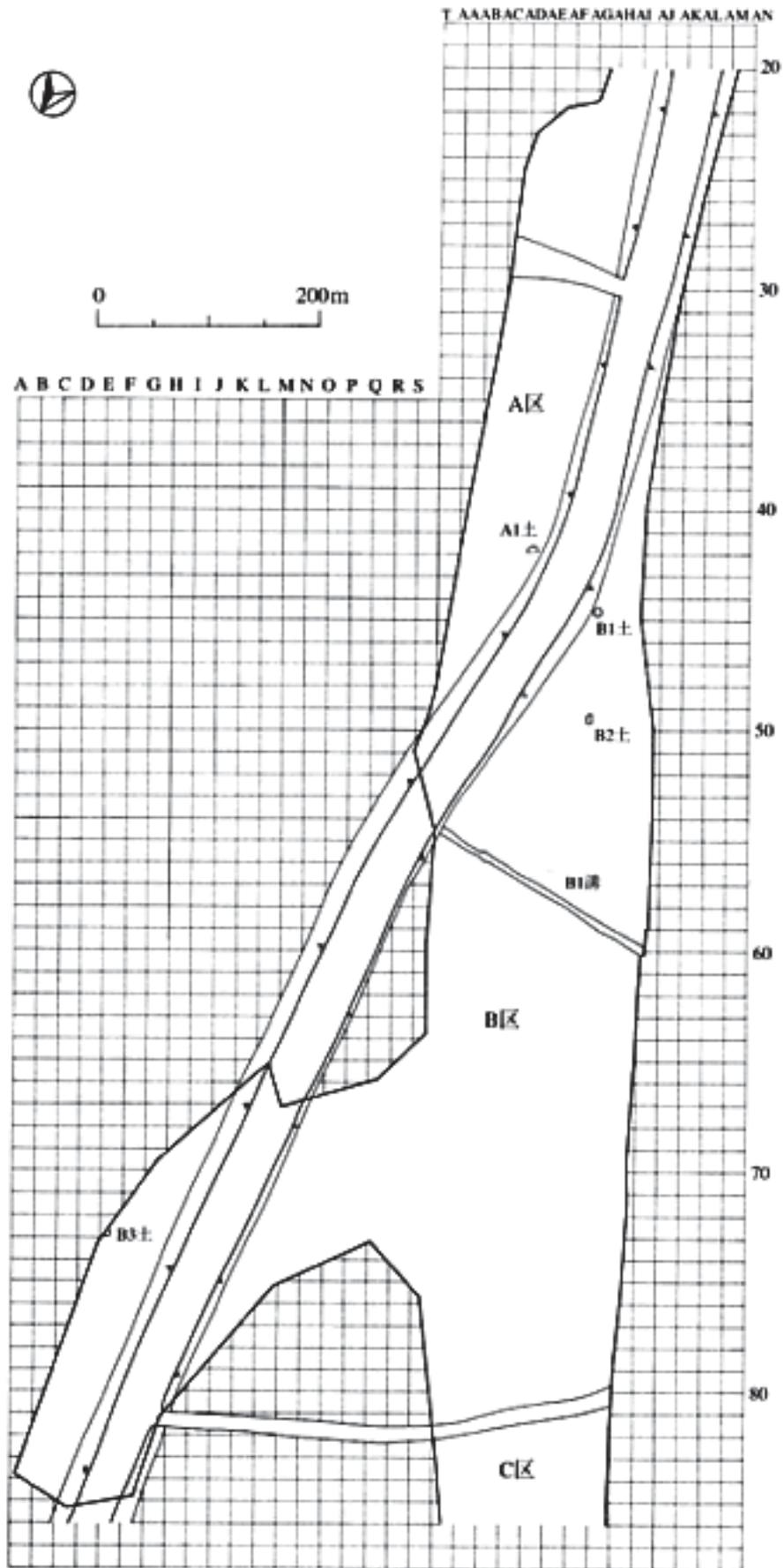
出土遺物は段ボール換算で約50箱であった。

平成7・8年、2ヵ年での検出遺構の総数は、竪穴式住居跡7軒、土坑54基、埋設土器遺構11基、柱穴状ピット20基、遺物集中ブロック1、溝状遺構1条で総出土遺物量は段ボール換算で約100箱である。

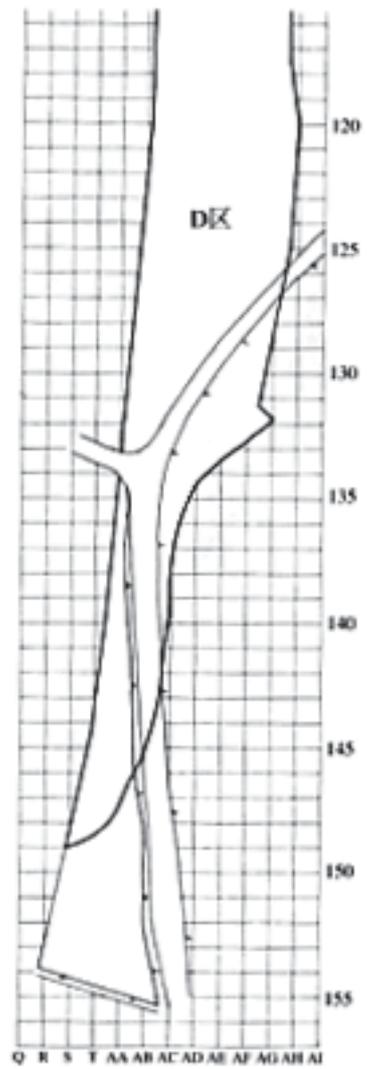
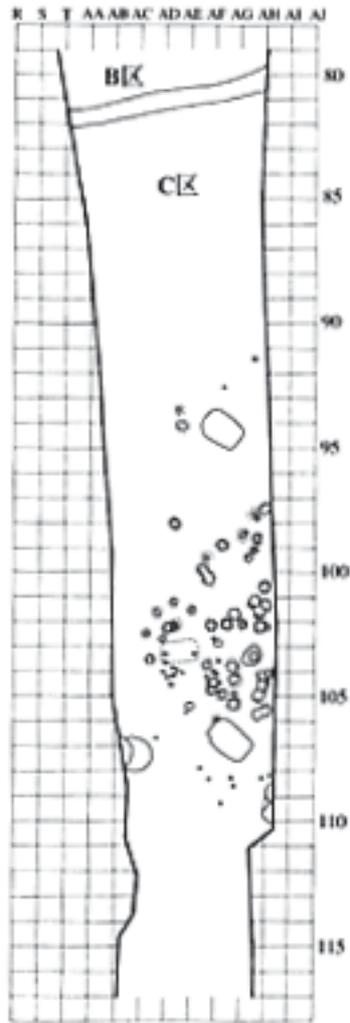
(小野貴之)



第1図 グリッド配置図



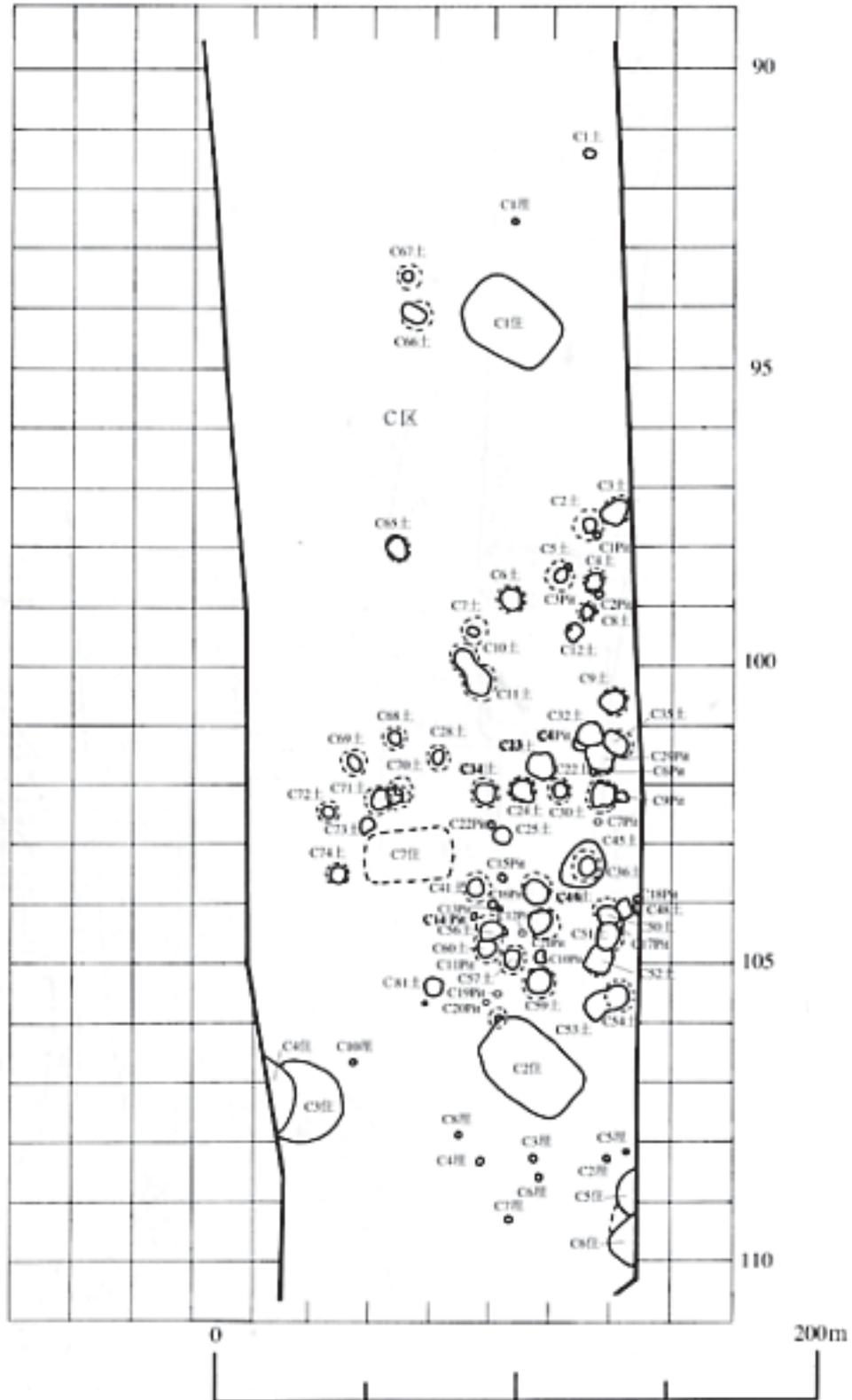
第2図 遺構配置図1



第3図 遺構配置図2



R S T AA AB AC AD AE AF AG AH AI AJ



第4図 遺構配置図3 (C区拡大)

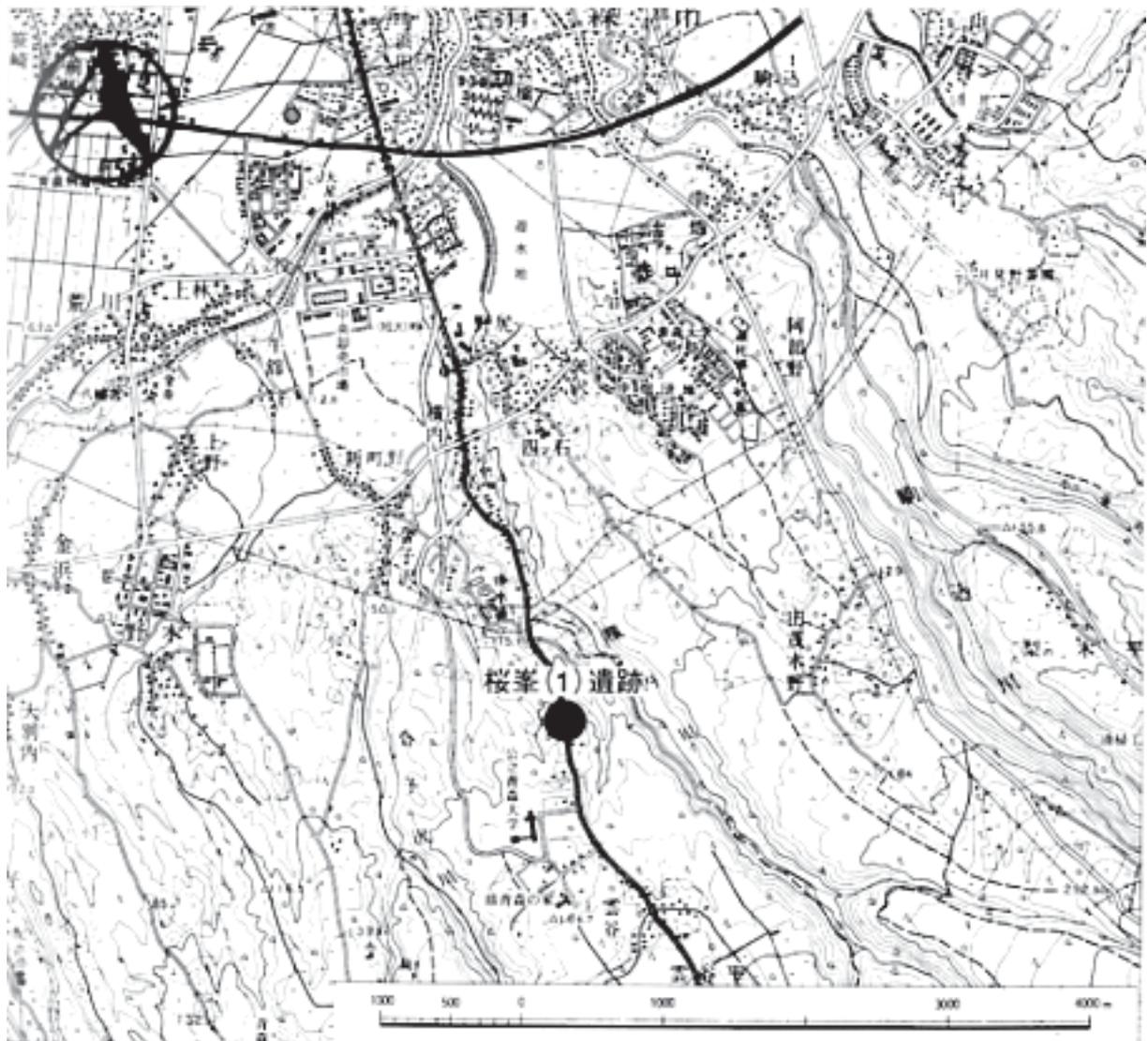
第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置

桜峯(1)遺跡は、青森公立大学から国道103号を約1km市街地へ下った、標高100～120m付近に立地している。この丘陵地は、南から北に向かい緩やかに傾斜し、東を横内川、西を合子沢川によって挟まれており、さらに深い谷や小沢により幾つかの小丘陵に分けられる。

本遺跡は、北西に向かい緩やかに傾斜する小丘陵上に立地し、東西は、比高差10、20mの谷となっている。

調査区南側の標高120m付近は、平坦な台地となっておりA区とB区の一部が所在する。調査区C区の標高115～110mにかけては、現代における削平と盛土がされており平坦な面が作り出されていたが、周囲の地形から推測すると、北西に向かう緩傾斜な台地の一部であったと思われる。標高110m～100mにかけて一旦下り斜面となり、そこから調査区北側のD区に向かい緩やかに立ち上がる。調査区北端にあつては、西側へ向かう急峻な斜面となっている。(沼宮内陽一郎)



第5図 遺跡位置図

第2節 周辺の遺跡

青森市内には、平成9年3月末現在287ヵ所の遺跡が台帳に登録されている。このうち本遺跡が所在する青森市南部の八甲田山火山性台地上には、約60ヵ所の遺跡が登録されている。

この数字は、青森市全体の遺跡数に対しては少ないようにも思えるが、平成4年度から当委員会で開催している市内遺跡詳細分布調査等による分布調査の成果によって、確認した遺跡が増加した上での数字である。青森市南部地区は、各種開発行為等による緊急調査が増加している地区でもあり、今後も新たな遺跡確認・本調査が実施されることが予想される。

本遺跡周辺には、本遺跡と同時期と推定される遺跡が数多く所在する。しかしながら、試掘調査や発掘調査が実施された例は数例にしかすぎず、ほとんどが分布調査によって把握されている状況である。

本遺跡と同丘陵上の遺跡としては、直線距離にして約1km北方に桜峯(2)遺跡が所在する。本遺跡に先立って当委員会が平成6年度に調査を実施した。調査の結果、竪穴式住居跡1軒、土坑35基（うち12基はフラスコ状土坑）、配石遺構2基、埋設土器遺構1基を検出し、縄文時代中期を主体とする土器・石器等が段ボール約10箱出土した（青森市教育委員会1995a）。

また、桜峯(2)遺跡より西方に700m離れた地点には、横内遺跡、500m離れた地点には横内(2)遺跡が所在する。この両遺跡についても当委員会が平成5年度に調査を実施している。調査の結果、横内遺跡では、縄文時代前期円筒下層b式に伴う竪穴式住居跡1軒、円筒下層 d_2 式に伴う竪穴式住居跡2軒を検出しており、そのうち円筒下層 d_2 式に伴う竪穴式住居跡1軒は、テラスを持つ住居跡である。

出土遺物は、縄文時代早期白浜式に比定される土器、縄文時代前期円筒下層b式・ d_2 式、縄文時代中期最花式に比定される土器、石器等が出土している。

横内(2)遺跡では、縄文時代前期後半から中期初頭の土坑26基、平安時代の竪穴住居跡1軒等を検出しており、土坑のなかには、水抜き施設と考えられる放射状の溝をもつフラスコ状土坑も検出している。出土遺物は、縄文時代早期、前期後半円筒下層 d_1 ・ d_2 式、中期前半円筒上層a式、大木7式系統の土器、石器等が出土している（青森市教育委員会1995b）。

東部側については、横内川と駒込川に挟まれた丘陵地上に四ツ石遺跡が所在する。発掘調査は、当委員会で昭和38年、39年の2年次にわたって、また、青森山田高等学校考古学研究部によって、昭和59年に実施されている。当委員会で実施した発掘調査では、小規模な配石遺構1基を検出した。また、出土遺物は、縄文時代後期前半十腰内I式の土器、石器、三角形岩版などの石製品、耳栓等の土製品が出土した（青森市教育委員会1965）。青森山田高等学校考古学研究部の調査では、遺構は検出しなかったが、縄文時代後期前葉から中葉にかけての十腰内I式、II式の土器、石器等が出土している（青森山田高等学校考古学研究部1986）。

四ツ石遺跡から約50m上った地点には、田茂木野遺跡が所在する。発掘調査は、昭和60年に当委員会で実施しており、調査の結果縄文時代後期の竪穴住居跡2軒、屋外炉跡1基、土坑1基を検出している。出土遺物は、縄文時代前期円筒下層d式、中期円筒上層b式、最花式、後期十腰内I式、V式、晩期大洞B、BC式、 C_1 式等の土器、石器等が出土している（青森市教育委員会1986）。

その他、この地域における発掘調査が実施された遺跡は、近年は西部側に多く、合子沢川と牛館川とに挟まれた丘陵上には県教育委員会・当委員会で試掘調査・発掘調査を実施した新町野遺跡、野木遺跡がある。新町野遺跡では、縄文時代前期後半円筒下層 d_2 式を中心とした竪穴式住居跡、土坑等を検出

しており、また平安時代の竪穴式住居跡等を検出している（青森市教育委員会1998）。野木遺跡は、平安時代の竪穴式住居跡を多数検出しており、新町野遺跡とあわせて、当時この一帯が集落群として存在したことが推定される（青森市教育委員会1998）。牛館川と荒川に挟まれた丘陵上には、葛野(1)遺跡、葛野(2)遺跡、山吹(4)遺跡などが所在している。このうち、葛野(2)遺跡については、当委員会で平成8年度に一部発掘調査を実施しており、平安時代の竪穴式住居跡4軒、土坑5基、竪穴遺構1基、道路状遺構3条を検出している。道路状遺構3条のうち2条については、平安時代に伴うものと推定され、該期の生活道としての機能が想定される。また、出土遺物は、縄文時代前期円筒下層b式、平安時代の土師器・須恵器・鉄製品等が出土している（青森市教育委員会1997）。（木村淳一）

第1表 周辺の遺跡

番号	台帳番号	遺跡名	種別	所在地	時期	備考
1	207	桜峯(1)遺跡	包蔵地	横内字桜峯	縄文(前・中・後)	
2	208	桜峯(2)遺跡	包蔵地	横内字桜峯、亀井	縄文(前・中・後)	青森市教委1994年発掘調査
3	164	横内遺跡	包蔵地	合子沢字山崎	縄文(前)	青森市教委1993年発掘調査
4	206	横内(2)遺跡	包蔵地	合子沢字山崎	縄文(前・中)、平安	青森市教委1993年発掘調査
5	284	横内猿沢(1)遺跡	散布地	横内字猿沢	平安	
6	209	鏡山遺跡	散布地	横内字鏡山	縄文(前・中・後)	
7	285	雲谷山吹(3)遺跡	散布地	雲谷字山吹	縄文	
8	247	雲谷山崎遺跡	散布地	雲谷字山崎	縄文、平安	
9	263	雲谷山吹(1)遺跡	散布地	雲谷字山吹	縄文	
10	199	雲谷山吹(1)遺跡	散布地	雲谷字山吹	縄文(後)	
11	174	横内城跡	館跡	横内字亀井	中世	青森市教委1986年発掘調査
12	215	四ツ石(3)遺跡	散布地	四ツ石字里見	縄文	
13	173	野尻館遺跡	館跡	野尻字野田	中世	
14	283	野尻野田(1)遺跡	散布地	野尻字野田	平安	
15	236	大矢沢里見(1)遺跡	散布地	大矢沢字里見	縄文	
16	28	四ツ石遺跡	散布地	四ツ石字里見	縄文(中・後)	青森市教委1963・64年、青森山田高等学校考古学研究所1984年発掘調査
17	194	四ツ石(2)遺跡	散布地	四ツ石字里見	縄文(中・後)	
18	160	田茂木野遺跡	集落跡	田茂木野字阿部野	縄文(後・晩)	青森市教委1985年発掘調査
19	219	阿部野(2)遺跡	散布地	幸畑字阿部野	平安	
20	50	阿部野遺跡	集落跡	幸畑字阿部野	縄文(前・中・後)、平安	
21	220	阿部野(3)遺跡	散布地	幸畑字阿部野	平安	
22	48	駒込館遺跡	館跡	駒込字桐ノ沢、月見野	平安	
23	221	月見野(3)遺跡	散布地	駒込字月見野	縄文(後)、平安	
24	8	玉清水(3)遺跡	散布地	駒込字月見野	縄文(前)	青森市教委1969年発掘調査
25	7	玉清水(2)遺跡	散布地	駒込字月見野	不明	
26	6	玉清水(1)遺跡	散布地	駒込字月見野	縄文(晩)	
27	235	月見野(4)遺跡	散布地	駒込字月見野	縄文(後)	
28	286	月見野(6)遺跡	散布地	駒込字深沢	縄文(前・晩)	
29	234	深沢(2)遺跡	散布地	駒込字深沢	縄文(前・後)	
30	54	梨の木平遺跡	散布地	駒込字深沢	縄文(前・中・晩)	
31	57	蛭沢遺跡	集落跡	駒込字月見野	縄文(早・前・中・後・晩)、弥生、平安	青森市蛭沢遺跡調査団1976年発掘調査
32	264	月見野(5)遺跡	散布地	駒込字月見野	縄文	
33	10	月見野遺跡	散布地	駒込字蛭沢	縄文(前・後)	
34	192	月見野(2)遺跡	散布地	駒込字蛭沢	不明	
35	42	沢山(1)遺跡	散布地	駒込字月見野	縄文(晩)	
36	9	月見野壺園遺跡	散布地	駒込字月見野	平安	
37	44	沢山(3)遺跡	散布地	沢山字平野	平安	
38	53	赤坂遺跡	散布地	戸山字赤坂	平安	
39	5	戸山遺跡	散布地	戸山字赤坂	縄文(前・中)、弥生	
40	22	戸崎館遺跡	館跡	戸崎字宮井	中世	
41	46	桑原遺跡	散布地	桑原字山崎	縄文	
42	47	後菟遺跡	散布地	後菟字外山、久堅	縄文、平安	
43	58	佃遺跡	散布地	佃3丁目	縄文(前)	
44	59	小柳遺跡	散布地	小柳3丁目	平安	
45	51	沢田遺跡	集落跡	造道3丁目	平安	
46	61	露草遺跡	散布地	八重田字3丁目	奈良	
47	261	合子沢松森(1)遺跡	散布地	合子沢字松森	縄文	
48	262	合子沢松森(2)遺跡	散布地	合子沢字松森	平安	
49	161	新町野遺跡	集落跡	新町野字菅谷	縄文(前・中)、奈良、平安	青森県教委1996・97年発掘調査、青森市教委1997年発掘調査
50	210	野木遺跡	集落跡	野木字山口	縄文、平安	青森県教委1996・97年発掘調査、青森市教委1997年発掘調査
51	271	山口遺跡	散布地	野木字山口	縄文(前・中・後)	
52	188	山吹(3)遺跡	散布地	大別内字山吹	縄文	
53	216	野木沢田遺跡	散布地	野木字沢田	平安	
54	217	葛野(1)遺跡	散布地	大別内字葛野	縄文	
55	218	葛野(2)遺跡	集落跡	大別内字葛野	縄文(前)、平安	青森市教委1996年発掘調査
56	237	山吹(4)遺跡	散布地	大別内字山吹	縄文、平安	
57	186	山吹(1)遺跡	集落跡	大別内字山吹	縄文(前・中・後)	青森市教委1990年発掘調査
58	187	山吹(2)遺跡	散布地	大別内字山吹	縄文	
59	176	小牧野遺跡	墓地	野沢字小牧野	縄文(前・中・後)、続縄文	青森山田高等学校考古学研究所1989年、青森市教委1990～97年発掘調査



第6図 桜峯(1)遺跡周辺の遺跡位置

第3節 遺跡周辺の地形と地質

青森県教育センター指導主事 工藤 一 彌

青森平野は新生代第四紀（約170万年前～現在）に形成された海岸平野であり、東西約10km、南北約5kmのほぼ直角三角形をしている。北は陸奥湾に面し、南～東は八甲田山につらなる火山性の台地、西は標高50～150mの比較的緩傾斜の開析が進んだ丘陵に囲まれている。火山性の台地は、北、北西に流れる入内川、荒川、合子沢川、横内川、駒込川などの河川によって細分される。平野部と西部の丘陵地との境界には「入内断層」と呼ばれる南北方向の大きな断層が存在しており、断層は第四紀洪積世初頭（約170万年前）から活動を始め、東側が最大で800m以上も北に落ち込み、南東の後背地から運ばれた大量の碎屑物によって非常に厚い地層が形成され、平野の原形が形成されていった。

南東側の火山性台地は、八甲田カルデラから噴出した八甲田火砕流堆積物、いわゆる「田代平溶結凝灰岩」から構成されており、八甲田火山の北方につづき標高は40～500mである。八甲田牧場（標高500m）、雲谷平（200m）、梨の木平（200m）、青森ゴルフ場（150m）、月見野霊園（100m）など緩傾斜の平坦面を広く残しており、傾斜は荒川左岸の小牧野遺跡南方で約3度、右岸の青森カントリークラブゴルフ場付近で約2.5度、合子沢川左岸で約4度、遺跡南方の雲谷平付近で約5度、平均で約4度である。この台地は入内川、荒川、合子沢川、横内川、駒込川など北西、北に流れる河川によって開析されている。溶結凝灰岩が侵食に弱いのでいずれの河川の谷壁も25～40度と他の開析谷に比べて著しく急傾斜となっている。八甲田火砕流堆積物は「入内断層」によってできた低地を埋め、緩やかな勾配で北西側に傾斜し、横内、駒込付近から平野に没し、平野部の試錐データによると断層の東側で1000m、市の中心部では500m、市東部の矢田前付近では300mの深さまで達している。

西部の丘陵地は開析がすすみ、稜線の標高は50～150mで緩やかに北に傾斜している。砂・砂質シルト層からなる洪積世の岡町層を基盤に砂・砂礫や八甲田火砕流堆積物などが重なり、最上位に火山灰層が堆積している。八甲田火砕流堆積物は村岡・長谷（1990）によると、大きく2つに区分され、そのうち1期のものには水底火砕流堆積物として産する場合があります、従来の鶴ヶ坂層がこれに相当するという。2期のものは従来の田代平溶結凝灰岩に相当し、陸上火砕流堆積物が主体である。村岡・長谷（1990）はK-Ar法により八甲田第1期火砕流堆積物を約65万年前、八甲田第2期火砕流堆積物を40万年前の活動としている。

本地域の火山灰層は沢田（1976）により3層に区分され、下位から三内火山灰・大谷火山灰・月見野火山灰と呼ばれている。下位の三内火山灰は中部と最下部に浮石帯をもつ赤褐色粘土質降下火山灰で、中位の大谷火山灰は赤褐色粘土質降下火山灰と茶褐色浮石質降下火山灰よりなり、分布範囲は狭い。上位の月見野火山灰は最も広範囲に分布しており、黄褐色浮石質火山灰からなり、浮石流～火山灰流の部分も多い。

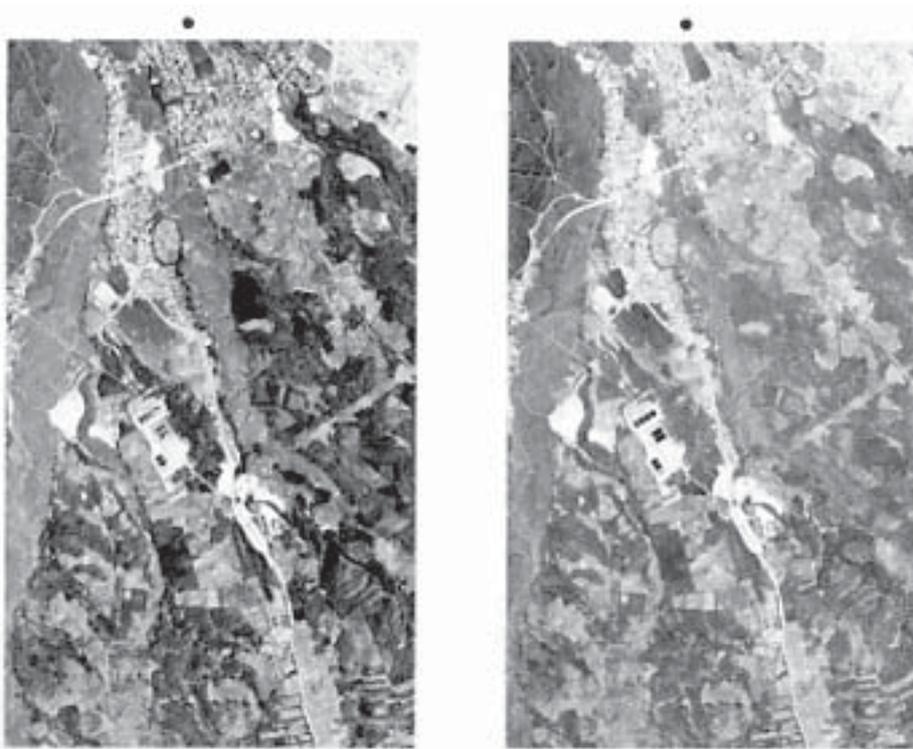
本遺跡は標高約100mで、東が横内川の支流、西は合子沢川の支流の二つの支流に挟まれている火山性台地の北側に位置し、平野部に対し、北側に緩く傾斜した台地が舌状に突き出した部分の尾根の部分に相当する。遺跡の基盤の地層は遺跡北方の合子沢川の支流に分布する八甲田火砕流堆積物であり、遺跡の火山灰層の下位に分布しているものと考えられる。黒色土の下位の黄褐色火山灰層は月見野火山灰と考えられ、その下位に存在する赤褐色の粘土質火山灰は大谷火山灰と考えられる。基盤の八甲田火砕

流堆積物は、塊状無層理で灰色を特徴とし、赤紫色を帯びる所も多い。径が1mm前後の石英や斜長石を多量に含み、軽石や本質レンズは比較的少ないため、風化面では石英などの鉱物粒の多いことが特徴である。八甲田火砕流堆積物の層厚は50～100mに見積もられており、荒川や駒込川の中流部などのように下位の第三系は比較的浅いところにあるものと推定されるが、遺跡周辺では下湯ダム付近で確認できる。青森平野周辺では野内川上流一帯、駒込川中流、雲谷峠付近、荒川中上流には新第三紀中新世中期の地層が分布するので、本遺跡の第四系の基盤にも同様の地層が分布しているものと推定できる。上位の火山灰層は、地形の起伏によって厚さが異なり、凸部で薄く、凹部で厚くなっており、最上位の黒色土でも同様の傾向が認められる。

なお、地形区分では1948年・1969年・撮影の航空写真を使用した。

引用・参考文献

- | | | |
|-----------|------|-----------------------------|
| 北村信他 | 1972 | 青森県の地質（青森県） |
| 沢田庄一郎 | 1972 | 近野遺跡発掘調査報告書（Ⅰ）（青森県教育委員会） |
| 沢田庄一郎 | 1976 | 三内丸山（Ⅱ）遺跡発掘調査報告書（青森県教育委員会） |
| 沢田庄一郎 | 1978 | 近野遺跡発掘調査報告書（Ⅳ）（青森県教育委員会） |
| 池田敬 | 1979 | 青森市の自然（青森市教育委員会） |
| 青森県 | 1982 | 土地分類基本調査「青森西部」 |
| 青森県 | 1983 | 土地分類基本調査「青森東部」 |
| 村岡洋文・高倉伸一 | 1998 | 10万分の1八甲田地熱地域地質図・説明書（地質調査所） |
| 村岡洋文・長谷紘和 | 1990 | 5万分の1地質図幅黒石地域の地質（地質調査所） |



国土地理院薩英 1969年 空中写真（実体視）

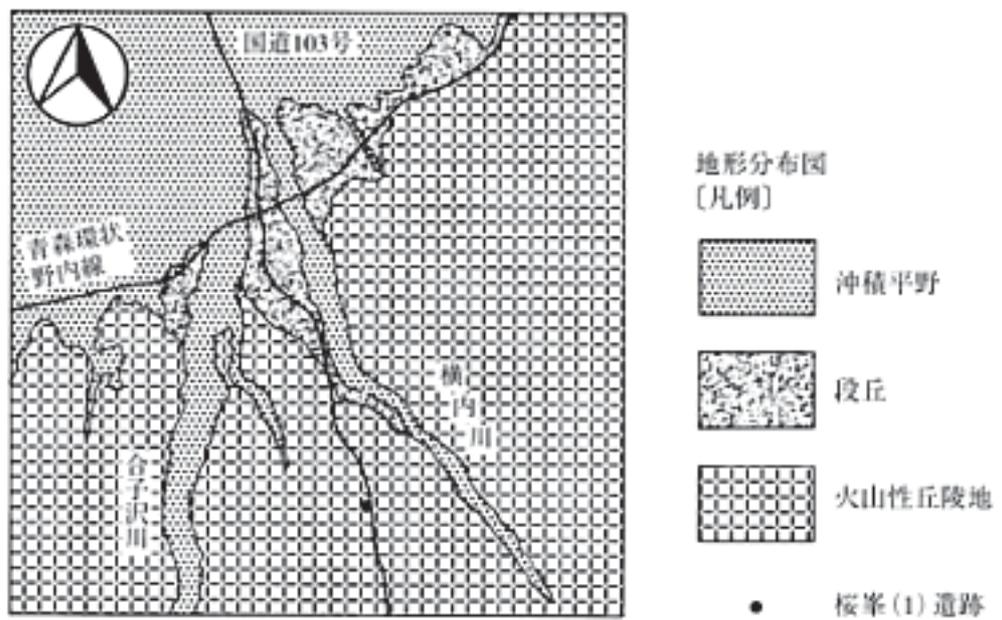


図1 遺跡周辺の地形

第4節 基本層序

桜峯(1)遺跡調査区内の基本層序は次のとおりである。

- 第Ⅰ層 黒褐色土
- 第Ⅱ層 黒褐色土
- 第Ⅲ層 黒褐色土
- 第Ⅳ層 暗褐色土
- 第Ⅴ層 黄褐色土
- 第Ⅵ層 橙色土

桜峯(1)遺跡の調査区域は、調査区北端から南端まで、約700mの距離があり、その間の堆積状況は、各層において若干の土色、層厚の変化、混入物の有無、量の変化が見られるものの、基本的には同一であると思われる。

第Ⅰ層は、表土である。

第Ⅱ層は、第Ⅰ層と比較し、土色が若干暗いため分層した。ただし、地点により、存在しない箇所もある。また第Ⅱ層と第Ⅲ層との間には、若干明るい色調の褐色土が部分的に存在したが間層として扱った。

第Ⅲ層は、主体となる遺物包含層である。

第Ⅳ層は、漸移層である。

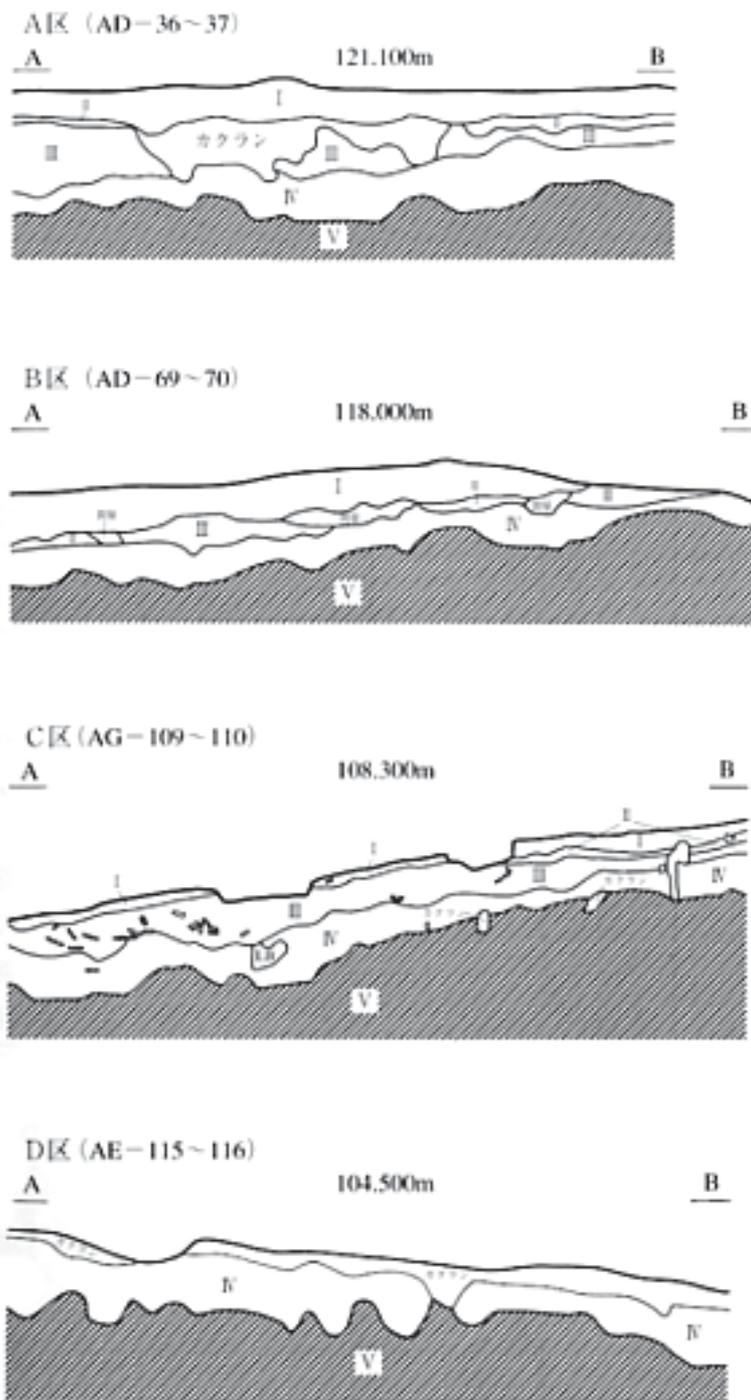
第Ⅲ層は主に縄文時代前期から中期にかけての遺物を包含しているが、第Ⅳ層出土土器には同時期のものの他、縄文時代後～晩期の土器片も見られた。それらについては、調査区内に植林されていた樹木による攪乱を受けたものと考えられる。

また第Ⅰ・Ⅱ層についても多くの遺物が出土している。第Ⅰ・Ⅱ層出土土器には、比較的平坦な箇所においては、平面的位置がほぼ同じである第Ⅲ層出土土器との接合、斜面においては、平面的位置が、より斜面の高い場所に位置する第Ⅳ層出土土器との接合が見られる。後者については、樹木の攪乱とともに、降雨等により、流れ落ちたものと推定される。

第Ⅴ層は、浮石質の月見野火山灰に相当する。

第Ⅵ層は、粘土質の大谷火山灰に相当する。一部浮石質の箇所も見られるが、第Ⅴ層とは色調が異なる。

(小野貴之)



第7図 基本層序

第三章 検出遺構と出土遺物

第1節 A区の調査

A区は、調査面積1,512m²であり、検出した遺構は土坑1基である。出土した遺物は、段ポール箱で約2箱で、内訳は縄文時代前期と後期の土器、石器である。遺物の出土量が少量であり散布地的な様相を呈する地区である。

1. 土坑

第1号土坑（第8図）

[位置] AD・AE-41グリッド第V層上面において、黒褐色土の落ち込みを確認した。北側については、巨木があり調査の際の危険性を考慮し、精査をしないこととした。

[重複] 未調査部分があるため不明である。

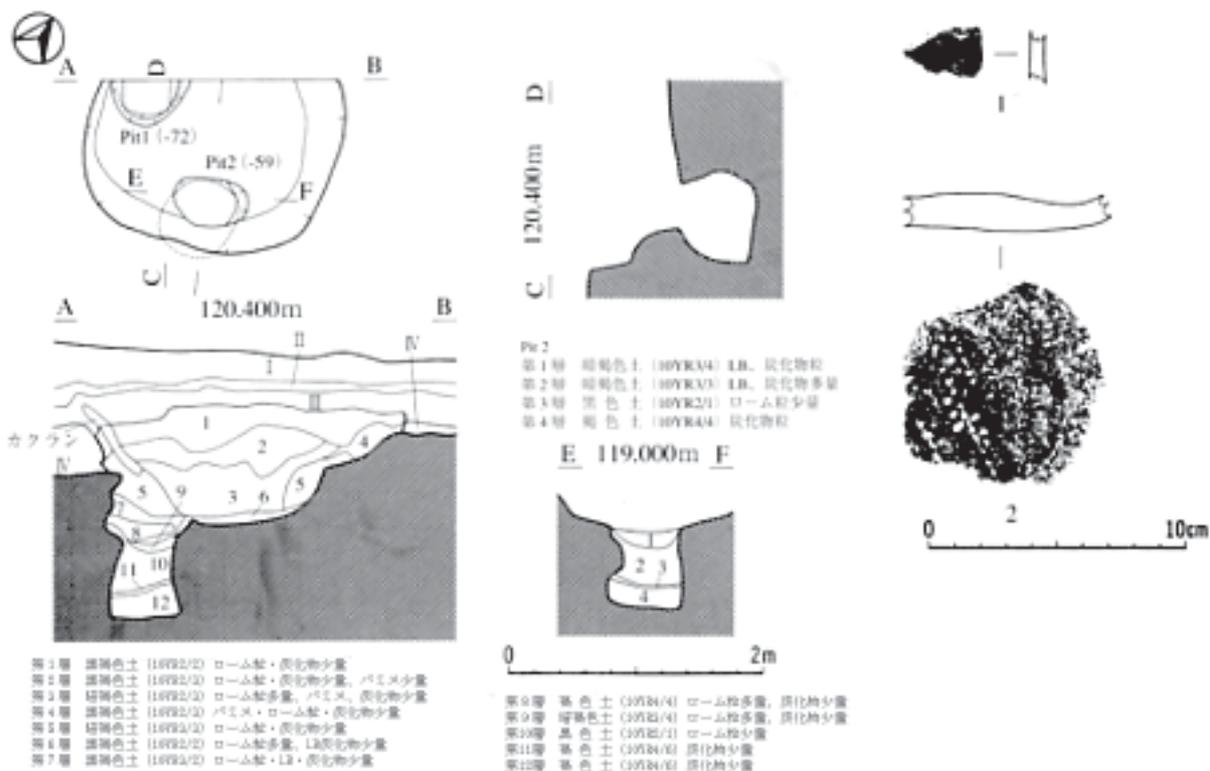
[形状・規模] 未調査部分にのびるため全体の平面形は把握できないが、開口部の最大長で210cm、平面形は円形と推定される。

[壁] 緩やかに立ち上がる。壁高は、70～90cmである。

[底] 第V層を底面とし、ほぼ平坦な底面である。平面形は円形と推定される。底面壁際にピット2基がみられる。

[堆積土] 12層に分層した。自然堆積の様相を呈する。

[出土遺物] 床面直上より縄文時代後期と思われる土器片（第8図1、2）3点が出土した。



第8図 A区第1号土坑及び出土土器

第2表 A区第1号土坑出土土器観察表

図版番号	出土地点	層位	器種	部位	文様	分類	備考
8-1	A1土	フク3		胴部	無文	Ⅲ群2類	赤色顔料?
8-2	A1土	床直		底部	網代	Ⅲ群2類	

2. 出土遺物

1) 土器

A区からは、第Ⅰ群、第Ⅲ群の土器が段ボール約2箱分、第Ⅵ群の平安時代に属する須恵器片が1点出土した。Ⅲ層からの出土が最も多く、殆どが調査区中央部から北側へかけての出土である。調査区内のその他の地点の出土状況は、ごく疎らであった。

第Ⅰ群土器 縄文時代前期末葉～中期初頭に属する土器小破片であり個体になるものが無く文様構成が不明確なため、細分は行わなかった。

第9図1は、口唇部と口頸部文様帯がLR庄痕により施文されている。口唇部の断面形は先細りである。第9図2は、口頸部文様帯にR庄痕、太めの隆帯にL庄痕が施され、胴部にLR斜縄文が施されている。第9図6は、結束第1種と結節回転文が横位に施文されている。

第Ⅲ群土器 縄文時代後期初頭、中葉に属する土器

時期により分類し、文様構成により細分した。比較的多量に出土したが、Ⅰ群同様小破片が多く個体になるものは無い。

2類 十腰内ⅠA式土器期に相当する資料1号土坑から出土した第8図1と2は同一個体である。第8図2は底面に網代痕を有する。

第9図9は、口唇部にLR縄文が施される。本類に分類したが、口縁部が開き、3類に分類される可能性もある。第9図14は、円文を中心とし、対角に両端が連結する楕円形の沈線文を施し、間に縦位の山形文が充填される。

3類 十腰内ⅠB式土器期に相当する資料

第9図15、第9図16は、波状口縁の下に2本の平行する沈線により入組文が施される。

4類 十腰内Ⅱ式土器期に相当する資料

a 沈線文、刺突、磨消縄文・充填縄文により施文される土器

ヘラ状工具による比較的幅広の沈線文に沿って間隔の密な斜位方向からの刺突が施され、沈線で区画された曲線的な文様帯に磨消縄文・充填縄文が施される。

第9図18は、平行する2本の沈線により文様帯が区画されRL縄文が施されている。第9図21は、第9図22・第9図23と比較し薄手である。2本の沈線により入組文が施される。

第9図22と第9図23は同一個体である。口唇部に沈線が施される。1本の沈線により口唇部と文様帯の間に渦巻文が施される。

b 地縄文と縄文が施される土器

第10図3は、地縄文の上にRL庄痕が施される。口唇部直下でやや垂直に立ち上がる。

c 地縄文と沈線文が施される土器

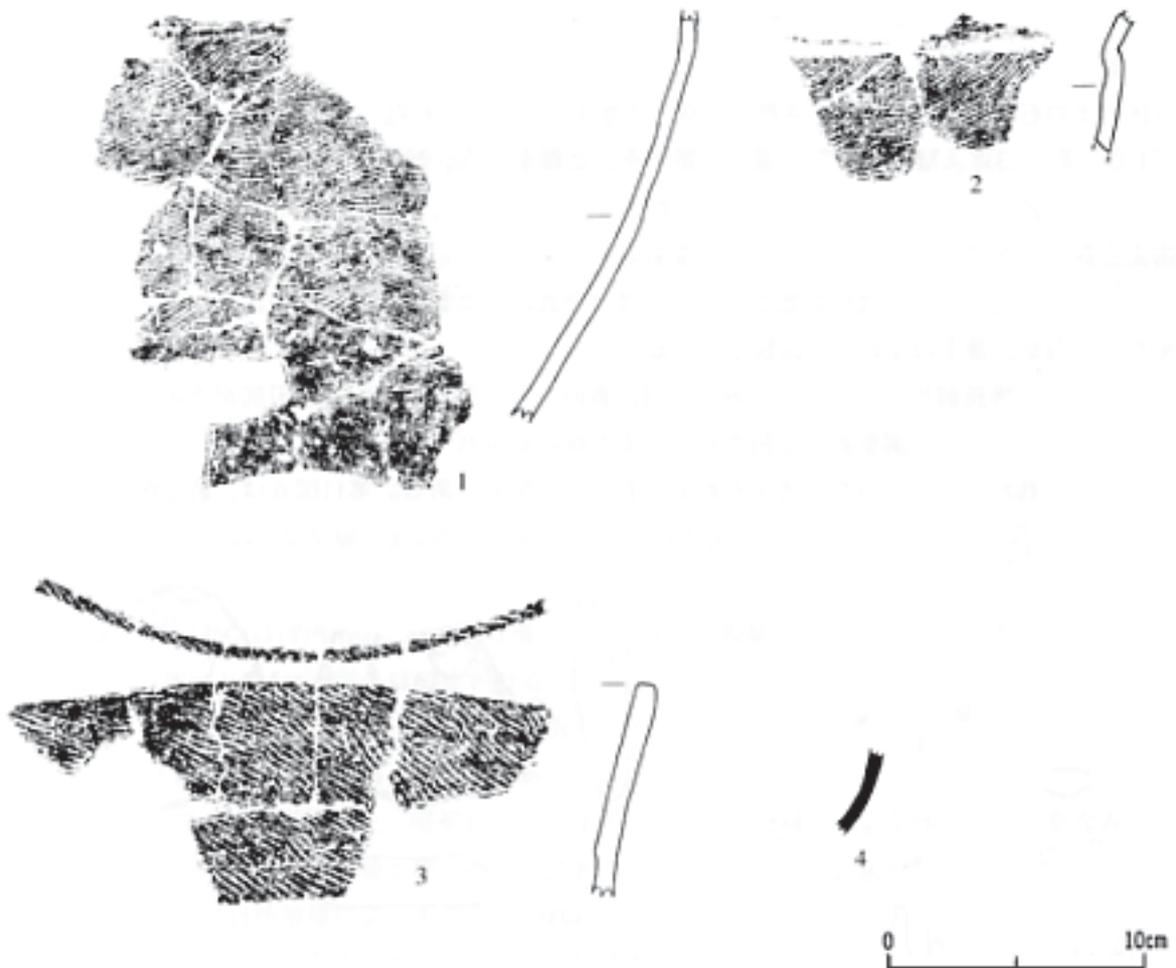
第10図1と第10図2は同一個体である。胴部以下に施文、口縁部は無文である。

第Ⅵ群土器 平安時代に属する土器

第10図4は、AF-32より出土した須恵器の胴部破片である。



第9图 A区遺構外出土土器1



第10図 A区遺構外出土土器2

第3表 A区遺構外出土土器観察表

図版番号	出土地点	層位	器種	部位	文様	分類	備考
9-1	AH-28	Ⅲ		口唇部	LR圧痕	I群	繊維混入
9-2	AE-33	Ⅳ		口頸部	口頸部R圧痕 隆帯L圧痕 胴部LR斜縄文	I群	内面磨き
9-3	AH-27	Ⅲ		口頸部	L圧痕	I群	内面磨き
9-4	AH-27	Ⅲ		胴部	結束第一種	I群	内面磨き
9-5	AH-27	Ⅲ		胴部	結節回転文(2段、横)	I群	内面磨き
9-6	AH-28	Ⅲ		胴部	RL縄文 結束第一種 結節回転文(2段、横)	I群	繊維混入
9-7	AB-28	Ⅲ		胴部	結節回転文(2段、縦)	I群	内面磨き
9-8	AH-28	Ⅲ		胴部	RL斜縄文	I群	内面磨き
9-9	AC-41	Ⅲ		口頸部	口唇部LR縄文 口頸部無文	Ⅲ群2類	
9-10	AE-38	Ⅲ		口頸部	無文	Ⅲ群2類	折り返し口縁
9-11	AB-41	Ⅲ		口頸部	無文	Ⅲ群2類	
9-12	AE-38	Ⅲ		胴部	無文	Ⅲ群2類	
9-13	AD-36	不明		胴部	沈線 LR縄文	Ⅲ群2類	
9-14	AE-38	Ⅲ		胴部	沈線(円文、楕円文、山形)	Ⅲ群2類	
9-15	AC-41	Ⅲ		口頸部	沈線(入組文)	Ⅲ群3類	口唇部刻み
9-16	AC-41	Ⅲ		口頸部	沈線(入組文)	Ⅲ群3類	口唇部刻み
9-17	AC-38	Ⅳ		胴部	沈線	Ⅲ群3類	
9-18	AB-43	Ⅲ		口頸部	LR縄文 沈線 刺突 磨消・充填縄文	Ⅲ群4類a	
9-19	AC-40	Ⅲ		口頸部	沈線 刺突 磨消・充填縄文	Ⅲ群4類a	
9-20	AC-40	Ⅲ		口頸部	沈線(入組文) 刺突 磨消・充填縄文	Ⅲ群4類a	内面磨き
9-21	AC-40	Ⅲ		口頸部	沈線(入組文) 刺突 磨消・充填縄文	Ⅲ群4類a	
9-22	AC-41	Ⅲ		口頸部	沈線(渦巻文) 刺突 磨消・充填縄文	Ⅲ群4類a	口唇部沈線
9-23	AC-40	Ⅲ		口頸部	沈線(渦巻文) 刺突 磨消・充填縄文	Ⅲ群4類a	口唇部沈線
10-1	AC-40	Ⅲ	鉢	胴部	沈線 LR縄文	Ⅲ群4類b	
10-2	AC-41	Ⅲ	鉢	胴部	沈線 LR縄文	Ⅲ群4類b	
10-3	AC-41	Ⅲ		口頸部	RL圧痕 RL斜縄文 口唇部RL圧痕	Ⅲ群4類c	
10-4	AF-32	Ⅲ		胴部	ロクロ	Ⅵ群	

2) 石器

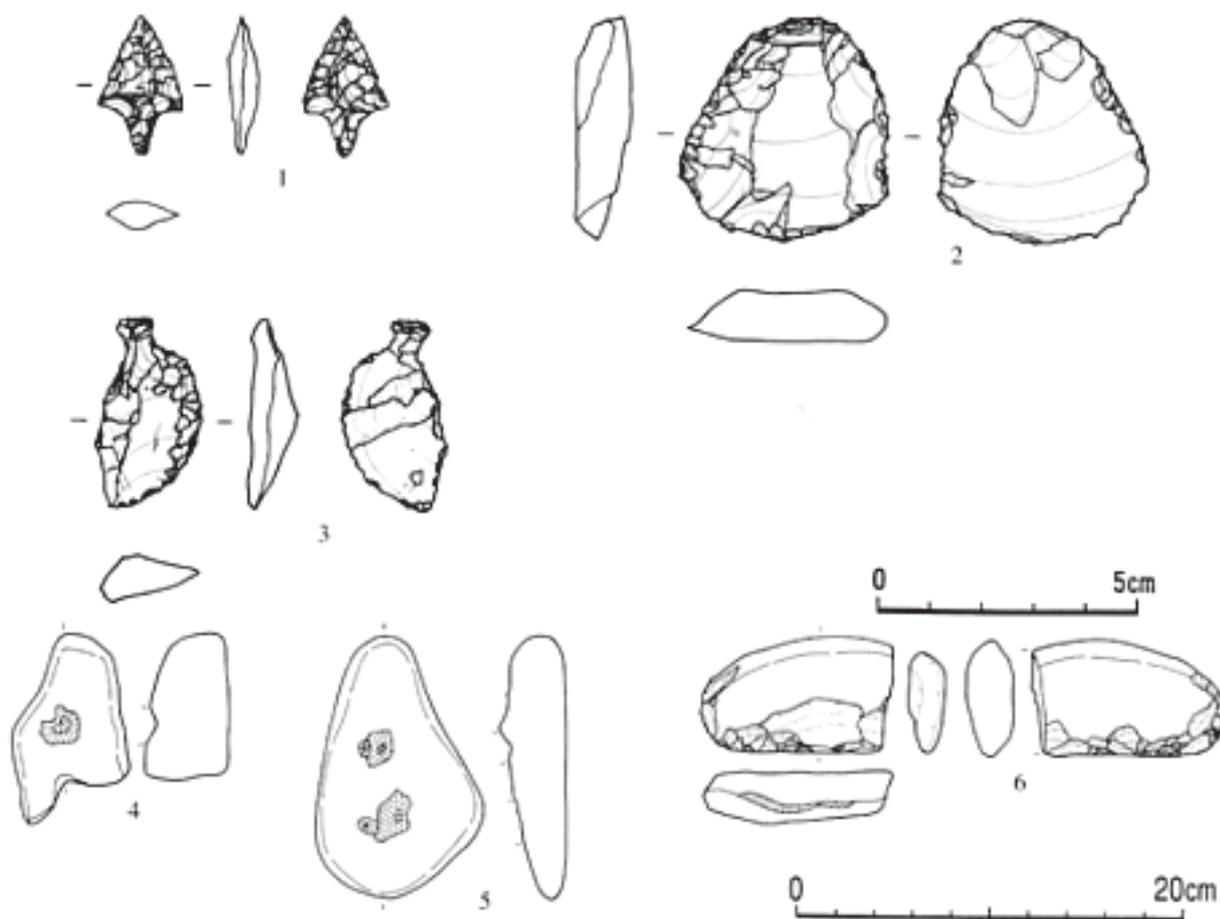
A区出土の石器は遺構外から、A群（石鏃）3類1点、D群（石匙）1類1点、G群（不定形石器）1類1点、剥片13点、M群（敲磨器類）1類1点、2類が2点、N群（半円状扁平打製石器あるいはそれに類似する形状のもの）1類1点が出土した。

出土点数が少量であるため、一括して記載する。

第11図1は、正三角形に近い形状を呈する。ほぼ全面に及ぶ調整剥離が施されている。器体中央付近がやや膨らむが、薄手の平坦な側面観を呈する。

第11図3は、横長剥片を素材とし、剥片末端に裏面からの調整剥離を施し刃部が作出されている。正面左側縁にも裏面からの調整剥離が施されているが縁辺が潰れているため、刃部としての機能は正面右側縁に作出された刃部であったと考えられる。石質は黒曜石である。第11図6は、若干凹凸の目立つスリ面である。

(沼宮内陽一郎)



第11図 A区遺構外出土遺物

第4表 A区遺構外出土石器観察表

図版番号	出土地点	層位	最大計測値				石質	分類	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
11-1	AC-41	Ⅲ	28	16	6	1.5	珪・頁	A-3	
11-2	AD-41	Ⅲ	44	41	10	21.8	珪・頁	G-1	
11-3	AE-34	Ⅳ	38	220	10	4.9	黒	D-1	
11-4	AI-27	Ⅲ	(100)	60	44	246	石・安	M-1	
11-5	AE-35	Ⅳ	139	88	35	362	石・安	M-2	
11-6	AE-36	Ⅲ	(101)	61	25	252	安	N-1	

第2節 B区の調査

B区は、調査面積6,579m²であり、検出した遺構は、土坑3基、溝状遺構1基である。

出土した遺物は、段ボール箱で3箱で、内訳は縄文時代の土器・石器・土製品、続縄文時代の土器、平安時代の土師器・須恵器である。本地区は、C区に比べ縄文時代後・晩期の遺物が多く見られ、該期に帰属する遺構もわずかながらではあるが検出されている。このことから集落の縁辺部的様相を示すものと思われる。

1. 土 坑

第1号土坑（第12図）

[位 置] AH-44、第V層において黒褐色土の落込みを確認した。

[重 複] なし。

[形状・規模] 平面形はほぼ円形で、断面形は挿鉢形を呈する。規模は、開口部で186cm×156cm、底面で、118cm×115cm、深さは67cmを計る。

[壁] V層を壁面としており、比較的堅緻である。

[底] 底面はほぼ平坦であり、堅緻である。

[堆 積 土] 堆積土は、黒褐色土・暗褐色土を主体とし、8層に分層した。全体的に小礫を含み、上層において炭化物、焼土粒、浮石粒、下層においてローム粒、炭化物が混入している。堆積状況は自然堆積によるものと思われる。

[出 土 遺 物] 第2層から縄文時代晩期の土器（第12図1、2）2点が出土した。

第2号土坑（第12図）

[位 置] AG-49、第V層において暗褐色土・褐色土を主体とする落込みを確認した。

[重 複] なし。

[形状・規模] 平面形は、小判形で、断面形は両端部が丸みを帯びているナベ形を呈する。規模は、開口部で150cm×105cm、底面で、155cm×105cm、深さは32cmを計る。

[壁] V層を壁面としており、北壁・東壁・西壁の一部において若干内側に入り込んで立ち上がる。やや脆弱である。

[底] 底面はほぼ平坦であり、やや脆弱である。

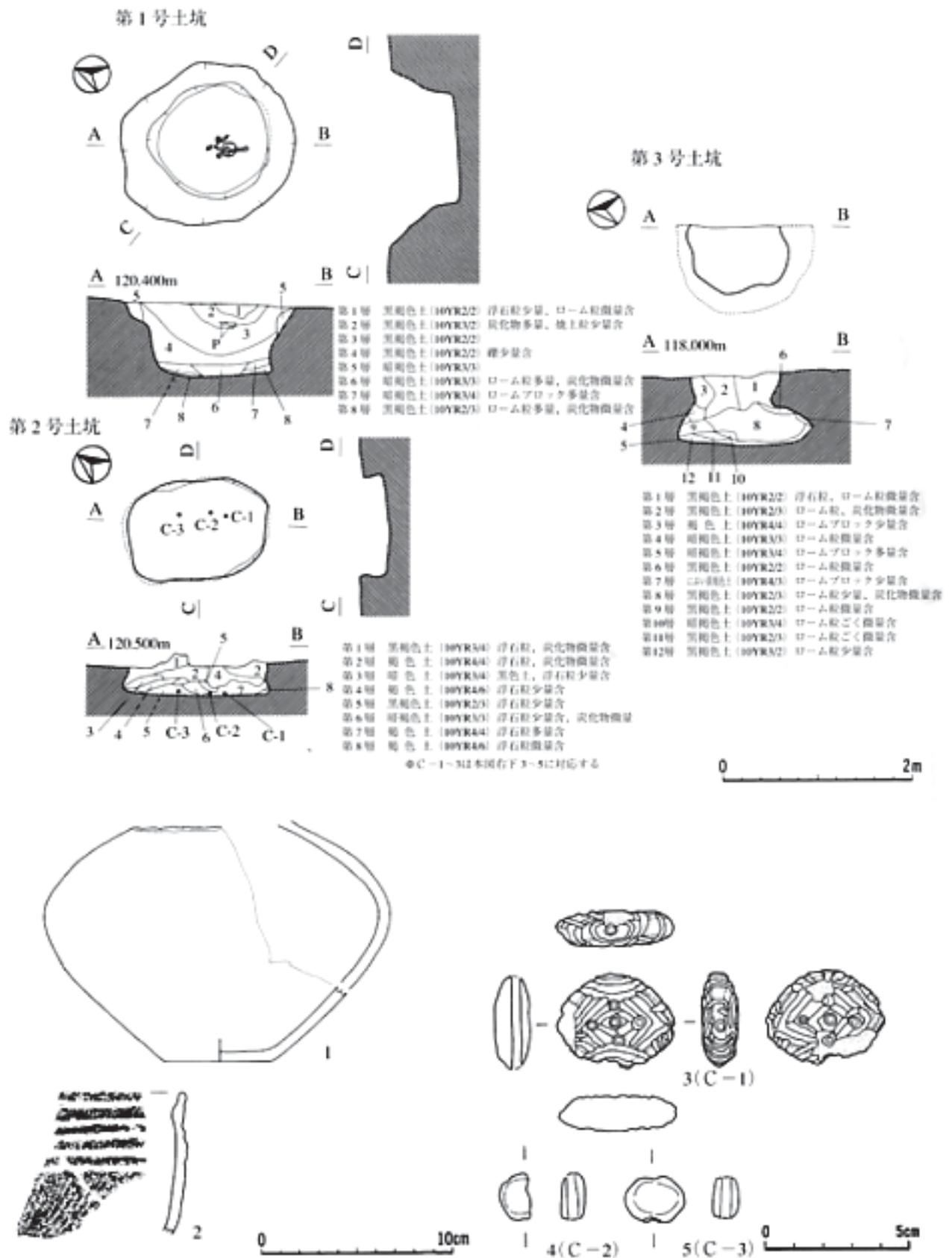
[堆 積 土] 堆積土は、暗褐色土・褐色土を主体とし、8層に分層した。全体的に浮石粒を含み、6層において炭化物が少量混入している。堆積状況は人為的に埋め戻されたと思われる。出土遺物と併せて墓としての機能が想定される。

[出 土 遺 物] 第5層並びに第7層から縄文時代後期前葉の垂飾品（第12図3～5）3点（菱形1点、楕円形2点）が出土した。

第3号土坑（第12図）

[位 置] F-73、第V層で黒褐色土・褐色土を主体とする落込みを確認した。

[重 複] 調査区外に延びるため不明である。



第12図 b区第1～3号土坑及び出土土器・土製品

[形状・規模] 調査区外に延びるため全体形は不明であるが、断面形はフラスコ状である。

[壁] V層を壁面としており、比較的堅緻である。

[底] 底面はほぼ平坦であり、堅緻である。

[堆積土] 12層に分層した。全体的にロームブロック、ローム粒が混入しており、壁の崩落、人為的堆積が想定される。

[出土遺物] なし

2. 溝状遺構 (第13図)

[位置] AA-54～AI-59にかけて、第IV層において黒褐色土の落込みを確認した。なお、第III層中に掘り込み面を確認した。

[重複] なし。

[形状・規模] 直線状を呈する。開口部は、最大幅160cmを測り、全長4240cm、最深部70cmである。また、AA-55付近において土坑状の落込みを確認している。

[堆積土] 3層に分層した。自然堆積によるものと思われる。また、覆土2層中にごく少量であるが十和田a層火山灰(To-a)が混入している。

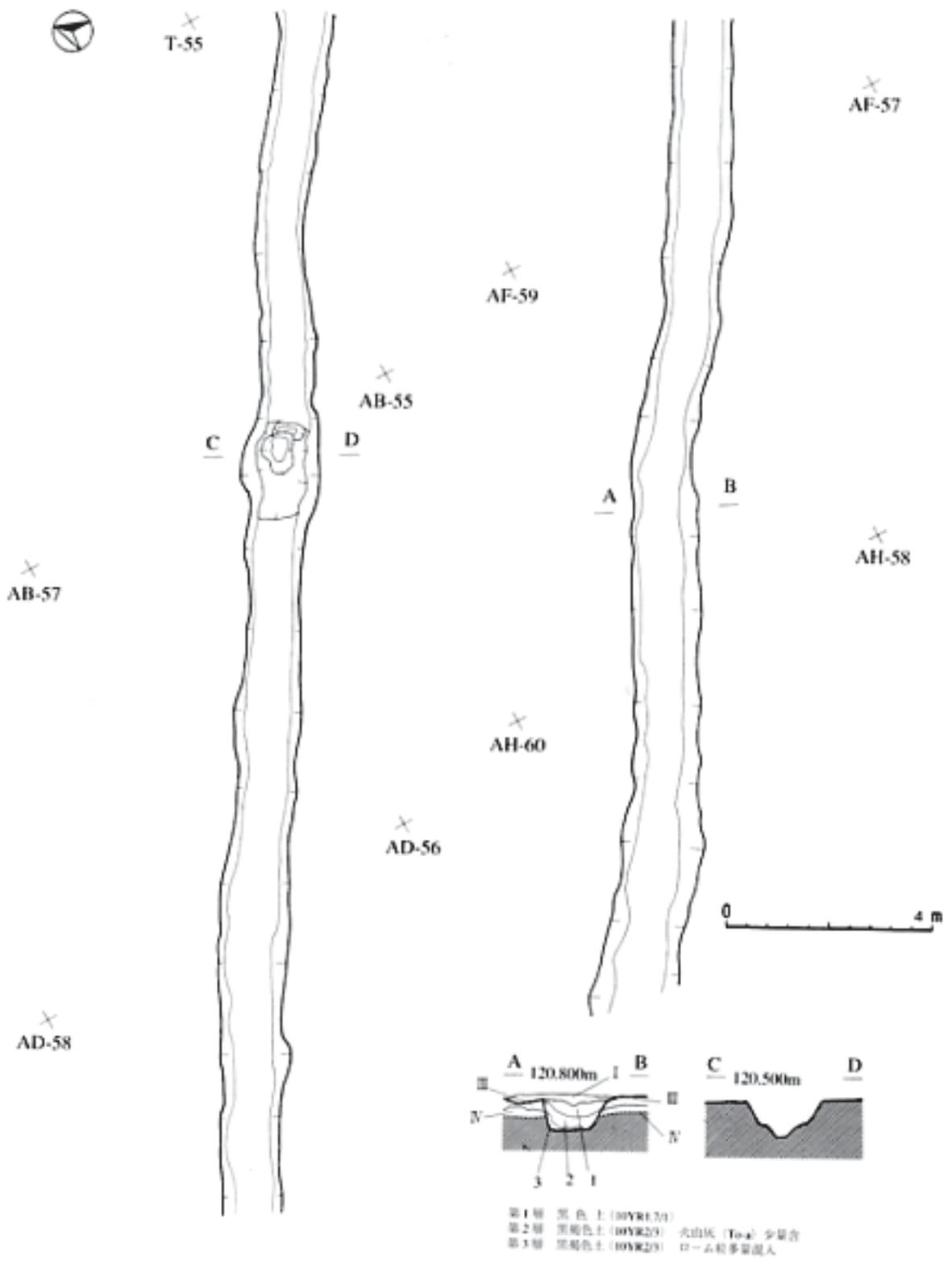
[出土遺物] なし

第5表 B区第1号土坑出土土器観察表

図版番号	出土地点	層位	器種	部位	文様	分類	備考
12-1	B1土	フク2	壺	胴～底部	無文	第IV群	
12-2	B1土	フク2	鉢	口縁部	沈線、LR	第IV群	

第6表 B区第2号土坑出土土器観察表

図版番号	出土地点	層位	種類	特徴・計測値 (cm、g) 等
12-3	B2土	フク5	垂飾品	菱形、沈線、刺突、長さ1.6、幅2.0、厚さ0.6、重さ15.1
12-4	B2土	フク7	垂飾品	楕円形、無文、長さ0.8、幅1.0、厚さ0.5、重さ3.0
12-5	B2土	フク7	垂飾品	楕円形、無文、長さ0.8、厚さ0.4、重さ1.1



第13図 B区第1号溝状遺構

3. 出土遺物

B区から出土した遺物は、ほとんどが遺構外出土のものであり、遺構内から出土した遺物については、第1号土坑出土の土器2点、第2号土坑出土の土製品3点である。

また、遺構外出土遺物についても、破片資料が主で全体形のわからないものが多く、特定の地点において集中して出土する例等は確認されなかった。

1) 土器

第Ⅰ群土器 縄文時代前期末葉～中期初頭に属する土器

2類 円筒下層 d_2 式～円筒上層 a_1 式土器期に相当する資料

第14図1は、口頸部上端を欠損しているが、ほぼ直立した器形を呈するものと推定され、口頸部文様と胴部文様の区画帯には、隆帯が施される。胴部文様は、単軸絡条体1類が施文されている。第14図2～4は、口頸部文様にLR圧痕が施される口縁部片で、2については橋状把手がついている。また、4の胴部文様にはLR斜縄文が施文されている。第14図5は、口頸部のみの破片で、横位、縦位のR圧痕が施文されている。第14図6は、隆帯が貼られ、口頸部にはLR圧痕が施文されている。第14図7は、小型の深鉢形を呈する土器であると推定され、口頸部文様帯と胴部文様帯との区画がなく地文にLR0段多条が施文されている。

また、第14図8～14は、いずれも胴部破片で、明確な帰属時期等について把握できないが、施文手法、胎土等の特徴から本群に属するものと思われる。

第Ⅲ群土器 縄文時代後期初頭～中葉に属する土器

1類 蛭沢3群・沖附(2)式土器期に相当する資料

第14図15は、深鉢の口縁部片で波状を呈するものと推定され、沈線文が施されている。

3類 十腰内IB式土器期に相当する資料

第14図16、17は、同一個体と考えられる深鉢の口縁部片と胴部片で、地文に撚糸Rを施文したのち平行沈線ならびに斜行沈線文による施文がなされている。第14図18は、深鉢の胴部片で沈線文が施されている。第14図19は、深鉢の胴部片で沈線による入組文が施されている。第14図20、21は、深鉢の無文の胴部片である。

第14図22、23は浅鉢の底部片で、このうち23は、底面に十字状の痕跡がある。第14図24は、透かしを持つ台付鉢の台部であると推定され、稚拙な入組文が施されている。右側面に透かし部が若干残存している。

第15図1～5は、壺である。第15図1、2、3は、いずれも橋状把手を有する土器である。1は、橋状把手部に沈線文が施文されている。2は橋状把手部に竹管による刺突文が施文され、口縁部と胴部文様帯の間の隆帯にも竹管による刺突文が施される。胴部文様帯には入組文が施されている。3は、口縁部が波状を呈し、口唇部にはキザミが施されている。橋状把手を有し、竹管による刺突が見られる。LR充填縄文である。4は、胴部片で入組文が施されている。5は、胴部から底部にかけての破片で、平行沈線間にLR縄文が充填されている。

第Ⅳ群土器 縄文時代晩期に属する土器

遺構内出土の第12図1は、無文の壺で、口縁部が欠損しているが、胴部～底部にかけて残存している。底径7.0cmを計る。第12図2は、鉢の口縁部片で外面に沈線文が施され、胴部にかけてLRの斜縄文が施されている。1と2は同一の層から出土しており、いずれも縄文時代晩期大洞A式に比定される。遺構外出土の第15図6～8は、同一個体であると推定される深鉢である。6は、口縁部片であり、地文にLR縄文が施され平行沈線文が施されている。また、内面にも沈線が一条巡らされている。7、8はいずれも胴部片であるが、7は、平行沈線間に2個一対の粘土粒がつけられている。

また8は、地文にLR縄文が施され、矢羽根状沈線文が施されている。大洞A式に比定される。

第Ⅴ群土器 続縄文時代に属する土器

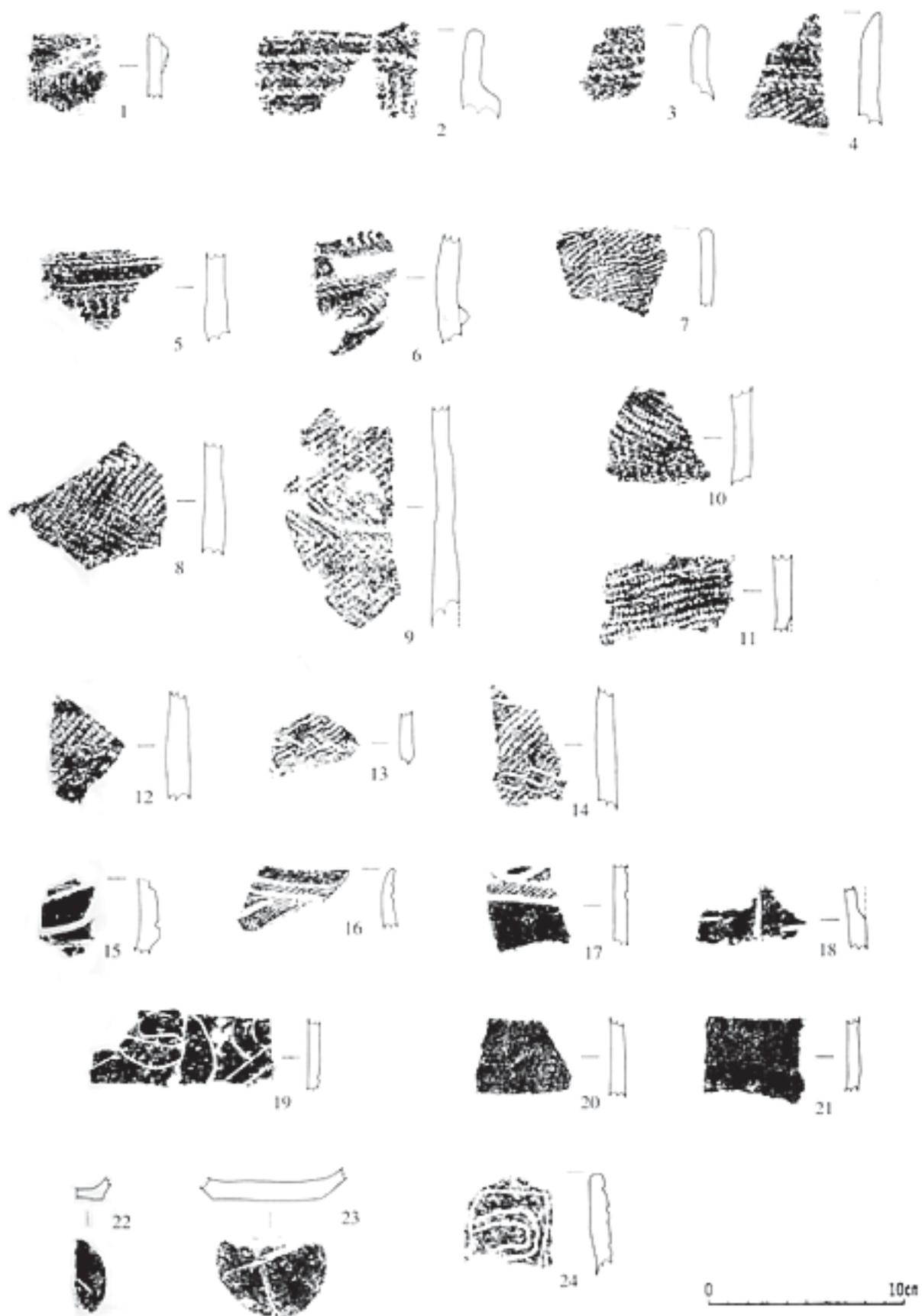
第15図9は、口縁部片であり口唇部は欠損している。帯状文が施され、平行沈線間にキザミが列点文状に施されている。帰属時期については後北C₁式段階に属するものと思われる。

第Ⅵ群土器 平安時代に属する土器

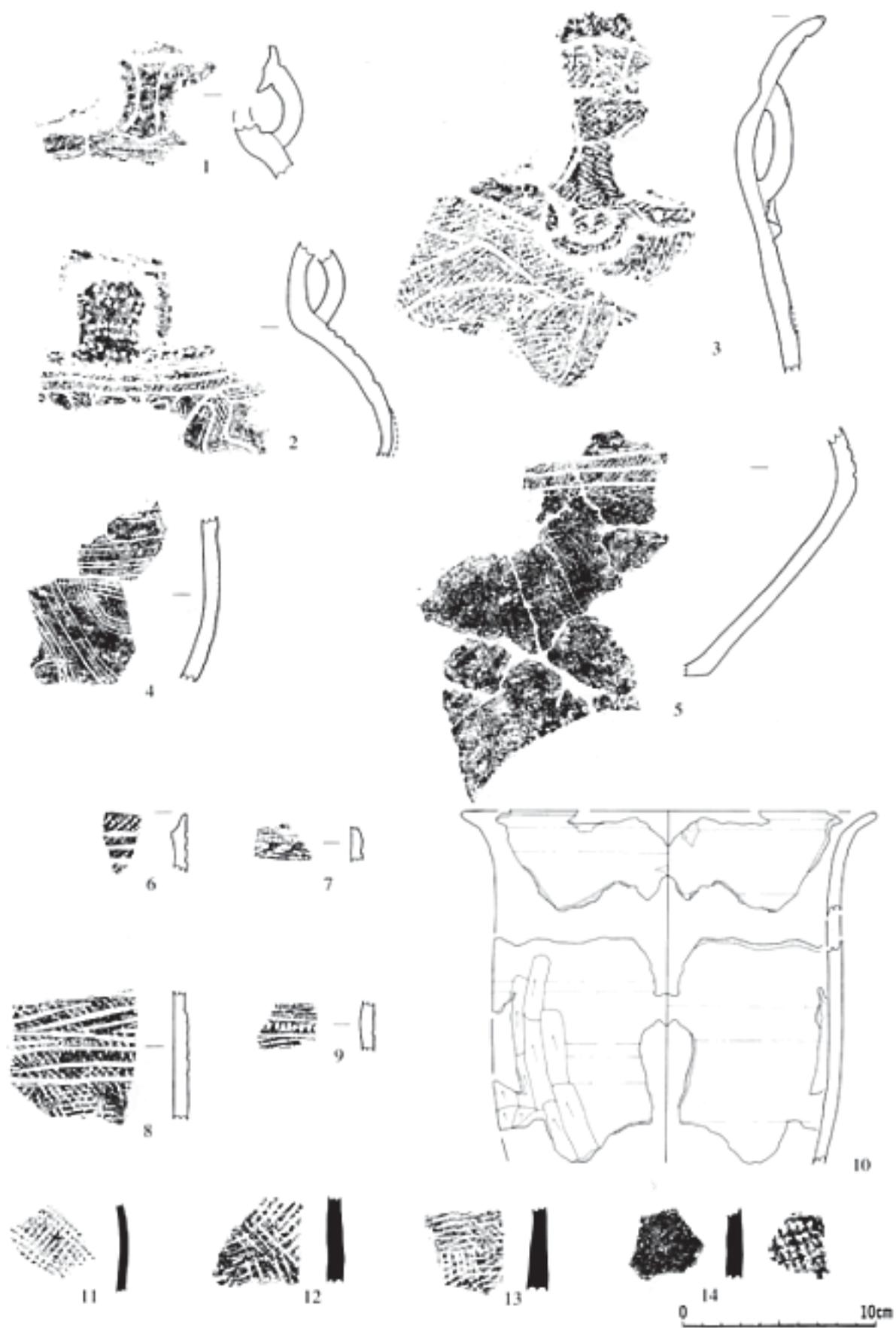
第15図10は、土師器甕で、破片資料としてAB-67第I層中より出土した。外面調整は、ロクロ成形のち胴部から底部方向にかけて縦方向のヘラケズリを施す。内面調整は、ロクロによるナデである。復元口径は22.0cmである。9世紀末葉～10世紀前半に帰属するものと思われる。

第15図11～13は、いずれも須恵器の甕の胴部破片である。第15図14は、須恵器の胴部破片であるが、器種は、甕の可能性が高いが他の破片と調整が異なり、明瞭ではない。

(木村淳一)



第14图 B区遺構外出土土器1



第15图 B区遺構外出土土器2

第7表 B区遺構外出土土器観察表

図版番号	出土地点	層位	器種	部位	文様	分類	備考
14-1	AI-68	Ⅲ	深鉢	口縁部～胴部	隆帯 単軸絡条体1類	I群	
14-2	S-70	Ⅳ	深鉢	口縁部	LR圧痕 橋状把手	I群2類c	
14-3	T-70	Ⅲ	深鉢	口縁部	LR圧痕	I群2類a	
14-4	S-70	Ⅲ	深鉢	口縁部～胴部	LR圧痕 LR斜縄文	I群2類a	
14-5	AD-76	Ⅲ	深鉢	口縁部	R圧痕	I群2類f	
14-6	AH-72	Ⅲ	深鉢	口縁部	LR圧痕 隆帯	I群2類e	
14-7	AI-70	Ⅲ	深鉢	口縁部	LR0段多条	I群	
14-8	T-70	Ⅲ	深鉢	胴部	LR・RL結束第一種	I群	
14-9	S-71	Ⅲ	深鉢	胴部	LR・RL結束第一種	I群	
14-10	AI-71	Ⅲ	深鉢	胴部	RL斜縄文	I群	
14-11	AI-70	Ⅲ	深鉢	胴部	LR斜縄文	I群	
14-12	AH-72	Ⅲ	深鉢	胴部	LR結束第二種	I群	
14-13	MN-76	カクラン	深鉢	胴部	結節回転文 LR	I群	
14-14	AD-76	Ⅲ	深鉢	胴部	結節回転文2段 RL	I群	
14-15	AT-56	I	深鉢	口縁部	沈線文	Ⅲ群1類	
14-16	AT-56	I	深鉢	口縁部	平行沈線 R 斜行沈線	Ⅲ群3類	
14-17	AT-56	I	深鉢	胴部	平行沈線 R 曲沈線	Ⅲ群3類	
14-18	AA-75	Ⅲ	深鉢	胴部	沈線	Ⅲ群3類	
14-19	T-66	I	深鉢	胴部	入組文	Ⅲ群3類	
14-20	AE-50	Ⅲ	深鉢	胴部	無文	Ⅲ群3類	
14-21	AG-47	I	深鉢	胴部	無文	Ⅲ群3類	
14-22	S-68	Ⅲ	浅鉢	底部	無文	Ⅲ群3類	
14-23	S-71	Ⅱ	浅鉢	底部	沈線による十字状の痕跡	Ⅲ群3類	
14-24	AT-56	Ⅱ	台付鉢	台部	稚拙な入組文	Ⅲ群3類	
15-1	AT-56	Ⅱ	壺	口縁部	沈線	Ⅲ群3類	
15-2	AT-56	Ⅱ	壺	口縁部～胴部	刺突文(竹管) 入組文 摩消縄文(LR)	Ⅲ群3類	
15-3	AT-56	Ⅱ	壺	口縁部～胴部	刺突文(竹管) 入組文 摩消縄文(RL)	Ⅲ群3類	
15-4	T-56	Ⅱ	壺	胴部	入組文	Ⅲ群3類	
15-5	AT-56	Ⅱ	壺	胴部～底部	平行沈線 摩消縄文(LR)	Ⅲ群3類	
15-6	AG-78	Ⅲ	深鉢	口縁部	LR斜縄文 平行沈線	Ⅳ群	
15-7	AG-78	Ⅲ	深鉢	胴部	平行沈線	Ⅳ群	
15-8	AG-78	Ⅲ	深鉢	胴部	LR斜縄文 矢羽状沈線文	Ⅳ群	
15-9	AG-58	Ⅱ	深鉢	口縁部	帯縄文 平行沈線文 キザミ(列点状)	V群	
15-10	AB-67	I	甕	口縁部～胴部	ヘラケズリ ロクロナデ	Ⅵ群	
15-11	AJ-48	Ⅱ	甕	胴部	叩き目(格子状)	Ⅵ群	
15-12	表採		甕	胴部	叩き目(格子状)	Ⅵ群	
15-13	R-67	I	甕	胴部	叩き目(格子状)	Ⅵ群	
15-14	AA-55	I	不明	胴部	叩き目	Ⅵ群	

2) 石 器

B区出土の石器は遺構外からA群1類1点、D群1類4点、E群1点、G群2類1点、G群3類1点、G群6類1点、K群9点、M群3類1点、N群1類1点、P群1点が出土した。B区北側からの出土である。

A群 石鏃

第16図1は、二等辺三角形を呈し、両面に調整剥離を施している。正面の調整剥離はほぼ全面に及んでいるが、裏面は主要剥離面を残す。薄手の平坦な側面観を呈する。正面右側縁からの調整剥離はその他の剥離と比較すると、ネガティブ面が抉られる剥離が施されており、主に平坦な剥離が施される正面左側縁や裏面右側縁とは異なる調整剥離である。厚みのあるバルブ側を素材の末端側同様に薄くするための調整が施された可能性も考えられる。

D群 石匙

B区出土石器中剥片を除き、最も出土点数が多い。すべて縦型である。

第16図6は、縦長剥片を素材とし、両側縁から裏面を打面とした調整剥離を施した後、正面を打面とした、バルブから末端までが短い調整剥離を施し刃部が作出されている。刃部の側面観は波形を呈する。正面下端には僅かに微細剥離を観察するが、調整剥離をほとんど施しておらず、古いネガティブ面を残している。第16図4は、つまみと下端が欠損した石匙と思われる。断面が三角形の厚みのある器体である。正面右側縁は縦長の調整剥離が整然と施されるだけなのに対し、左側縁の調整剥離は縦長の調整剥離が施されたのち、横長で末端が階段状の剥離が側縁の全域にわたり施される。

E群 石篋

第16図5は撥形を呈し、横長で幅広の調整剥離を器体側縁に施し、石器長軸に対して斜交する直線状の刃部が幅広の調整剥離によって作出されている。

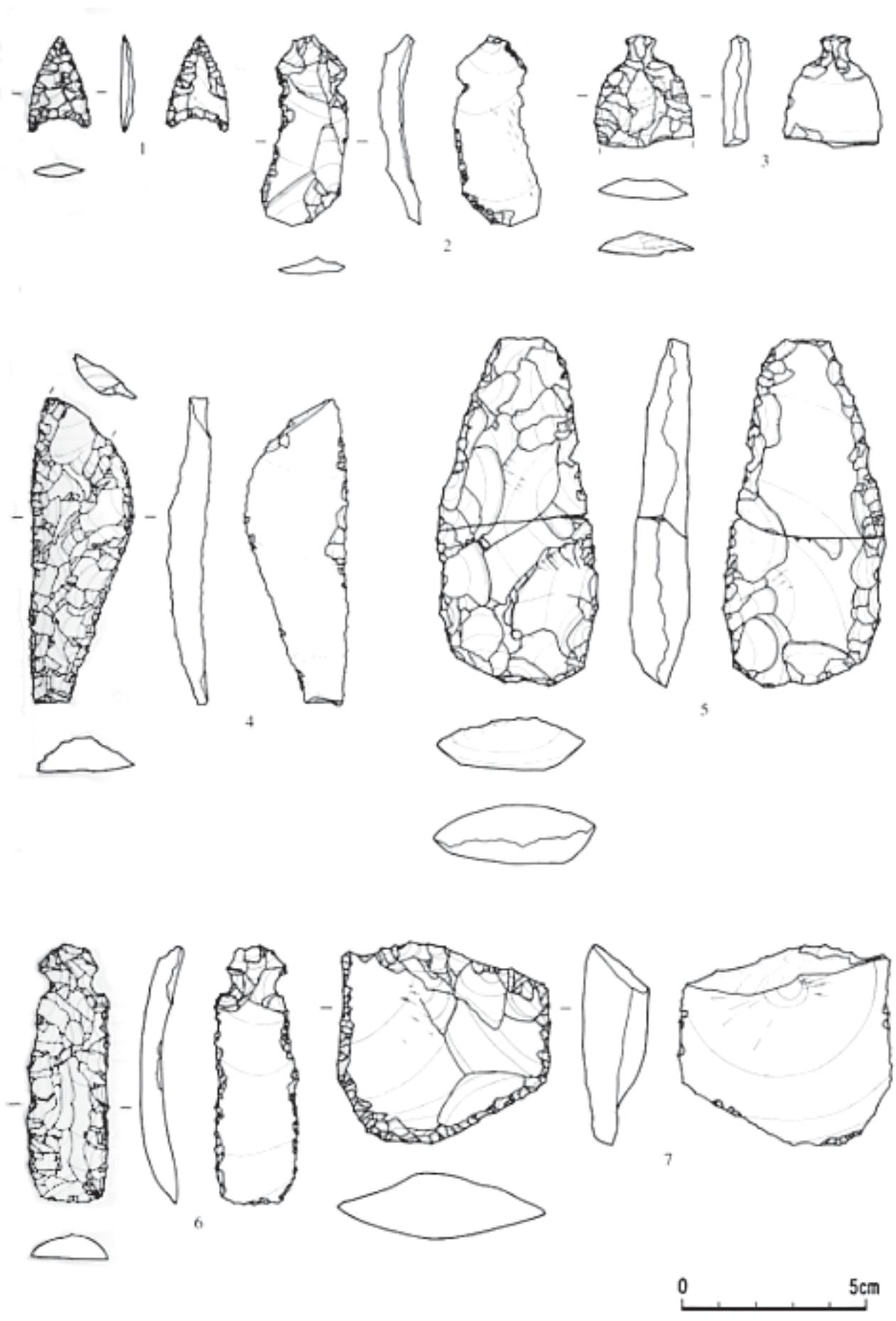
G群 不定形石器

第16図7は、四角形に近い剥片を素材とし、周縁に調整剥離を施し刃部が作出されている。刃部の調整剥離は、裏面を打面とする片面のみの調整である。素材剥片の平坦な断面形状を変えない緩斜度な刃部である。第17図1は、薄い縦長剥片を素材とし、正面右側縁から下端にわたり調整剥離を施し、刃部が作出されている。正面右側縁から下端の刃部が作出されていない縁辺は、非常に鋭角な鋭い断面を呈し、右側縁上側に微細剥離を観察することから、調整剥離を施していない縁辺も刃部として機能していたことも考えられる。

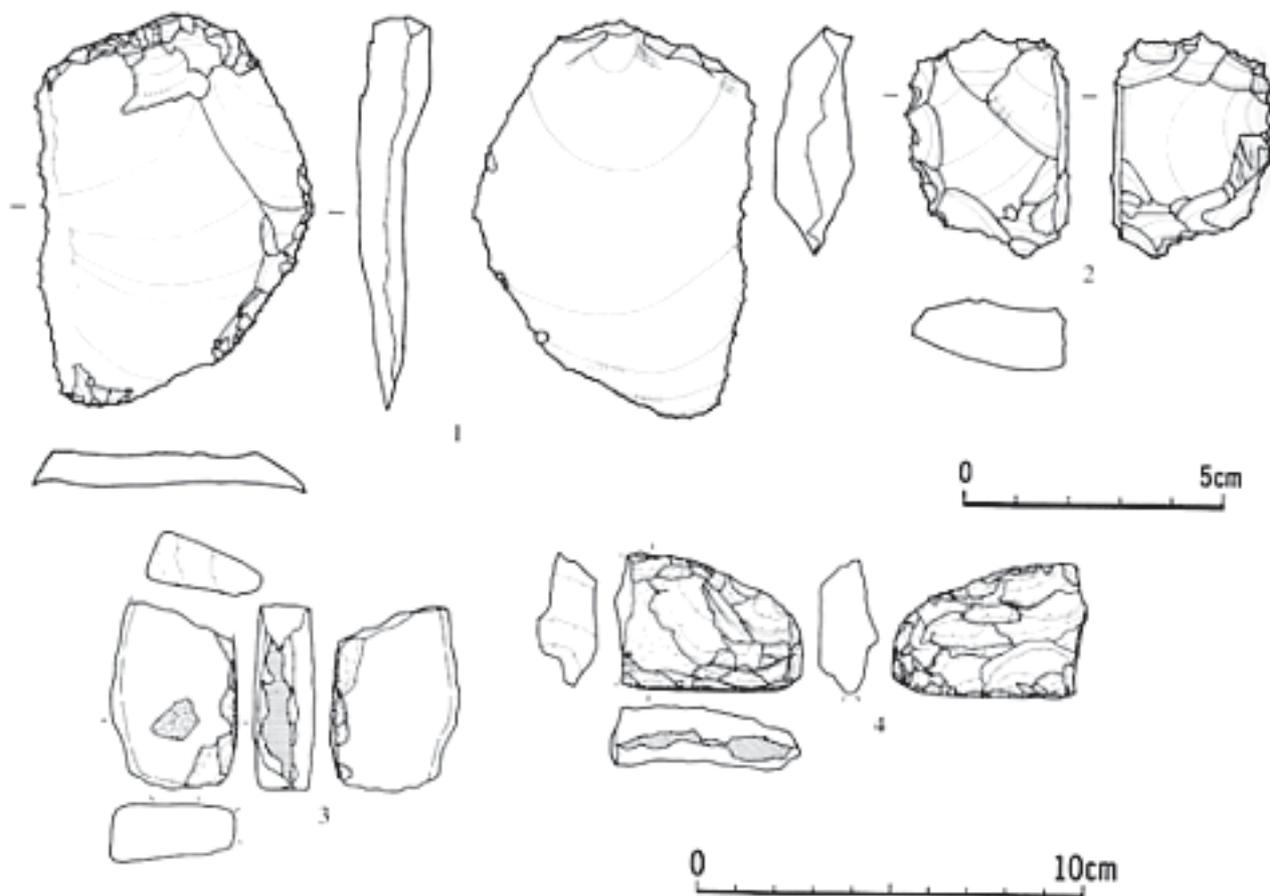
N群 半円状扁平打製石器あるいはそれに類似する形状のもの

第17図4は、欠損品であるが、残存部分のほぼ全周に剥離が施され、滑らかなスリ面である。

(沼宮内陽一郎)



第16图 B区遺構外出土石器1



第17図 B区遺構外出土遺物

第8表 B区遺構外出土石器観察表

図版番号	出土地点	層位	最大計測値				石質	分類	備考
			長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)			
16-1	C-84	II	26	17	3	1.2	珪・頁	A-1	
16-2	S-68	II	53	24	11	6.8	珪・頁	D-1	
16-3	AF-78	IV	(38)	27	10	(75.2)	珪・頁	D-2	
16-4	AI-75	II	(89)	29	12	(25.3)	珪・頁	D-1	
16-5	AF-49	風倒木	97	49	16	64.4	珪・頁	E	
16-6	AF-77	IV	72	23	10	14.8	珪・頁	D-1	
16-7	S-70	III	58	56	18	51.9	珪・頁	G-3	
17-1	AH-48	III	79	55	19	43.2	珪・頁	G-2	
17-2	D-84	カクラン	(46)	33	16	(25.7)	珪・頁	G-6	
17-3	AH-49	III	(98)	67	31	(304)	安	M-3	
17-4	AD-75	II	(99)	72	32	(252)	安	N-1	

3) 土製品

B区出土の土製品は、第2号土坑から垂飾品が3点出土した。

垂飾品（第12図3～5）

貫通口を有する土製品で垂飾品と想定できるものである。第2号土坑の底面に接する堆積層から3点出土した。第2号土坑は、堆積状況から墓として考えられ、本資料は、出土状況から埋葬時に装着されていた可能性が想定される。資料は菱形を呈するもの1点と楕円形を呈するもの2点である。

菱形を呈するものは板状を呈し、短軸方向に穿孔されている。各頂部には弧状、両面には3重の沈線が施され、中央と2重目の沈線の間と中心部に刺突が加えられ、また、側面頂点にも刺突が施されている。

楕円形を呈するものは扁平で、短軸方向に穿孔されている。1点は完形品であるが、もう1点は約半分が欠損している。

時期的には、本資料の菱形を呈するものが、十腰内I式土器を主体とする遺跡から、数例出土していることから、縄文時代後期前葉に製作されたものと考えられる。

なお、本資料について、第V章で考察する。

(児玉大成)

第3節 C区の調査

C区は、調査面積約2,000m²であり、台地が小舌状に突出する地形の根元にあたる。検出した遺構は、竪穴式住居跡7軒、土坑50基、埋設土器遺構11基、柱穴状ピット20基、遺物集中ブロック1である。出土した遺物は、段ボール箱で約95箱で、内訳は縄文時代の土器・石器・土製品である。なかでも縄文時代前期末葉から中期初頭にかけての遺物が主体を占める。検出遺構もおおむね同様の時期で、この時期の集落を構成するものと思われる。

なお、C区の80～103ライン内においては、基本層序第Ⅱ～Ⅳ層は全体に削平を受けており、さらに削平の後、盛土がおこなわれ、平坦に造成されていた。そのため、同ライン内の検出遺構は上部が失われている。

1. 竪穴式住居跡

第1号竪穴式住居跡（第18図）

[位置] AF～AH-93・94において、盛土下に現れた第Ⅴ層で黒褐色土の落ち込みを確認した。本遺構は、全体として西に傾斜する調査区のなかで、さらに西に小丘状に突出する地形の根元の部分に構築されている。遺構上部は近代の削平により失われている。

[重複] なし。

[平面形・規模] 現存部分における長軸は6.5m、短軸は4.5mで隅丸長方形を呈する。

[壁] 現存部分における壁面の大部分は、やや急に立ち上がる。南壁は緩やかに立ち上がる。壁高は、北壁12cm、東壁14cm、西壁11cm、南壁17cmである。

[床] 第Ⅴ層を床面としている。床面は、ほぼ平坦で非常に堅緻である。

[柱穴] 計11基のピットを検出した。床面からの深さは、Pit1が54cm、2が50cm、3が58cm、4が32cm、5が51cm、6が50cm、7が5cm、8が7cm、9が2cm、10が3cm、11が5cmを計測する。規模・配置よりpit1～6は支柱穴と思われる。

[炉] 床面中央やや東寄りで地床炉1基を検出した。

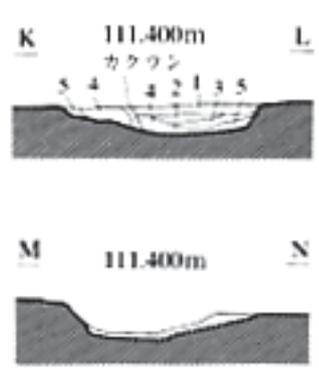
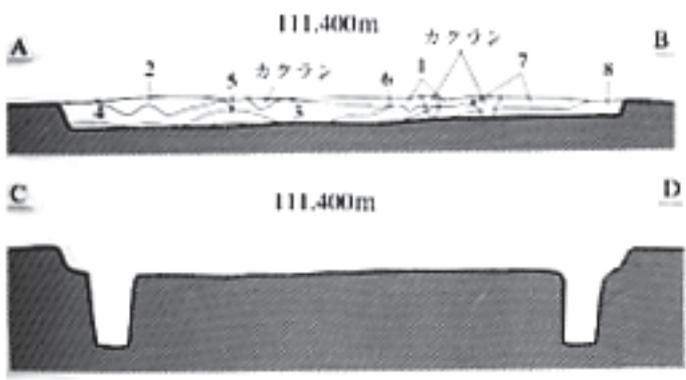
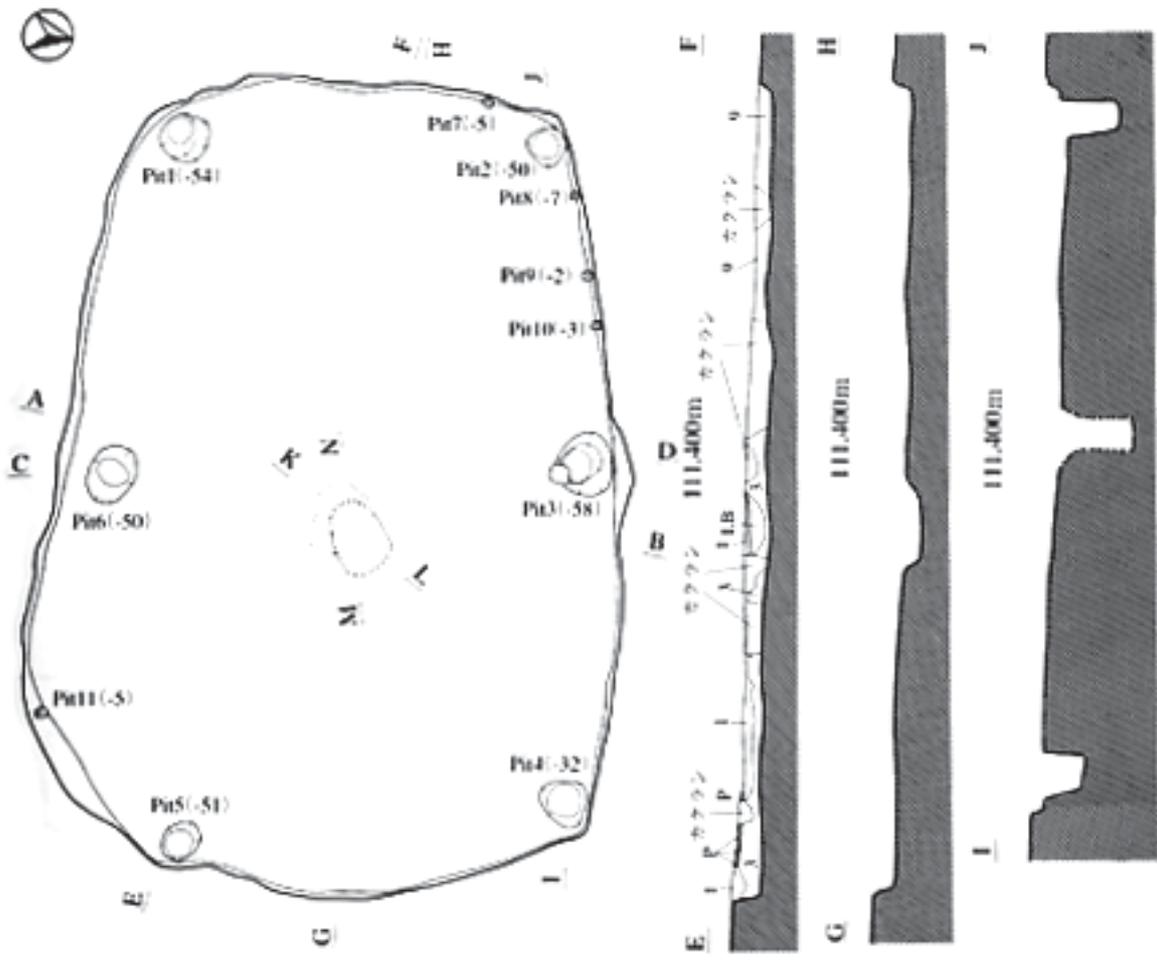
[特殊施設] なし。

[堆積土] 9層に分層した。1層は自然堆積、その他は人為堆積と思われる。

[その他の付属施設] なし。

[出土遺物] 覆土中、床面より土器（第19図1～11）及び土製品（第19図12、13）が出土した。土器は、Ⅰ群、Ⅰ群2類c、Ⅱ群1類土器が出土した。土製品は、ミニチュア土器の底部、紐状の焼成粘土塊が出土した。

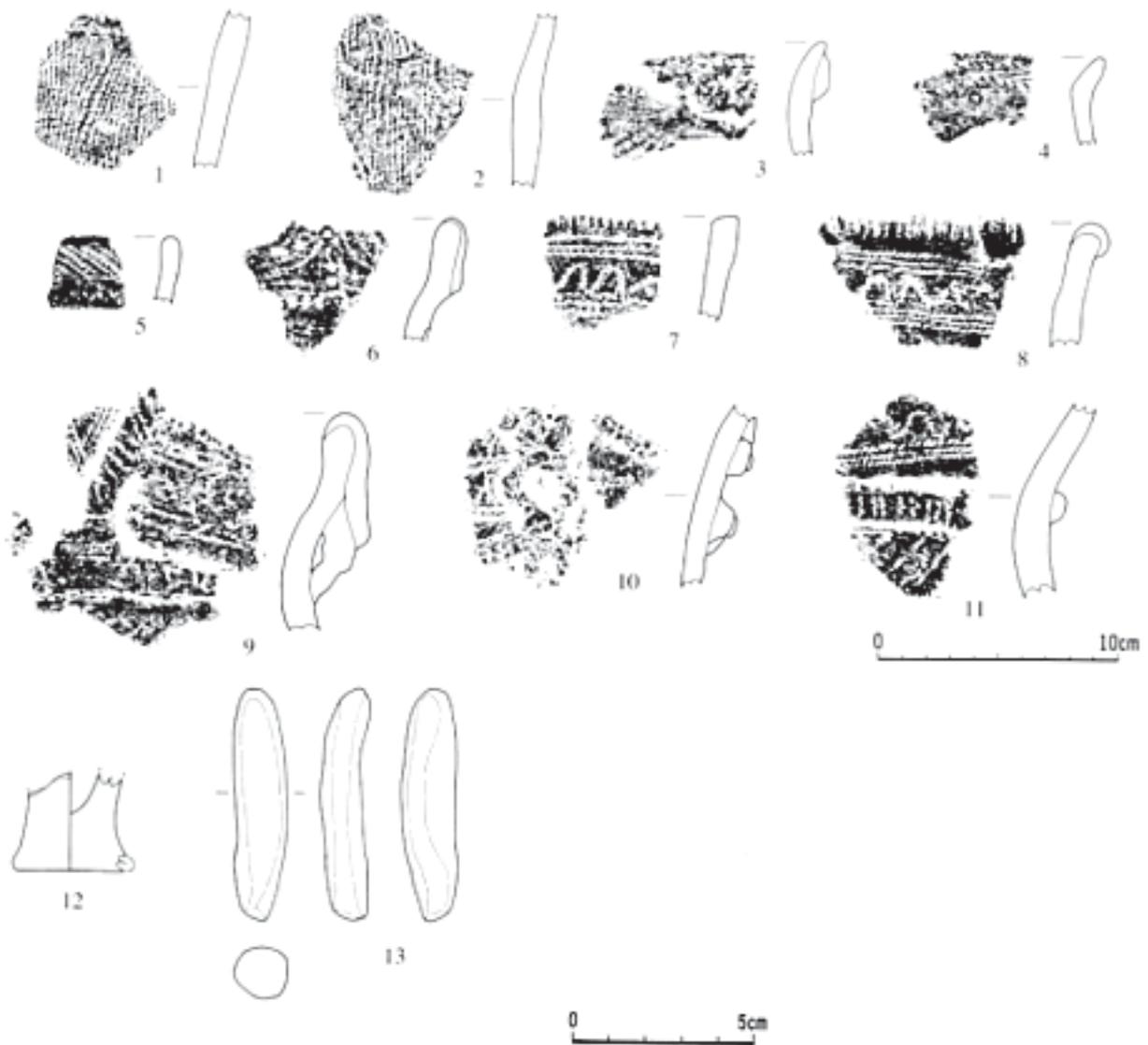
[小結] 覆土下層及び床面から第Ⅰ群2類c土器（注. C区出土土器の細分については140頁参照）が出土しており、縄文時代前期末葉～中期初頭の竪穴式住居跡と思われる。



- 第1号竖穴式住居跡
- 第1層 床面片：H9829 灰化土、珪石、土器片
 - 第2層 灰土：H9844 珪石、土器片、灰化土、土器片
 - 第3層 灰土：H9854 灰化土、珪石、土器片、土器片
 - 第4層 灰土：H9854 灰化土、珪石、土器片、土器片
 - 第5層 灰土：H9846 珪石、土器片
 - 第6層 灰土：H9853 灰化土、珪石、土器片
 - 第7層 灰土：H9844 珪石、土器片
 - 第8層 灰土：H9854 灰化土、珪石、土器片
 - 第9層 灰土：H9855 灰化土、珪石、土器片
- 第1層 床面片：H9829 灰化土、珪石、土器片、土器片
 - 第2層 灰土：H9854 珪石、土器片
 - 第3層 灰土：H9829 珪石、土器片、土器片
 - 第4層 灰土：H9856 珪石、土器片
 - 第5層 灰土：H9854 珪石、土器片

0 2m

第18图 C区第1号竖穴式住居跡



第19図 C区第1号竖穴式住居跡出土土器・土製品

第9表 C区第1号竖穴式住居跡出土土器観察表

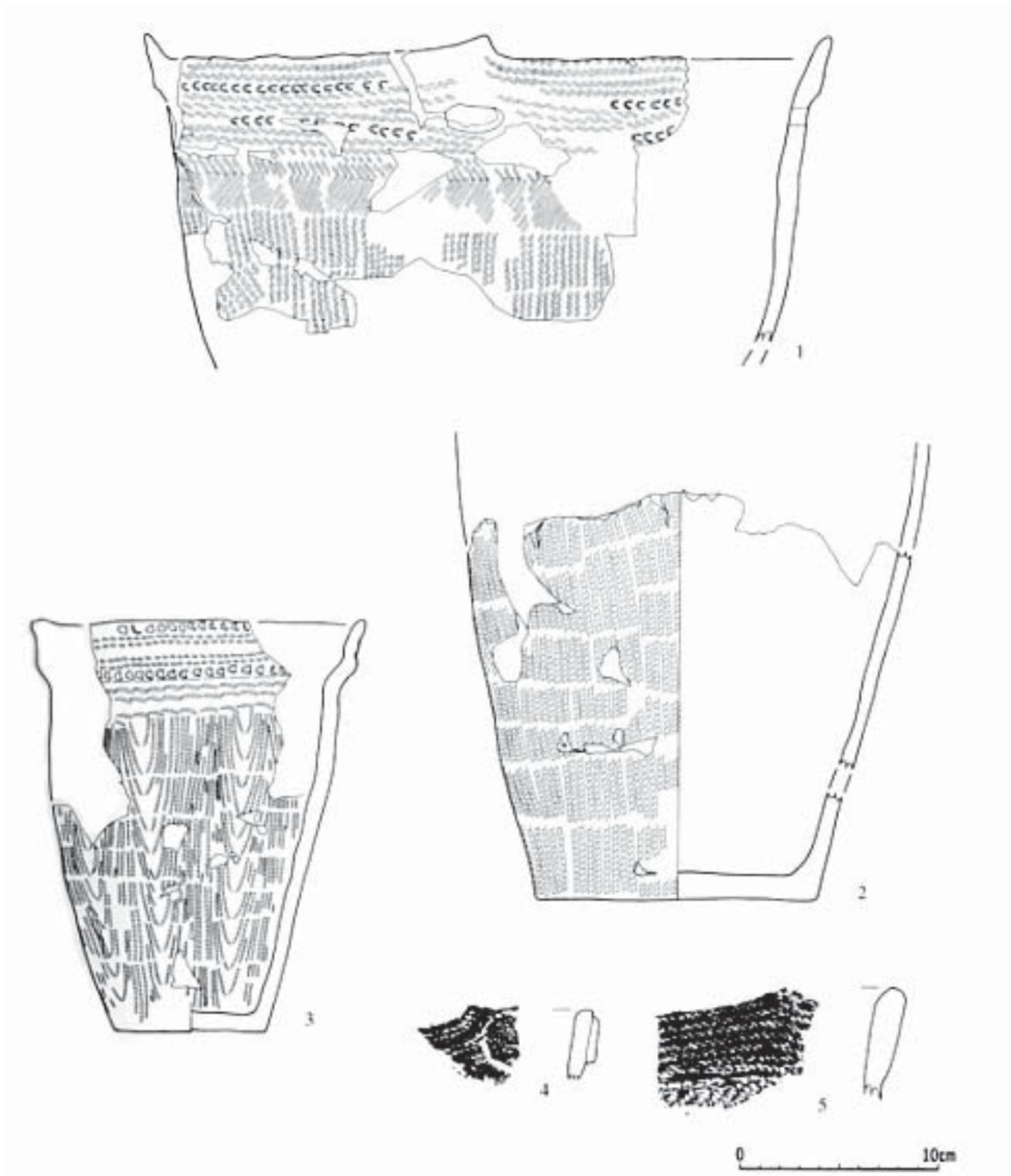
図版番号	出土地点	層位	器種	部位	文様	分類	備考
19-1	C1住	床直	深鉢	胴部	L圧痕 L単軸絡条体1類	I群	
19-2	C1住	床直	深鉢	胴部	L単軸絡条体1類	I群	
19-3	C1住	床直	深鉢	口縁部	LR圧痕 貼付 LR縄文	I群2類c	
19-4	C1住	床直	深鉢	口縁部	LR圧痕	I群	
19-5	C1住	フク9	深鉢	口縁部	LR縄文	I群	
19-6	C1住	フク9	深鉢	口縁部	隆帯 刺突 L圧痕	I群2類c	
19-7	C1住	フク9	深鉢	口縁部	L圧痕 R圧痕	II群1類	
19-8	C1住	フク4	深鉢	口縁部	貼付 R圧痕	II群1類	
19-9	C1住	フク1	深鉢	口縁部	隆帯 橋状把手 R圧痕	II群1類	
19-10	C1住	フク1	深鉢	口縁部	隆帯 RL圧痕 LR圧痕	II群1類	
19-11	C1住	フク1	深鉢	口縁部	R圧痕 隆帯 LR縄文	II群1類	

第10表 C区第1号竖穴式住居跡出土土製品観察表

図版番号	出土地点	層位	種類	特徴・計測値 (cm, g) 等
19-12	C1住	フク1	ミニチュア土器	台付、無文、手捏ね、器高2.8、底径3.0、重さ18.6
19-13	C2住	フク1	焼成粘土塊	紐状、無文、長さ6.6、幅1.4、重さ12.0

第2号竪穴式住居跡（第20図）

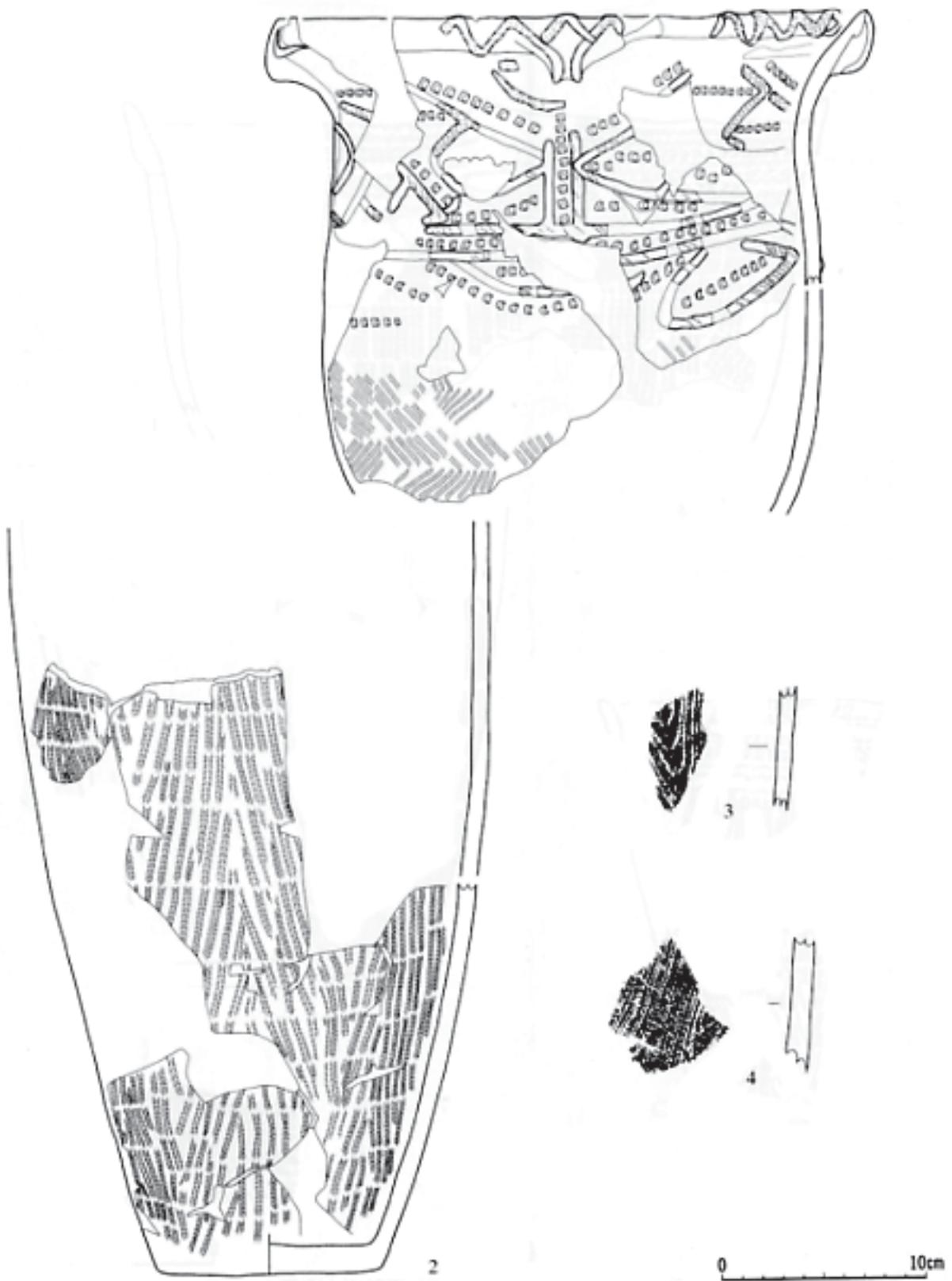
- [位置] AF～AH－105～107、第Ⅲ層において、褐色ロームの落ち込みを確認した。調査区内の小丘状台地が北に傾斜し始める地点に位置する。
- [重複] 第61号土坑と重複するが、第61号土坑より新しい。
- [平面形・規模] 長軸は、7.5m、短軸は4.5mで楕円形を呈する。
- [壁] 現存部分における壁面の大部分は、やや急に立ち上がる。本住居の西北部分においては、床から壁への立ち上がりを明確に確認できなかった。壁高は、北壁24cm、東壁60cm、西壁39cm、南壁17cmである。
- [床] 第Ⅴ・Ⅵ層を床面としている。床面は、一部貼床である。多少の起伏があるが全体としてほぼ平坦で堅緻である。本住居の西北部分の一部においては床面を明確に確認できなかった。
- [柱穴] 計23基のピットを検出した。床面からの深さは、Pit1が50cm、2が75cm、3が53cm、4が32cm、5が66cm、6が50cm、7が60cm、8が50cm、9が40cm、10が70cm、11が21cm、12が32cm、13が11cm、14が22cm、15が16cm、16が34cm、17が28cm、18が50cm、19が15cm、20が20cm、21が11cm、22が22cm、23が25cm、24が7cmを計測する。規模・配置よりPit1～4及びPit7～10は、支柱穴と思われる。
- [炉] 床面中央やや東寄りで地床炉を1基、床面中央やや南寄りで焼土を検出した。
- [特殊施設] 床面東側で径58cm、深さ66cmのピットを検出した。
- [堆積土] 6層に分層した。1、2各層は、基本層序第Ⅴ・Ⅵ層出自と思われる地山ロームを多量に含む。人為堆積と思われる。堆積土は、一部樹木によると思われる攪乱を受けている。
- [その他の付属施設] 西北部分を除き、壁際を断続的に巡る壁溝を検出した。また壁溝の底部では、計7基の小ピットを検出した。床面西南部で口径130cm、底径150cm、確認面よりの深さ34cm、断面形がフラスコ状を呈する土坑を1基検出した。床面中央よりやや東側で埋設土器遺構を2基検出した。
- [出土遺物] 床面及び覆土中より土器（第21、22図）及び石器（第23図）が出土した。出土土器は、Ⅰ群、Ⅰ群2類b～d、Ⅱ群2類土器である。覆土中の土器は大半が破片であるが完形に近いものが1個体出土した。覆土が樹木によると思われる攪乱を受けている部分からは第Ⅰ群2類土器の破片が出土した。石器は、G群1類2点、H群2点、L群2類1点、M群3類1点、M群4類1点、M群5類1点、N群1類2点が出土した。
- [小結] 床面及び埋設土器遺構から第Ⅰ群2類d土器が出土しており、縄文時代前期末葉～中期初頭の竪穴式住居跡と思われる。



第21図 C区第2号竖穴式住居跡出土土器1

第11表 C区第2号竖穴式住居跡出土土器観察表

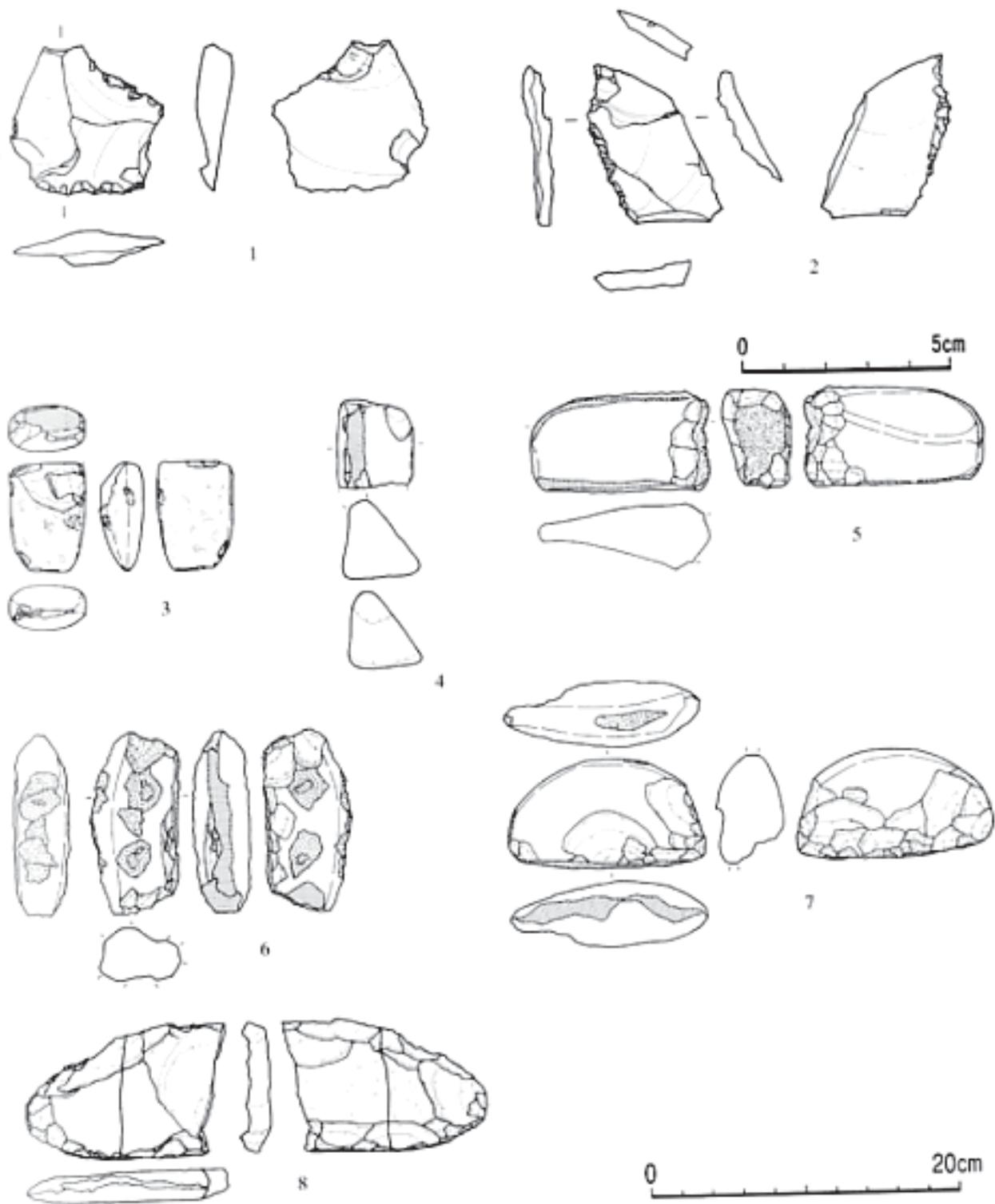
図版番号	出土地点	層位	器種	部位	文様	分類	備考
21-1	C2住	埋設 1	深鉢	口縁部	LR圧痕 刺突 LRRL結束第一種 LR単軸絡条体1類	I群2類d	
21-2	C2住	埋設 1	深鉢	底部	LR単軸絡条体1類	I群	
21-3	C2住	フク 2	深鉢	完形	LR圧痕 刺突 結束回転文 L・R単軸絡条体1A類	I群2類b	
21-4	C2住	フク 7	深鉢	口縁部	ボタン状貼付 L圧痕	I群2類c	
21-5	C2住	フク 3	深鉢	口縁部	隆帯 LR縄文 LR縄文	I群2類b	



第22図 C区第2号竖穴式住居跡出土土器2

第12表 C区第2号竖穴式住居跡出土土器観察表2

図版番号	出土地点	層位	器種	部位	文様	分類	備考
22-1	C2住	フク 2	深鉢	口縁部	隆帯 刺突 L圧痕 LRRL結束第一種	II群2類	
22-2	C2住	フク 1	深鉢	底部	L・R単軸絡条体1A類	I群	
22-3	C2住	フク 2	深鉢	胴部	L単軸絡条体1A類	I群	
22-4	C2住	フク 2	深鉢	胴部	L・R単軸絡条体1A類	I群	



第23図 C区第2号竪穴式住居跡出土石器

第13表 C区第2号竪穴式住居跡出土石器観察表

図版番号	出土地点	層位	最大計測値				石質	分類	備考
			長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)			
23-1	C2住	フク 2	39	37	9	8.1	珪・頁	G-1	
23-2	C2住	フク土	40	33	7	5.7	珪・頁	G-1	
23-3	C2住	フク 1	72	51	29	173	輝・凝	L-2	
23-4	C2住	フク 9	59	50	61	228	安	M-3	
23-5	C2住	フク 5	116	56	45	474	安	M-4	
23-6	C2住	フク11	120	58	37	348	安	M-5	
23-7	C2住	フク 3	129	71	45	466	安	N-1	
23-8	C2住	フク 3	(133)	88	20	(286)	凝	N-1	AE-110グリッドからの出土と接合

第3号竪穴式住居跡（第24図）

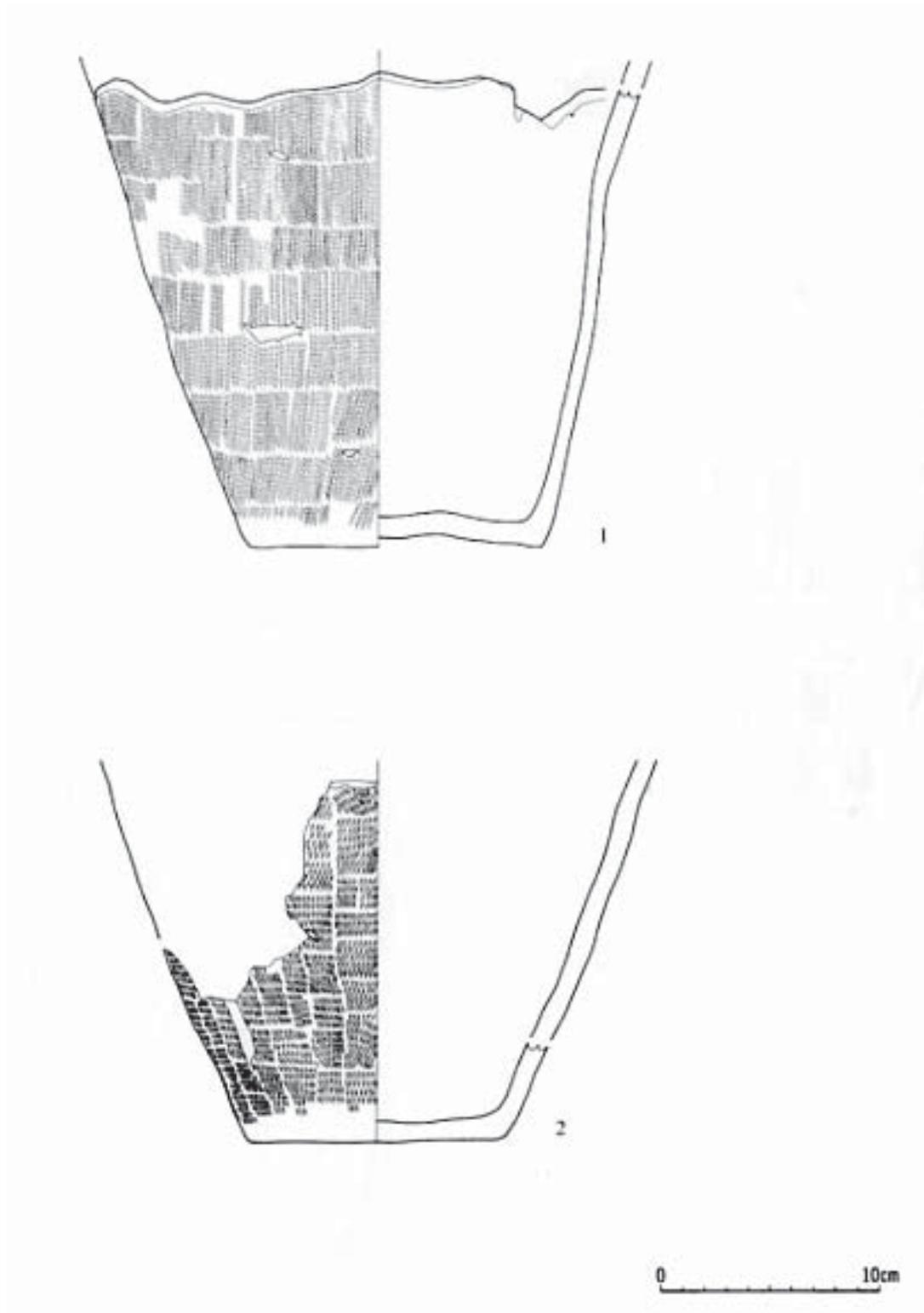
- [位置] AC・AD－106・107、第IV層において黒褐色土の落ち込みを確認した。本遺構は、第2号竪穴式住居跡同様、調査区内の小丘状台地が北に傾斜し始める地点の調査区東端付近に位置する。
- [重複] 第4号竪穴式住居跡と重複しており、本住居跡が古い。
- [平面形・規模] 第4号竪穴式住居跡と重複しており、全容は明確でない。確認できる最大径は、ほぼ南北方向における2.4mである。平面形は楕円形もしくは円形と推測される。
- [壁] 現存部分における南～西壁面は、急に立ち上がる。壁高は北壁20cm、西壁28cm、南壁26cmである。
- [床] 第V・VI層を床面としている。床面はほぼ平坦で堅緻である。床面中央部は、一部貼床である。住居跡南側で一部段状に高くなっている。
- [柱穴] 計9基のピットを検出した。第4号竪穴式住居跡内のピット3、4は本住居跡に伴うものである。床面からの深さは、Pit1が71cm、2が87cm、3が67cm、4が61cm、5が31cm、6が3cm、7が6cm、8が27cm、9が24cm、10が31cmを計測する。規模・配置よりPit1～4は支柱穴と思われる。
- [炉] 住居跡中央部と推定される床面で土器埋設炉1基を検出した。
- [特殊施設] なし。
- [堆積土] 11層に分層した。10層以下は貼床である。自然堆積と思われる。
- [その他の付属施設] 住居跡南側の段状の部分で径130cm、深さ33cmのピットを検出した。貼床下で埋設土器遺構を2基検出した。床面南側の壁際で壁溝を検出した。溝の底部では、計4基の小ピットを検出した。
- [出土遺物] 覆土中、床面より土器（第25～28図、第29図1～3）及び石器（第29図4～8、第30図）が出土した。出土土器は、I群、I群2類b～d、f土器である。土器埋設炉内部からI群2類b土器が出土した。覆土中の土器は、ほぼ完形のもの1個体、胴上半部のもの1個体を除き、破片である。石器は、A群1点、A群2類3点、G群1類2点、G群4類1点、I群1点、M群2類1点、M群3類2点、M群4類1点、N群1類2点、N群3類1点、Q群1類1点が出土した。
- [小結] 埋設炉内部から第I群2類b土器が出土しており、縄文時代前期末葉～中期初頭の竪穴式住居跡と思われる。



第25図 C区第3号竖穴式住居跡出土土器1

第14表 C区第3号竖穴式住居跡出土土器観察表1

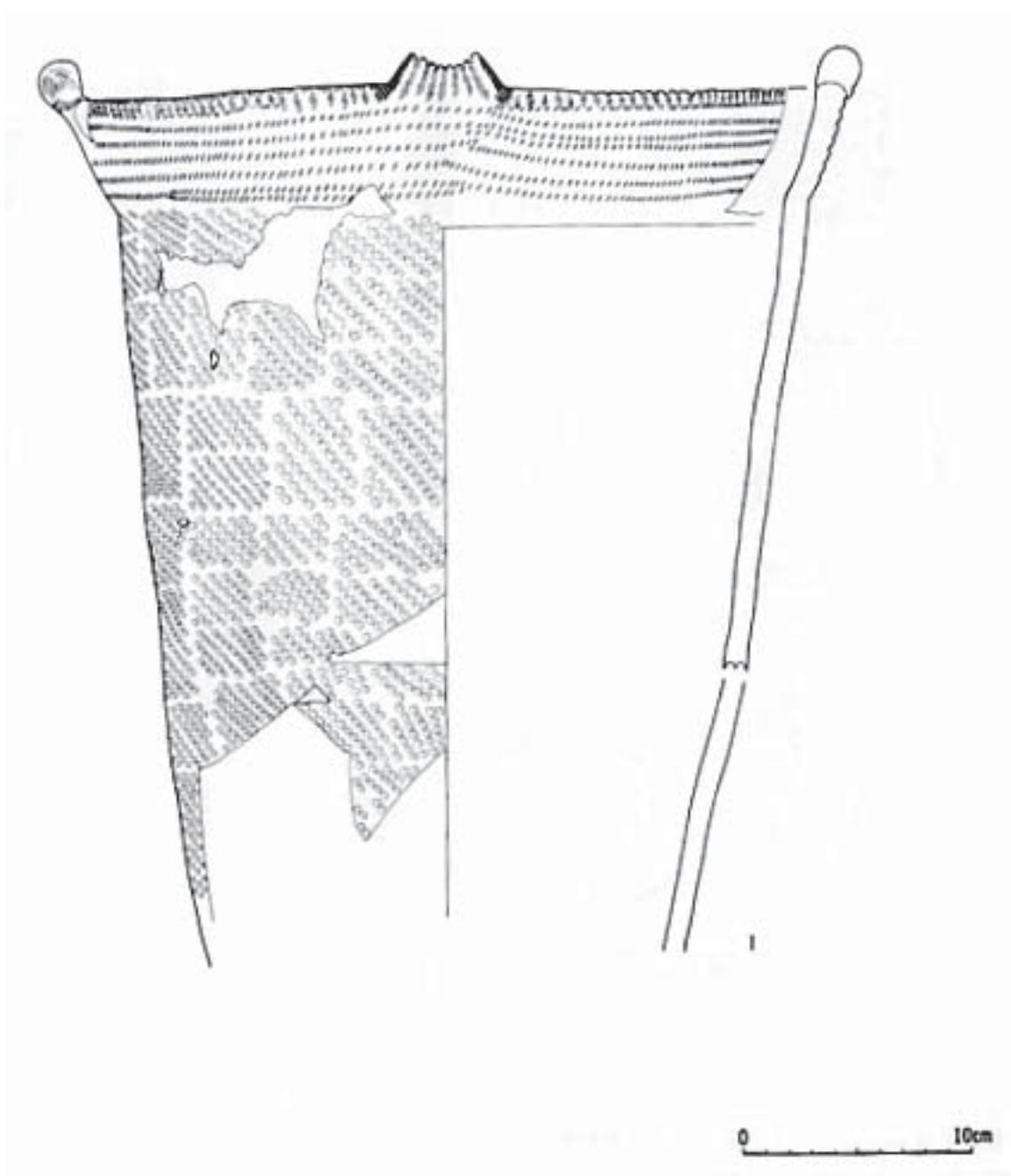
図版番号	出土地点	層位	器種	部位	文様	分類	備考
25-1	C3住	埋設炉	深鉢	胴部	LR縄文 L単軸絡条体1類	I群	
25-2	C3住	埋設炉内	深鉢	略完形	L圧痕 結節回転文 刺突 LRRL結束第一種	I群2類b	



第 26 図 C区第 3号竪穴式住居跡出土土器 2

第 15 表 C区第 3号竪穴式住居跡出土土器観察表 2

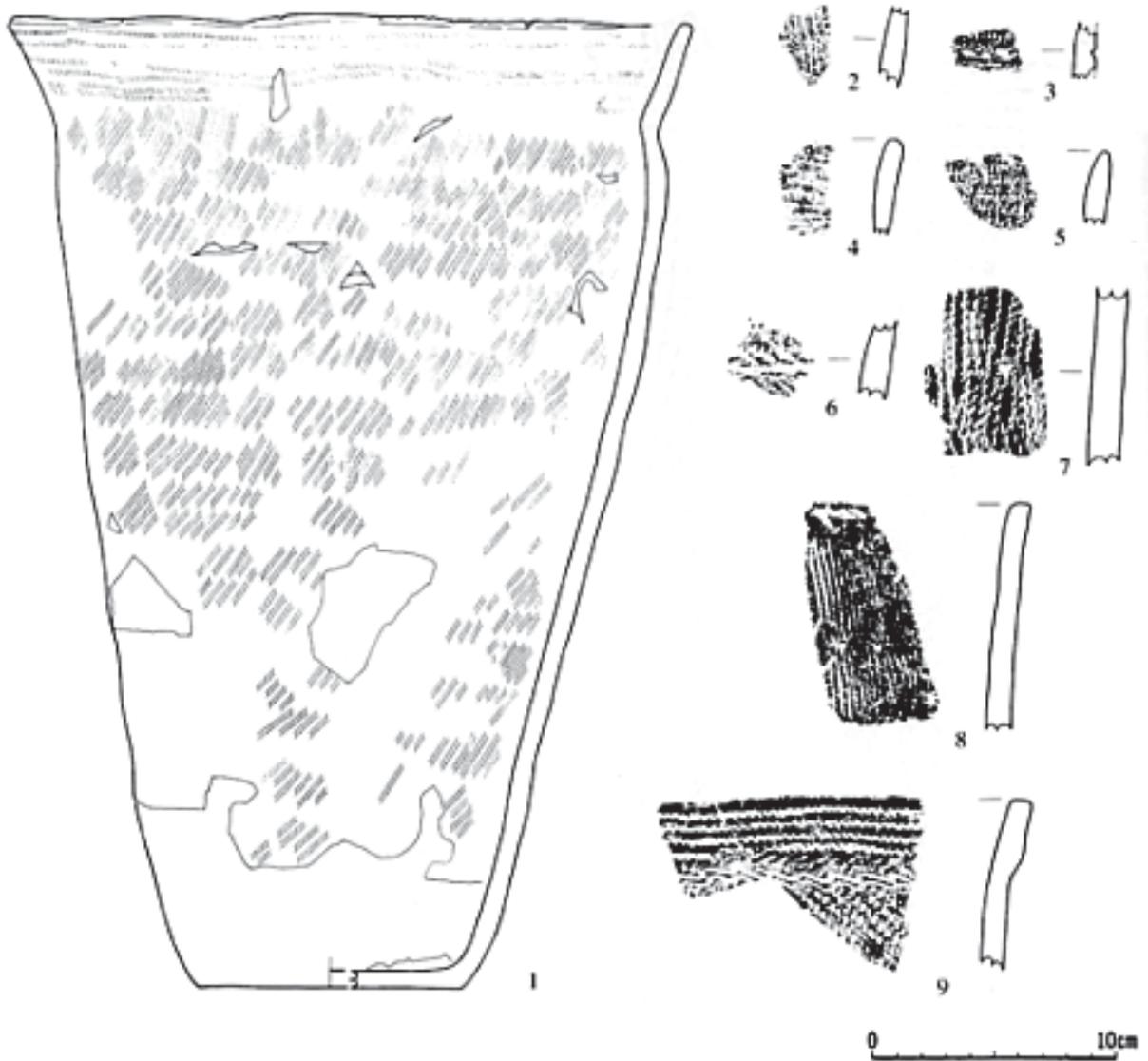
図版番号	出土地点	層位	器種	部位	文様	分類	備考
26-1	C3住	埋設 1	深鉢	底部	L単軸絡条体1類	I群	
26-2	C3住	埋設 2	深鉢	底部	多軸絡条体	I群	



第 27 図 C 区第 3 号竪穴式住居跡出土土器 3

第 16 表 C 区第 3 号竪穴式住居跡出土土器観察表 3

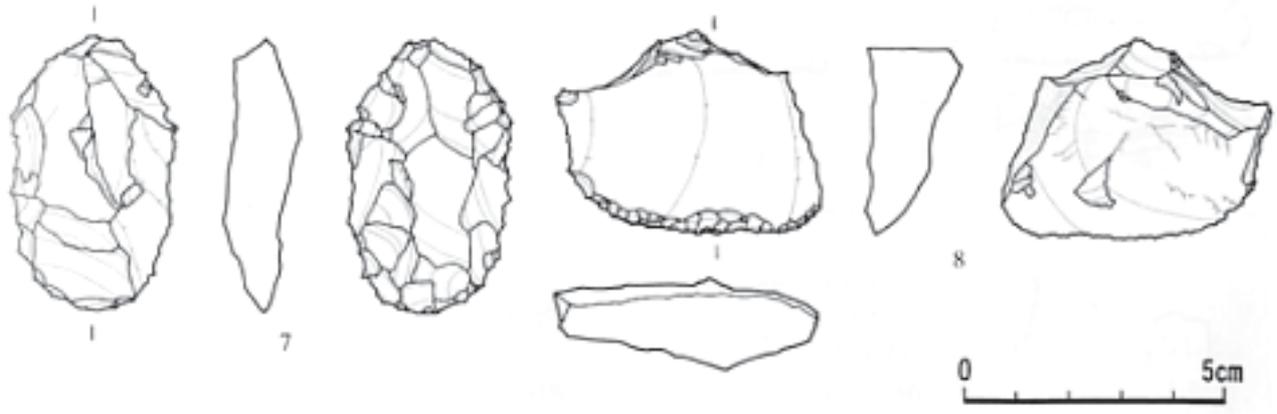
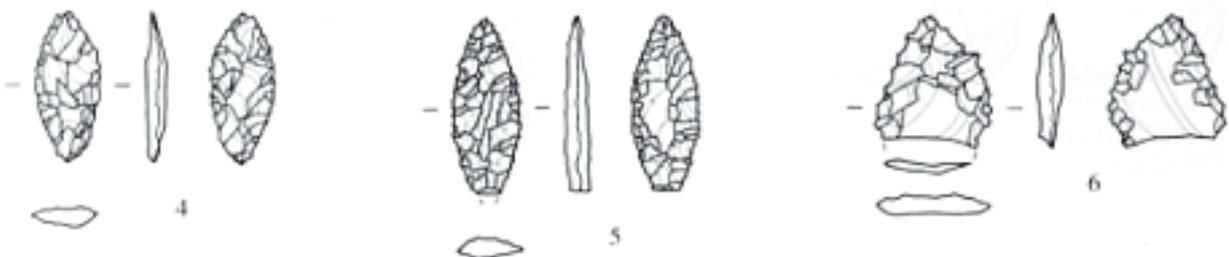
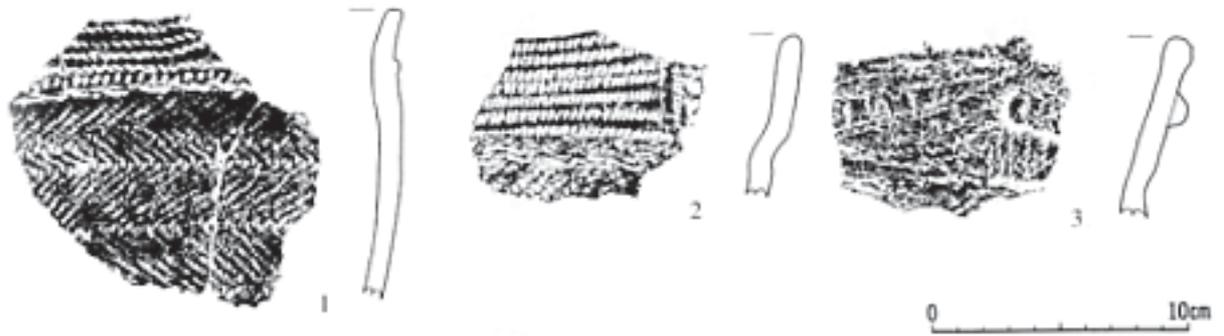
図版番号	出土地点	層位	器種	部位	文様	分類	備考
27-1	C3住	フク 1	深鉢	上半部	貼付 LR縄文 LR圧痕 絡条体圧痕 RLR縄文	I 群2類b	



第28図 C区第3号竪穴式住居跡出土土器4

第17表 C区第3号竪穴式住居跡出土土器観察表4

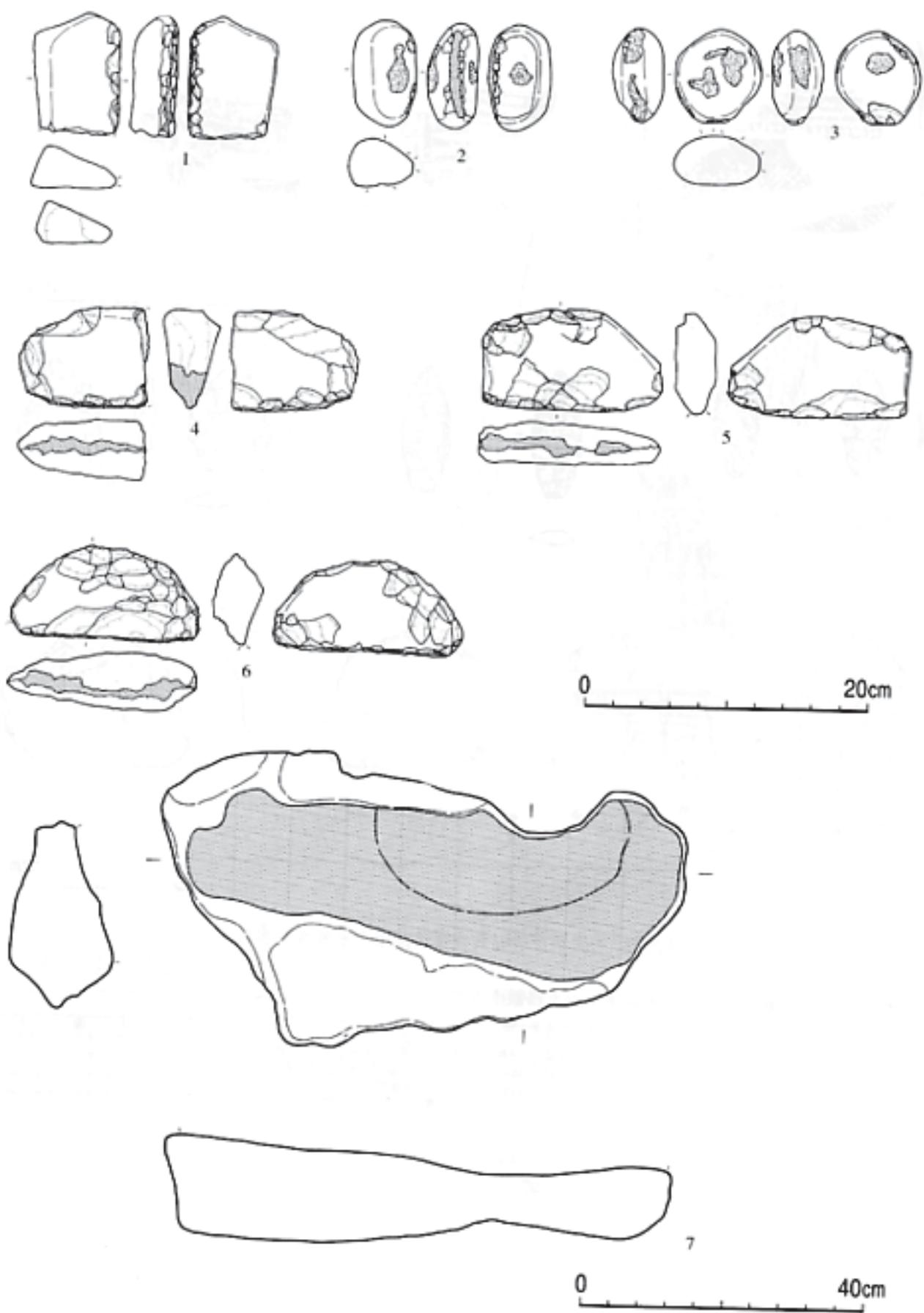
図版番号	出土地点	層位	器種	部位	文様	分類	備考
28-1	C3住	フク 1	深鉢	略完形	L圧痕 LR縄文	I群2類b	
28-2	C3住	床直	深鉢	胴部	L単軸絡条体1類	I群	
28-3	C3住	土坑フク	深鉢	口縁部	絡条体圧痕 刺突	I群	
28-4	C3住	土坑フク	深鉢	口縁部	LR圧痕 刺突	I群2類d	
28-5	C3住	フク 4	深鉢	口縁部	絡条体圧痕	I群2類b	
28-6	C3住	フク 3	深鉢	口縁部	絡条体圧痕 刺突 結節回転文 RL縄文	I群	
28-7	C3住	フク 3	深鉢	胴部	LR単軸絡条体1類	I群	
28-8	C3住	フク 3	深鉢	口縁部	L圧痕 L単軸絡条体1類	I群	
28-9	C3住	フク 1	深鉢	口縁部	R圧痕 結節回転文 RL縄文	I群2類b	



第29図 C区第3号竖穴式住居跡出土土器5・石器1

第18表 C区第3号竖穴式住居跡出土土器観察表5

図版番号	出土地点	層位	器種	部位	文様	分類	備考
29-1	C3住	フク 1	深鉢	口縁部	LR縄文 LR圧痕 刺突 結節回転文 LRRL結束第一種	I群2類b	
29-2	C3住	フク 2	深鉢	口縁部	L単軸絡条体1類	I群2類c	
29-3	C3住	フク 3	深鉢	口縁部	絡条体圧痕 刺突	I群2類f	



第30图 C区第3号竖穴式住居跡出土石器2

第19表 C区第3号竪穴式住居跡出土土器観察表

図版番号	出土地点	層位	最大計測値				石質	分類	備考
			長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)			
29-4	C3住	フク 1	30	12	4	1.5	珪・頁	A-2	
29-5	C3住	フク 1	(35)	13	5	(1.9)	珪・頁	A-2	
29-6	C3住	フク土	(26)	23	5	(2.3)	珪・頁	A	
29-7	C3住	フク 3	54	33	15	24.7	珪・頁	I	
29-8	C3住	フク 2	52	40	18	36.2	珪・頁	G-1	
30-1	C3住	フク 3	(87)	62	31	(220)	安	M-3	
30-2	C3住ピット19	フク 3	76	44	35	124	流	M-3	
30-3	C3住	フク 3	67	61	36	190	頁	M-4	
30-4	C3住	フク 2	(92)	72	43	(364)	安	N-3	
30-5	C3住	フク 3	130	73	30	420	変・安	N-1	
30-6	C3住	フク 3	134	67	41	396	安	N-1	
30-7	C3住	フク 1	760	426	48	59,000	安	Q-1	

第4号竪穴式住居跡（第24図）

[位置] AC-106・107、第IV層において黒褐色土の落ち込みを確認した。本遺構は、第3号竪穴式住居跡同様、調査区内の小丘状台地が北に傾斜し始める地点の調査区東端に位置する。

[重複] 第3号竪穴式住居跡と重複しており、本住居跡が新しい。

[平面形・規模] 第4号竪穴式住居跡と重複しており、また調査区端のため、全容は不明である。

[壁] 現存部分における南～西壁面は、急に立ち上がる。壁高は西壁20cm、南壁30cmである。

[床] 第V・VI層を床面としている。床面はほぼ平坦で堅緻である。

[柱穴] 計6基のピットを検出した。床面からの深さは、Pit1が70cm、2が24cm、3が13cm、4が11cm、5が14cm、6が33cmを計測する。規模・配置からPit1は支柱穴と思われる。

[炉] 検出していない。

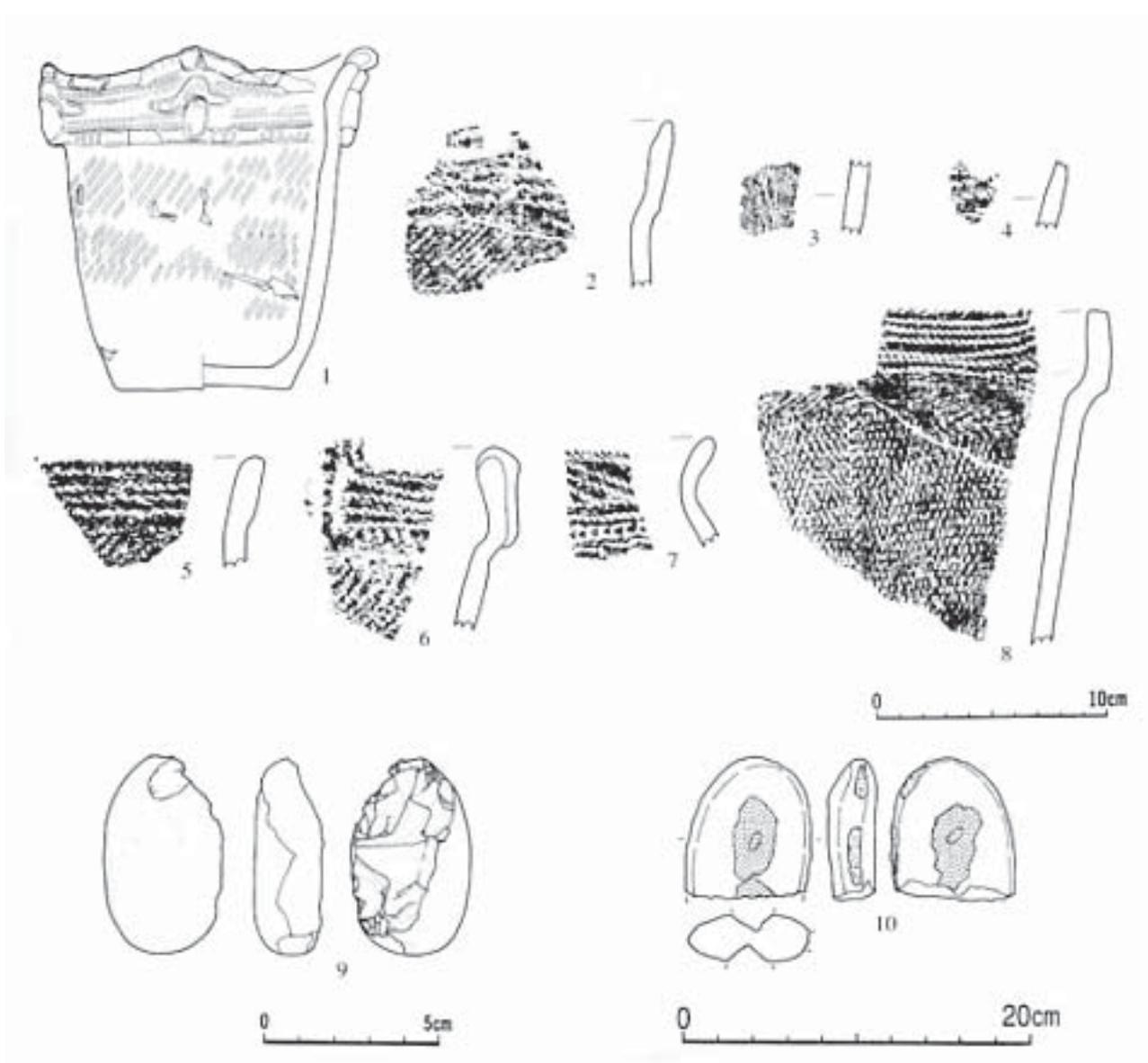
[特殊施設] なし。

[堆積土] 3層に分層した。自然堆積と思われる。

[その他の付属施設] 検出部分の壁際で壁溝を検出した。また壁溝の底部では、計4基の小ピットを検出した。

[出土遺物] 覆土中、床面より土器（第31図1～8）、石器（第31図9、10）が出土した。出土土器は、I群、I群2類a～c、e土器である。土器は床面直上出土のI群2類e土器1個体を除き、全て破片である。石器は、I群1点、M群2類1点が出土した。

[小結] 床面からI群2類b土器が出土しており、縄文時代前期末葉～中期初頭の竪穴式住居跡と思われる。



第31図 C区第4号竪穴式住居跡出土土器・石器

第20表 C区第4号竪穴式住居跡出土土器観察表

図版番号	出土地点	層位	器種	部位	文様	分類	備考
31-1	C4住	床直	深鉢	完形	隆帯 LR圧痕 R圧痕 LR結束斜縄文	I群2類e	
31-2	C4住	床面	深鉢	口縁部	LR圧痕 LR縄文	I群2類b	
31-3	C4住	床面	深鉢	胴部	L単軸絡条体1類	I群	
31-4	C4住	床直	深鉢	口縁部	LR圧痕	I群	
31-5	C4住	フク3	深鉢	口縁部	LR圧痕	I群2類b	
31-6	C4住	フク3	深鉢	口縁部	隆帯 LR縄文 LR圧痕	I群2類c	
31-7	C4住	フク3	深鉢	胴部	LR圧痕 半截竹管刺突 結節回転文	I群2類a	
31-8	C4住	フク3	深鉢	口縁部	LR縄文 LR圧痕 多軸絡条体	I群2類b	

第21表 C区第4号竪穴式住居跡出土石器観察表

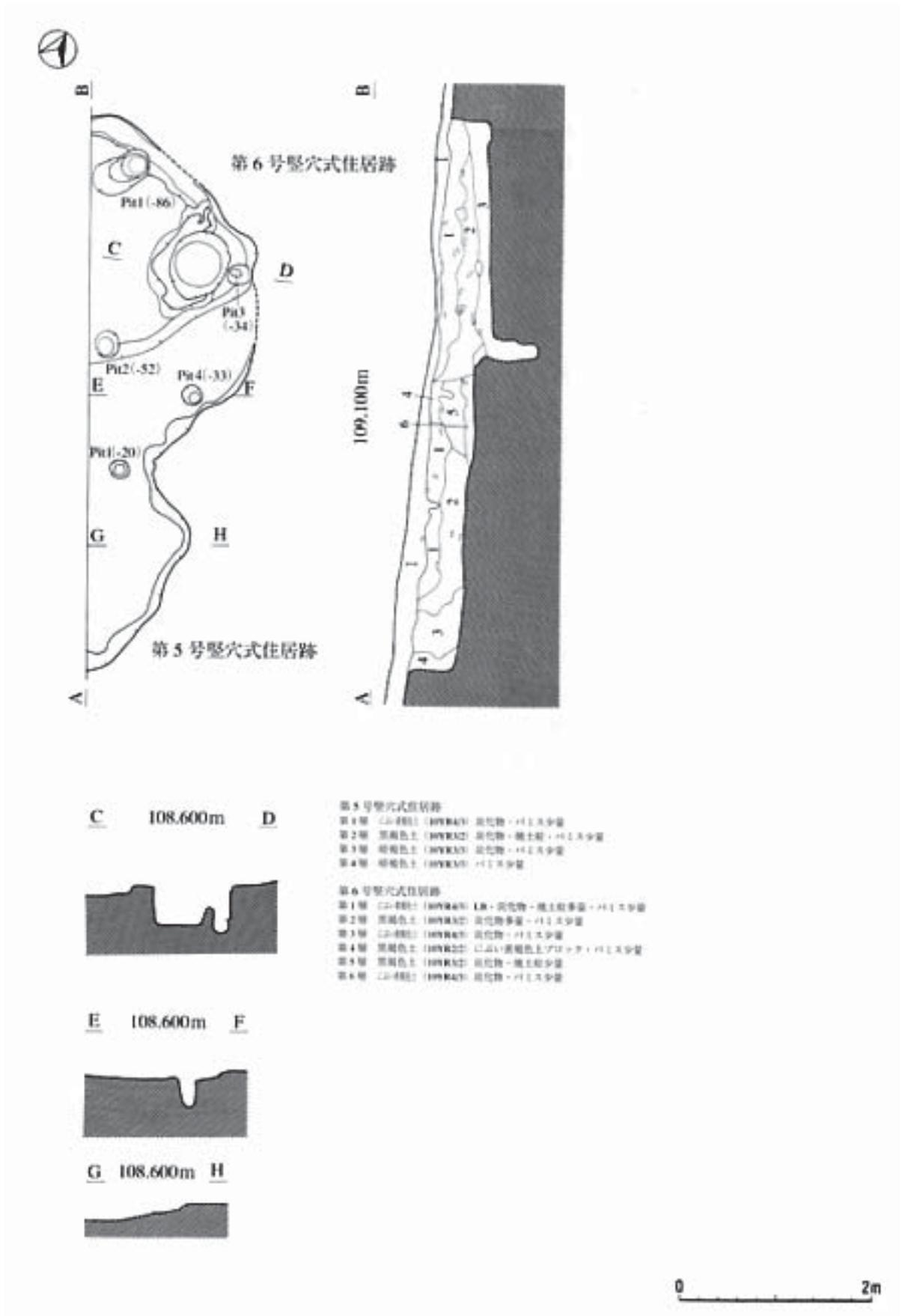
図版番号	出土地点	層位	最大計測値				石質	分類	備考
			長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)			
31-9	C4住	床直	58	34	20	50.6	珪・頁	I	
31-10	C4住	壁溝	(84)	74	28	(208)	流	M-2	

第5号竪穴式住居跡（第32図）

- [位置] AI-108・109、第IV層において暗褐色土の落ち込みを確認した。本遺構は、第6号竪穴式住居跡同様、調査区内の小丘状台地が北に傾斜し始める地点の調査区西端に位置する。
- [重複] 第6号竪穴式住居跡と重複しており、本住居跡が新しい。
- [平面形・規模] 第6号竪穴式住居跡と重複しており、また調査区端のため、全容は不明である。
- [壁] 確認部分における東壁面は、緩やかに立ち上がる。壁高は東壁17cmである。
- [床] 第V・VI層を床面としている。床面はほぼ平坦で堅緻である。
- [柱穴] 1基のピットを検出した。床面からの深さは、20cmを計測する。
- [炉] 検出していない。
- [特殊施設] なし。
- [堆積土] 4層に分層した。自然堆積と思われる。
- [その他の付属施設] なし。
- [出土遺物] 覆土中よりI群2類a、e土器（第33図）が出土した。
- [小結] 覆土中よりI群2類土器が出土しており、縄文時代前期末葉～中期初頭の竪穴式住居跡と思われる。

第6号竪穴式住居跡（第32、34～36図）

- [位置] AI-109、第IV層において暗褐色土の落ち込みを確認した。本遺構は、第5号竪穴式住居跡同様、調査区内の小丘状台地が北に傾斜し始める地点の調査区西端に位置する。
- [重複] 第5号竪穴式住居跡と重複しており、本住居跡が古い。
- [平面形・規模] 第5号竪穴式住居跡と重複しており、また調査区端のため、全容は不明である。
- [壁] 確認部分における東壁面は、緩やかに立ち上がる。壁高は東壁11cmである。
- [床] 第V・VI層を床面としている。床面はほぼ平坦で堅緻である。
- [柱穴] 4基のピットを検出した。床面からの深さは、1が86cm、2が52cm、3が34cm、4が33cmを計測する。
- [炉] 検出していない。
- [特殊施設] 東壁に接する部分で周囲に堤状にロームを貼った径48cmのピットを検出した。
- [堆積土] 6層に分層した。自然堆積と思われる。
- [その他の付属施設] なし。
- [出土遺物] 覆土中より土器（第34、35図、第36図1～6）、石器（第36図7、8）、土製品（第36図9）が出土した。土器は、I群、I群1類c、2類b～e土器が出土した。覆土2層に遺物は集中し、ほぼ完形で出土したもの、完形及び完形に近いものが横転し潰れた状況で出土したものなど5個体出土した。他は、破片である。石器は、A群2類1点、G群2類1点が出土した。土製品はミニチュア土器が出土した。
- [小結] 覆土中よりI群2類土器が出土しており、縄文時代前期末葉～中期初頭の竪穴式住居跡と思われる。



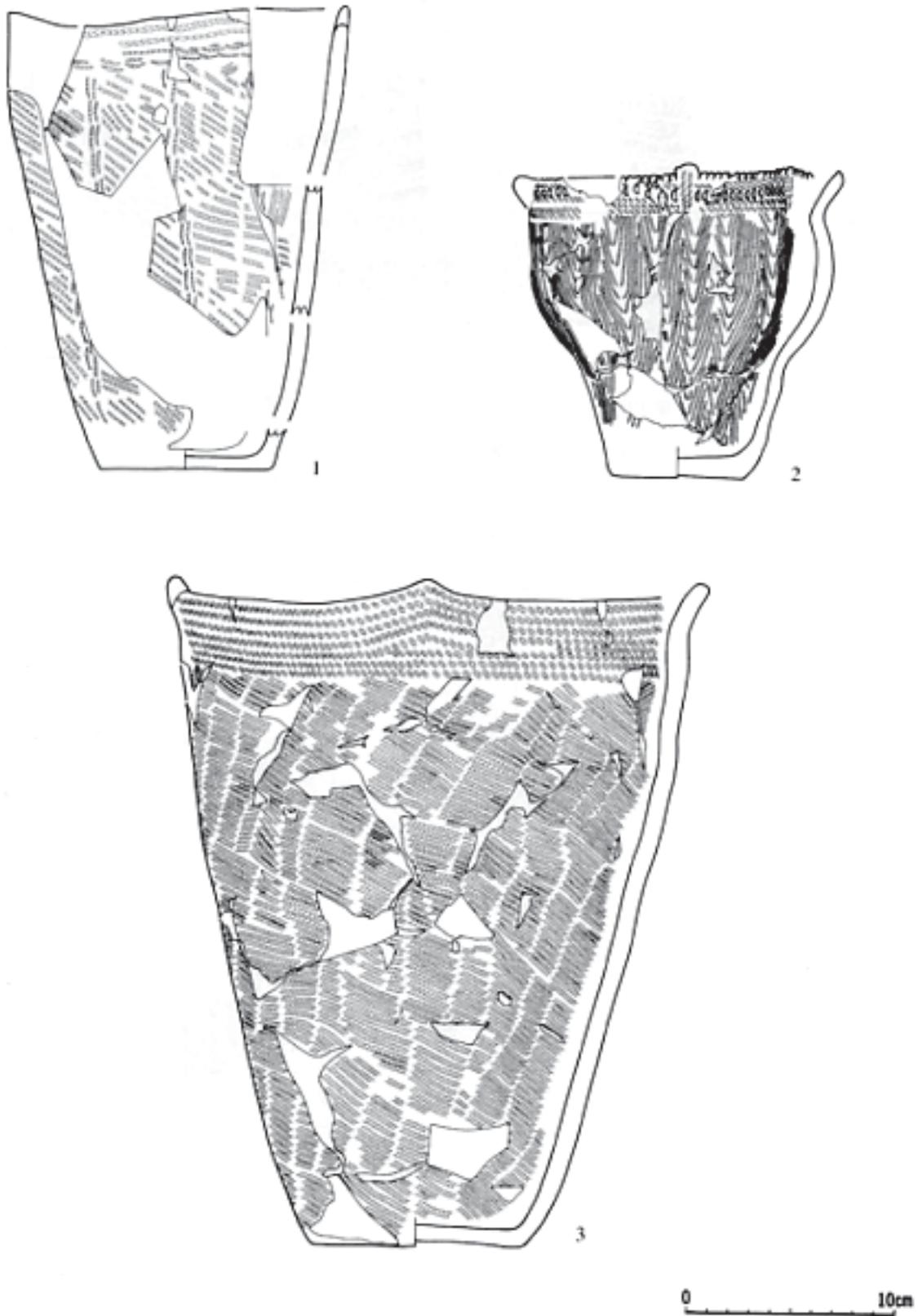
第32図 C区第5・6号竖穴式住居跡



第33図 C区第5号竪穴式住居跡出土土器

第22表 C区第5号竪穴式住居跡出土土器観察表

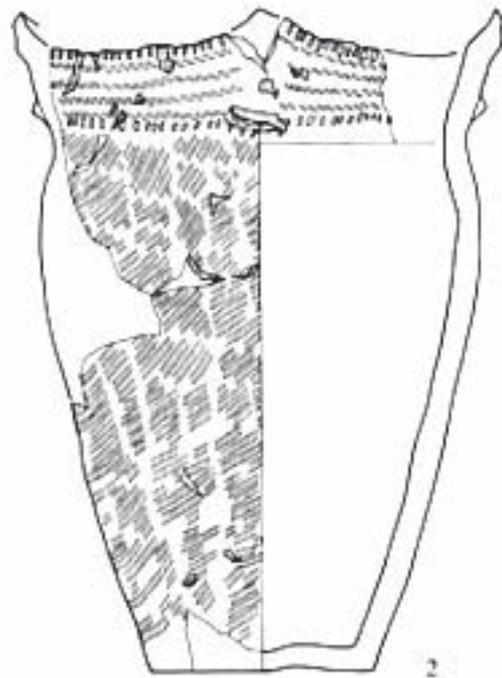
図版番号	出土地点	層位	器種	部位	文様	分類	備考
33-1	C5住	フク 2	深鉢	口頸部	隆帯 LR圧痕 RL圧痕	I群2類e	
33-2	C5住	フク 1	深鉢	口頸部	刺突 隆帯 LR圧痕 結節回転文 RL縄文	I群2類e	3と同一個体
33-3	C5住	フク 1	深鉢	口頸部	刺突 隆帯 LR圧痕 結節回転文 RL縄文	I群2類e	2と同一個体
33-4	C5住	フク 1	深鉢	口頸部	L圧痕 RL圧痕 刺突 LRRL結束第一種	I群2類a	



第34図 C区第6号竪穴式住居跡出土土器1

第23表 C区第6号竪穴式住居跡出土土器観察表1

図版番号	出土地点	層位	器種	部位	文様	分類	備考
34-1	C6住	フク2	深鉢	略完形	L圧痕 結節回転文 RL縄文	I群1類c	
34-2	C6住	フク2	深鉢	完形	LR圧痕 刺突 L・R単軸絡条体1A類	I群2類d	
34-3	C6住	フク2	深鉢	完形	LR圧痕 LR縄文	I群2類b	



0 10cm

第35図 C区第6号竪穴式住居跡出土土器2

第24表 C区第6号竪穴式住居跡出土土器観察表2

図版番号	出土地点	層位	器種	部位	文様	分類	備考
35-1	C6住	フク2	深鉢	完形	LR圧痕 LR縄文	I群2類b	
35-2	C6住	フク2	深鉢	完形	刺突 LR圧痕 LR縄文	I群2類c	橋状把手の痕跡有



第36図 C区第6号竪穴式住居跡出土土器3・石器・土製品

第25表 C区第6号竪穴式住居跡出土土器観察表3

図版番号	出土地点	層位	器種	部位	文様	分類	備考
36-1	C6住	フク1	深鉢	口頸部	LR圧痕 刺突 結節回転文 多軸絡条体	I群	
36-2	C6住	フク1	深鉢	口頸部	LR圧痕 結節回転文	I群2類b	
36-3	C6住	フク2	深鉢	口頸部	隆帯 絡条体圧痕	I群2類c	
36-4	C6住	フク2	深鉢	口頸部	絡条体圧痕 刺突 L単軸絡条体1類	I群2類c	
36-5	C6住	フク2	深鉢	口頸部	L圧痕 刺突	I群2類e	
36-6	C6住	フク2	深鉢	胴部	多軸絡条体	I群	

第26表 C区第6号竪穴式住居跡出土石器観察表

図版番号	出土地点	層位	最大計測値				石質	分類	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
36-7	C6住	フク2	28	14	5	1.7	珪・頁	A-2	
36-8	C6住	フク2	61	30	19	21	珪・頁	G-2	

第27表 C区第6号竪穴式住居跡出土土製品観察表

図版番号	出土地点	層位	種類	特徴・計測値(cm, g)等
36-9	C6住	フク2	ミニチュア土器	台付、無文、器高8.8、底径8.8、重さ69.4

第7号竪穴式住居跡（第37図）

[位置] AD～AF－102・103、第V層上面において、不整形であるが、長軸約6.2m、短軸約4.8mの堅く締る面の広がりを確認した。また、この堅い面の北側で長さ60cm、南側で長さ230cmに渡る、壁と想定しうる立ち上がりを確認した。堅く締る面においては、大小4ヵ所の焼土を検出している。堅い面の中及び周囲においては、柱穴と想定し得る規模のものを含む、ピット13基を検出しており、また、削平を受けている地点であることから、竪穴式住居跡である可能性を考慮し、本項で取り上げることにする。

[重複] なし。

[平面形・規模] 遺構上部の大半は、一部の壁面を除き、削平を受けており、全容は不明である。

[壁] 残存部分における壁面は、急に立ち上がる。壁高は北壁14cm、南壁17cmである。

[床] 第V・VI層を床面としている。一部は樹木による攪乱を受けている。床面は多少の起伏がある。堅緻である。

[柱穴] 13基のピットを検出した。床面からの深さは、Pit1が49cm、2が66cm、3が67cm、4が57cm、5が10cm、6が29cm、7が87cm、8が74cm、9が48cm、10が18cm、11が27cm、12が23cm、13が33cmを計測する。

[炉] 床面と思われる部分より4ヵ所の焼土を検出した。地床炉と思われる。

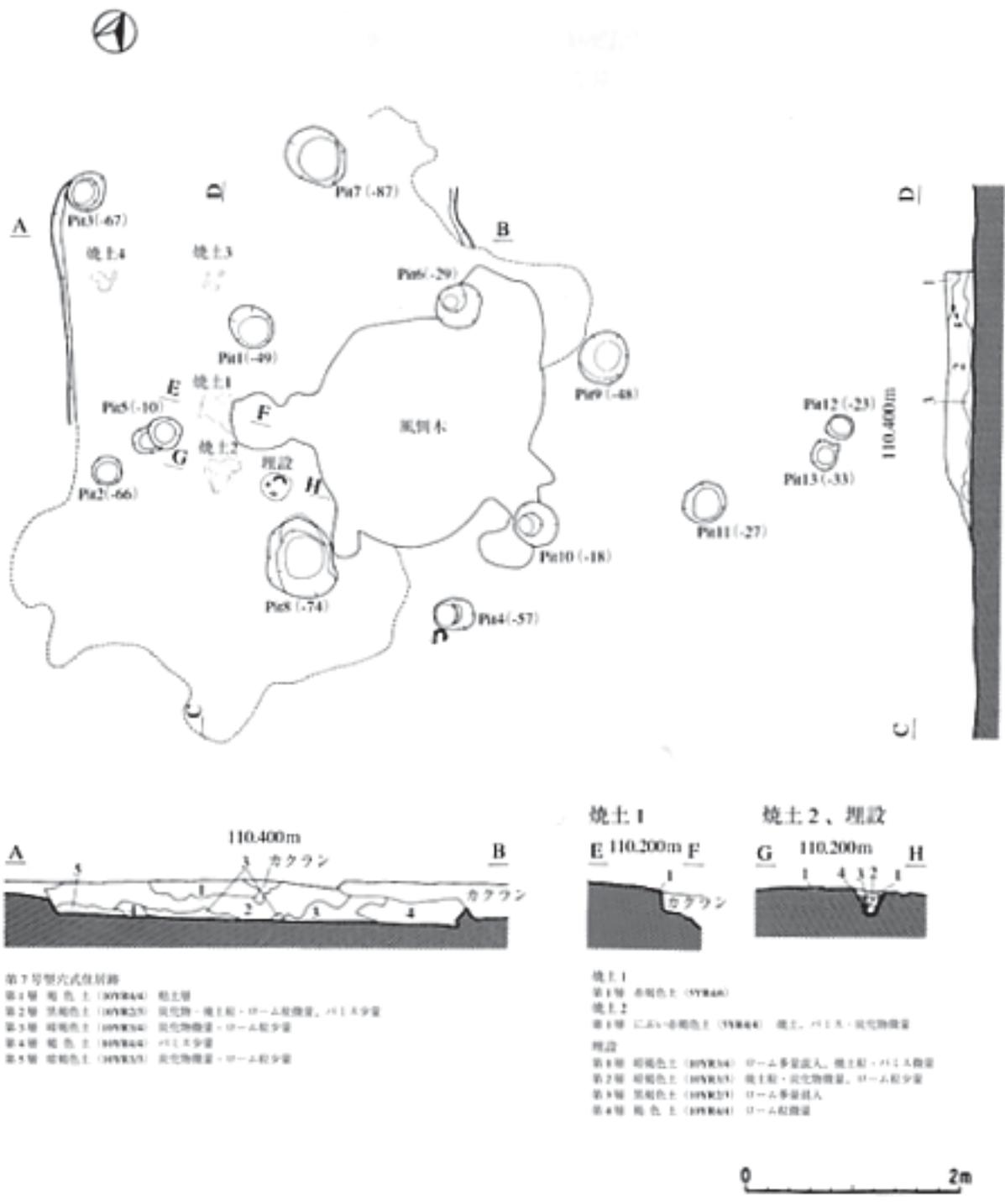
[特殊施設] なし。

[堆積土] 5層に分層した。自然堆積と思われる。

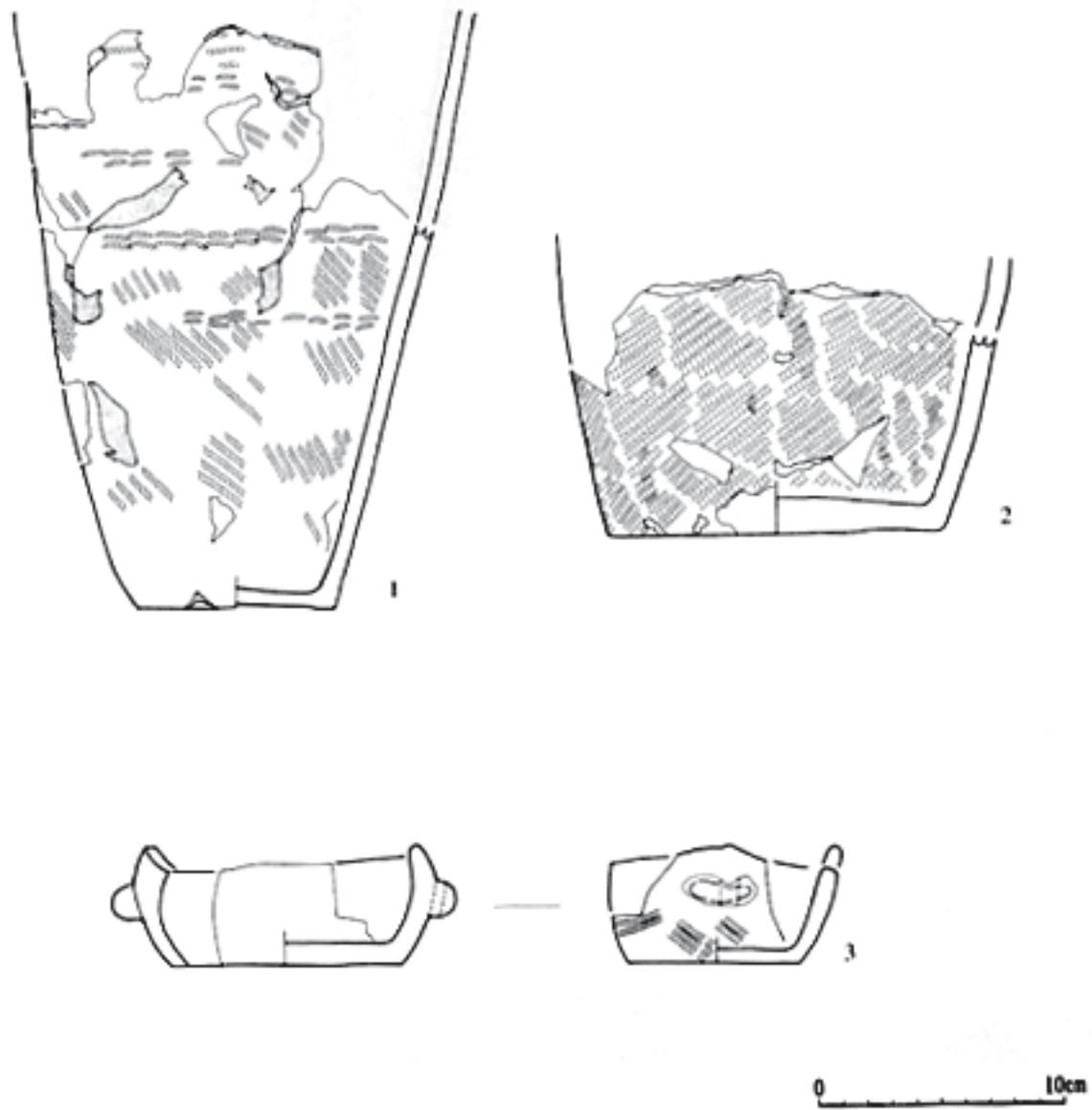
[その他の付属施設] 床面と思われる部分より1基の埋設土器を検出した。

[出土遺物] 覆土中、床面と思われる部分より土器（第38、39図）及び石器（第40図）が出土した。土器はI群、I群2類a～c土器が出土した。石器は、E群1点、G群1類3点、L群1類2点、M群1類1点、Q群1類1点が出土した。

[小結] 覆土よりI群2類a～b土器が出土しており、縄文時代前期末葉～中期初頭の竪穴式住居跡である可能性がある。



第37図 C区第7号竖穴式住居跡



第38図 C区第7号竪穴式住居跡出土土器1

第28図 C区第7号竪穴式住居跡出土土器観察表1

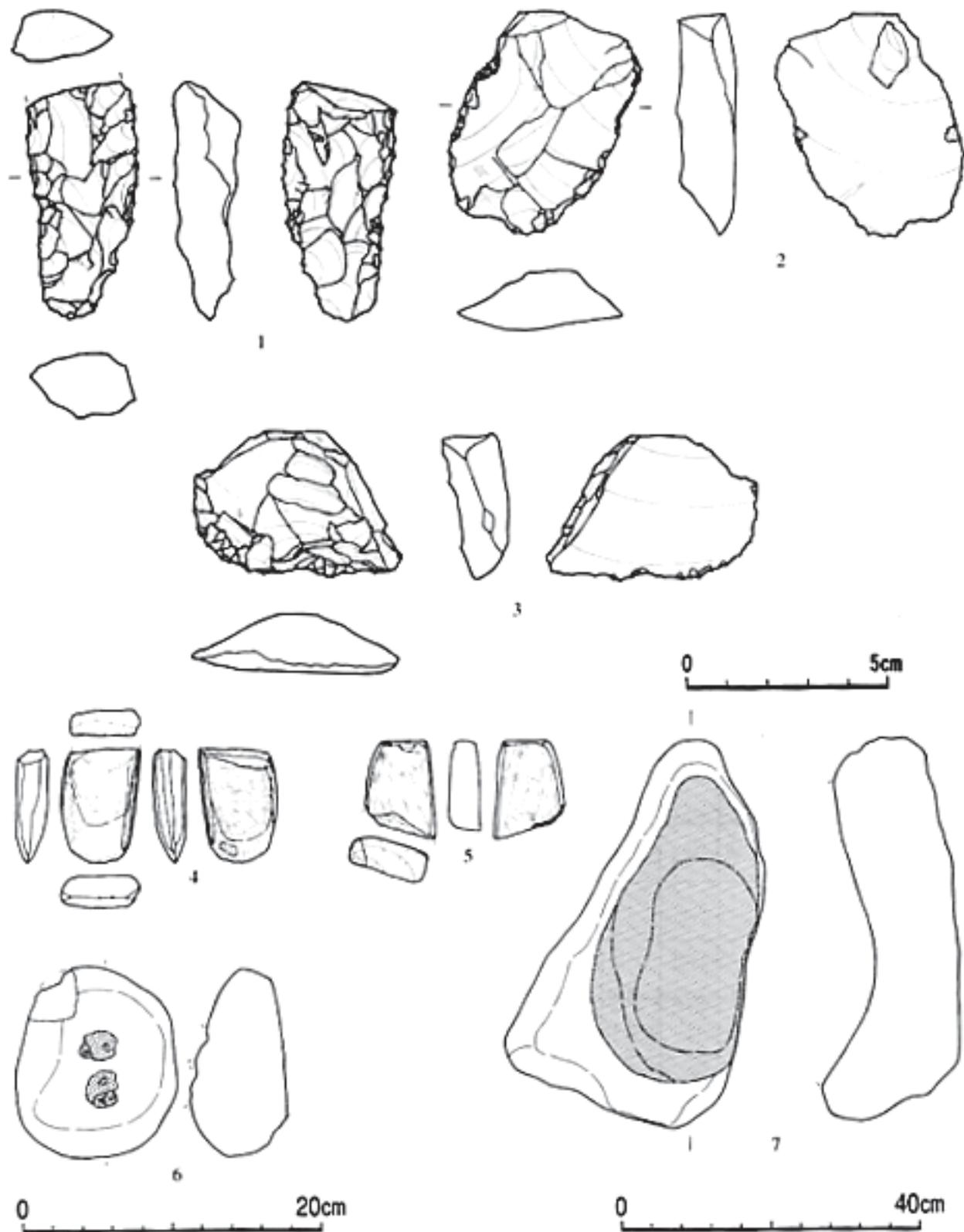
図版番号	出土地点	層位	器種	部位	文様	分類	備考
38-1	C7住	埋設	深鉢	胴部	L圧痕 結節回転文 RL縄文	I群	
38-2	C7住	床面	深鉢	底部	LR縄文	I群	
38-3	C7住	フク2	浅鉢	略完形	把手 LR縄文 RL縄文	I群	



第 39 図 C 区第 7 号竪穴式住居跡出土土器 2

第 29 表 C 区第 7 号竪穴式住居跡出土土器観察表 2

図版番号	出土地点	層位	器種	部位	文様	分類	備考
39-1	C7住	フク 2	深鉢	略完形	LR圧痕 刺突 LR縄文 結節回転文 RLR縄文	I 群2類a	
39-2	C7住	フク 3	深鉢	胴部	多軸絡条体	I 群	
39-3	C7住	フク 2	深鉢	口頸部	LR縄文 刺突 隆帯 LR圧痕 結節回転文	I 群2類c	
39-4	C7住	フク 2	深鉢	口頸部	LR圧痕 結節回転文 L単軸絡条体1A類	I 群2類b	
39-5	C7住	フク 1	深鉢	口頸部	LR圧痕 R単軸絡条体1類	I 群2類b	



第40図 C区第7号竪穴式住居跡出土石器

第30表 C区第7号竪穴式住居跡出土石器観察表

図版番号	出土地点	層位	最大計測値				石質	分類	備考
			長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)			
40-1	C7住	フク 2	(61)	28	17	(26.2)	珪・頁	E	
40-2	C7住	フク 1	57	48	15	36.4	珪・頁	G-1	
40-3	C7住	フク 2	53	37	15	26.0	珪・頁	G-1	
40-4	C7住	フク 2	(78)	53	22	(147.9)	輝・凝	L-1	
40-5	C7住	フク 2	(67)	48	22	(129.9)	輝・凝	L-1	
40-6	C7住	フク 2	131	109	66	1178	石・安	M-1	
40-7	C7住ピット	フク土	528	350	186	30,000	安	Q-1	

2. 土坑

第1号土坑（第41図）

[位置] AH-91に位置する。盛土下に現れた第V層において、黒褐色土の落ち込みを確認した。
本遺構は、遺構が集中する調査区中央小台地の南側斜面中に位置する。

[重複] なし。

[形状・規模] 開口部は74cm×70cmの不整円形を呈する。

[壁] 緩やかに立ち上がる、壁高は、13cmである。脆弱である。

[底] 第IV層を底面とし、67cm×64cmの不整円を呈する。底面は、丸底を呈し、脆弱である。

[堆積土] 2層に分層した。自然堆積の様相を呈する。

[出土遺物] 覆土中より土器（第54図1）、石器（第61図1）、土製品（第65図1）が出土した。土器は、第I群2類b土器が出土した。石器はA群3類1点が出土した。土製品はミニチュア土器が1点出土した。

第2号土坑（第41図）

[位置] AH-97に位置する。盛土下に現れた第V層において、暗褐色土の落ち込みを確認した。
本遺構は、遺構が集中する調査区中央小台地上に位置する。

[重複] なし。

[形状・規模] 開口部は、90cm×80cmの円形を呈する。

[壁] 壁高は、135cmである。西壁は垂直に立ち上がり、途中で内側に傾く。断面形は、フラスコ状を呈する。

[底] 第VI層を底面とし、214cm×197cmの円形を呈する。底面は、堅緻である。

[堆積土] 4層に分層した。自然堆積の様相を呈する。

[出土遺物] なし。

第3号土坑（第41図）

[位置] AH・AI-97に位置する。盛土下に現れた第V層において、暗褐色土の落ち込みを確認した。
本遺構は、遺構が集中する調査区中央小台地の南側斜面の縁辺部、調査区西端に位置する。

[重複] 調査区西端に位置するため、極一部が調査区域外である。

[形状・規模] 開口部は、184cm×154cmの円形を呈する。

[壁] 壁高は、143cmである。西壁を除き、ほぼ垂直に立ち上がる。西壁は垂直に立ち上がり、壁面途中で内側に傾く。断面形は、やや袋状を呈する。

[底] 第VI層を底面とし、176cm×166cmの円形を呈する。底面は、堅緻である。

[堆積土] 12層に分層した。自然堆積の様相を呈する。

[出土遺物] 覆土中よりI群2類a、c土器（第54図2、3）が出土した。

第4号土坑（第41図）

[位置] AH-98に位置する。盛土下に現れた第V層において、暗褐色土の落ち込みを確認した。

2. 土坑

第1号土坑（第41図）

[位置] AH-91に位置する。盛土下に現れた第V層において、黒褐色土の落ち込みを確認した。本遺構は、遺構が集中する調査区中央小台地の南側斜面中に位置する。

[重複] なし。

[形状・規模] 開口部は74cm×70cmの不整円形を呈する。

[壁] 緩やかに立ち上がる、壁高は、13cmである。脆弱である。

[底] 第IV層を底面とし、67cm×64cmの不整円を呈する。底面は、丸底を呈し、脆弱である。

[堆積土] 2層に分層した。自然堆積の様相を呈する。

[出土遺物] 覆土中より土器（第54図1）、石器（第61図1）、土製品（第65図1）が出土した。土器は、第I群2類b土器が出土した。石器はA群3類1点が出土した。土製品はミニチュア土器が1点出土した。

第2号土坑（第41図）

[位置] AH-97に位置する。盛土下に現れた第V層において、暗褐色土の落ち込みを確認した。本遺構は、遺構が集中する調査区中央小台地上に位置する。

[重複] なし。

[形状・規模] 開口部は、90cm×80cmの円形を呈する。

[壁] 壁高は、135cmである。西壁は垂直に立ち上がり、途中で内側に傾く。断面形は、フラスコ状を呈する。

[底] 第VI層を底面とし、214cm×197cmの円形を呈する。底面は、堅緻である。

[堆積土] 4層に分層した。自然堆積の様相を呈する。

[出土遺物] なし。

第3号土坑（第41図）

[位置] AH・AI-97に位置する。盛土下に現れた第V層において、暗褐色土の落ち込みを確認した。本遺構は、遺構が集中する調査区中央小台地の南側斜面の縁辺部、調査区西端に位置する。

[重複] 調査区西端に位置するため、極一部が調査区域外である。

[形状・規模] 開口部は、184cm×154cmの円形を呈する。

[壁] 壁高は、143cmである。西壁を除き、ほぼ垂直に立ち上がる。西壁は垂直に立ち上がり、壁面途中で内側に傾く。断面形は、やや袋状を呈する。

[底] 第VI層を底面とし、176cm×166cmの円形を呈する。底面は、堅緻である。

[堆積土] 12層に分層した。自然堆積の様相を呈する。

[出土遺物] 覆土中よりI群2類a、c土器（第54図2、3）が出土した。

第4号土坑（第41図）

[位置] AH-98に位置する。盛土下に現れた第V層において、暗褐色土の落ち込みを確認した。

[壁] 壁高は、127cmである。壁は底面から急に内側に傾斜して立ち上がる。断面形は、袋状を呈する。

[底] 第VI層を底面とし、188cm × 170cmの円形を呈する。底面は堅緻である。

[堆 積 土] 30層に分層した。自然堆積の様相を呈する。

[出 土 遺 物] 覆土中よりI群土器（第54図9）が1片及び礫が出土した。

第8号土坑（第42図）

[位 置] AH-98・99に位置する。盛土下に現れた第V層において、暗褐色土の落ち込みを確認した。本遺構は、遺構が集中する調査区中央小台地上に位置する。

[重 複] なし。遺構上部は削平を受けており、痕跡から重機によるものと思われる。

[形状・規模] 開口部は、削平を受けており、確認できない。

[壁] 壁高は、59cmである。壁は底面から急に内側に傾斜して立ち上がる。断面形は、袋状を呈する。西壁は、一部オーバーハングする。

[底] 第VI層を底面とし、120cm × 110cmの円形を呈する。底面は堅緻である。

[出 土 遺 物] 覆土中よりI群土器（第54図10）の底部1片が出土した。

第9号土坑（第43図）

[位 置] AH・AI-100に位置する。盛土下に現れた第V層において、暗褐色土の落ち込みを確認した。本遺構は、遺構が集中する調査区中央小台地上に位置する。

[重 複] なし。

[形状・規模] 開口部は、172cm × 140cmの円形を呈する。

[壁] 壁高は、118cmである。壁は底面から緩やかに内側に傾斜して立ち上がる。断面形は、袋状を呈する。

[底] 第VI層を底面とし、188cm × 166cmの円形を呈する。底面は堅緻である。底面では中央やや東側に1基の小ピットを検出した。規模は、径28cm × 24cm、深さ8cmである。

[堆 積 土] 16層に分層した。自然堆積の様相を呈する。

[出 土 遺 物] 覆土中より土器（第54図11）及び石器（第61図3、4）が出土した。土器は、I群2類b土器が出土した。石器は、C群1点、E群1点が出土した。

第10号土坑（第43図）

[位 置] AF-99・100に位置する。盛土下に現れた第V層において、暗褐色土の落ち込みを確認した。本遺構は、遺構が集中する調査区中央小台地上に位置する。

[重 複] 第11号土坑と重複する。新旧関係は不明である。

[形状・規模] 開口部は、240cm × 230cmで、一部重複により不明であるが、円形を呈すると思われる。

[壁] 壁高は、133cmである。壁は底面から急に内側に傾斜して立ち上がる。断面形は、袋状を呈する。

[底] 第VI層を底面とし、160cm × 139cmの円形を呈する。底面は堅緻である。

[堆 積 土] 30層に分層した。自然堆積の様相を呈する。なお、本土坑は後述する、第11号土坑と重複

関係にあるが、堆積土の状況より、2基同時に堆積したものと思われる。

[出土遺物] 覆土中より土器が出土した。

第11号土坑（第43図）

[位置] AF・AG－99・100に位置する。盛土下に現れた第V層において、暗褐色土の落ち込みを確認した。本遺構は、遺構が集中する調査区中央小台地上に位置する。

[重複] 第10号土坑と重複する。新旧関係は不明である。

[形状・規模] 開口部は、160cm×139cmで、一部重複により不明であるが、円形を呈すると思われる。

[壁] 壁高は、140cmである。壁は、底面から急に内側に傾斜して立ち上がり、壁面途中で緩やかに傾斜する。断面形は、袋状を呈する。

[底] 第VI層を底面とし、204cm×194cmの円形を呈する。底面は堅緻である。底面では、中央やや南側に1基の小ピットを検出した。規模は、径40cm×38cm、深さ16cmである。

[堆積土] 30層に分層した。自然堆積の様相を呈する。なお、本土坑は前述した、第11号土坑と重複関係にあるが、堆積土の状況より、2基同時に堆積したものと思われる。

[出土遺物] 覆土中より土器及び石器（第61図5、6）が出土した。石器は、E群1点、G群3類1点が出土した。

第12号土坑（第43図）

[位置] AH-99に位置する。盛土下に現れた第V層において、暗褐色土の落ち込みを確認した。本遺構は、遺構が集中する調査区中央小台地上に位置する。

[重複] なし。

[形状・規模] 開口部は、122cm×114cmで、円形を呈する。

[壁] 壁高は、42cmである。壁は底面から緩やかに傾斜して立ち上がる。断面形は、鍋底状を呈する。

[底] 第VI層を底面とし、90cm×72cmの円形を呈する。底面は堅緻である。底面では、東壁脇に1基の小ピットを検出した。規模は、径30cm×28cm、深さ90cmである。

[出土遺物] なし。

第22号土坑（第44図）

[位置] AG・AH－101・102に位置する。調査区内の削平、盛土の状況を確認するため、AGラインにトレンチを入れた際、盛土下に現れた第V層において、暗褐色土の落ち込みを確認した。本遺構は、遺構が集中する調査区中央小台地上に位置する。

[重複] なし。

[形状・規模] 開口部は、114cm×108cmで、円形を呈する。

[壁] 壁高は、113cmである。壁は、底面から緩やかに内側に傾斜して立ち上がり、一部、壁面途中でオーバーハングする。断面形は、袋状を呈する。

[底] 第VI層を底面とし、164cm×136cmの円形を呈する。底面は堅緻である。

[堆積土] 18層に分層した。自然堆積の様相を呈する。

[出土遺物] 覆土中より I 群、I 群 2 類 f 土器（第 54 図 12、13）が出土した。

第 23 号土坑（第 44 図）

[位置] AG・AH－101 に位置する。盛土下に現れた第 V 層において、暗褐色土の落ち込みを確認した。本遺構は、遺構が集中する調査区中央小台地上に位置する。

[重複] なし。

[形状・規模] 開口部は、200cm × 180cm で、円形を呈する。

[壁] 壁高は、51cm である。壁は、底面から緩やかに立ち上がる。南西壁及び北西壁の一部は、底面から緩やかに内側に立ち上がる。断面形は、袋状を呈する。

[底] 第 VI 層を底面とし、202cm × 182cm の円形を呈する。底面は堅緻である。

[堆積土] 7 層に分層した。人為堆積の様相を呈する。

[出土遺物] 覆土中より I 群 1 類 c 土器（第 54 図 14）が出土した。

第 24 号土坑（第 44 図）

[位置] AG－101・102 に位置する。盛土下に現れた第 V 層において、暗褐色土の落ち込みを確認した。本遺構は、遺構が集中する調査区中央小台地上に位置する。

[重複] なし。

[形状・規模] 開口部は、156cm × 150cm で、円形を呈する。

[壁] 壁高は、100cm である。壁は、底面から急にやや内側に傾斜し立ち上がる。北西壁の一部は底面から急に立ち上がる。断面形は、弱いフラスコ状を呈する。

[底] 第 VI 層を底面とし、175cm × 158cm の円形を呈する。底面は堅緻である。

[堆積土] 23 層に分層した。自然堆積の様相を呈する。

[出土遺物] 覆土中より I 群、I 群 2 類 b、c、f 土器（第 54 図 15、16、第 55 図 1、2）が出土した。

大半は破片であるが、底面の東壁脇より底部を欠く I 群 2 類 f 土器の浅鉢（第 54 図 16）が出土した。

第 25 号土坑（第 44 図）

[位置] AF・AG－102・103 に位置する。盛土下に現れた第 V 層において、暗褐色土の落ち込みを確認した。本遺構は、遺構が集中する調査区中央小台地上に位置する。

[重複] なし。

[形状・規模] 開口部は、138cm × 124cm で、不整円形を呈する。

[壁] 壁高は、75cm である。壁は、底面から緩やかに内側に傾斜し立ち上がり、壁面途中でオーバーハングする。断面形は、袋状を呈する。

[底] 第 VI 層を底面とし、162cm × 156cm の円形を呈する。底面は堅緻である。

[堆積土] 12 層に分層した。自然堆積の様相を呈する。

[出土遺物] 覆土中より I 群土器（第 55 図 3）が出土した。

第28号土坑（第45図）

- [位置] AE・AF-101に位置する。盛土下に現れた第V層において、暗褐色土の落ち込みを確認した。本遺構は、遺構が集中する調査区中央小台地上に位置する。
- [重複] なし。
- [形状・規模] 開口部は、104cm×78cmで、不整形円形を呈する。
- [壁] 壁高は、78cmである。壁は、底面から緩やかに内側に傾斜し立ち上がり、壁面途中でオーバーハングする。断面形は、フラスコ状を呈する。
- [底] 第VI層を底面とし、150cm×106cmの円形を呈する。底面は堅緻である。
- [堆積土] 14層に分層した。人為堆積の様相を呈する。
- [出土遺物] 覆土中よりI群土器（第55図4）が出土した。

第29号土坑（第45図）

- [位置] AH・AI-101に位置する。盛土下に現れた第V層において、暗褐色土の落ち込みを確認した。本遺構は、遺構が集中する調査区中央小台地上に位置する。
- [重複] 第32号土坑及び第35号土坑と重複し、本土坑は、第35号土坑より新しく、第32号土坑より古い。
- [形状・規模] 重複のため規模は不明であるが、円形を呈するものと思われる。
- [壁] 壁高は、101cmである。壁は、西壁はやや急に立ち上がる。その他の壁は緩やかに内側に傾斜して立ち上がり、壁面途中でオーバーハングする。断面形は、フラスコ状を呈する。
- [底] 第VI層を底面とし、堅緻である。底面径は、202cm×202cmの円形を呈する。
- [堆積土] 24層に分層した。自然堆積の様相を呈する。
- [出土遺物] 覆土中よりI群2類b土器（第55図5）が出土した。

第30号土坑（第45図）

- [位置] AI・AH-101・102に位置する。盛土下に現れた第V層において、暗褐色土の落ち込みを確認した。本遺構は、遺構が集中する調査区中央小台地上に位置する。
- [重複] なし。
- [形状・規模] 開口部は、184cm×166cmで、不整形円形を呈する。
- [壁] 壁高は、120cmである。壁は、南壁を除き、底面から緩やかに内側に傾斜し立ち上がり、壁面途中で若干、オーバーハングする。南壁は急に立ち上がり、壁面途中でやや内側に傾斜して立ち上がる。断面形は、袋状を呈する。
- [底] 第VI層を底面とし、194cm×184cmの円形を呈する。底面は堅緻である。
- [堆積土] 19層に分層した。自然堆積の様相を呈する。
- [出土遺物] なし。

第32号土坑（第46図）

- [位置] AH-100・101に位置する。盛土下に現れた第V層において、暗褐色土の落ち込みを確認した。本遺構は、遺構が集中する調査区中央小台地上に位置する。

- [重複] 第29号土坑及び第35号土坑と重複し、本土坑は、第29号土坑及び第35号土坑より新しい。
- [形状・規模] 重複のため規模は不明である。残存部の開口部における最大径は、250cm×192cmを計測する。円形を呈するものと思われる。
- [壁] 壁高は、137cmである。壁は、北東壁はやや急に立ち上がる。その他の壁は緩やかに内側に傾斜して立ち上がる。断面形は、フラスコ状を呈する。
- [底] 第VI層を底面とし、200cm×152cmの円形を呈する。底面は堅緻である。
- [堆積土] 28層に分層した。自然堆積の様相を呈する。
- [出土遺物] 覆土中よりI群、I群2類b土器（第55図6、7）が出土した。石器（第62図1）は、G群1類1点が出土した。

第34号土坑（第46図）

- [位置] AF・AG-101・102に位置する。盛土下に現れた第V層において、暗褐色土の落ち込みを確認した。本遺構は、遺構が集中する調査区中央小台地上に位置する。
- [重複] なし。
- [形状・規模] 開口部は、180cm×150cmで、不整円形を呈する。
- [壁] 壁高は、77cmである。壁は、底面から直線的に内側に傾斜し立ち上がる。断面形は、袋状を呈する。
- [底] 第VI層を底面とし、216cm×180cmの円形を呈する。底面は堅緻である。底面では、壁脇に1基の小ピットを検出した。規模は、径24cm×25cm、深さ16cmである。
- [堆積土] 20層に分層した。自然堆積の様相を呈する。
- [出土遺物] 覆土中よりI群土器（第55図8）が出土した。石器（第62図2）は、B群1点が出土した。

第35号土坑（第46図）

- [位置] AH・AI-101に位置する。盛土下に現れた第V層において、暗褐色土の落ち込みを確認した。本遺構は、遺構が集中する調査区中央小台地上に位置する。
- [重複] 第29号土坑及び第32号土坑と重複し、本土坑は、第29号土坑及び第32号土坑より古い。
- [形状・規模] 開口部は、164cm×134cmで、楕円形を呈する。
- [壁] 壁高は、106cmである。壁は、いずれも底面から緩やかに内側に傾斜して立ち上がり、西壁は、オーバーハングする。東壁は、屈曲しながら立ち上がる。断面形は、フラスコ状を呈する。
- [底] 第VI層を底面とし、194cm×162cmの円形を呈する。底面は堅緻である。
- [堆積土] 29層に分層した。自然堆積の様相を呈する。
- [出土遺物] 覆土中よりI群、I群2類c土器（第55図9～11・第56図1）が出土した。復元した出土土器には注口を有する浅鉢（第56図1）が含まれる。

第36号土坑（第47図）

- [位置] AH-103に位置する。第IV層において、暗褐色土の落ち込みを確認した。本遺構は、遺構が集中する調査区中央小台地上に位置する。

[重複] 第45号土坑と重複するが、本土坑が新しい。

[形状・規模] 開口部は、126cm×100cmで、不整形円形を呈する。

[壁] 壁高は、170cmである。壁は、底面から直線的に内側に傾斜し立ち上がり、壁面途中でオーバーハングする。断面形は、フラスコ状を呈する。

[底] 第Ⅵ層を底面とし、206cm×190cmの円形を呈する。底面は堅緻である。底面の中央と西壁の中間で、径22cm×18cm、深さ5cmの小ピットを検出した。

[堆積土] 25層に分層した。自然堆積の様相を呈する。

[出土遺物] 覆土中よりⅠ群2類b土器（第56図2）が出土した。

第41号土坑（第47図）

[位置] AF-103に位置する。第Ⅳ層において、暗褐色土の落ち込みを確認した。本遺構は、遺構が集中する調査区中央小台地上に位置する。

[重複] なし。

[形状・規模] 開口部は、120cm×120cmで、円形を呈する。

[壁] 壁高は、150cmである。壁は、内側に傾斜しオーバーハングする。断面形は、フラスコ状を呈する。

[底] 第Ⅵ層を底面とし、208cm×196cmの円形を呈する。底面は堅緻である。底面ほぼ中央部に径24cm×26cm、深さ4cmのピットを検出した。

[堆積土] 21層に分層した。自然堆積の様相を呈する。

[出土遺物] 覆土中よりⅠ群、Ⅰ群2類b、c土器（第56図3、4・第57図1、2）が破片で出土した。覆土第12層から1個体分の破片（第57図1）が出土している。石器（第62図3～6）は、D群1類1点、G群2類1点、M群3類1点、Q群1類1点が出土した。土製品はミニチュア土器（第65図2）が1点出土した。

第45号土坑（第47図）

[位置] AH-103に位置する。第Ⅳ層において、暗褐色土の落ち込みを確認した。本遺構は、遺構が集中する調査区中央小台地上に位置する。

[重複] 第36号土坑と重複するが、本土坑が古い。

[形状・規模] 開口部は、328cm×264cmで、楕円形を呈する。

[壁] 壁高は、30cmである。壁は、緩やかに傾斜し立ち上がる。断面形は、鍋底状を呈する。

[底] 第Ⅴ層を底面とし、320cm×250cmの楕円形を呈する。底面は堅緻である。

[堆積土] 3層に分層した。自然堆積の様相を呈する。

[出土遺物] 覆土中よりⅠ群2類c土器（第58図1）が出土した。石器（第62図7）は、M群4類1点が出土した。

第46号土坑（第48図）

[位置] AG・AH-103・104に位置する。第Ⅳ層において、暗褐色土の落ち込みを確認した。本遺構は、遺構が集中する調査区中央小台地上に位置する。

[重複] なし。

[形状・規模] 開口部は、180cm×170cmで、円形を呈する。

[壁] 壁高は、122cmである。壁は、北～東壁はやや急に立ち上がる。その他の壁は緩やかに内側に傾斜して立ち上がり、壁面途中でオーバーハングする。断面形は、フラスコ状を呈する。

[底] 第VI層を底面とし、212cm×212cmの円形を呈する。底面は堅緻である。

[堆積土] 35層に分層した。自然堆積の様相を呈する。

[出土遺物] 覆土中よりI群、I群2類a土器（第58図2、3）が出土した。

第48号土坑（第48図）

[位置] AH・AI－103・104に位置する。第IV層において、暗褐色土の落ち込みを確認した。本遺構は遺構が集中する調査区中央小台地上に位置する。

[重複] 第49号土坑、第15号ピットと重複し、本土坑が古い。

[形状・規模] 重複のため規模は不明である。不整楕円形を呈すると思われる。

[壁] 壁高は、最大22cmである。

[底] 第V層を底面とし、規模は不明である。

[堆積土] 5層に分層した。自然堆積の様相を呈する。

[出土遺物] なし。

第49号土坑（第48図）

[位置] AH・AI－103・104に位置する。第IV層において、暗褐色土の落ち込みを確認した。本遺構は、遺構が集中する調査区中央小台地上に位置する。

[重複] 第48号土坑と重複し、本土坑が新しい。

[形状・規模] 調査区端のため不明である。確認できる最大径は106cmである。

[壁] 壁高は、55cmである。壁は、内側に緩やかに立ち上がり、壁面途中でオーバーハングする。断面形は、フラスコ状を呈する。

[底] 第V層を底面とし、堅緻である。調査区端のため規模は不明である。

[堆積土] 11層に分層した。自然堆積の様相を呈する。

[出土遺物] 覆土中よりI群、I群1類c土器（第58図4～6）が出土した。覆土6層において礫4点が集合して出土した。

第50号土坑（第48図）

[位置] AH・AI－104に位置する。第IV層において、暗褐色土の落ち込みを確認した。本遺構は、遺構が集中する調査区中央小台地上に位置する。

[重複] 第51号土坑、第52号土坑と重複し、本土坑が新しい。

[形状・規模] 開口部は、180cm×160cmで、円形を呈する。

[壁] 壁高は、88cmである。壁は、内側に緩やかに立ち上がり、北壁を除き壁面途中でオーバーハングする。断面形は、袋状を呈する。

[底] 第VI層を底面とし、堅緻である。

[堆 積 土] 11層に分層した。自然堆積の様相を呈する。

[出土遺物] 覆土中よりI群土器(第58図7、8)が出土した。石器(第63図1、2)はG群1類2点が出土した。

第51号土坑(第48図)

[位 置] AH・AI-103・104に位置する。第IV層において、褐色土の落ち込みを確認した。本遺構は、遺構が集中する調査区中央小台地上に位置する。

[重 複] 第50号土坑と重複し、本土坑が古い。

[形状・規模] 重複のため不明である。楕円形を呈するものと思われる。

[壁] 壁高は、138cmである。壁は、内側に緩やかに立ち上がり、壁面途中でオーバーハングする。断面形は、フラスコ状を呈する。

[底] 第VI層を底面とし、堅緻である。

[堆 積 土] 17層に分層した。自然堆積の様相を呈する。

[出土遺物] 覆土中より石器(第63図3～5)が、A群4類1点、G群6類1点、M群2類1点が出土した。

第52号土坑(第49図)

[位 置] AH-104・105に位置する。第IV層において、褐色土の落ち込みを確認した。本遺構は、遺構が集中する調査区中央小台地上に位置する。

[重 複] 第50号土坑と重複し、本土坑が古い。

[形状・規模] 一部重複のため不明であるが、確認できる開口部の最大径は206cm×202cmで、円形を呈するものと思われる。

[壁] 壁高は、27cmである。壁は、緩やかに立ち上がる。断面形は、鍋底状を呈する。

[底] 第V層を底面とし、一部重複のため不明であるが、194cm×188cmの円形を呈すると思われる。底面は堅緻である。

[堆 積 土] 6層に分層した。自然堆積の様相を呈する。

[出土遺物] なし。

第53号土坑(第49図)

[位 置] AH・AI-105に位置する。第IV層において、褐色土の落ち込みを確認した。本遺構は、遺構が集中する調査区中央小台地上に位置する。

[重 複] 第54号土坑本土坑が新しい。

[形状・規模] 開口部は、一部重複のため不明である。円形を呈するものと思われる。

[壁] 壁高は、119cmである。壁は、内側に緩やかに立ち上がり、壁面途中でオーバーハングする。断面形は、フラスコ状を呈する。

[底] 第VI層を底面とし、堅緻である。

[堆 積 土] 19層に分層した。自然堆積の様相を呈する。

[出土遺物] 覆土中より I 群 2 類 b、c 土器 (第 58 図 9、10) が出土した。石器 (第 63 図 6) は、A 群 4 類 1 点が出土した。

第 54 号土坑 (第 49 図)

[位置] AH-105 に位置する。第 IV 層において、褐色土の落ち込みを確認した。本遺構は、遺構が集中する調査区中央小台地上に位置する。

[重複] 第 53 号土坑と重複し、本土坑が古い。

[形状・規模] 重複のため不明である。円形を呈するものと思われる。

[壁] 壁高は、64cm である。壁は、内側に緩やかに立ち上がる。断面形は、重複のため不明である。

[底] 第 VI 層を底面とし、堅緻である。

[堆積土] 4 層に分層した。自然堆積の様相を呈する。

[出土遺物] 覆土中より I 群土器 (第 58 図 11) が出土した。

第 55 号土坑 (第 50 図)

[位置] AG・AH-104 に位置する。盛土下に現れた第 V 層において、暗褐色土の落ち込みを確認した。本遺構は、遺構が集中する調査区中央小台地上に位置する。

[重複] なし。

[形状・規模] 開口部は、170cm × 160cm で、楕円形を呈する。

[壁] 壁高は、186cm である。壁は緩やかに立ち上がり、壁面途中でオーバーハングする。断面形は、フラスコ状を呈する。

[底] 第 VI 層を底面とし、200cm × 180cm の円形を呈する。底面は堅緻である。底面の南西部より。径 36cm × 22cm、深さ 16cm の小ピットを検出した。

[堆積土] 27 層に分層した。自然堆積の様相を呈する。

[出土遺物] 覆土中より I 群土器 (第 58 図 12～14) が出土した。石器 (第 63 図 7) は、A 群 4 類 1 点が出土した。

第 56 号土坑 (第 50 図)

[位置] AF・AG-104 に位置する。盛土下に現れた第 V 層において、褐色土の落ち込みを確認した。本遺構は、遺構が集中する調査区中央小台地上に位置する。

[重複] 第 60 号土坑と重複し、本土坑が新しい。

[形状・規模] 開口部は、200cm × 156cm で、不整楕円形を呈する。

[壁] 壁高は、125cm である。壁は、緩やかに立ち上がり、壁面途中でオーバーハングする。断面形は、フラスコ状を呈する。

[底] 第 VI 層を底面とし、径 208cm の円形を呈する。底面は堅緻である。

[堆積土] 13 層に分層した。自然堆積の様相を呈する。

[出土遺物] 覆土中より石器 (第 64 図 2) が、D 群 1 類 1 点が出土した。

第57号土坑（第50図）

[位置] AG-104・105に位置する。盛土下に現れた第V層において、暗褐色土の落ち込みを確認した。本遺構は、遺構が集中する調査区中央小台地上に位置する。

[重複] なし。

[形状・規模] 開口部は、140cm×112cmで、不整楕円形を呈する。

[壁] 壁高は、135cmである。壁は、緩やかに立ち上がり、壁面途中でオーバーハングする。断面形は、フラスコ状を呈する。

[底] 第VI層を底面とし、径204cmの円形を呈する。底面は堅緻である。底面中央部より、径34cm×30cm、深さ24cmの小ピットを検出した。

[堆積土] 14層に分層した。自然堆積の様相を呈する。

[出土遺物] 覆土中よりI群2類c土器（第58図15、16・第59図1、2）が出土した。

第59号土坑（第51図）

[位置] AG・H-105に位置する。第V層において、暗褐色土の落ち込みを確認した。本遺構は、遺構が集中する調査区中央小台地上に位置する。

[重複] なし。

[形状・規模] 開口部は、172cm×152cmで、円形を呈する。

[壁] 壁高は、98cmである。壁は、内側に立ち上がり、一部壁面途中でオーバーハングする。断面形は、フラスコ状を呈する。

[底] 第VI層を底面とし、208cm×194cmの円形を呈する。底面は堅緻である。底面中央部やや南側より、径14cm×14cm、深さ6cmの小ピットを検出した。

[堆積土] 12層に分層した。人為堆積の様相を呈する。

[出土遺物] 覆土中より石器（第64図1）がA群4類1点が出土した。

第60号土坑（第51図）

[位置] AF・AG-104に位置する。第V層において、褐色土の落ち込みを確認した。本遺構は、遺構が集中する調査区中央小台地上に位置する。

[重複] 第56号土坑と重複し、本土坑が古い。

[形状・規模] 重複のため不明であるが、確認できる開口部の最大径は150cm×100cmで、楕円形を呈するものと思われる。

[壁] 壁高は、80cmである。壁は、緩やかに立ち上がり、壁面途中でオーバーハングする。断面形は、フラスコ状を呈する。

[底] 第VI層を底面とし、重複のため不明であるが、確認できる最大径は径132cm×132cmの円形を呈する。底面は堅緻である。

[堆積土] 4層に分層した。自然堆積の様相を呈する。

[出土遺物] なし。

第61号土坑（第51図）

- [位置] AF・AG－106に位置する。第Ⅳ層において、褐色土の落ち込みを確認した。本遺構は、遺構が集中する調査区中央小台地上に位置する。
- [重複] 第2号竪穴式住居跡と重複し、本土坑が新しい。
- [形状・規模] 開口部は、120cm×112cmで、不整形円形を呈する。
- [壁] 壁高は、17cmである。壁は、やや急に立ち上がる。断面形は、鍋底状を呈する。
- [底] 第Ⅴ層を底面とし、116cm×110cmで、不整形円形を呈する。底面はほぼ堅緻である。
- [堆積土] 2層に分層した。
- [出土遺物] なし。

第65号土坑（第51図）

- [位置] AE－97・98に位置する。盛土下に現れた第Ⅵ層において、暗褐色土の落ち込みを確認した。本遺構は、遺構が集中する調査区中央小台地上に位置する。
- [重複] なし。
- [形状・規模] 開口部は、158cm×140cmで、円形を呈する。
- [壁] 壁高は、59cmである。壁は、南壁は緩やかに立ち上がり、他は急に立ち上がり壁面途中でオーバーハングする。断面形は、袋状を呈する。
- [底] 第Ⅵ層を底面とし、172cm×156cmの円形を呈する。底面は堅緻である。
- [堆積土] 10層に分層した。人為堆積の様相を呈する。
- [出土遺物] なし。

第66号土坑（第51図）

- [位置] AE－93・94に位置する。盛土下に現れた第Ⅵ層において、黒褐色土の落ち込みを確認した。本遺構は、遺構が集中する調査区中央小台地上に位置する。
- [重複] 遺構上部は、一部を除き、樹木によると思われる攪乱を受けている。
- [形状・規模] 攪乱を受けているため、不明である。
- [壁] 壁高は、106cmである。壁は、内側に急に立ち上がり壁面途中でオーバーハングする。断面形は、フラスコ状を呈する。
- [底] 第Ⅵ層を底面とし、径202cmの円形を呈する。底面は堅緻である。
- [堆積土] 5層に分層した。自然堆積の様相を呈する。
- [出土遺物] 覆土中よりⅠ群、Ⅰ群2類c、f土器（第59図3～6）が出土した。

第67号土坑（第52図）

- [位置] AE－93に位置する。盛土下に現れた第Ⅵ層において、褐色土の落ち込みを確認した。本遺構は、遺構が集中する調査区中央小台地上に位置する。
- [重複] なし。
- [形状・規模] 開口部は、112cm×96cmで、円形を呈する。
- [壁] 壁高は、84cmである。壁は、内側に急に立ち上がる。断面形は、フラスコ状を呈する。

[底] 第VI層を底面とし、166cm × 154cmの円形を呈する。底面は堅緻である。

[堆積土] 9層に分層した。自然堆積の様相を呈する。

[出土遺物] 覆土中よりI群、I群2類b土器(第60図1～3)が出土した。

第68号土坑(第52図)

[位置] AE-101に位置する。盛土下に現れた第VI層において、黄褐色土の落ち込みを確認した。本遺構は、遺構が集中する調査区中央小台地上に位置する。

[重複] なし。

[形状・規模] 開口部は、106cm × 152cmで、円形を呈する。

[壁] 壁高は、67cmである。壁は、内側に急に立ち上がる。断面形は、袋状を呈する。

[底] 第VI層を底面とし、162cm × 152cmの円形を呈する。底面は堅緻である。

[堆積土] 3層に分層した。人為堆積の様相を呈する。

[出土遺物] 覆土中よりI群2類c土器(第60図4)が出土した。

第69号土坑(第52図)

[位置] AD-101に位置する。盛土下に現れた第V層において、褐色土の落ち込みを確認した。本遺構は、遺構が集中する調査区中央小台地上に位置する。

[重複] なし。

[形状・規模] 開口部は、100cm × 68cmで、楕円形を呈する。

[壁] 壁高は、76cmである。壁は、内側に急に立ち上がり、一部壁面途中で強くオーバーハングする。断面形は、フラスコ状を呈する。

[底] 第VI層を底面とし、178cm × 154cmの円形を呈する。底面は堅緻である。

[堆積土] 12層に分層した。自然堆積の様相を呈する。

[出土遺物] 覆土中よりI群2類a、e土器(第60図5～7)が出土した。石器(第64図3、4)は、A群4類1点、G群4類1点が出土した。

第70号土坑(第52図)

[位置] AE-101・102に位置する。盛土下に現れた第V層において、暗褐色土の落ち込みを確認した。本遺構は、遺構が集中する調査区中央小台地上に位置する。

[重複] 第71号土坑と重複するが、本土坑が新しい。

[形状・規模] 重複のため不明であるが、確認できる最大径は114cm × 107cmで、円形を呈するものと思われる。

[壁] 壁高は、90cmである。壁は、内側に緩やかに立ち上がり、壁面途中でオーバーハングする。断面形は、フラスコ状を呈する。

[底] 第VI層を底面とし、175cm × 158cmの円形を呈する。底面は堅緻である。底面南側で土坑を検出した。開口部は、76cm × 66cmで、円形を呈する。壁高は、111cmである。壁は、内側に緩やかに立ち上がり、断面形はフラスコ状を呈する。第VI層を底面とし、146cm × 128cmの円形を呈する。底面は堅緻である。堆積土は、4層に分層した。人為堆積の様相を呈す

る。遺物は、出土しなかった。

[堆積土] 10層に分層した。自然堆積の様相を呈する。

[出土遺物] 覆土中よりI群土器(第60図8、9)が出土した。

第71号土坑(第53図)

[位置] AE・AD-101・102に位置する。盛土下に現れた第V層において、褐色土の落ち込みを確認した。本遺構は、遺構が集中する調査区中央小台地上に位置する。

[重複] 第70号土坑と重複するが、本土坑が古い。

[形状・規模] 重複のため不明であるが、確認できる最大径は150cm×144cmで、円形を呈するものと思われる。

[壁] 壁高は、66cmである。壁は、内側に緩やか立ち上がり、一部壁面途中でオーバーハングする。断面形は、袋状を呈する。

[底] 第VI層を底面とする。確認できる最大径は180cm×176cmである。底面は堅緻である。

[堆積土] 12層に分層した。自然堆積の様相を呈する。

[出土遺物] 覆土中よりI群、I群2類b土器(第60図10、11)が出土した。

第72号土坑(第53図)

[位置] AD-102に位置する。盛土下に現れた第V層において、褐色土の落ち込みを確認した。本遺構は、遺構が集中する調査区中央小台地上に位置する。

[重複] なし。

[形状・規模] 開口部は、96cm×88cmで、円形を呈する。

[壁] 壁高は、64cmである。壁は、内側に急に立ち上がる。断面形は、袋状を呈する。

[底] 第VI層を底面とし、128cm×122cmの円形を呈する。底面は堅緻である。底面北西側より、径24cm×12cm、深さ5cmの小ピットを検出した。

[堆積土] 3層に分層した。自然堆積の様相を呈する。

[出土遺物] なし。

第73号土坑(第53図)

[位置] AD-102に位置する。第V層において、褐色土の落ち込みを確認した。本遺構は、遺構が集中する調査区中央小台地上に位置する。

[重複] なし。

[形状・規模] 開口部は、124cm×96cmで、不整形を呈する。

[壁] 壁高は、53cmである。壁は、やや急に立ち上がる。断面形は、鍋底状を呈する。

[底] 第VI層を底面とし、74cm×66cmの円形を呈する。底面は堅緻である。底面南側より、径30cm×24cm、深さ7cmの小ピットを検出した。

[堆積土] 8層に分層した。自然堆積の様相を呈する。

[出土遺物] なし。

第74号土坑（第53図）

[位置] AD-103に位置する。盛土下に現れた第V層において、暗褐色土の落ち込みを確認した。
本遺構は、遺構が集中する調査区中央小台地上に位置する。

[重複] なし。

[形状・規模] 開口部は、124cm×120cmで、円形を呈する。

[壁] 壁高は、61cmである。壁は、内側に緩やかに立ち上がり、壁面途中でオーバーハングする。
断面形は、フラスコ状を呈する。

[底] 第VI層を底面とし、170cm×158cmの円形を呈する。底面は堅緻である。

[堆積土] 10層に分層した。自然堆積の様相を呈する。

[出土遺物] なし。

第81号土坑（第53図）

[位置] AE・F-105に位置する。盛土下に現れた第V層において、暗褐色土の落ち込みを確認した。
本遺構は、遺構が集中する調査区中央小台地上に位置する。

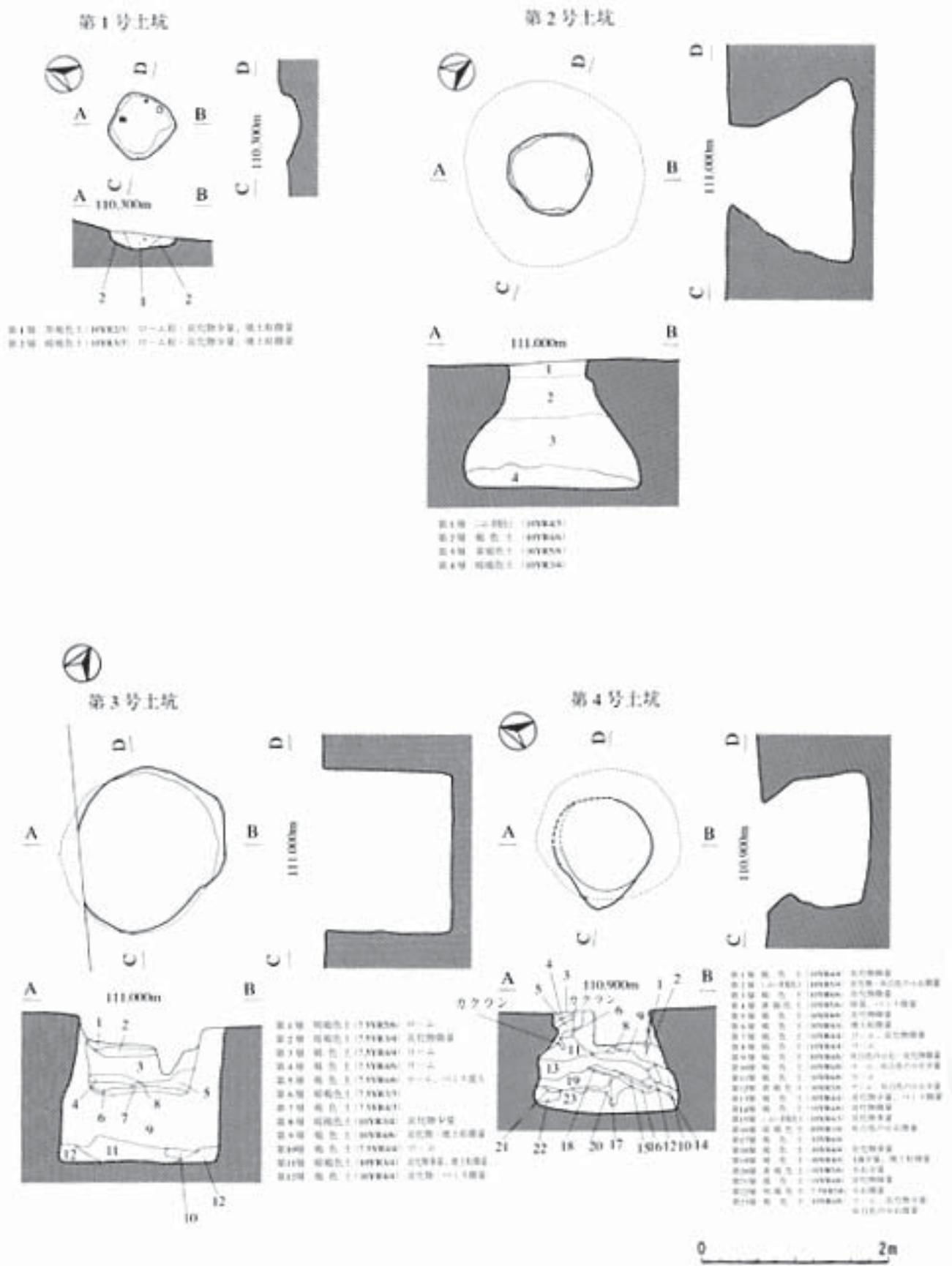
[重複] なし。

[形状・規模] 開口部は、127cm×123cmで、不整円形を呈する。

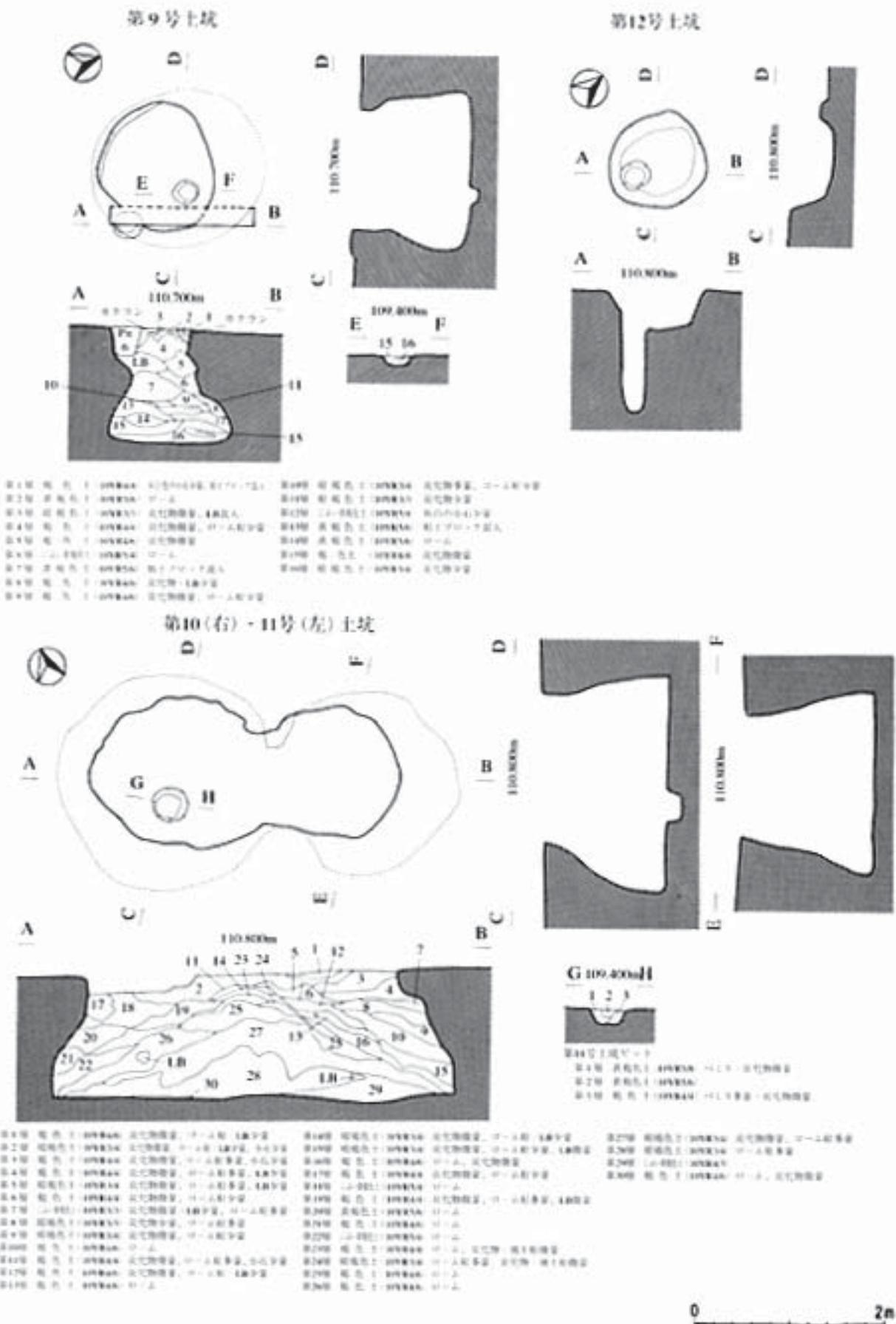
[壁] 壁高は、120cmである。壁は、内側に急に立ち上がり、壁面途中でオーバーハングする。北
壁は内側に直線的に立ち上がる。断面形は、フラスコ状を呈する。

[底] 第VI層を底面とし、164cm×148cmの円形を呈する。底面は堅緻である。

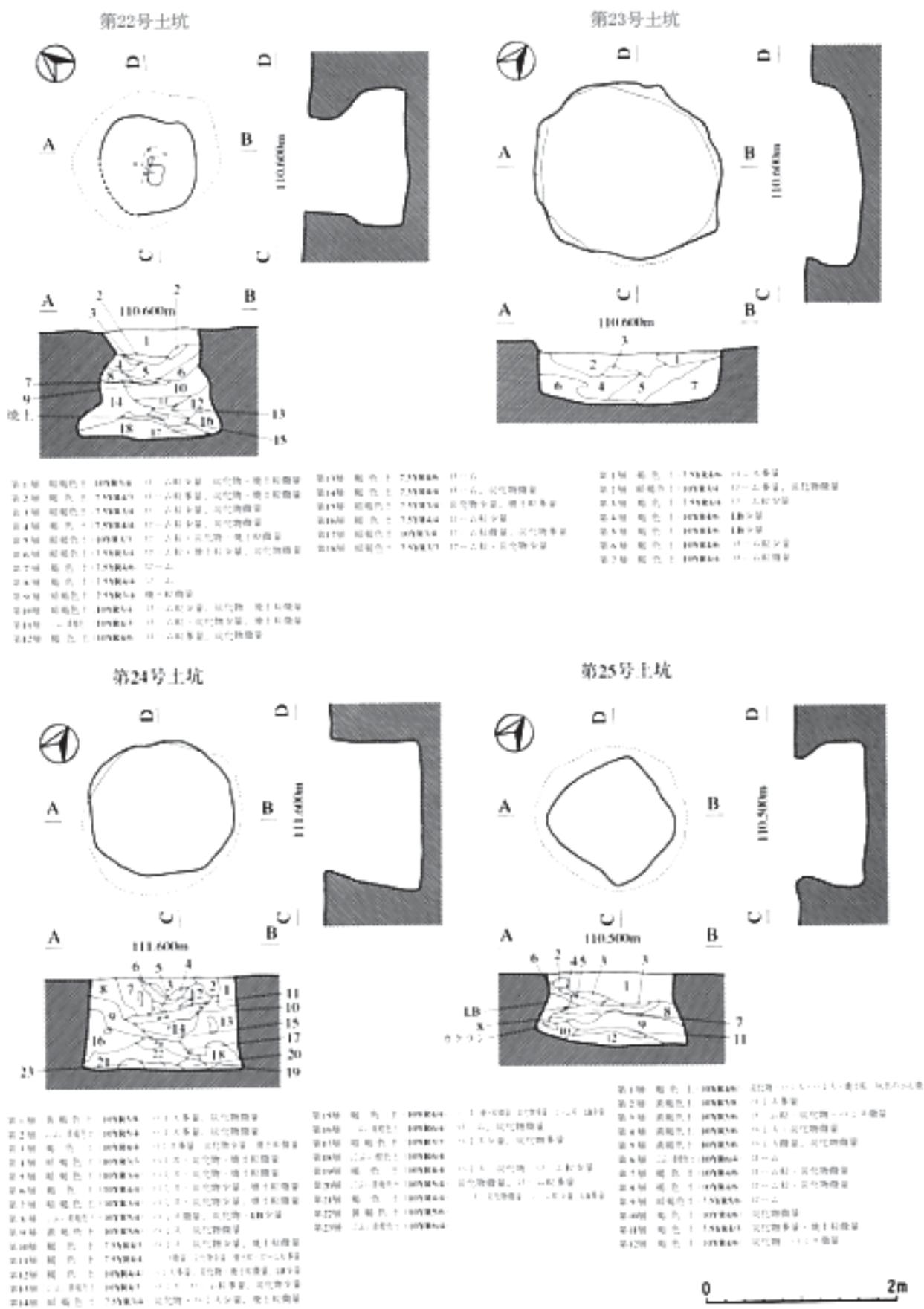
[出土遺物] 覆土中より石器（第64図5）、M群3類1点が出土した。



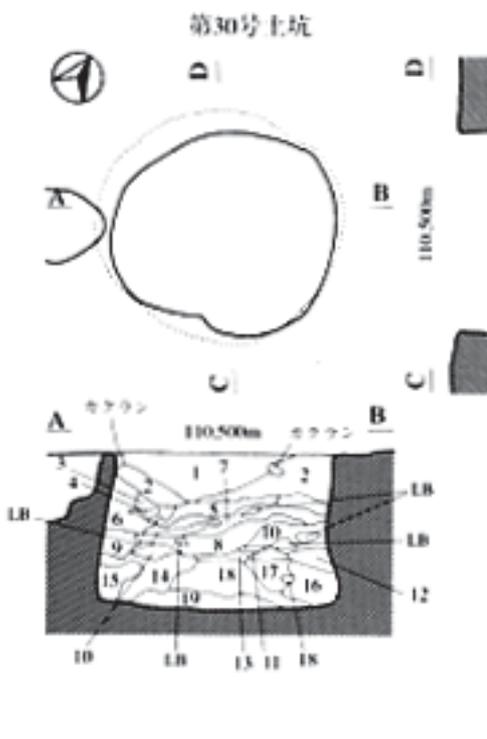
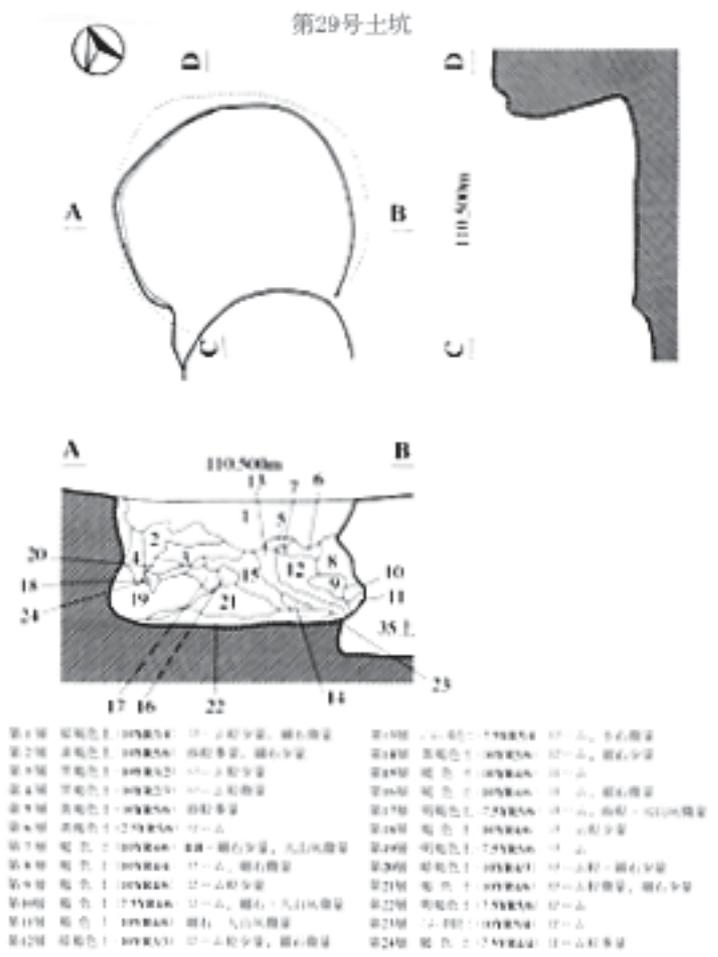
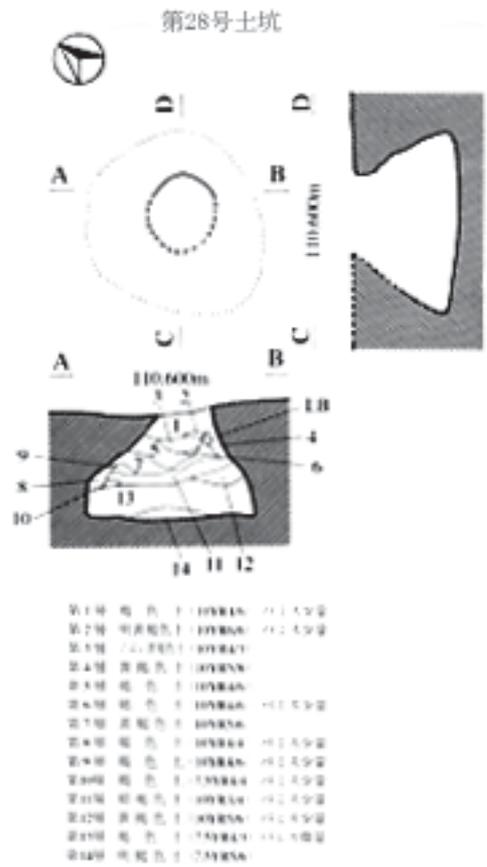
第41図 C区第1～4号土坑



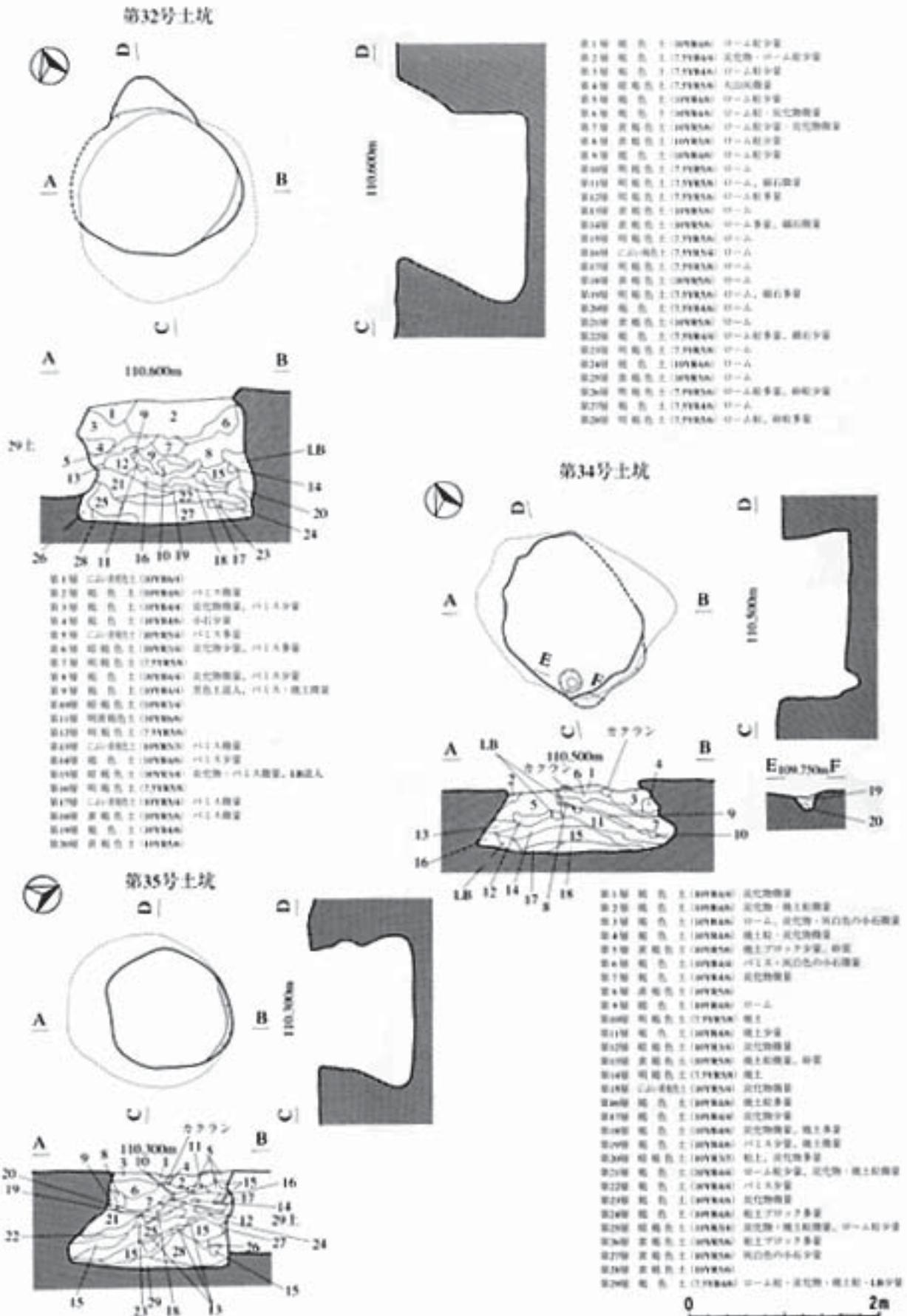
第43图 C区第9~12号土坑



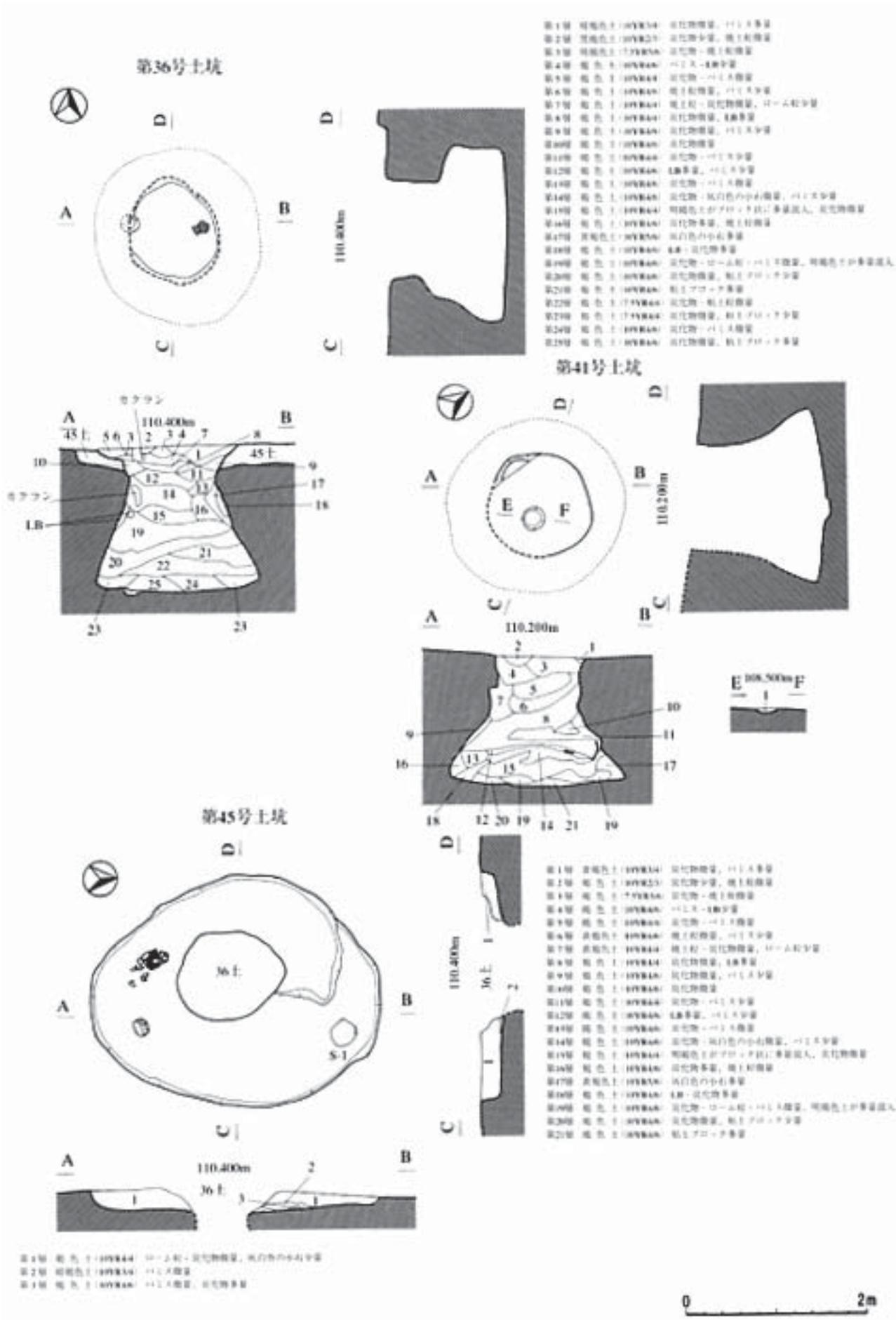
第44图 C区第22~25号土坑



第45図 C区第28～30号土坑

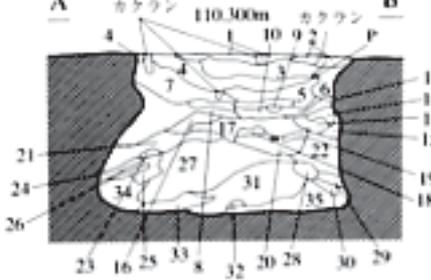
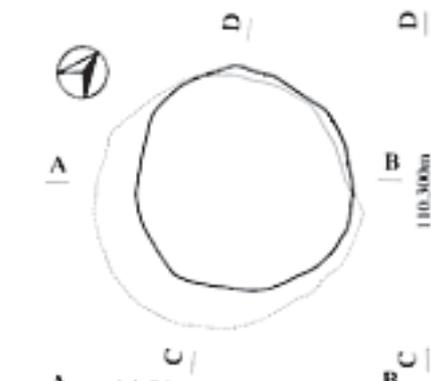


第46図 C区第32・34・35号土坑



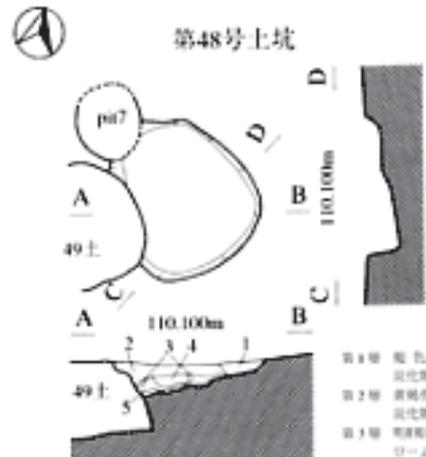
第 47 図 C 区第 36・41・45 号土坑

第46号土坑



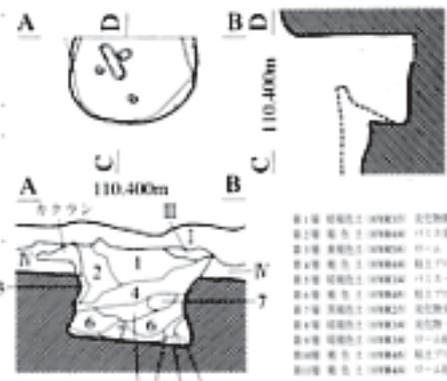
- 第1層 褐色土 (7.5YR4/6) LB多量
- 第2層 褐色土 (7.5YR4/6) コーム粒少量
- 第3層 褐色土 (7.5YR5/4) コーム粒・炭化物少量
- 第4層 褐色土 (7.5YR4/7) コーム粒少量
- 第5層 褐色土 (10YR5/4) コーム粒少量、礫石微量
- 第6層 褐色土 (10YR4/6) コーム粒少量、礫石微量
- 第7層 褐色土 (10YR4/6) コーム粒少量
- 第8層 褐色土 (7.5YR4/4) コーム粒少量
- 第9層 褐色土 (7.5YR4/4) コーム
- 第10層 褐色土 (7.5YR4/5) コーム粒少量、炭化物微量
- 第11層 褐色土 (7.5YR5/4) コーム粒、礫石少量
- 第12層 褐色土 (7.5YR4/4) コーム粒微量
- 第13層 褐色土 (7.5YR5/4) コーム粒少量、礫石少量

第48号土坑



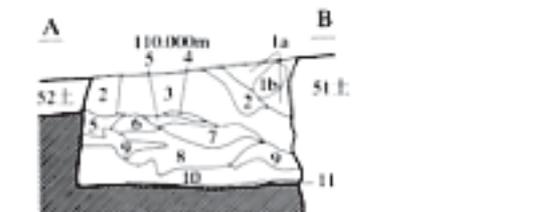
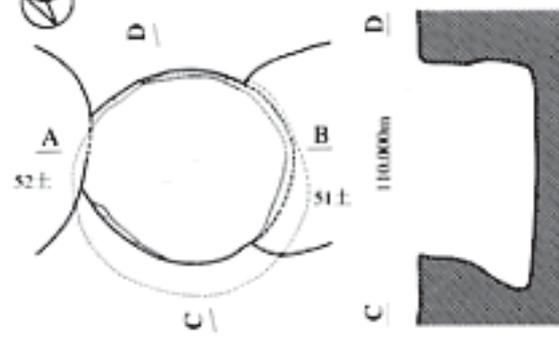
- 第1層 褐色土 (10YR4/6) 炭化物微量
- 第2層 黄褐色土 (10YR5/4) 炭化物・礫石粒・コーム粒微量
- 第3層 黄褐色土 (10YR5/4) コーム
- 第4層 黄褐色土 (10YR5/4) コーム
- 第5層 黄褐色土 (10YR4/2) 炭化物混入

第49号土坑



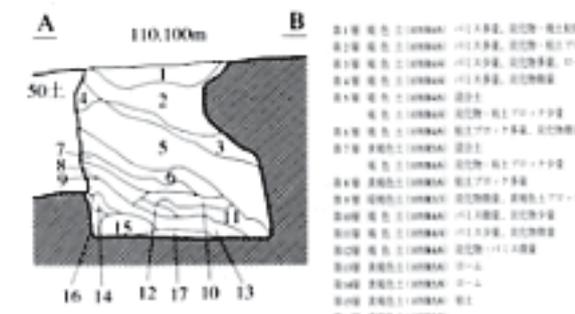
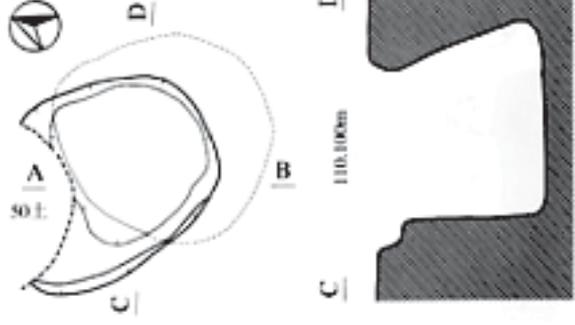
- 第1層 黄褐色土 (10YR5/4) 炭化物微量、コーム
- 第2層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第3層 黄褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第4層 褐色土 (10YR4/6) 礫石・コーム
- 第5層 黄褐色土 (10YR5/4) コーム
- 第6層 黄褐色土 (10YR4/6) 炭化物、礫石微量
- 第7層 黄褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第8層 褐色土 (10YR4/6) 礫石・コーム
- 第9層 褐色土 (10YR4/6) 礫石・コーム
- 第10層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第11層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第12層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第13層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第14層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第15層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第16層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第17層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第18層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第19層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第20層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第21層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第22層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第23層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第24層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第25層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第26層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第27層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第28層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第29層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第30層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第31層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第32層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第33層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第34層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第35層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第36層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第37層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第38層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第39層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第40層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第41層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第42層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第43層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第44層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第45層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第46層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第47層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第48層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第49層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第50層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第51層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第52層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第53層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第54層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第55層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第56層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第57層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第58層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第59層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第60層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第61層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第62層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第63層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第64層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第65層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第66層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第67層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第68層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第69層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第70層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第71層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第72層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第73層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第74層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第75層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第76層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第77層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第78層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第79層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第80層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第81層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第82層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第83層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第84層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第85層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第86層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第87層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第88層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第89層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第90層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第91層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第92層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第93層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第94層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第95層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第96層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第97層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第98層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第99層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第100層 褐色土 (10YR4/6) コーム

第50号土坑



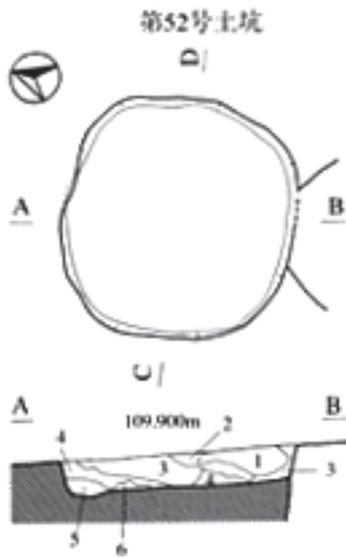
- 第1a層 褐色土 (10YR4/4) 炭化物微量
- 第1b層 褐色土 (10YR4/4) 炭化物微量、粘土ブロック多量
- 第2層 褐色土 (10YR4/4) パリス少量、炭化物微量
- 第3層 黄褐色土 (10YR5/4) パリス多量
- 第4層 黄褐色土 (10YR5/4) 褐色土混入
- 第5層 褐色土 (10YR4/4) 褐色土混入、炭化物微量
- 第6層 黄褐色土 (10YR5/4) 褐色土混入、パリス少量
- 第7層 褐色土 (10YR4/6) 黄褐色土混入、炭化物・パリス微量
- 第8層 黄褐色土 (10YR5/4) パリス少量
- 第9層 褐色土 (10YR4/4) コーム多量
- 第10層 コーム粒 (10YR5/4) 粘土層
- 第11層 褐色土 (10YR4/6) パリス少量

第51号土坑

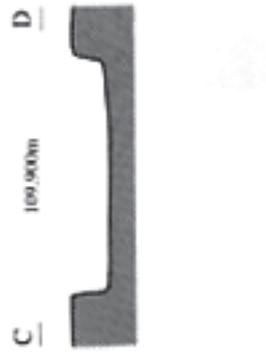


- 第1層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第2層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第3層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第4層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第5層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第6層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第7層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第8層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第9層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第10層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第11層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第12層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第13層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第14層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第15層 褐色土 (10YR4/6) コーム
- 第16層 褐色土 (10YR4/6) コーム

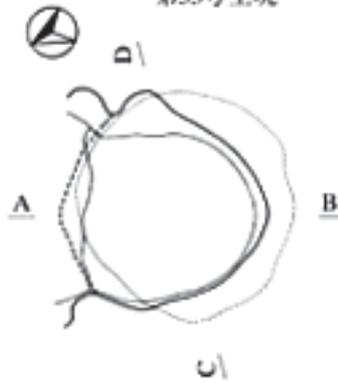
第 48 図 C 区第 46・48・51 号土坑



- 第1層 黄褐色土 (10YR5/6) +ピリス少量、炭化物微量、粘土アロク少量
- 第2層 褐色土 (10YR4/6) +ピリス・粘土アロク少量、炭化物微量
- 第3層 褐色土 (10YR4/6) +ピリス少量、炭化物微量
- 第4層 暗褐色土 (10YR3/4) +ピリス少量、炭化物・ローム微量
- 第5層 褐色土 (10YR4/6) 炭化物・ローム微量
- 第6層 褐色土 (10YR4/6) 土砂少量、炭化物微量



第53号土坑



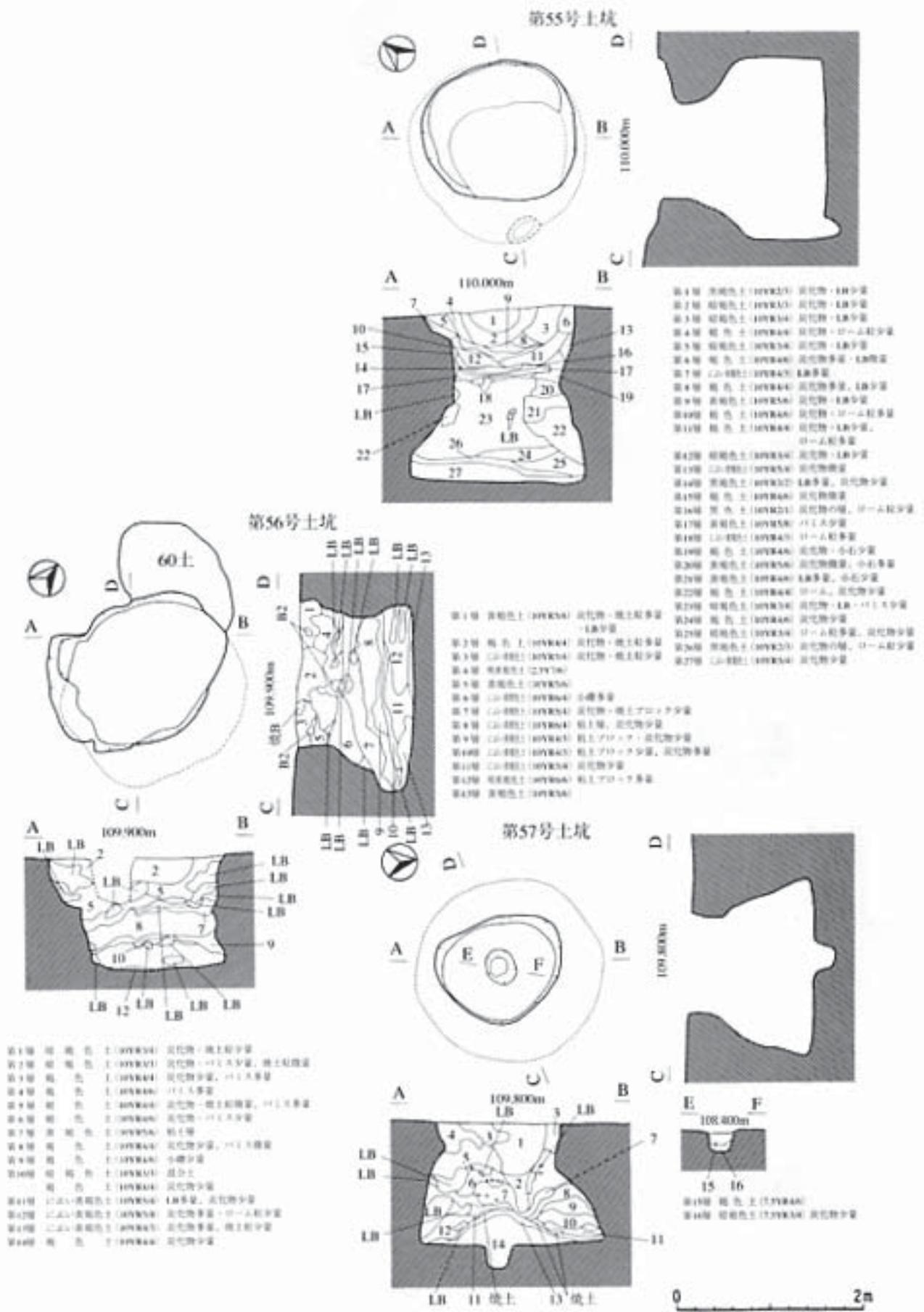
- 第1層 褐色土 (10YR4/6) 炭化物・ピリス少量
- 第2層 褐色土 (10YR4/6) 炭化物少量、ピリス・粘土微量
- 第3層 黄褐色土 (10YR5/6) +ピリス少量、炭化物微量
- 第4層 暗褐色土 (10YR3/4) 炭化物・ピリス少量
- 第5層 黄褐色土 (10YR5/6) +ピリス少量
- 第6層 褐色土 (10YR4/6) 炭化物・ピリス・ローム少量
- 第7層 褐色土 (10YR4/6) 粘土和・炭化物微量
- 第8層 褐色土 (10YR4/6) 炭化物少量
- 第9層 暗褐色土 (10YR3/4) 灰色の中心微量
- 第10層 褐色土 (10YR4/6) 炭化物微量
- 第11層 暗褐色土 (10YR3/4) 灰色の中心微量
- 第12層 褐色土 (10YR4/6) 洋見野アロク混入、炭化物少量、粘土微量
- 第13層 褐色土 (10YR4/6) 炭化物、炭化した木片少量
- 第14層 暗褐色土 (10YR3/4) 炭化物・粘土和少量
- 第15層 褐色土
- 第16層 暗褐色土 (10YR3/4)
- 第17層 褐色土 (10YR4/6) 炭化物少量
- 第18層 暗褐色土 (10YR3/4)
- 第19層 褐色土 (10YR4/6) 炭化物微量

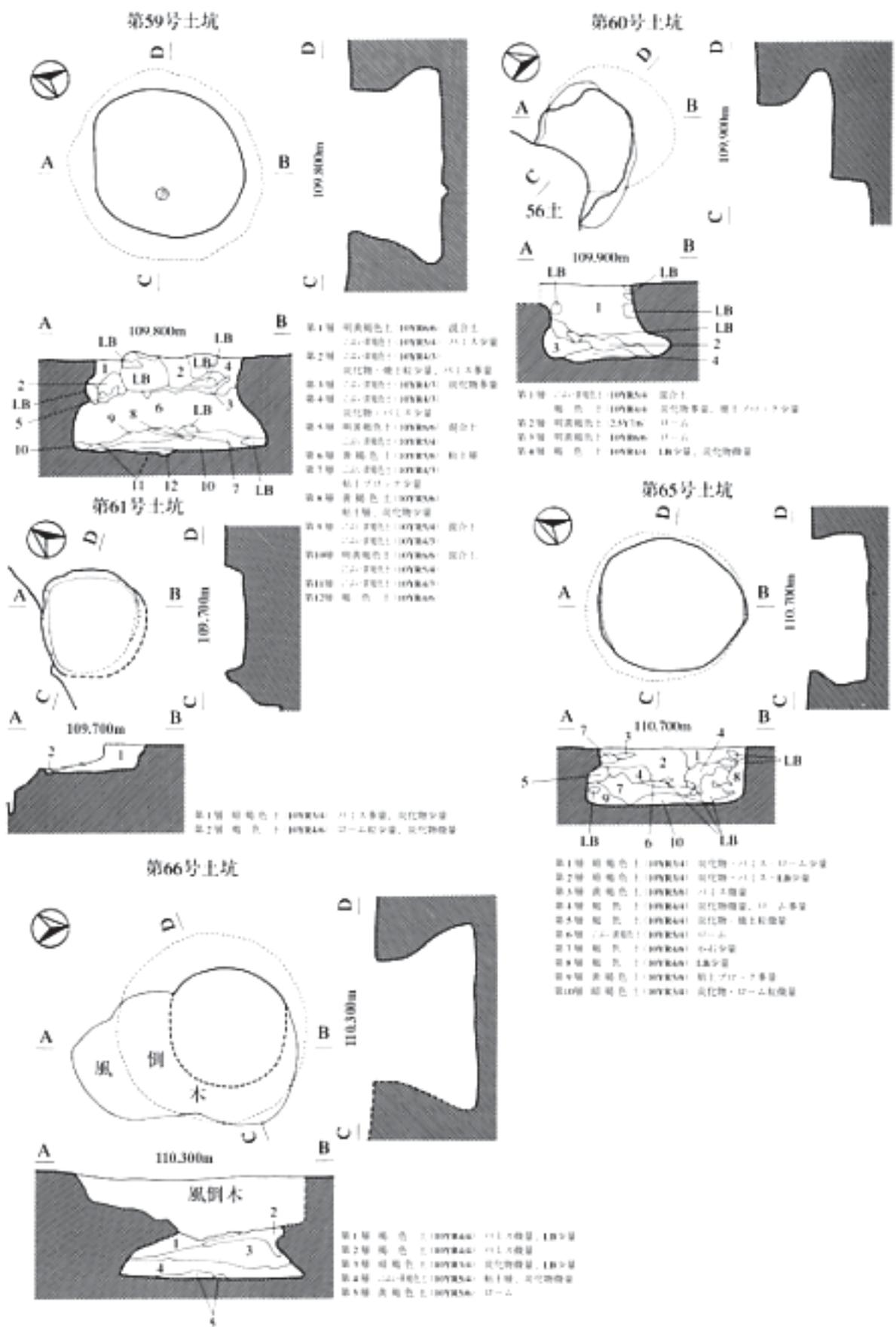


- 第1層 暗褐色土 (10YR3/4) 炭化物・ピリス少量
- 第2層 褐色土 (10YR4/6) 黄褐色土アロク少量、粘土和・炭化物少量、+ピリス微量
- 第3層 暗褐色土 (10YR3/4) 炭化物・土砂少量、+ピリス・粘土和微量
- 第4層 黄褐色土 (10YR5/6) 土砂少量

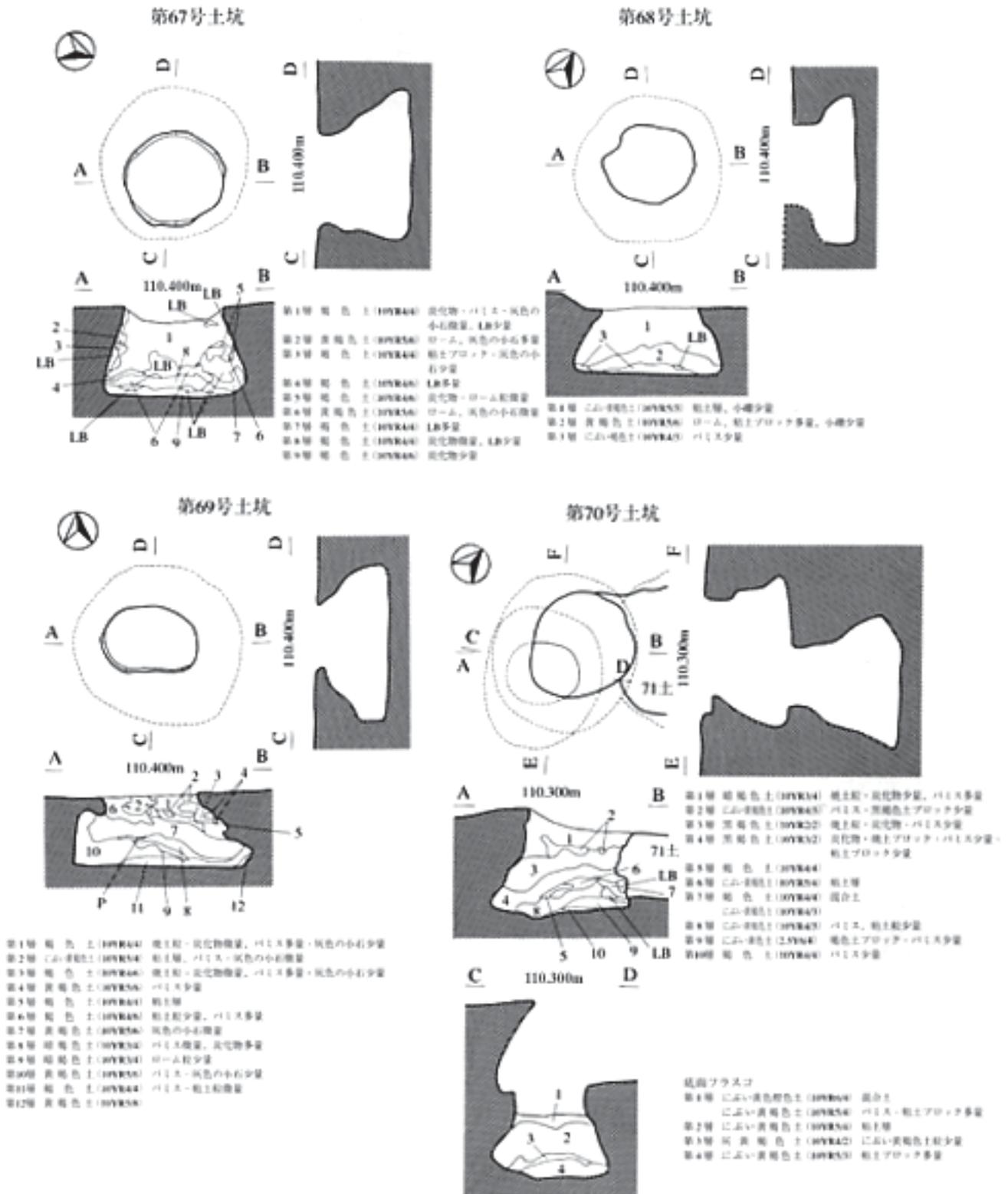


第49図 C区第52～54号土坑

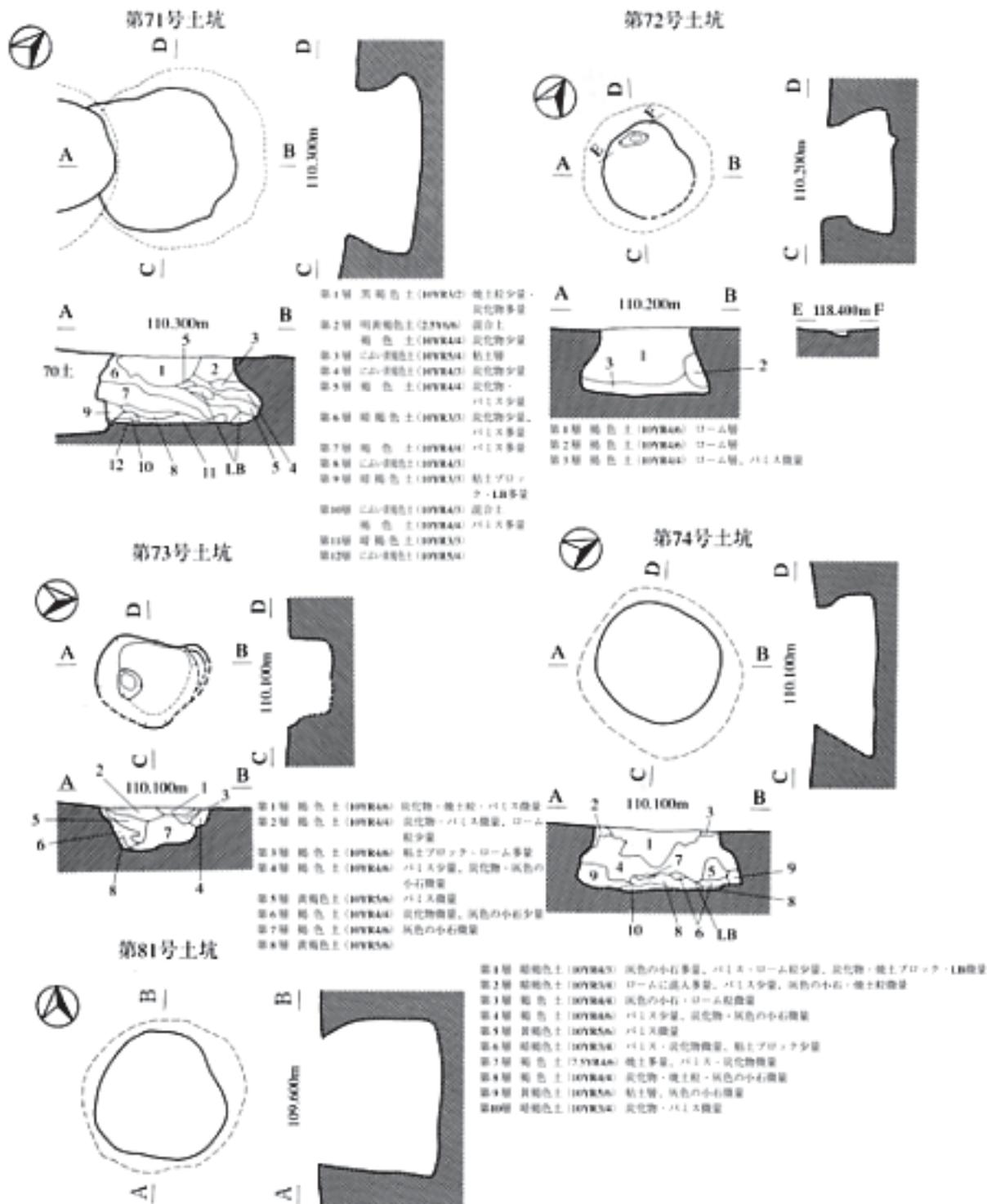




第51图 C区第59~61・65・66号土坑

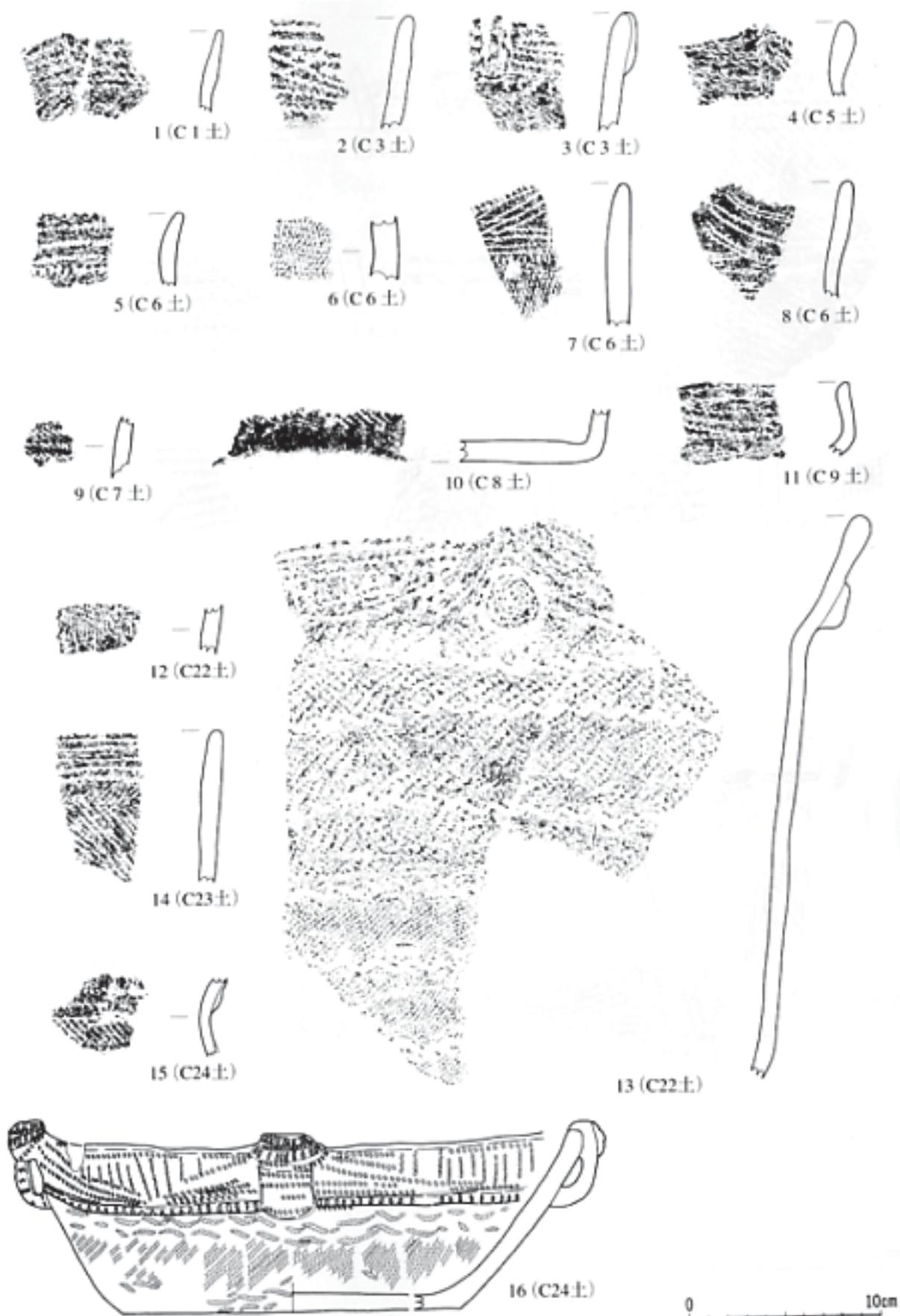


第52図 C区第67～70号土坑

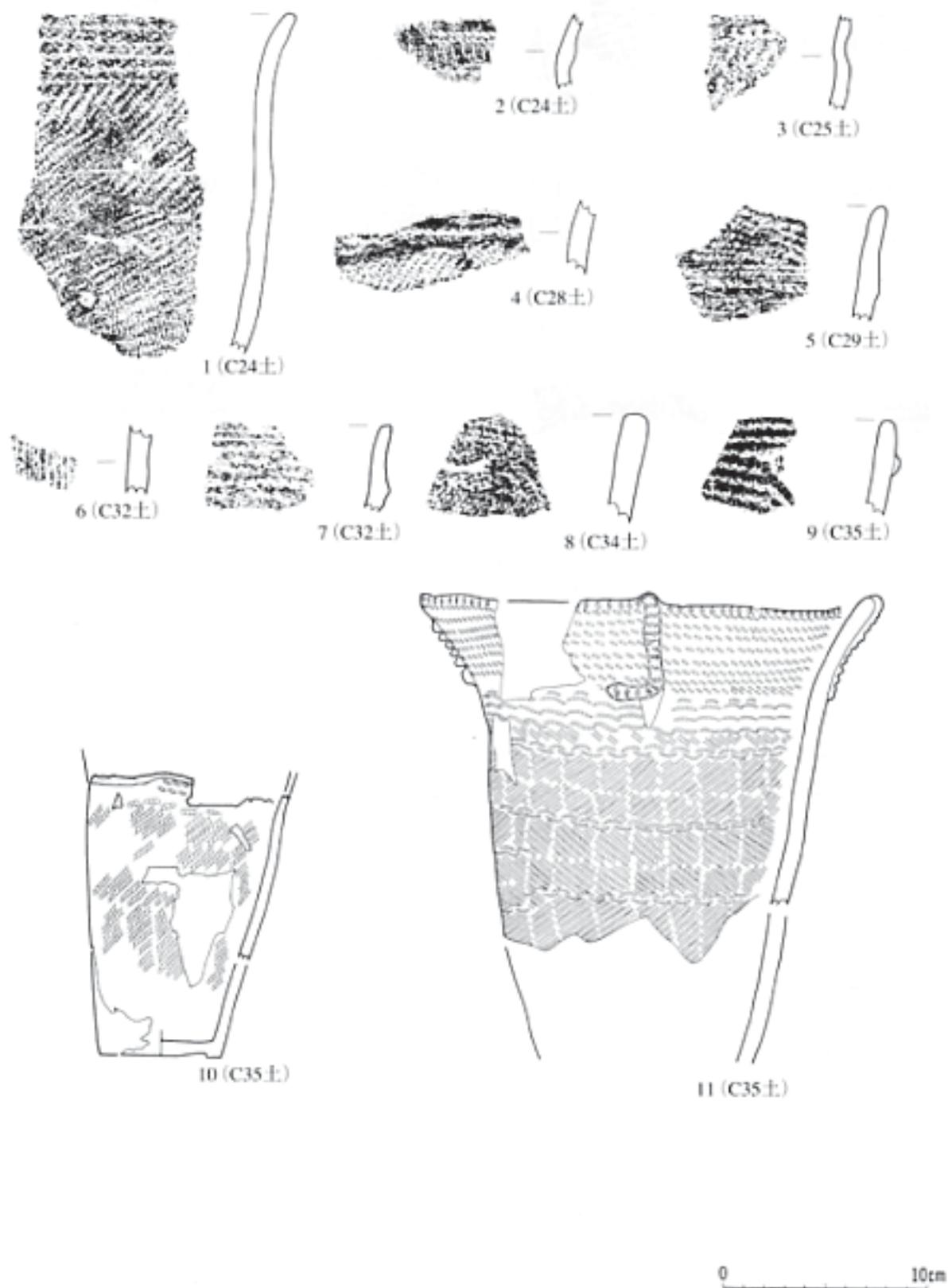


0 2m

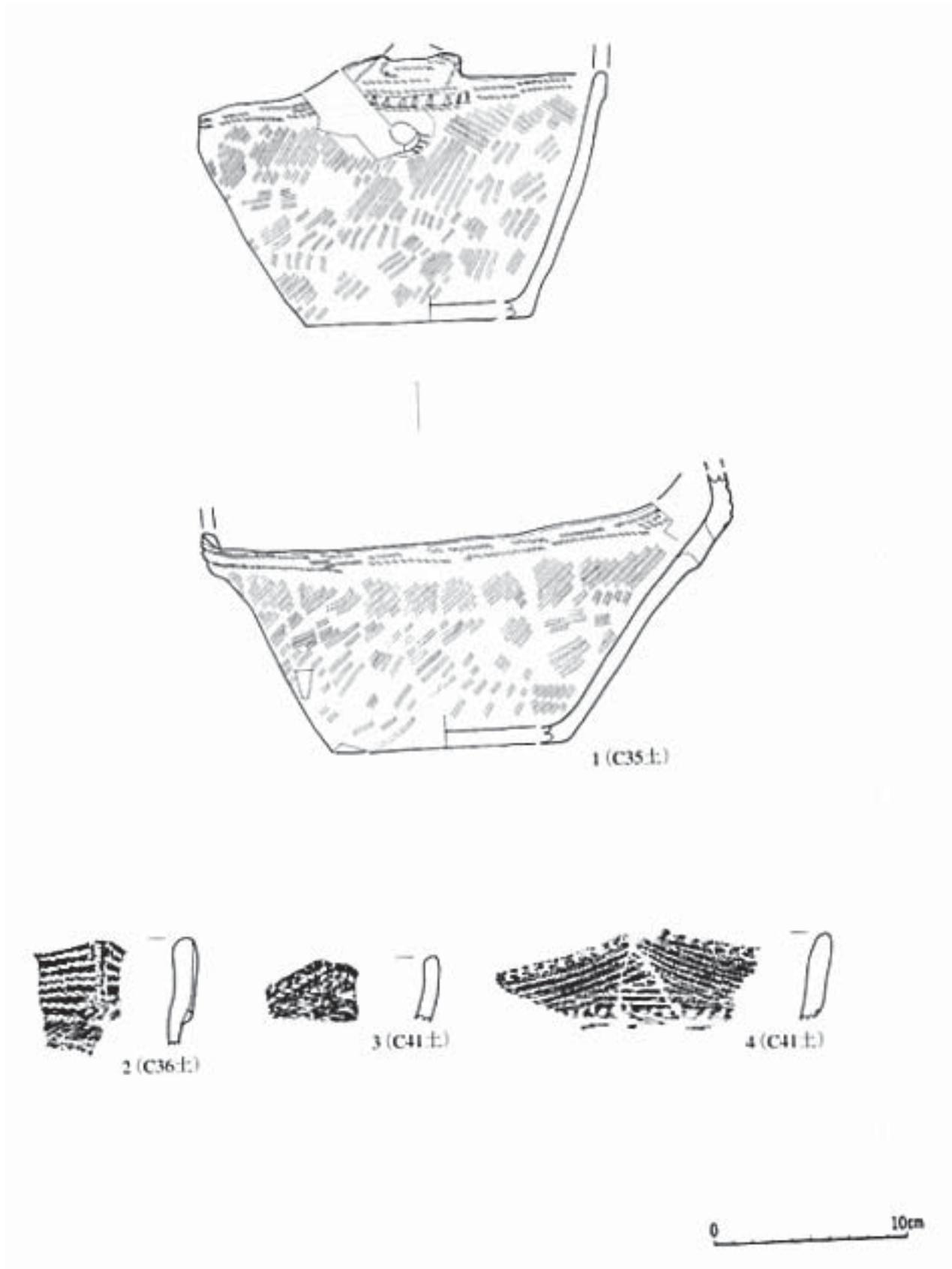
第53図 C区第71～74・81号土坑



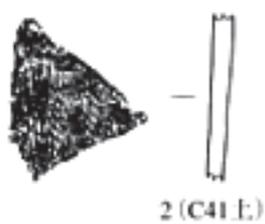
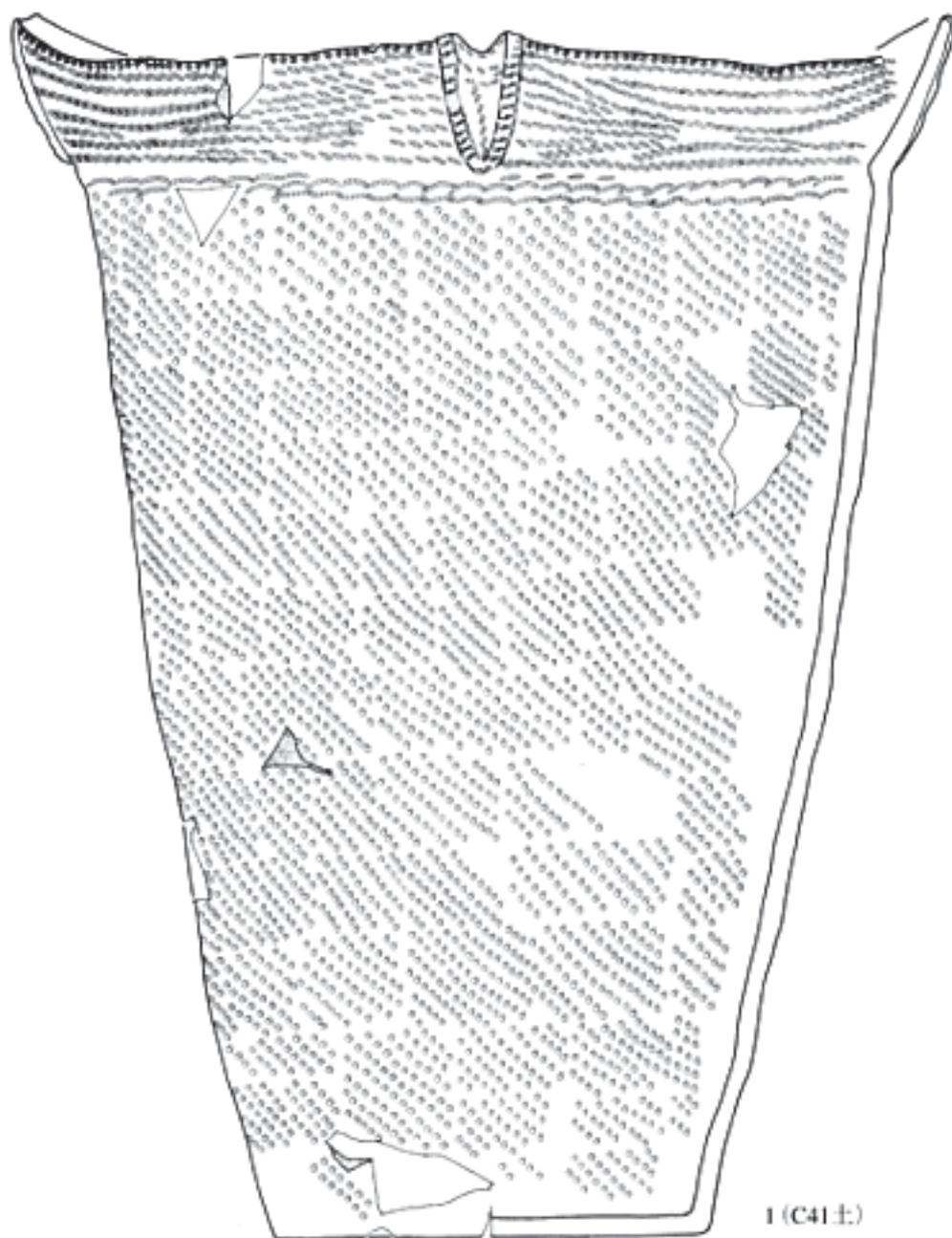
第 54 图 C 区土坑出土土器 1



第 55 图 C 区土坑出土土器 2

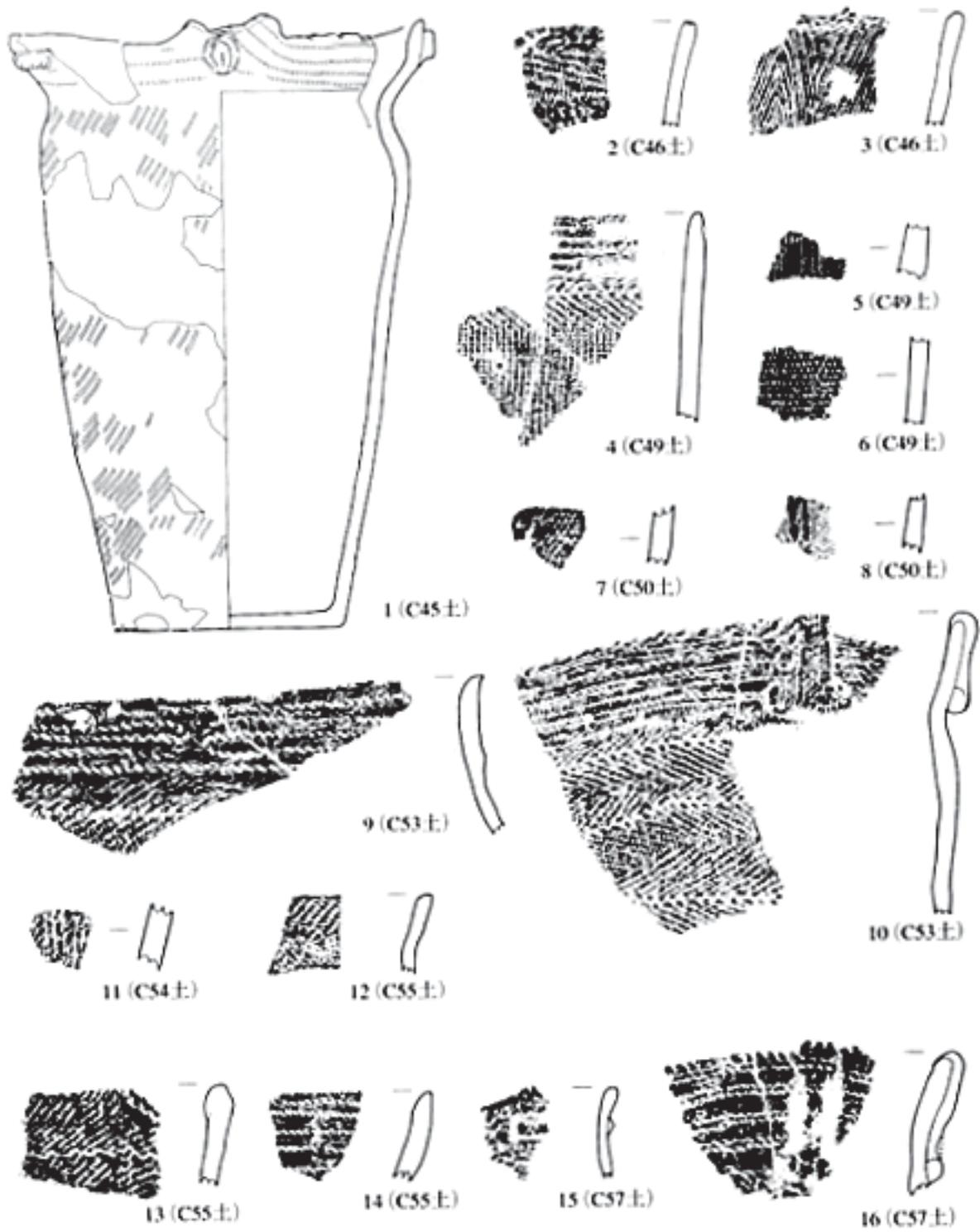


第 56 图 C 区土坑出土土器 3

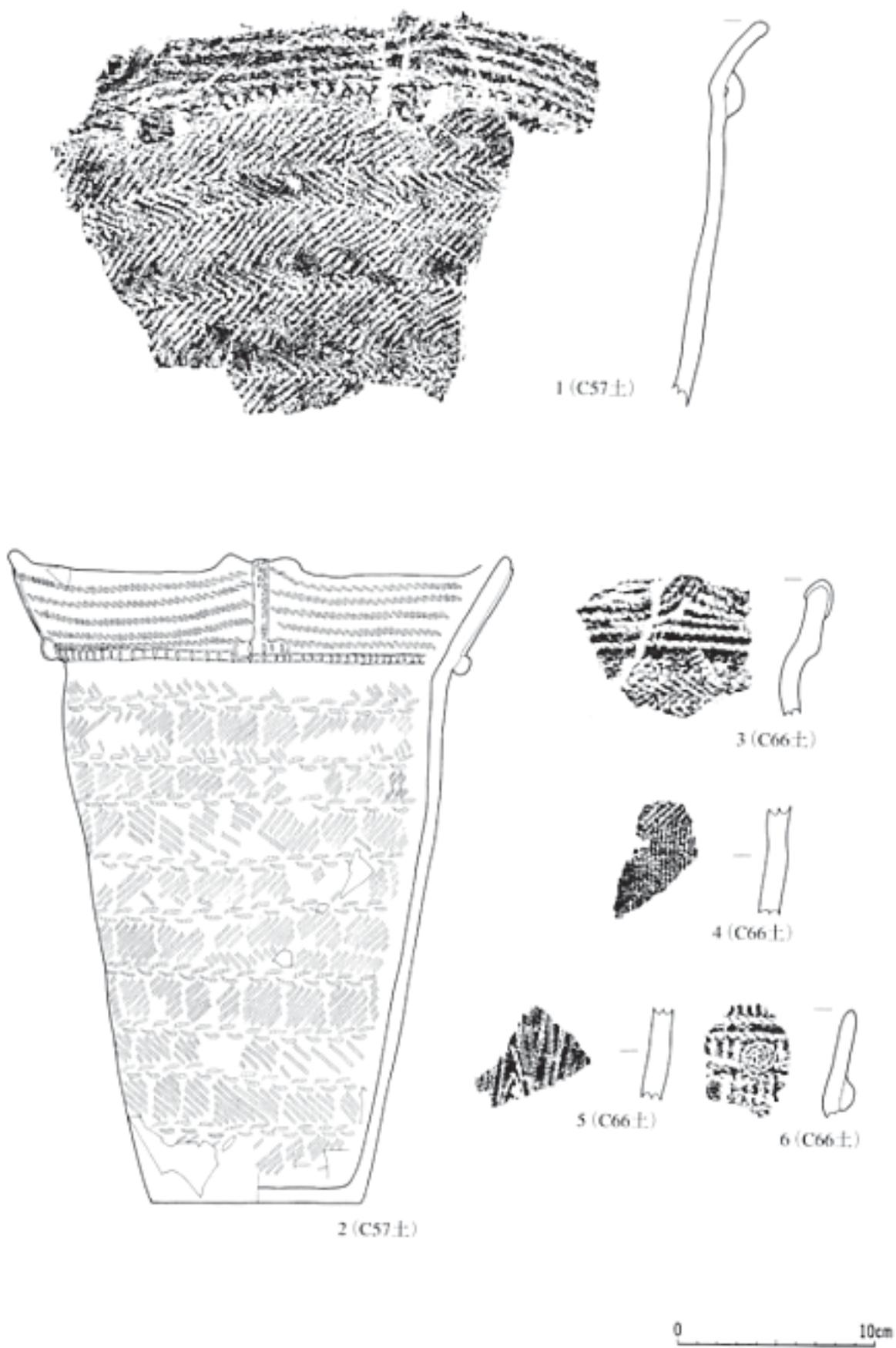


0 10cm

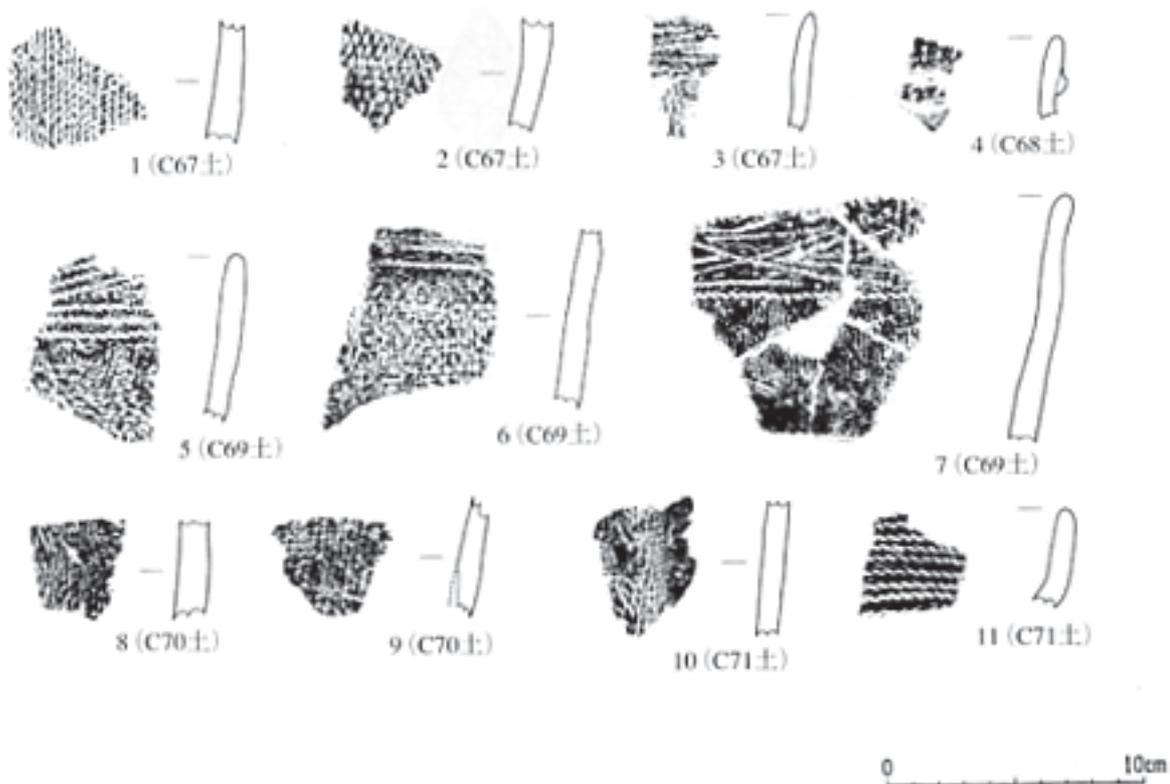
第 57 图 C 区土坑出土土器 4



第58图 C区土坑出土土器5



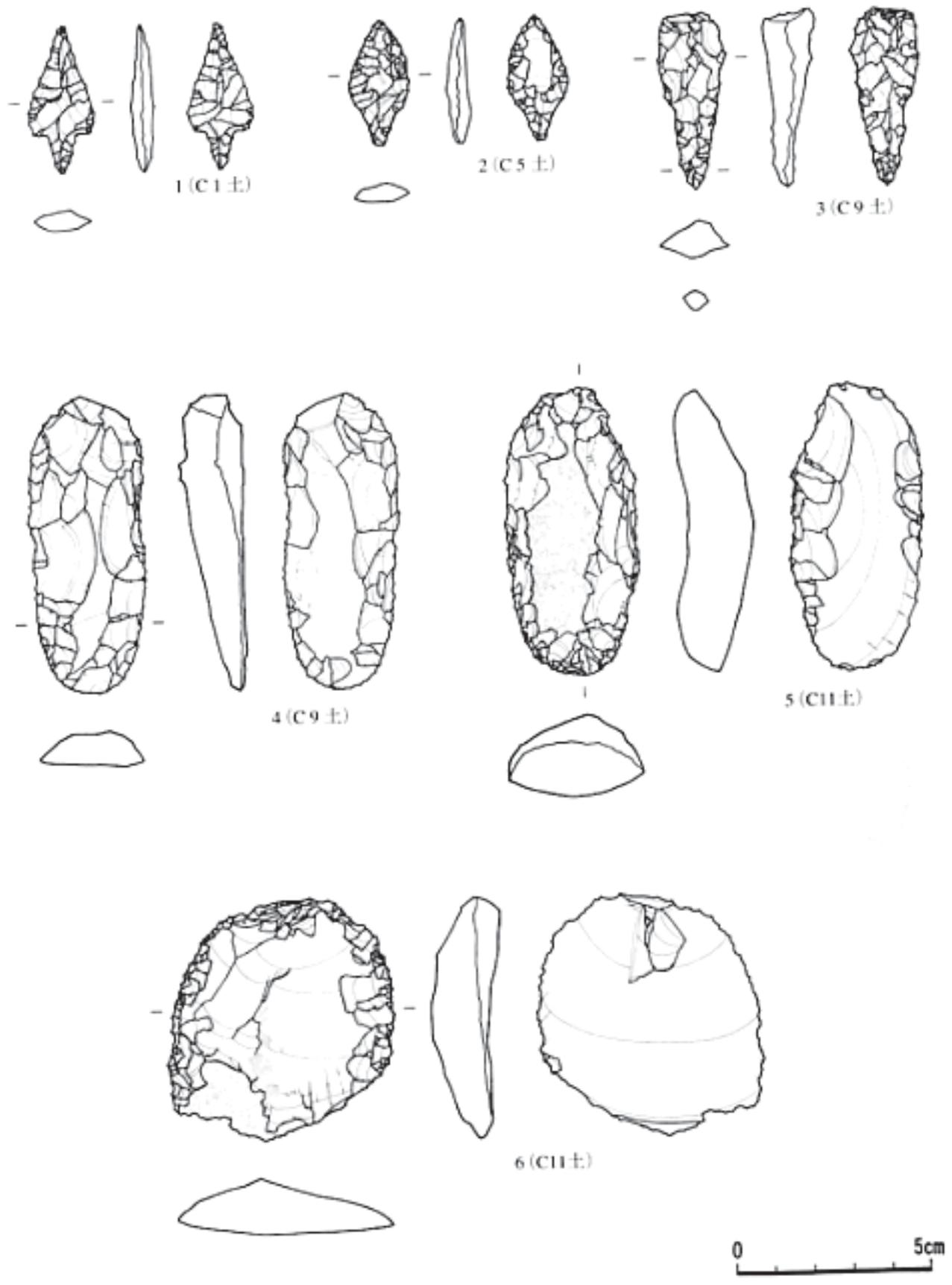
第 59 图 C 区土坑出土土器 6



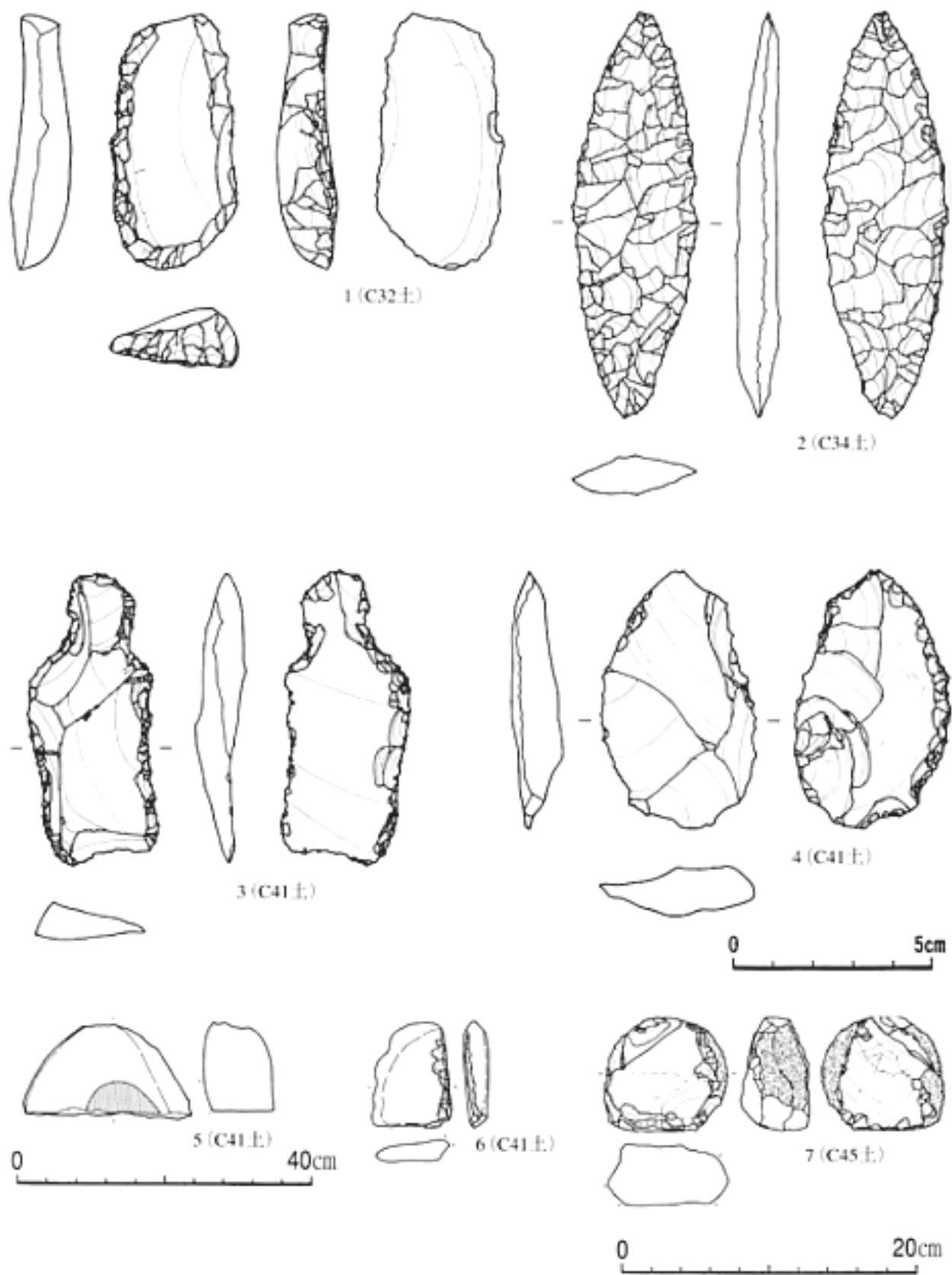
第 60 图 C 区土坑出土土器 7

第31表 C区土坑出土土器観察表

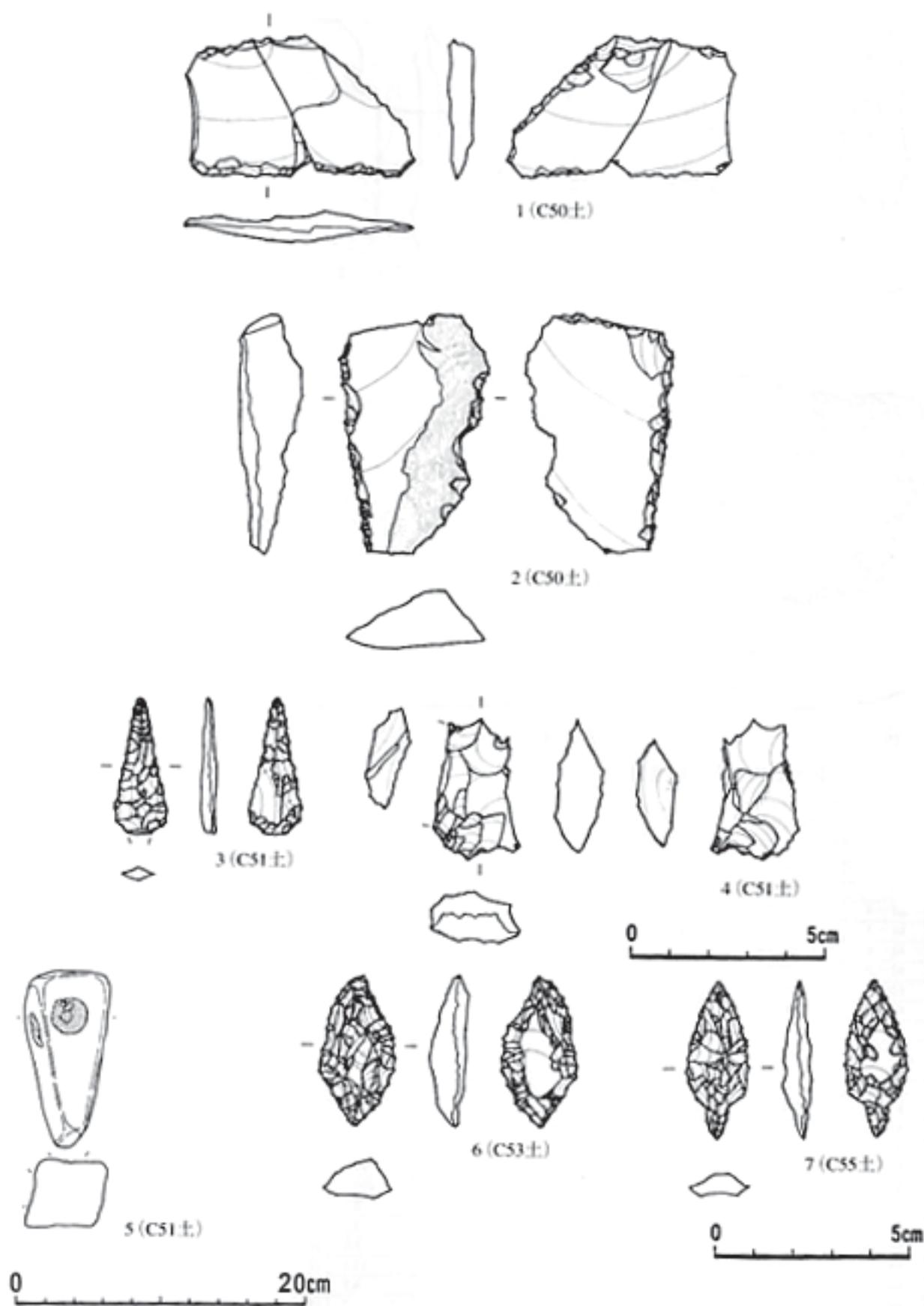
図版番号	出土地点	層位	器種	部位	文様	分類	備考
54-1	C1土	フク2	深鉢	口頸部	LR圧痕 貼付 LR縄文	I群2類b	
54-2	C3土	フク9	深鉢	口頸部	LR圧痕	I群2類a	
54-3	C3土	フク3	深鉢	口頸部	LR圧痕 R圧痕 隆帯 刺突	I群2類c	胴部文様摩滅により不明
54-4	C5土	フク6	深鉢	口頸部	LR圧痕	I群2類b	
54-5	C6土	フク25	深鉢	口頸部	刺突 絡条体圧痕	I群2類b	
54-6	C6土	フク2	深鉢	胴部	多軸絡条体	I群	
54-7	C6土	フク2	深鉢	口頸部	LR圧痕 絡条体圧痕 結束第一種	I群2類a	
54-8	C6土	フク1	深鉢	口頸部	L・R圧痕	I群2類b	
54-9	C7土	フク2	深鉢	口頸部	LR圧痕	I群	
54-10	C8土	フク1	深鉢	底部	RL縄文	I群	
54-11	C9土	フク16	深鉢	口頸部	LR圧痕	I群2類b	
54-12	C22土	フク18	深鉢	胴部	R単軸絡条体1類	I群	
54-13	C22土	フク14	深鉢	胴部	LR圧痕 RL圧痕 ボタン状貼付 LR縄文 結束回転文	I群2類f	
54-14	C23土	フク1	深鉢	口頸部	LR圧痕 RL縄文	I群1類c	
54-15	C24土	フク21	深鉢	口頸部	LR圧痕 隆帯 RL縄文	I群2類c	
54-16	C24土	フク19	浅鉢	完形	橋状把手 隆帯 刺突 LR縄文 LR圧痕 結節回転文	I群2類f	底部欠損
55-1	C24土	フク14	深鉢	口頸部	LR圧痕 LR縄文	I群2類b	
55-2	C24土	フク4	深鉢	口頸部	L圧痕	I群	
55-3	C25土	フク2	深鉢	口頸部	LR圧痕 刺突 LR縄文 R圧痕	I群	
55-4	C28土	フク1	深鉢	口頸部	LR圧痕 LR縄文	I群	
55-5	C29土	フク1	深鉢	口頸部	R圧痕	I群2類b	
55-6	C32土	フク8	深鉢	胴部	LR圧痕 単軸絡条体1類	I群	
55-7	C32土	フク6	深鉢	口頸部	LR圧痕	I群2類b	
55-8	C34土	フク18	深鉢	口頸部	LR圧痕 刺突 LRRL結束第二種	I群	
55-9	C35土	フク25	深鉢	口頸部	LR圧痕 貼付	I群2類c	
55-10	C35土	フク9	深鉢	略完形	LR圧痕 隆帯 結束第一種 結節回転文	I群	
55-11	C35土	フク17	深鉢	略完形	LR圧痕 隆帯 結節回転文 LRRL結束第二種	I群2類c	
56-1	C35土	フク2,3	浅鉢	完形	LR圧痕 隆帯 刺突 LR縄文	I群2類c	注口、底部欠損
56-2	C36土	フク19	深鉢	口頸部	LR圧痕 隆帯 絡条体圧痕 LR縄文 結節回転文	I群2類b	
56-3	C41土	フク16	深鉢	口頸部	L圧痕もしくはLR圧痕	I群	
56-4	C41土	フク13,18	深鉢	口頸部	刺突 L圧痕	I群2類b	
57-1	C41土	フク13	深鉢	完形	LR圧痕 隆帯 結節回転文 RLR縄文	I群2類c	
57-2	C41土	フク9	深鉢	胴部	多軸絡条体1A類	I群	
58-1	C45土	フク2	深鉢	完形	L圧痕 貼付(ボタン状) LR縄文	I群2類c	
58-2	C46土	フク4	深鉢	口頸部	絡条体圧痕 RL縄文	I群2類a	
58-3	C46土	フク土	深鉢	胴部	結節回転文 L・R単軸絡条体1A類	I群	
58-4	C49土	フク7	深鉢	口頸部	RL縄文 LR圧痕 刺突 LRRL結束第一種	I群1類c	
58-5	C49土	フク7	深鉢	胴部	R単軸絡条体1類	I群	
58-6	C49土	フク7	深鉢	胴部	多軸絡条体	I群	
58-7	C50土	フク2	深鉢	胴部	多軸絡条体	I群	
58-8	C50土	フク2	深鉢	胴部	L・R単軸絡条体1A類	I群	
58-9	C53土	フク13	深鉢	口頸部	RL縄文 LR圧痕 LR結束第一種	I群2類b	
58-10	C53土	フク12	深鉢	口頸部	LR圧痕 隆帯 LRRL結束第一種	I群2類c	
58-11	C54土	フク7	深鉢	胴部	LR単軸絡条体1類	I群	
58-12	C55土	フク26	深鉢	口頸部	LR縄文	I群	
58-13	C55土	フク27	深鉢	口頸部	LR縄文 LR圧痕 結節回転文	I群	
58-14	C55土	フク27	深鉢	口頸部	L圧痕	I群	
58-15	C57土	フク13	深鉢	口頸部	LR縄文 LR圧痕 刺突 貼付 結節回転文	I群2類c	
58-16	C57土	フク4	深鉢	口頸部	隆帯 貼付 RL圧痕 LR圧痕	I群2類c	
59-1	C57土	フク土	深鉢	口頸部	LR縄文 LR圧痕 橋状把手 LRRL結束第一種	I群2類c	
59-2	C57土	フク1	深鉢	完形	LR圧痕 隆帯 刺突 LRRL結束第二種	I群2類c	
59-3	C66土	フク14	深鉢	口頸部	LR縄文 隆帯 LR圧痕 LRRL結束第一種	I群2類c	
59-4	C66土	フク14	深鉢	胴部	RL縄文 R単軸絡条体1類	I群	
59-5	C66土	フク14	深鉢	胴部	L・R単軸絡条体1A類	I群	
59-6	C66土	フク1	深鉢	口頸部	LR圧痕 貼付	I群2類f	
60-1	C67土	フク1	深鉢	胴部	L単軸絡条体1類	I群	
60-2	C67土	フク1	深鉢	胴部	多軸絡条体	I群	
60-3	C67土	フク1	深鉢	口頸部	L圧痕 結節回転文	I群2類b	
60-4	C68土	フク1	深鉢	口頸部	LR圧痕 隆帯	I群2類c	
60-5	C69土	フク8	深鉢	口頸部	LR圧痕 刺突 LRRL結束第一種	I群2類a	
60-6	C69土	フク8	深鉢	口頸部	L圧痕 R圧痕 多軸絡条体	I群2類e	
60-7	C69土	フク8	深鉢	口頸部	LR圧痕 R単軸絡条体1類	I群2類a	
60-8	C70土	フク3	深鉢	胴部	LR単軸絡条体1類	I群	
60-9	C70土	フク4	深鉢	胴部	LR単軸絡条体1類	I群	
60-10	C71土	フク3	深鉢	胴部	L単軸絡条体1A類	I群	
60-11	C71土	フク6	深鉢	口頸部	LR圧痕	I群2類b	



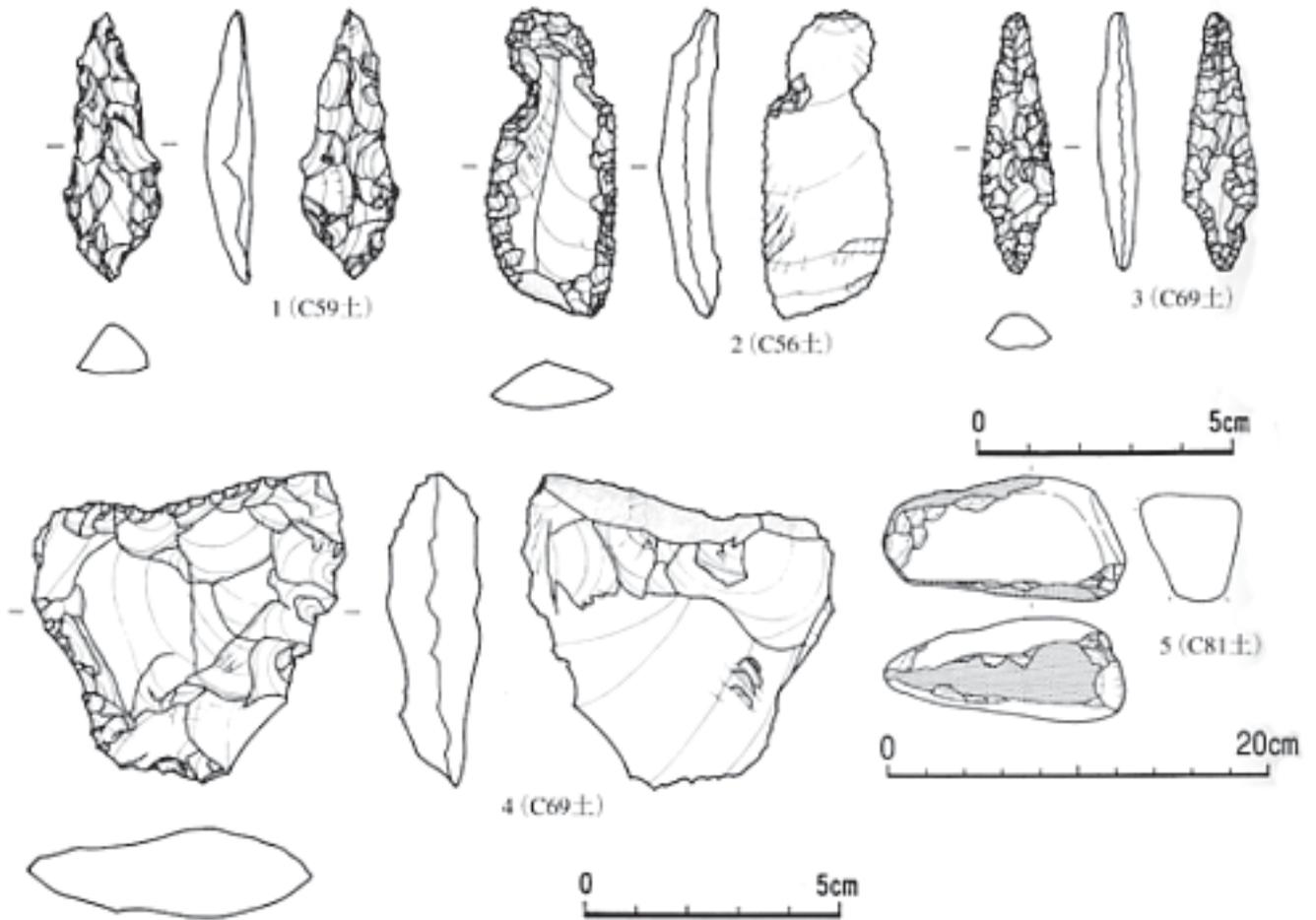
第 61 图 C 区土坑出土石器 1



第 62 图 C 区土坑出土石器 2



第 63 图 C 区土坑出土石器 3



第 64 図 C 区土坑出土石器 4

第 32 表 C 区土坑出土石器観察表

図版番号	出土地点	層位	最大計測値				石質	分類	備考
			長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)			
61- 1	C1土	フク土	39	17	6	2.6	珪・頁	A-3	
61- 2	C5土	フク16	33	15	5	2.4	珪・頁	A-4	
61- 3	C9土	フク 2	47	18	19	8.1	珪・頁	C	
61- 4	C9土	フク 2	77	30	17	40.3	珪・頁	E	
61- 5	C10・11土	フク14	77	36	22	51.4	珪・頁	E	
61- 6	C10・11土	フク9上	64	60	18	46.4	珪・頁	G-3	
62- 1	C32土	フク 1	67	33	15	31.6	珪・頁	G-1	
62- 2	C34土	フク15	105	32	14	33.5	珪・頁	B	
62- 3	C41土	フク13	76	34	14	20.0	珪・頁	D-1	
62- 4	C41土	フク13	67	40	13	24.0	珪・頁	G-2	
62- 5	C41土	フク 9	(230)	122	96	(3535)	安	Q-1	
62- 6	C41土	フク13	73	55	16	92	安	M-3	
62- 7	C45土	フク 2	85	79	48	390	頁	M-4	
63- 1	C50土	フク 2	60	38	8	13.1	珪・頁	G-1	
63- 2	C50土	フク 2	63	39	16		珪・頁	G-1	
63- 3	C51土	フク 5	(36)	14	5	(1.3)	珪・頁	A-4	
63- 4	C51土	フク 2	37	23	13	11.5	珪・頁	G-6	
63- 5	C51土	フク 5	124	60	47	490	安	M-2	
63- 6	C53土	フク 1	40	20	10	6.3	珪・頁	A-4	
63- 7	C55土	フク10	41	16	7	3.2	チャート	A-4	
64- 1	C59土	フク土	55	19	9	8.0	珪・頁	A-4	
64- 2	C56土	フク10	62	25	12	13.1	珪・頁	D-1	
64- 3	C69土	フク 4	52	13	7	4.5	珪・頁	A-4	
64- 4	C69土	フク 8	63	62	19	58.3	珪・頁	G-4	
64- 5	C81土	フク 6	124	56	67	556	安	M-3	



第 65 図 C 区土坑出土土製品

第 33 図 C 区土坑出土土製品観察表

図版番号	出土地点	層位	種類	特徴・計測値 (cm、g) 等
65-1	C1土	フク 2	ミニチュア土器	無文、手捏ね、器高2.9、底径4.2、重さ71.9
65-2	C41土	フク19	ミニチュア土器	台部のみ残存、無文、手捏ね、器高2.0、底径2.5、重さ9.7

3. 埋設土器遺構

第1号埋設土器遺構（第66図）

[位置] AG-92において盛土を除去し、盛土下で現れた第Ⅵ層において確認した。

[重複] なし。

[形状・規模] ほぼ円形の掘り方を有し、掘り方の確認面での径に対して、掘り方の底面径は小さく、すり鉢状を呈する。埋設土器は、正立状態で埋設されている。

[堆積土] 掘り方内は、2層に分層した。埋設土器内は、分層できなかった。

[出土土器] 第Ⅰ群2類e土器（第67図1）が出土した。胴部最下部に径5cmの円形の穴を有する。口縁部の大半を欠いているが、現代の削平によるものと考えられる。また、埋設土器の中からM群5類の石器（第67図2）が1点出土した。

第2号埋設土器遺構（第66図）

[位置] AH-109において、第Ⅲ層精査中に確認した。

[重複] なし。

[形状・規模] 不整楕円形の掘り方を有し、確認面での掘り方の径に対して、掘り方の底面径は小さく、皿状を呈する。埋設土器は掘り方の南側に底部が位置し、全体として北に傾くが、ほぼ正立状態で埋設されている。

[堆積土] 掘り方内は、分層できなかった。埋設土器内は、2層に分層した。

[出土土器] 第Ⅰ群2類c土器（第68図1）が出土した。

第3号埋設土器遺構（第66図）

[位置] AG-108において、第Ⅲ層精査中に確認した。

[重複] 樹木によると思われる攪乱を受けている。

[形状・規模] 不整楕円形の掘り方を有し、掘り方の確認面での径に対して、掘り方の底面径は小さく、すり鉢状を呈する。埋設土器は、正立状態で埋設されている。

[堆積土] 掘り方内、埋設土器内、共に2層に分層した。

[出土土器] 第(特)群2類b土器（第68図2）が出土した。また埋設土器内部から礫が1点出土した。

第4号埋設土器遺構（第66図）

[位置] AF-108において、第Ⅲ層精査中に確認した。

[重複] なし。

[形状・規模] 楕円形の掘り方を有し、掘り方の確認面での径に対して、掘り方の底面径は小さく、すり鉢状を呈する。埋設土器は、掘り方底面から土器底部が若干浮いており、正立状態で埋設されている。

[堆積土] 掘り方内は、分層できなかった。埋設土器内は、3層に分層した。

[出土土器] 第Ⅰ群2類c土器（第69図1）が出土した。

第5号埋設土器遺構（第66図）

[位置] AI－108において、第Ⅲ層精査中に確認した。

[重複] なし。

[形状・規模] 楕円形の掘り方を有し、掘り方の確認面での径に対して、掘り方の底面径は小さく、すり鉢状を呈する。埋設土器は、掘り方底面から土器底部が若干浮いており、ほぼ正立状態で埋設されている。

[堆積土] 掘り方内は、分層できなかつた。埋設土器内は、3層に分層した。

[出土土器] 第Ⅰ群2類b土器（第70図1）が出土した。また埋設土器内部から礫が1点出土した。

第6号埋設土器遺構（第66図）

[位置] AG－108において、第Ⅲ層精査中に確認した。

[重複] なし。

[形状・規模] 円形の掘り方を有し、掘り方の確認面での径に対して、掘り方の底面径は小さく、すり鉢状を呈する。埋設土器は、掘り方底面に土器底部接しており、ほぼ正立状態で埋設されている。

[堆積土] 掘り方内、埋設土器内、共に2層に分層した。

[出土土器] 第Ⅰ群2類e土器（第70図2）が出土した。

第7号埋設土器遺構（第66図）

[位置] AG－109において、第Ⅲ層精査中に確認した。

[重複] なし。

[形状・規模] 不整円形の掘り方を有し、掘り方の確認面での径に対して、掘り方の底面径はやや小さく、鍋状を呈する。埋設土器は、掘り方底面の南側に土器底部が接しており、ほぼ正立状態で埋設されている。

[堆積土] 掘り方内、埋設土器内、共に2層に分層した。

[出土土器] 第Ⅰ群Ⅰ類a土器（第71図1）が出土した。口縁部を欠損しているが、埋設時の状況が同様であるかは判断できなかった。

第8号埋設土器遺構（第66図）

[位置] AE－107において、第Ⅳ層上面で確認した。

[重複] なし。

[形状・規模] 不整円形の掘り方を有し、掘り方の確認面での径に対して、掘り方の底面径はやや小さく、鍋状を呈する。埋設土器は、掘り方底面から土器底部が若干浮いており、ほぼ正立状態で埋設されている。

[堆積土] 掘り方内は、分層できなかつた。埋設土器内は、3層に分層した。

[出土土器] 第Ⅰ群土器（第71図2）が出土した。底部のみの出土である。

第10号埋設土器遺構（第66図）

[位置] AD－106において、第Ⅳ層上面で確認した。

[重 複] なし。

[形状・規模] 楕円形の掘り方を有し、掘り方の確認面での径に対して、掘り方の底面径はやや小さく、鍋状を呈する。埋設土器は、掘り方底面から土器底部が若干浮いており、ほぼ正立状態で埋設されている。

[堆 積 土] 掘り方内、埋設土器内共に分層できなかった。

[出 土 土 器] 第Ⅰ群2類b土器（第72図1）が出土した。

第13号埋設土器遺構（第66図）

[位 置] AG・H－111において、第Ⅲ層精査中に確認した。

[重 複] なし。

[形状・規模] 掘り方の確認面での径に対して、掘り方の底面径はやや小さく、鍋状を呈する。埋設土器は、掘り方底面から土器底部が若干浮いており、斜位状態で埋設されている。

[堆 積 土] 掘り方内は、分層できなかった。埋設土器内は2層に分層した。

[出 土 土 器] 第Ⅰ群土器（第73図1）が出土した。また埋設土器内部から礫が1点出土した。

第16号埋設土器遺構（第66図）

[位 置] AD－113において、第Ⅳ層上面で確認した。

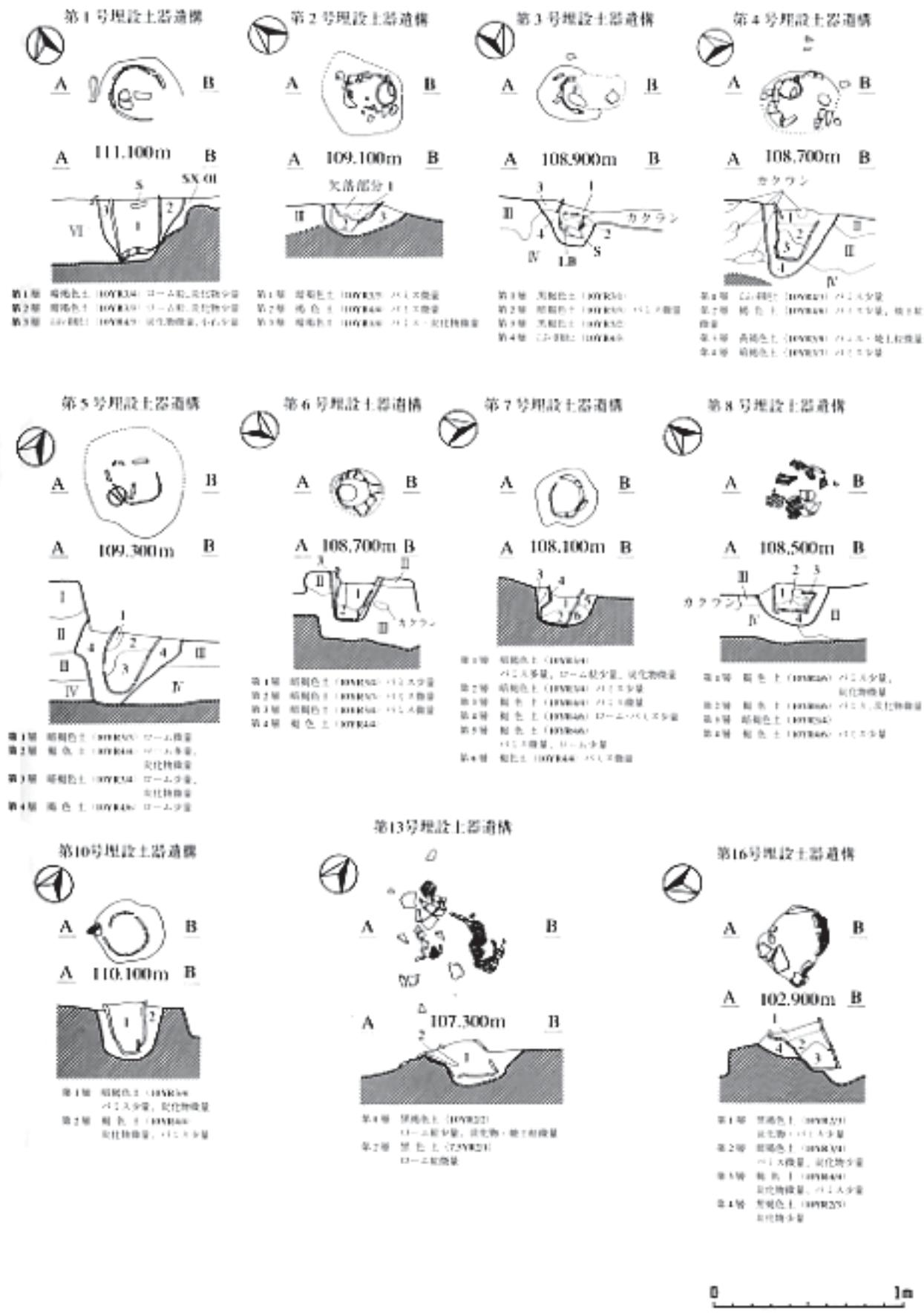
[重 複] なし。

[形状・規模] 掘り方は確認できなかった。ただし、埋設土器の底部は第Ⅴ層に達している。埋設土器は北側に傾いているが正立、斜位、いずれの状態で埋設されていたものかは判断できなかった。

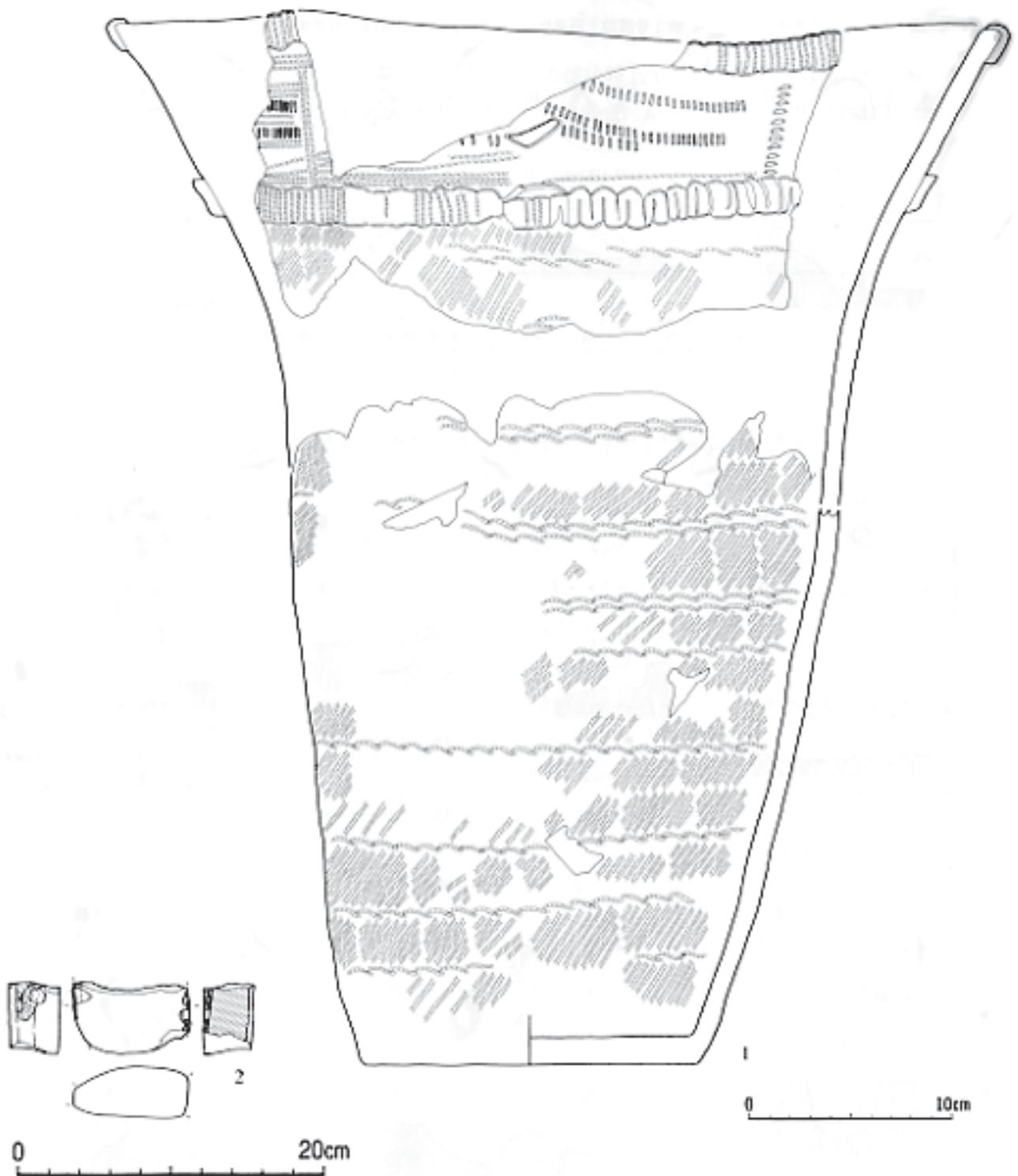
[堆 積 土] 掘り方内は、分層しなかった。埋設土器内は3層に分層した。

[出 土 土 器] 第Ⅰ群2類b土器（第72図2）が出土した。

（小野貴之）



第66図 C区埋設土器遺構



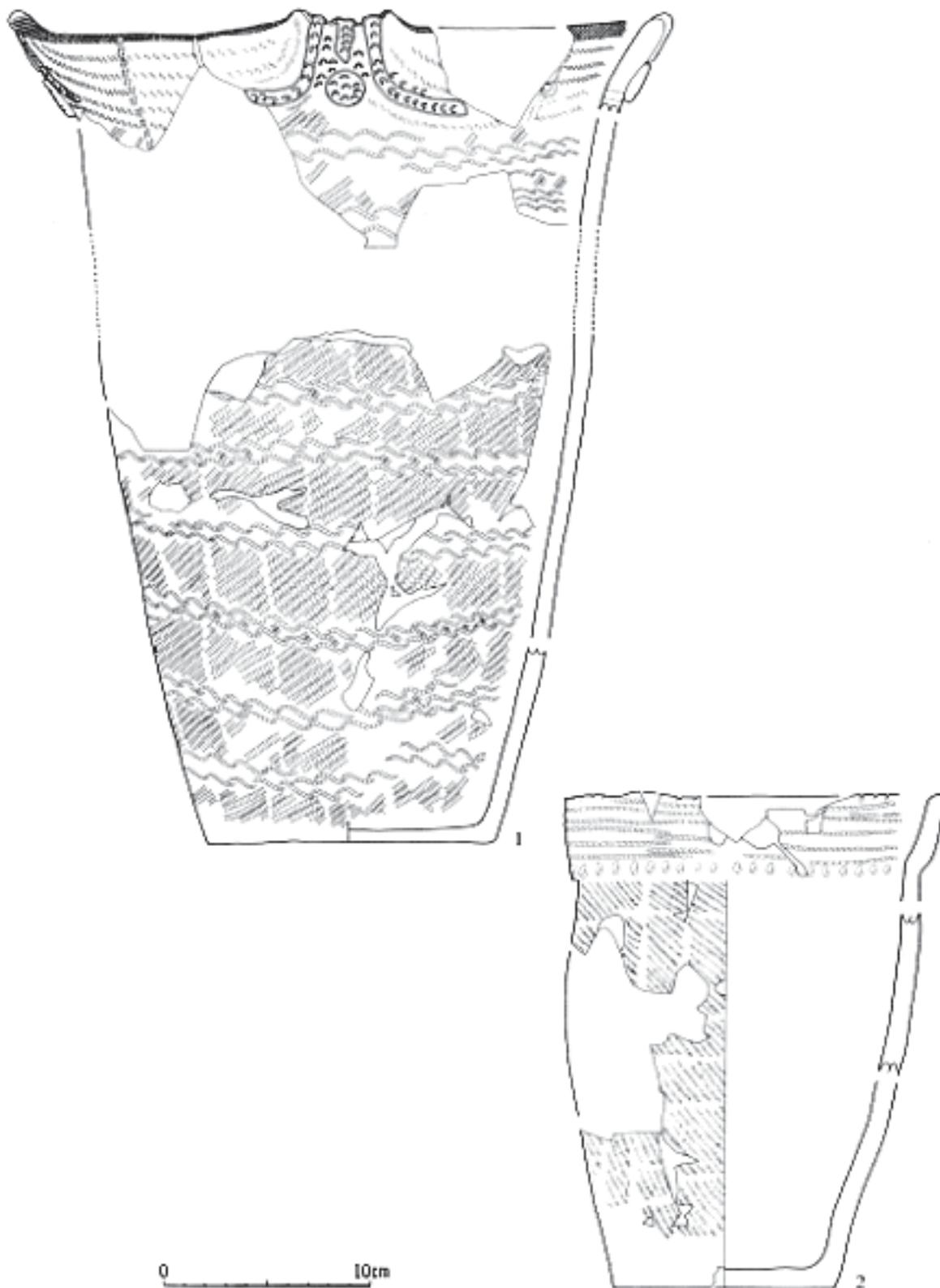
第 67 図 C 区第 1 号埋設土器遺構出土土器・石器

第 34 表 C 区第 1 号埋設土器遺構出土土器観察表

図版番号	出土地点	層位	器種	部位	文 様					分 類	備 考	
67-1	AG-92	C1埋	深鉢	略完形	隆帯	R圧痕	L圧痕	刺突	結節回転文	LR縄文	I 群2類e	橋状把手の圧痕

第 35 表 C 区第 1 号埋設土器遺構出土石器観察表

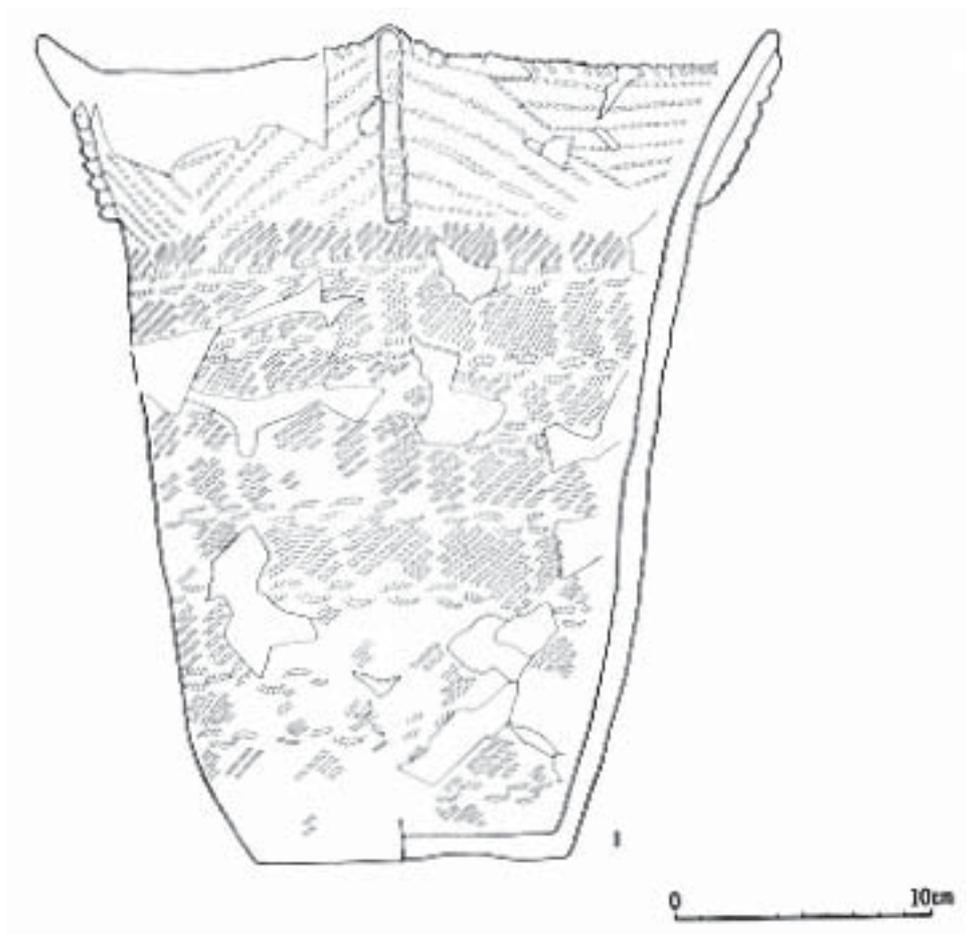
図版番号	出土地点	層位	最大計測値				石質	分類	備 考
			長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)			
67-2	C1埋	フク 1	(38)	47	34	236	石・安	M-5	



第 68 図 C 区第 2・3 号埋設土器遺構出土土器

第 36 表 C 区第 2・3 号埋設土器遺構出土土器観察表

図版番号	出土地点	層位	器種	部位	文様	分類	備考
68-1	AH-109	C2埋	深鉢	略完形	LR縄文 隆帯(八字状、ボタン状) 刺突 LR圧痕 結節回転文	I 群2類e	補修孔
68-2	AG-108	C3埋	深鉢	完形	L圧痕 R圧痕 L回転	I 群2類b	



第 69 図 C 区第 4 号埋設土器遺構出土土器

第 37 表 C 区第 4 号埋設土器遺構出土土器観察表

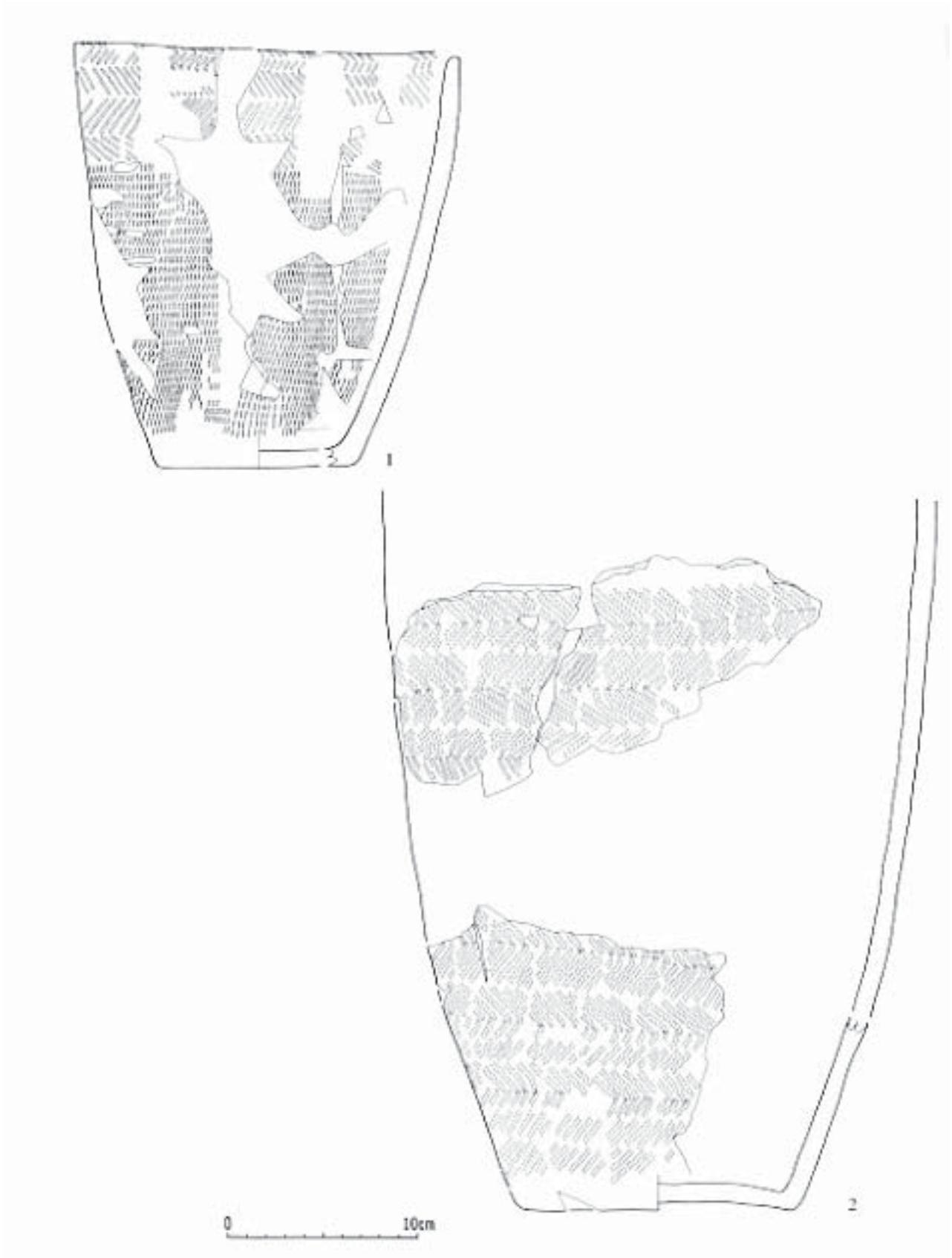
図版番号	出土地点	層位	器種	部位	文様	分類	備考
69-1	AF-108	C4埋	深鉢	完形	隆帯 R圧痕 LR結束第二種	I 群2類c	



第70図 C区第5・6号埋設土器遺構出土土器

第38表 C区第5・6号埋設土器遺構出土土器観察表

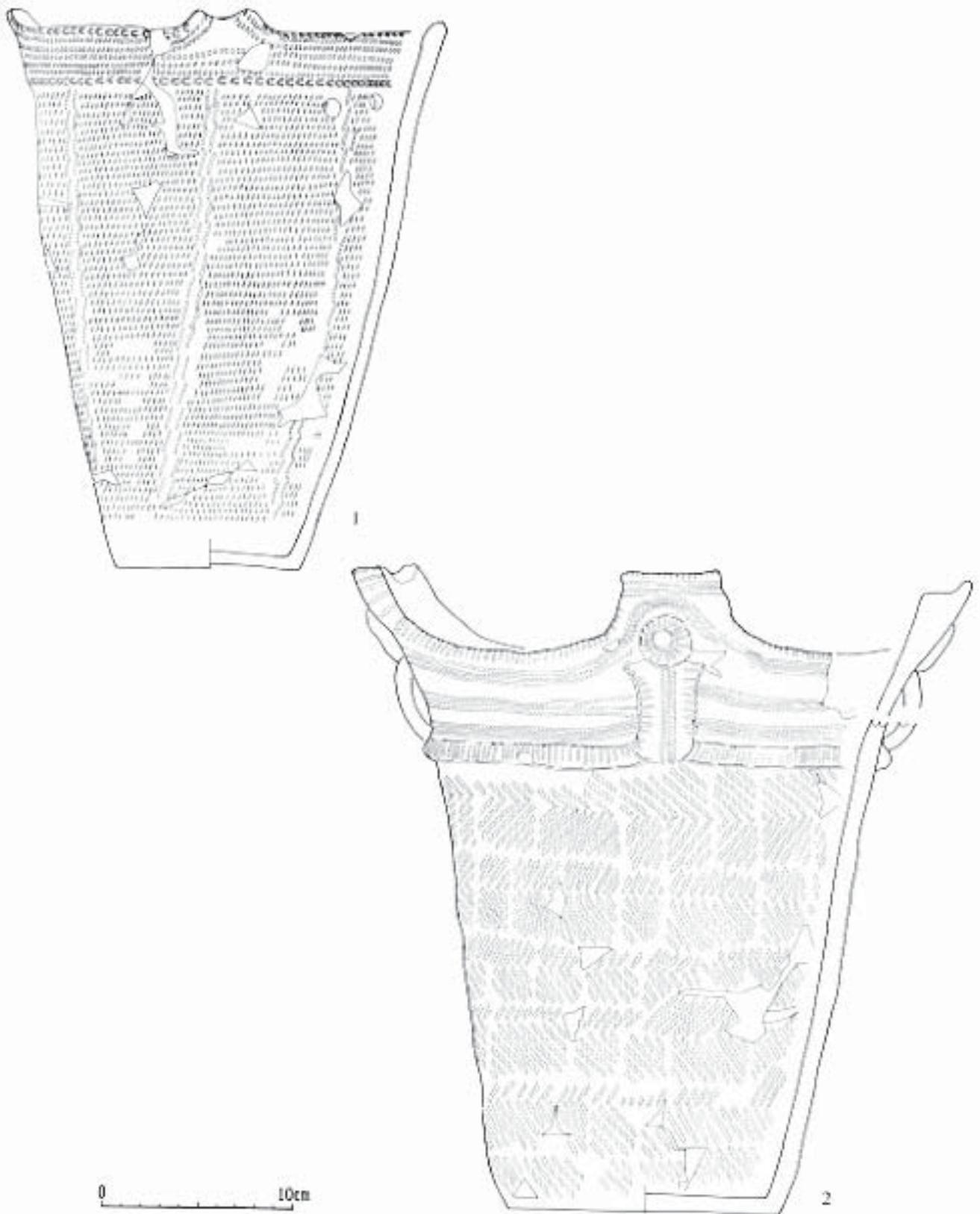
図版番号	出土地点	層位	器種	部位	文様	分類	備考
70-1	AI-108	C5埋	深鉢	完形	R圧痕 刺突 RL縄文	I群2類b	
70-2	AG-108	C6埋	深鉢	完形	隆帯 ボタン状貼付 L圧痕 R圧痕 LRRL結束第一種	I群2類e	



第71図 C区第7・8号埋設土器遺構出土土器

第39表 C区第7・8号埋設土器遺構出土土器観察表

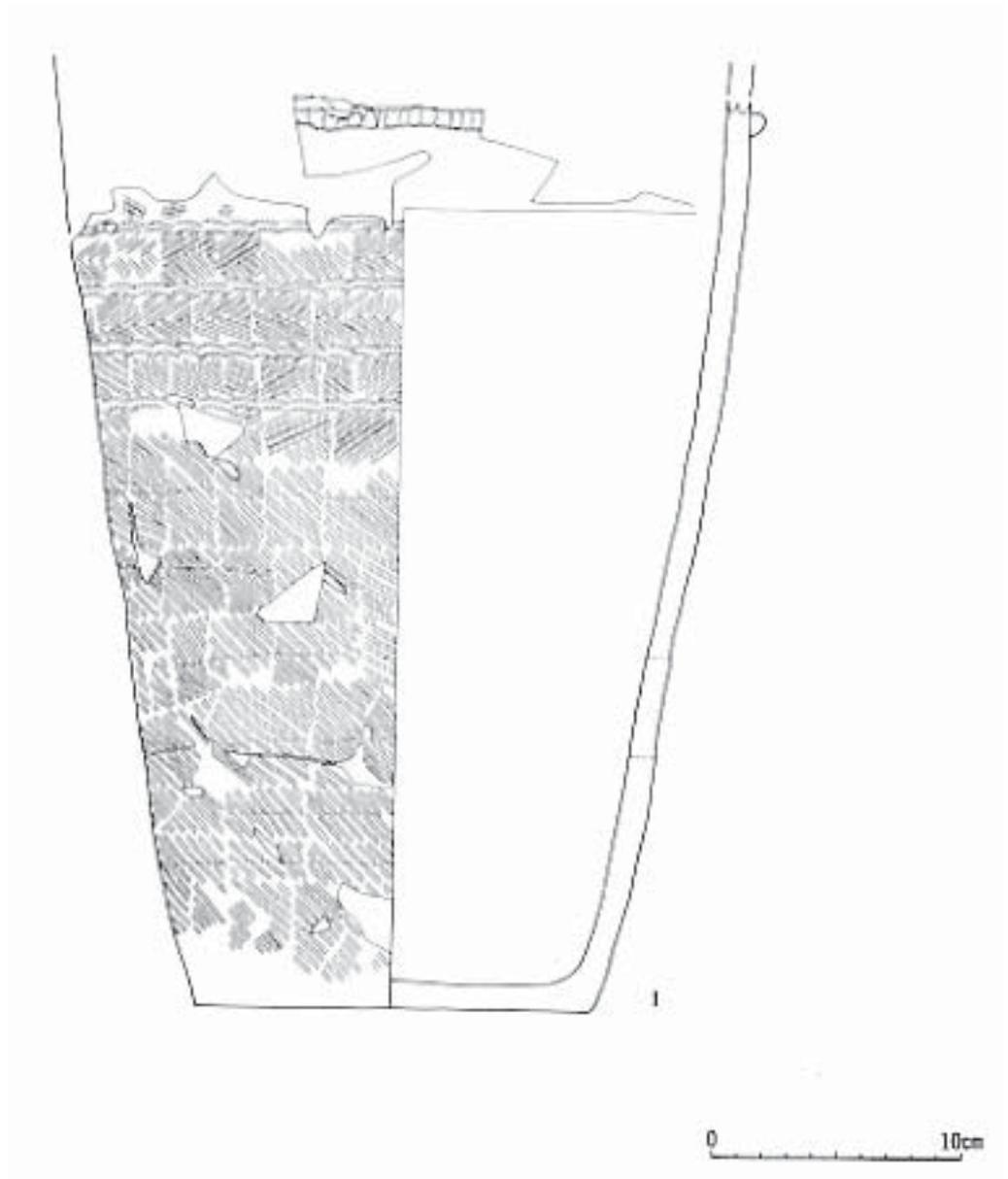
図版番号	出土地点	層位	器種	部位	文様	分類	備考
71-1	AG-109	C7埋	深鉢	完形	RL縄文 結束第一種 結節回転文 多軸絡条体	I群1類a	
71-2	AE-107	C8埋	深鉢	胴部	LRRL結束第一種	I群	



第72図 C区第10・16号埋設土器遺構出土土器

第40表 C区第10・16号埋設土器遺構出土土器観察表

図版番号	出土地点	層位	器種	部位	文様	分類	備考
72-1	AD-113	C10埋	深鉢	完形	刺突 RL圧痕 結節回転文 多軸絡条体	I群2類b	
72-2	AE-105	C16埋	深鉢	完形	突起 L圧痕 R圧痕 隆帯 橋状把手 LRRL結束第一種	I群2類e	



第 73 図 C 区第 13 号埋設土器遺構出土土器

第 39 表 C 区第 13 号埋設土器遺構出土土器観察表

図版番号	出土地点	層位	器種	部位	文様	分類	備考
73-1	AG・H-111	C13埋	深鉢	胴部	隆帯 L圧痕 RL結束第一種 結節回転文	I群	

4. 柱穴状ピット（第74図）

C区からは、20基の柱穴状ピットを検出した。97ラインから105ラインに散発的に分布しており、建物跡等を想定できるものは無かった。盛土下の第V、VI層で確認したものと、上位層から掘り下げた後、第V、VI層で確認したものとがあるが、いずれも本来の掘り込み面は不明である。3基の覆土からは、土器片が出土している。

集落跡内における、柱穴状ピットの検出位置は、土坑が分布する範囲と重複している。

他の集落を構成する土坑等の遺構が、各種類ごとに一定の分布範囲を持つことを考慮した場合、同じく一定の分布範囲を持つ本ピットにおいても、同時期の集落を構成するものであった可能性もあると思われるが、証明することはできなかった。

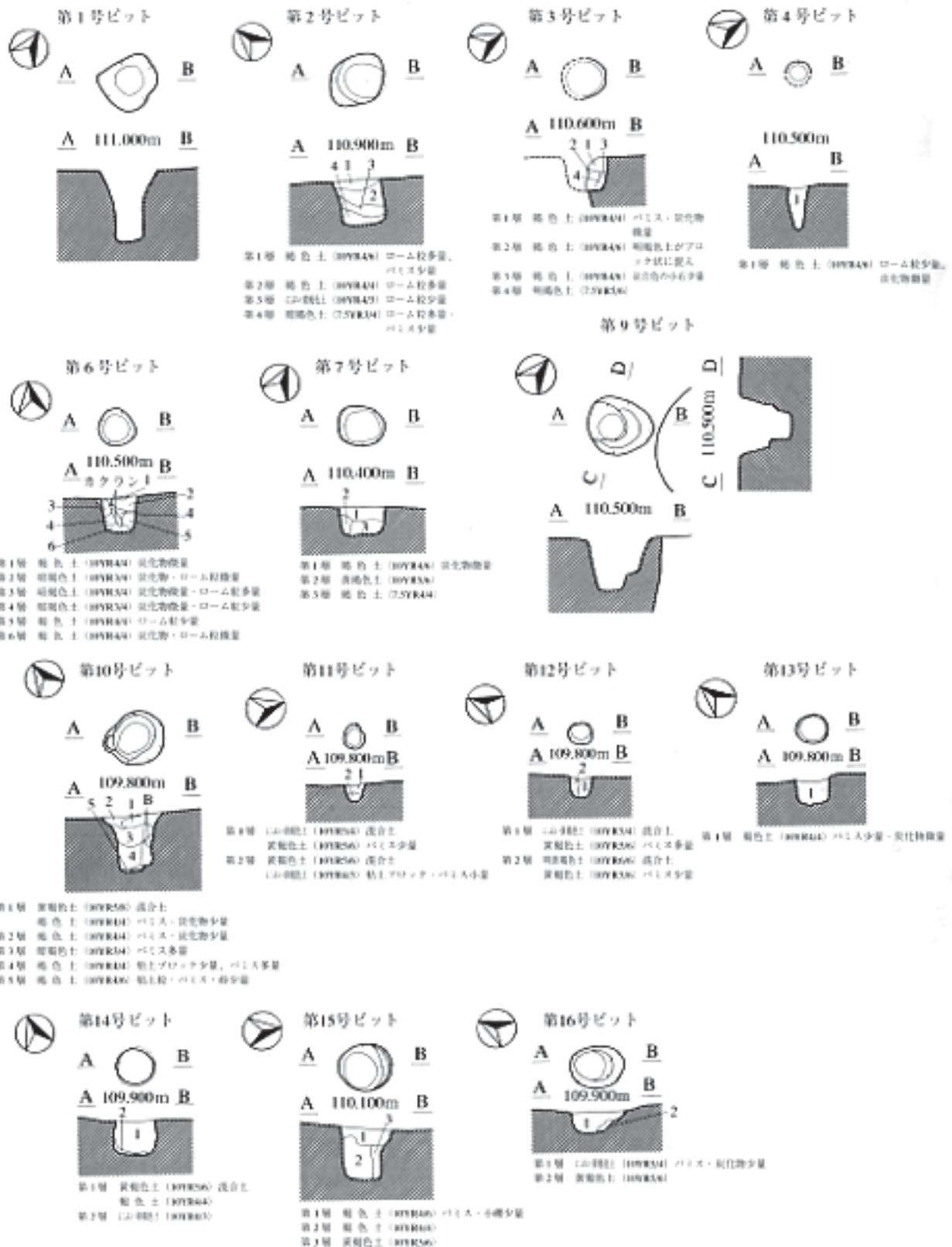
本ピットの性格としては、他の遺構と同時期のものと仮定した場合において、上記のとおり建物を構成したものと考えることからの、分布範囲を同じくする土坑の付属施設等、土坑に関連したものが考えられるが、同時期性は証明できなかった。

以下に、検出したピットの概略について、一括して表に記す。

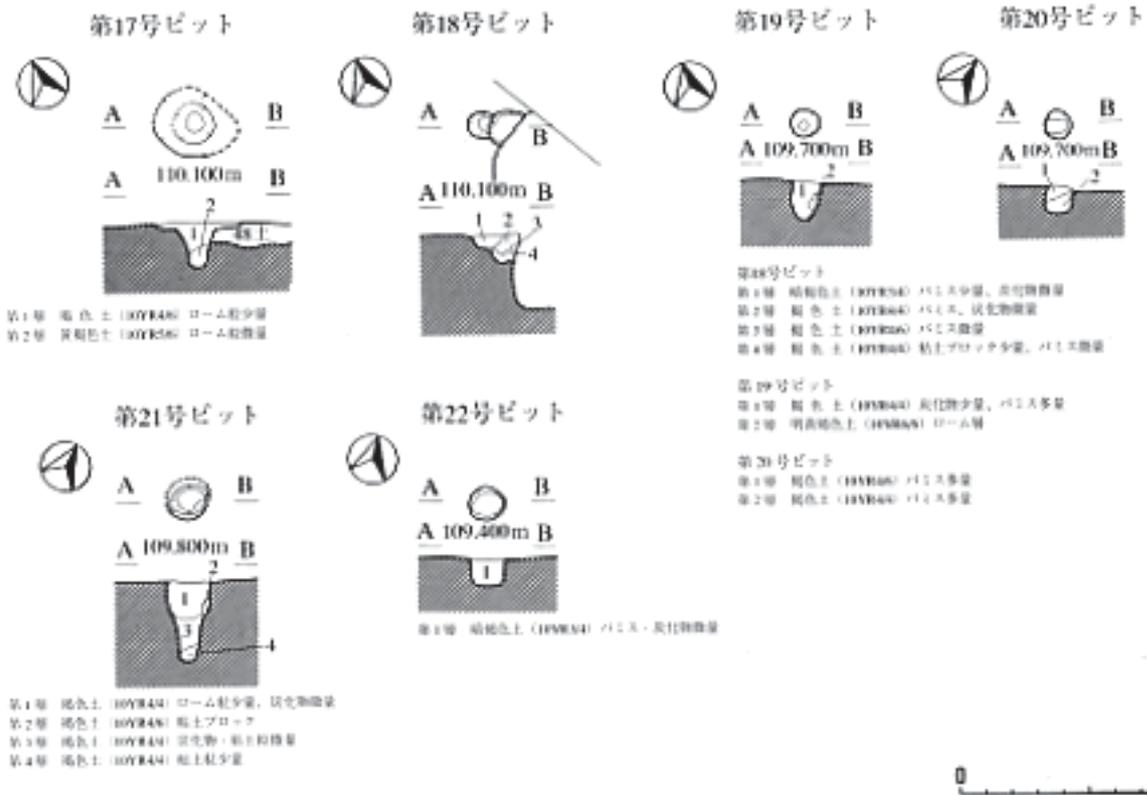
(小野貴之)

第42表 C区柱状ピット観察表

番号	グリッド	重複	平面形	計測値 (cm)			出土 遺物	確認	備 考
				開口部	坑底部	深さ			
1	AH-97	なし	不整形	63×50	29×26	73	土器片	第VI層	I群1類c土器が覆土より出土
2	AH-98	なし	不整形	65×52	44×40	43	なし	第VI層	
3	AH-98	4土	円	44×(46)	50×38	34	なし	第VI層	4土より古い
4	AH-101	なし	円	27×24	18×10	43	なし	第VI層	
6	AH-101	なし	円	40×37	30×28	34	なし	第V層	
7	AH-102	なし	楕円	50×41	37×36	32	なし	第VI層	
9	AI-102	なし	不整形	70×58	24×28	52	なし	第V層	
10	AG-104	なし	楕円	64×52	36×30	61	なし	第V層	
11	AF-104	なし	不整形楕円	26×22	19×16	18	土器片	第V層	胴部破片（結束第一種）が覆土より出土
12	AG-104	なし	不整形円	26×22	20×17	23	なし	第VI層	
13	AG-104	なし	円	34×28	28×26	25	なし	第VI層	
14	AF-104	なし	円	40×37	39×43	39	土器片	第VI層	胴部破片（LR斜縄文）が覆土より出土
15	AG-103	なし	楕円	55×49	36×34	54	なし	第VI層	
16	AG・F-103・4	なし	楕円	56×44	32×30	22	なし	第VI層	
17	AI-104	なし	不整形楕円	70×56	16×16	35	なし	第V層	
18	AI-103	49土	不明	32×不明	14×不明	21	なし	第V層	49土より古い
19	AG-105	なし	不整形円	24×20	16×13	29	なし	第V層	
20	AG-105	なし	円	24×21	20×8	16	なし	第V層	
21	AG-104	なし	楕円	60×48	42×36	54	なし	第V層	
22	AF-102	なし	不整形円	32×24	24×23	35	なし	第V層	



第74表 C区柱穴状ピット



0 10cm

第75図 C区柱穴状ピット及び出土土器

第43表 C区柱穴状ピット出土土器観察表

図版番号	出土地点	層位	器種	部位	文様	分類	備考
75-1	C1号ピット	フク 1	深鉢	口頸部	R/圧痕 LR圧痕 LRRL結束第一種	I群1類c	
75-2	C11号ピット	フク 4	深鉢	胴部	LRRL結束第一種	I群	
75-3	C14号ピット	フク 1	深鉢	胴部	LR縄文	I群	

5. 遺物集中ブロック

調査区C区において、遺構が集中する平坦部の北側は緩やかに下る斜面となっており、斜面上方の平坦面から斜面上にかけて、集中して土器（第76～82図）、石器（第83～86図）、土製品（第87図）の各遺物が出土した。

遺物が出土する範囲はおおよそAC～AI－103～115である。遺物の分布は、調査区内では、東に向かうに従い少なくなり、調査区東端においては、廃材等が捨てられており、様子が見えかねるが、さほど調査区外には、広がらないと思われる。調査区西側においては、調査区外である小舌状台地の突端部に向かい広がっていると思われ、調査区外の畑では、土器片等が多量に採取される。

出土遺物の主要包含層は第Ⅲ層であり、その層厚は20～30cmである。第Ⅰ層、第Ⅱ層、第Ⅳ層においても遺物は出土しており、第Ⅲ層出土土器と接合する破片も多数存在する。基本層序の項に前述したとおり、植林の影響を受け、木根等により入り込んだもの、降雨等で流され浮き上がった等推測される。

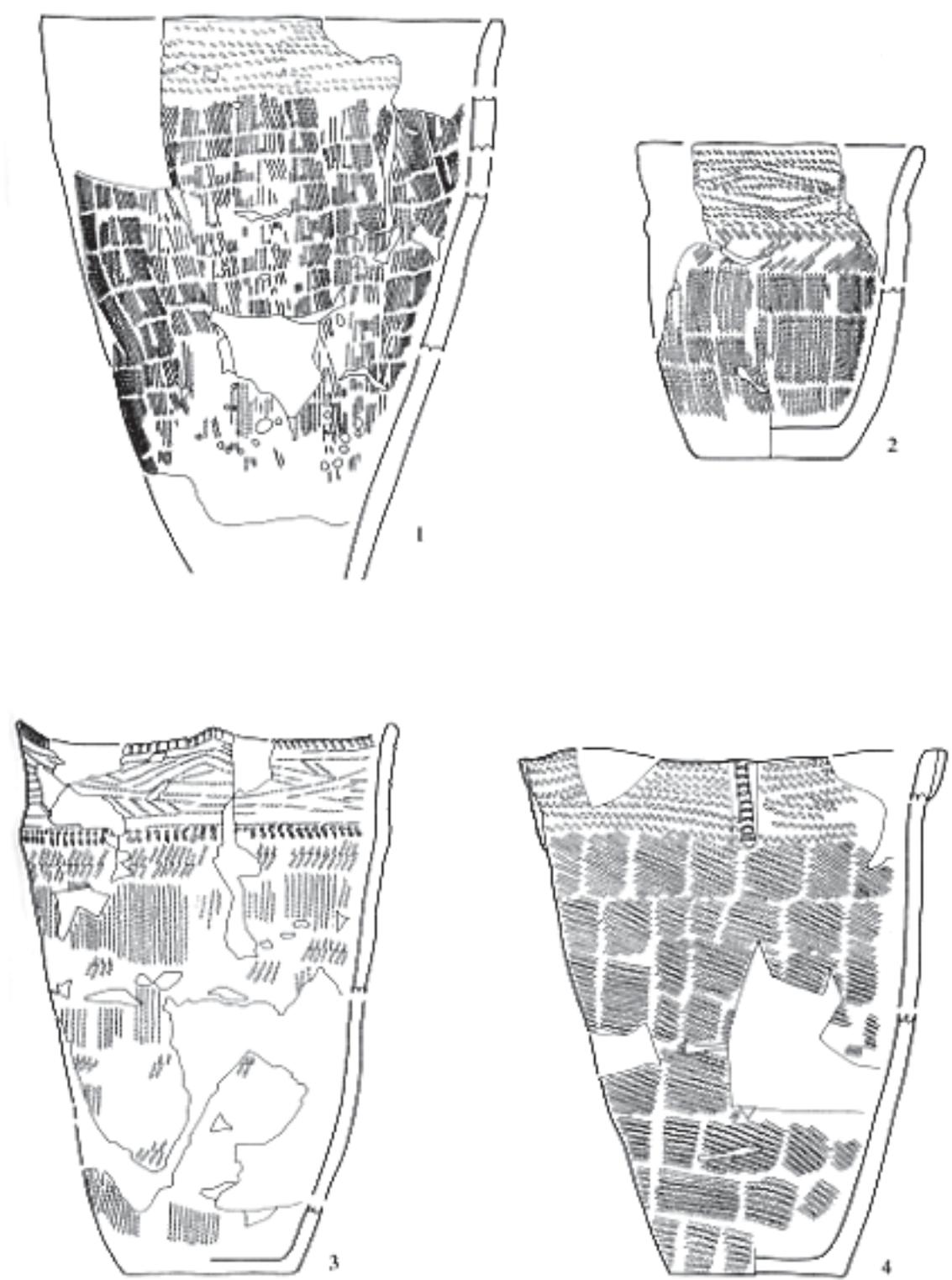
以上の状況を見た場合、第Ⅲ層以外の層からの出土遺物についても、本来は第Ⅲ層中に大半が存在したものとと思われるが、第Ⅲ群土器が第Ⅳ層から出土するなど、出自は明確なものではないため、本項では遺物の濃密に分布する範囲中の第Ⅲ層出土遺物についてのみ、遺物集中ブロックとして取り上げることとし、他層出土の遺物については、遺構外出土遺物として別項に後述することとする。

各遺物の出土状況は、土器については、AD～AH－109～112に濃密に分布し、個体が横転して潰れた状況のもの、原形をとどめない同一個体の破片が一定の範囲にまとまっているものが多数である。明確に直立、倒立等の状況で出土したものは、見られなかった。石器については、個々が散発的に出土している。AE～AH－109～113に集中し、上記の土器とほぼ同じ範囲に集中する。これは土器を含め本ブロック内でも遺物の分布が濃密な箇所である。調査区中央から西側にかけて主に集中していることが分る。

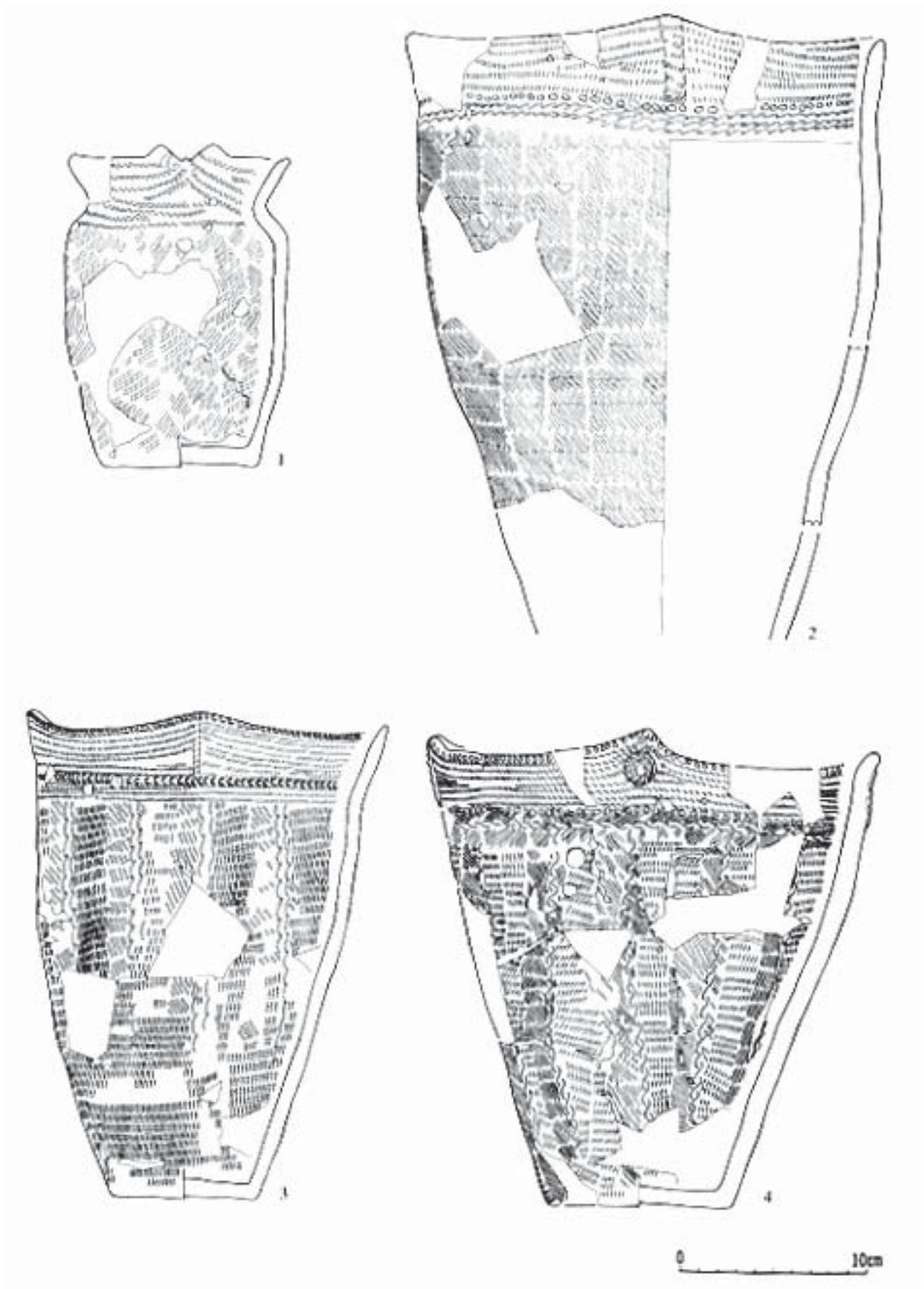
土製品については、5点が出土しているが、個数が少なく散発的な出土であるため、特に分布の特徴については言及できない。

出土土器は縄文時代前期末葉から中期初頭の時期のものが主体であり、次いでその前後の時期のものがわずかに含まれる。本遺跡出土土器分類では、Ⅰ群1類a～c、Ⅰ群2類a～d、Ⅰ群3類a、b、Ⅱ群1類に相当し、Ⅰ群2類が量的には突出している。出土石器は、遺物集中ブロック内においては、礫石器の割合が高い傾向を示している。調査区全体からみた場合、石器は、土器と異なり、遺物集中ブロックにおける割合はさほど高くない。土製品は、計5点が出土し、その内訳は、ミニチュア土器（第87図1）1点、円形土版（第87図2）1点、土器片利用土製品（第87図3、4）2点、焼成粘土塊（第87図5）1点である。本ブロックにおける出土土器と同様に、おおむね縄文時代前期末葉から中期初頭の時期のものと思われる。

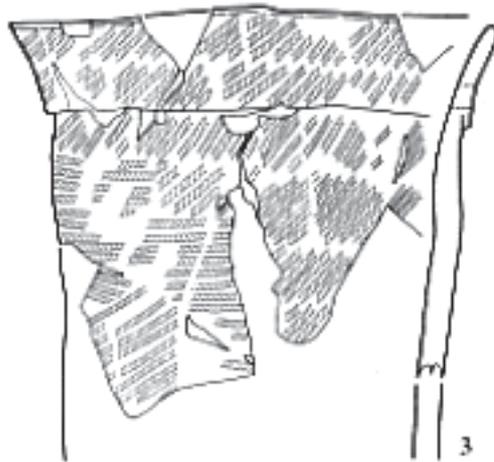
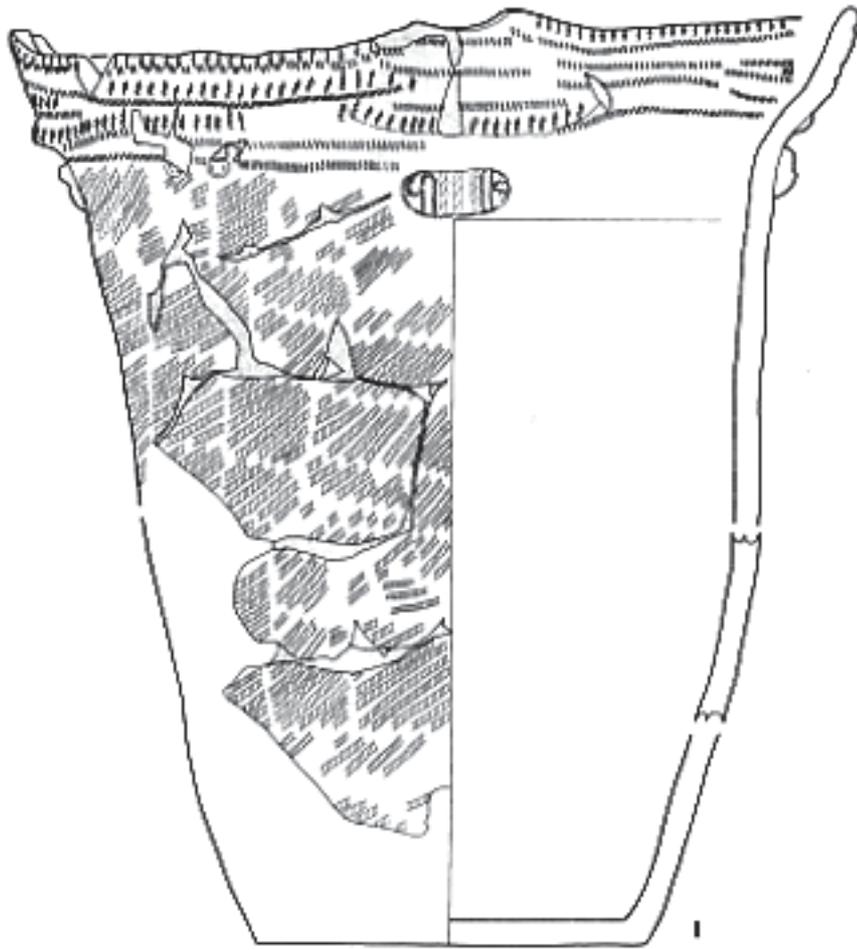
（小野貴之）



第76図 C区遺物集中ブロック出土土器1

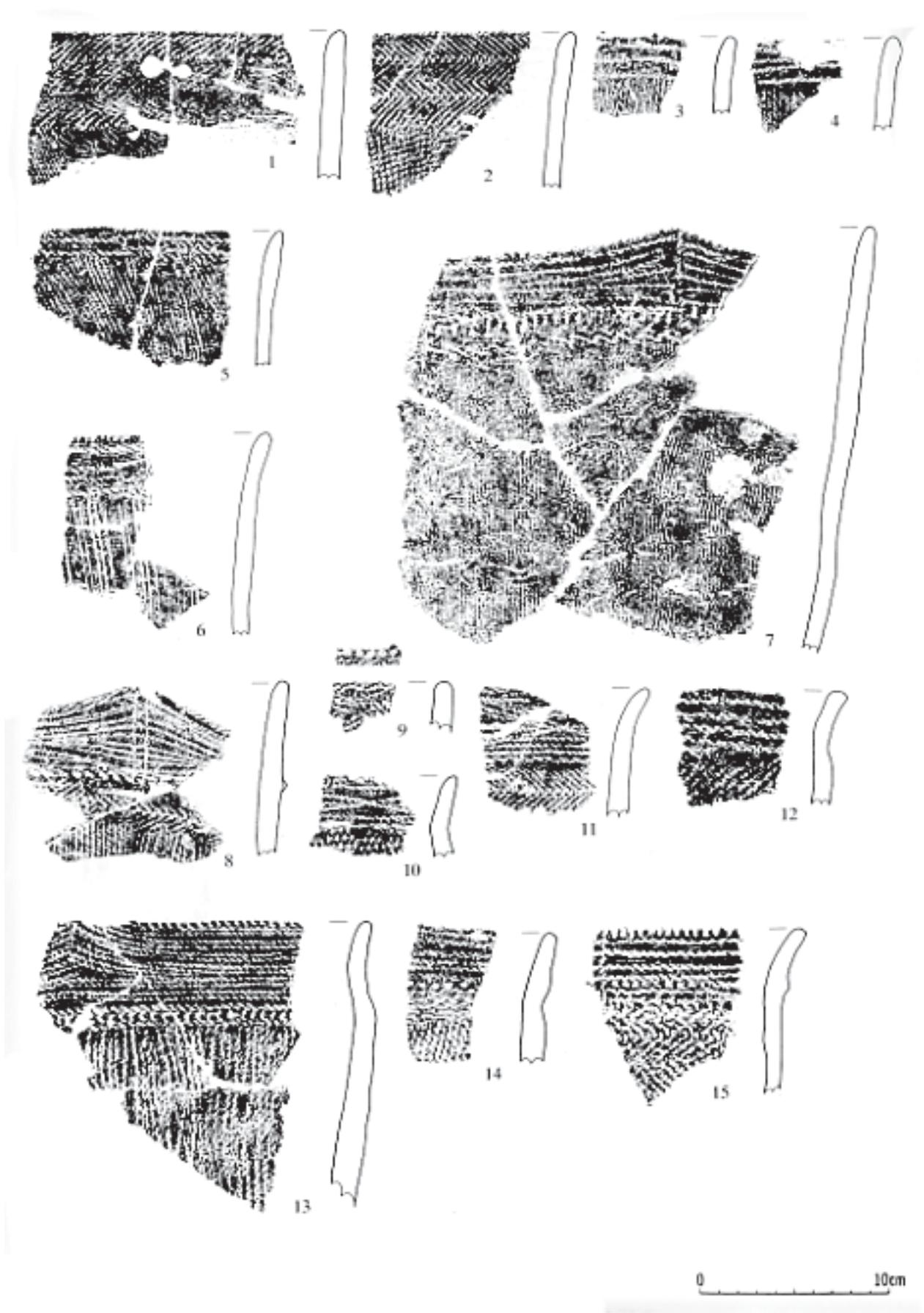


第77図 C区遺物集中ブロック出土土器2

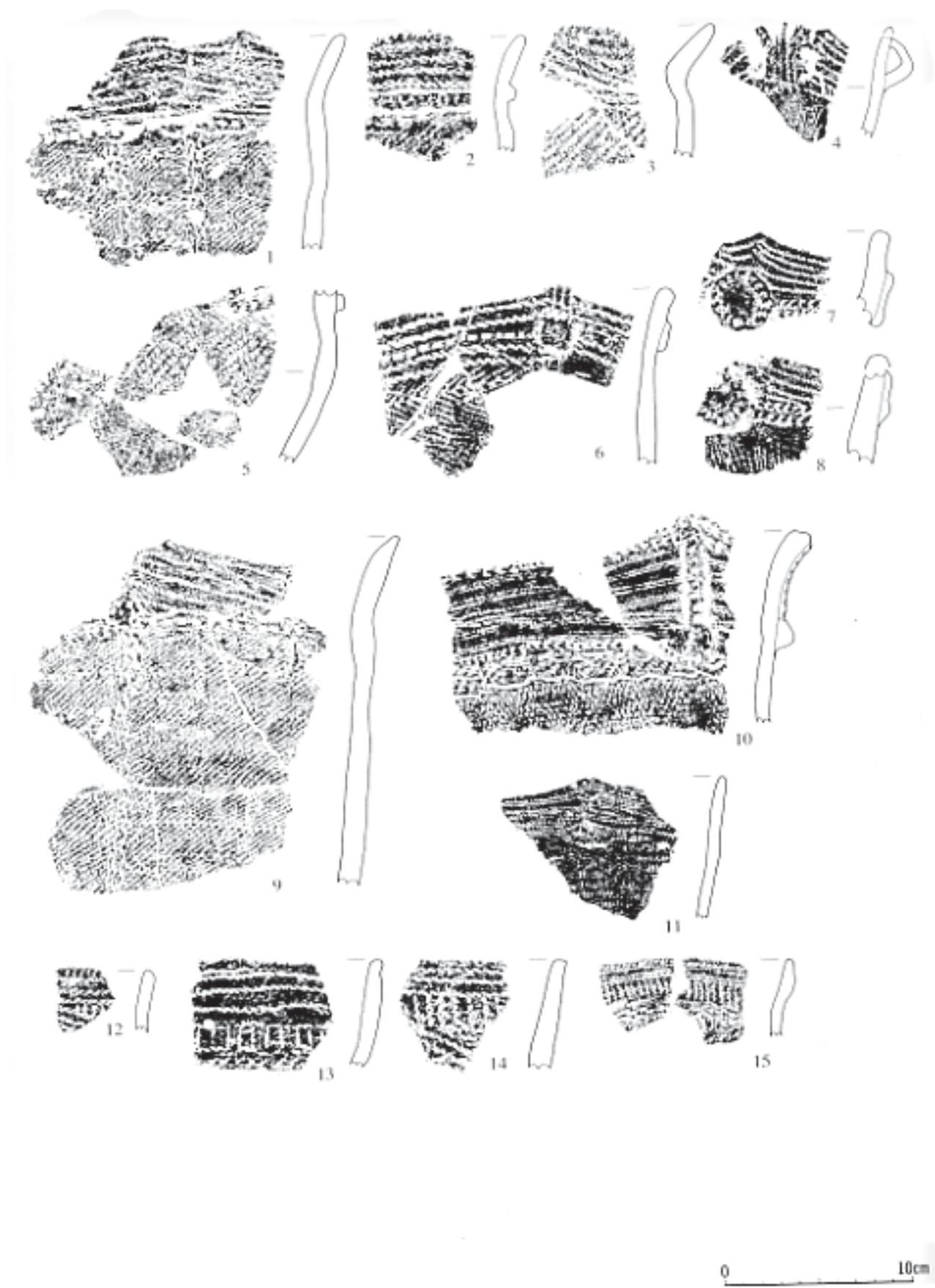


0 10cm

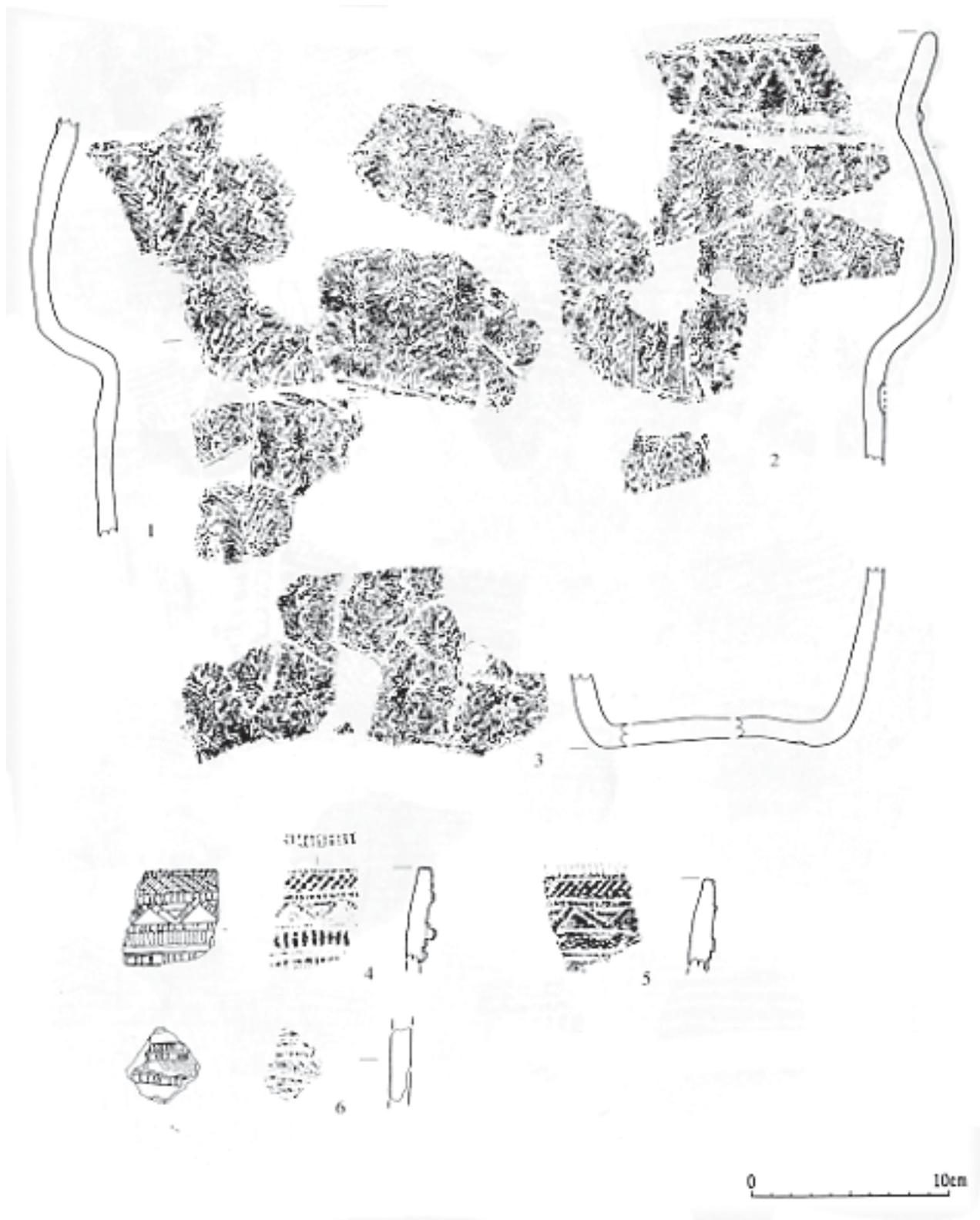
第 78 図 C 区遺物集中ブロック出土土器 3



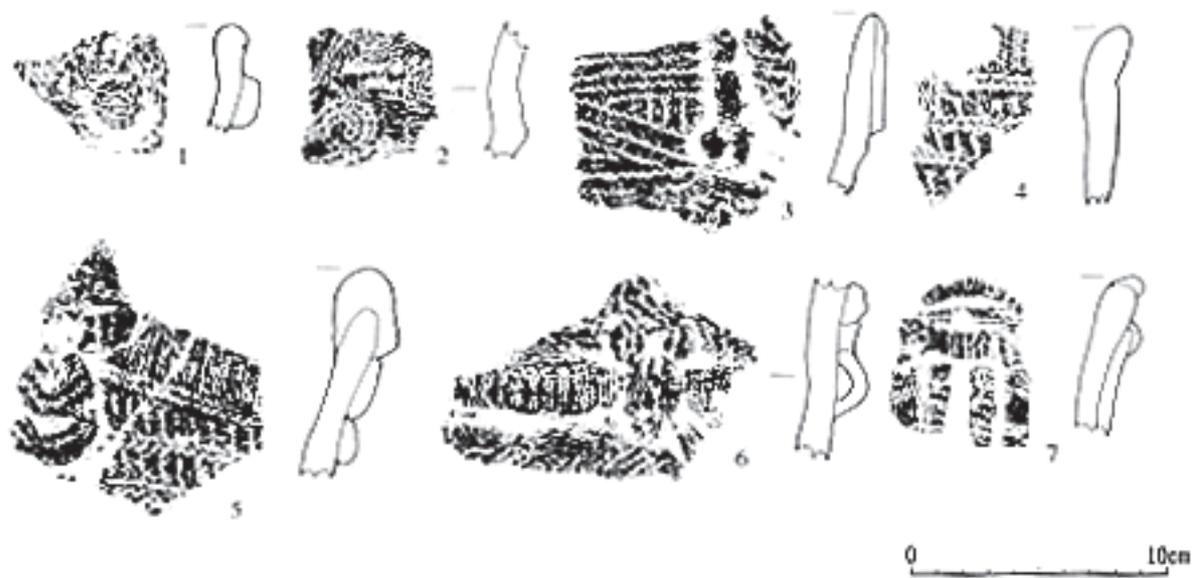
第79図 C区遺物集中ブロック出土土器4



第 80 図 C 区遺物集中ブロック出土土器 5



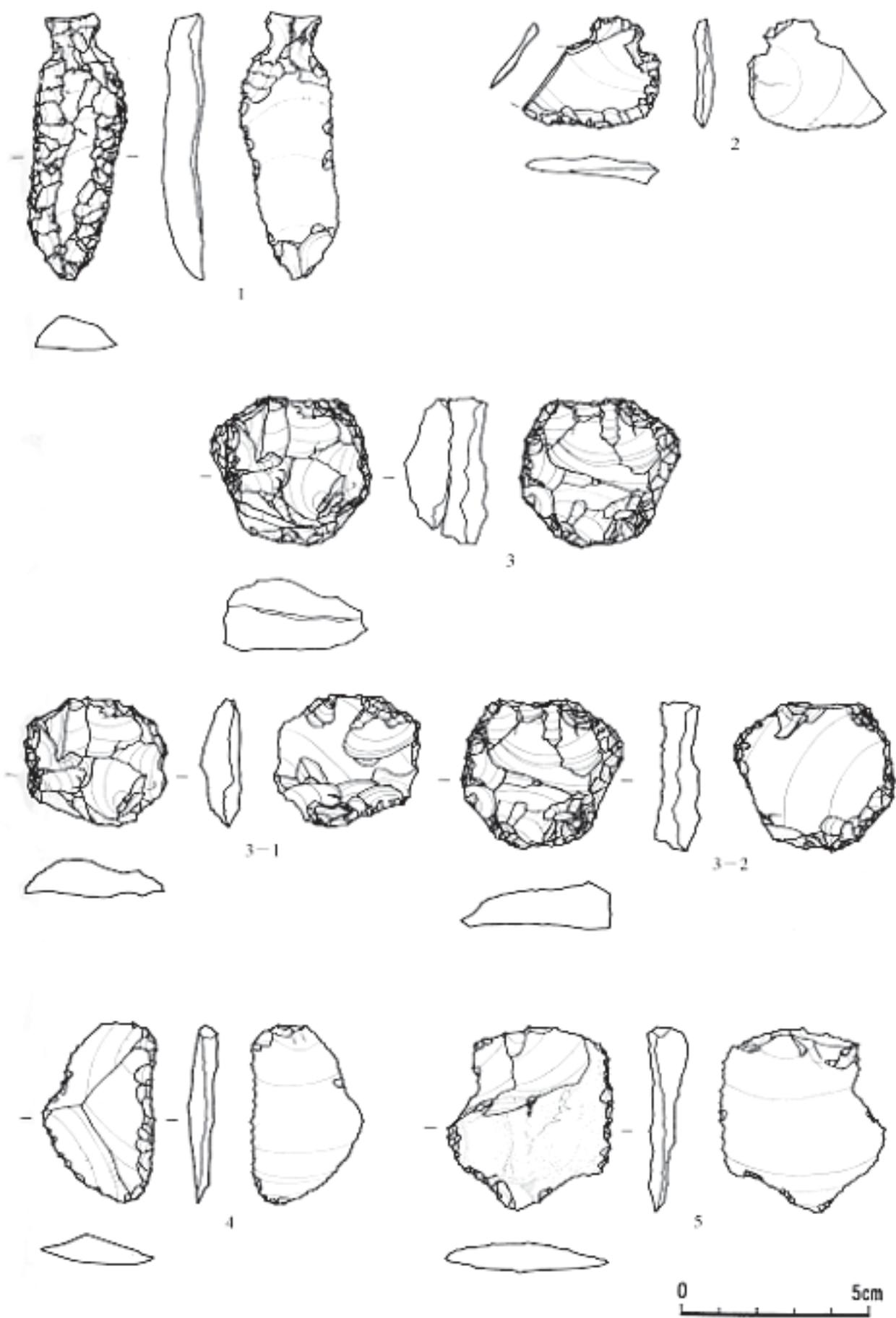
第 81 図 C区遺物集中ブロック出土土器 6



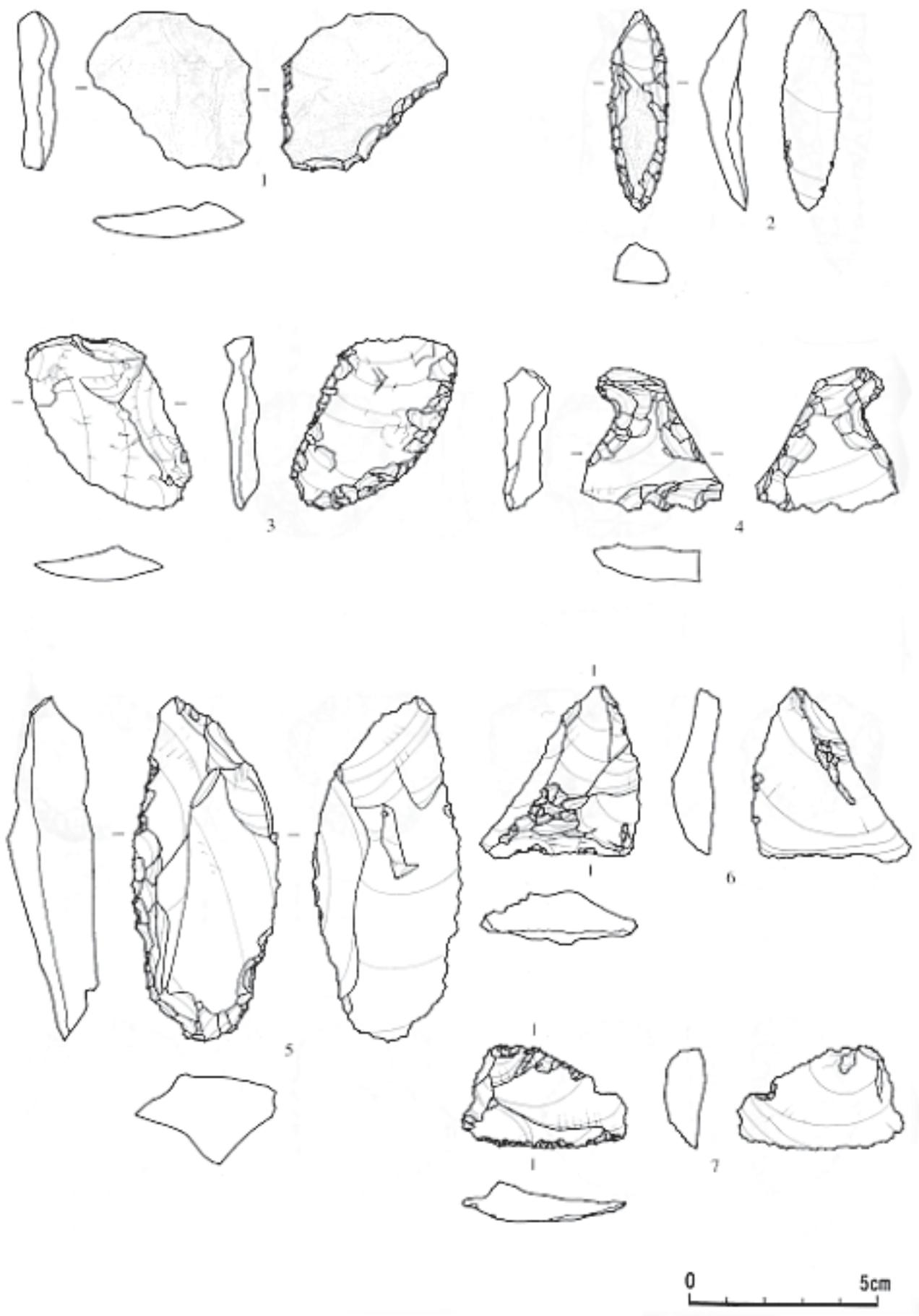
第 82 図 C 区遺物集中ブロック出土土器 7

第44表 C区遺物集中ブロック出土土器観察表

図版番号	出土地点	層位	器種	部位	文様	分類	備考
76-1	AE-109・110	第Ⅲ層	深鉢	略完形	L圧痕 L単軸絡条体1A類	I群2類b	
76-2	AG-112	第Ⅲ層	深鉢	完形	LR圧痕 LRRL結束第一種 R単軸絡条体1類	I群2類a	
76-3	AE-109	第Ⅲ層	深鉢	略完形	L圧痕 R圧痕 刺突 結束第一種 R単軸絡条体1類	I群2類a	
76-4	AG-109	第Ⅲ層	深鉢	完形	LR圧痕 隆帯 (隆帯上刺突) LR	I群2類c	
77-1	AG-109・110	第Ⅲ層	深鉢	完形	LR圧痕 LR	I群2類b	
77-2	AE-109	第Ⅲ層	深鉢	略完形	絡条体圧痕 隆帯 刺突 結節回転文 RL結束第一種	I群2類c	
77-3	AF-109	第Ⅲ層	深鉢	完形	刺突 R圧痕 LR圧痕 結節回転文 多軸絡条体 RL	I群2類b	
77-4	AG-112	第Ⅲ層	深鉢	完形	刺突 LR圧痕 ボタン状貼付 結節回転文 LR 多軸絡条体 結束LRRL	I群2類c	
78-1	AE-103・104	第Ⅲ層	深鉢	略完形	絡条体圧痕 L圧痕 貼付 補修孔 LR	I群2類f	
78-2	AG-112	第Ⅲ層	深鉢	略完形	LRRL結束第二種	I群	
78-3	AG-111	第Ⅲ層	深鉢	口頸部	LR 補修孔	I群	
79-1	AD-112	第Ⅲ層	深鉢	口頸部	RL縄文 結束第一種 単軸絡条体1類	I群1類a	
79-2	AD-113	第Ⅲ層	深鉢	口頸部	LR縄文 結束第一種 RLR縄文	I群1類a	
79-3	AG-111	第Ⅲ層	深鉢	口頸部	単軸絡条体1類 R圧痕	I群1類c	
79-4	AC-112	第Ⅲ層	深鉢	口頸部	R圧痕 単軸絡条体1類	I群1類c	
79-5	AD-112	第Ⅲ層	深鉢	口頸部	RL縄文 LR圧痕	I群1類c	
79-6	AG-111	第Ⅲ層	深鉢	口頸部	LR縄文 L圧痕 条痕	I群2類c	
79-7	AE-109	第Ⅲ層	深鉢	口頸部	LR圧痕 刺突 結節回転文 単軸絡条体1類	I群2類c	
79-8	AE-109	第Ⅲ層	深鉢	口頸部	RL縄文 R圧痕 LR圧痕 隆帯 結束第一種 単軸絡条体1類	I群2類a	
79-9	AH-111	第Ⅲ層	深鉢	口頸部	刺突 LR縄文 LR圧痕	I群	
79-10	AE-108	第Ⅲ層	深鉢	口頸部	LR圧痕 多軸絡条体	I群1類a	
79-11	AD-112	第Ⅲ層	深鉢	口頸部	LR圧痕 結束第一種	I群2類a	
79-12	AH-112	第Ⅲ層	深鉢	口頸部	LR圧痕 縄文	I群2類b	
79-13	AE-109	第Ⅲ層	深鉢	口頸部	刺突 LR圧痕 LR単軸絡条体1類	I群2類b	
79-14	AG-110	第Ⅲ層	深鉢	口頸部	LR圧痕 刺突 結節回転文 多軸絡条体	I群2類b	
79-15	AH-111	第Ⅲ層	深鉢	口頸部	LR圧痕 刺突 隆帯 結束第一種	I群2類b	
80-1	AE-110	第Ⅲ層	深鉢	口頸部	LR圧痕 隆帯 刺突 結束第一種 結節回転文	I群2類b	
80-2	AH-112	第Ⅲ層	深鉢	口頸部	LR圧痕 隆帯	I群2類b	
80-3	AG-110	第Ⅲ層	深鉢	口頸部	LR圧痕 LR縄文	I群2類b	
80-4	AG-109	第Ⅲ層	深鉢	口頸部	LR圧痕 橋状把手 単軸絡条体1類	I群2類c	
80-5	AG-110	第Ⅲ層	深鉢	口頸部	LR圧痕 LR縄文 貼付	I群2類c	
80-6	AH-111	第Ⅲ層	深鉢	口頸部	RL縄文 LR圧痕 R圧痕 ボタン状貼付	I群2類d	
80-7	AD-112	第Ⅲ層	深鉢	口頸部	L圧痕 ボタン状貼付 刺突	I群2類c	80-8と同一個体
80-8	AD-112	第Ⅲ層	深鉢	口頸部	L圧痕 ボタン状貼付 刺突 単軸絡条体1類	I群2類c	80-7と同一個体
80-9	AG-111	第Ⅲ層	深鉢	口頸部	L圧痕 ボタン状貼付 刺突 結束第一種 結節回転文	I群2類e	
80-10	AG-112	第Ⅲ層	深鉢	口頸部	刺突 隆帯 L圧痕 R圧痕 結節回転文 多軸絡条体	I群2類e	
80-11	AC-106	第Ⅲ層	深鉢	口頸部	L圧痕 R圧痕 多軸絡条体	I群2類e	
80-12	AD-107	第Ⅲ層	深鉢	口頸部	LR縄文 LR圧痕	I群2類f	
80-13	AH-111	第Ⅲ層	深鉢	口頸部	LR圧痕	I群2類f	
80-14	AD-107	第Ⅲ層	深鉢	口頸部	LR圧痕	I群2類f	
80-15	AE-104	第Ⅲ層	深鉢	口頸部	L圧痕 R圧痕 隆帯 結節回転文	I群2類c	
81-1	AE-109	第Ⅲ層	深鉢	胴部	結束第二種	I群2類a	80-2, 3と同一個体
81-2	AE-109	第Ⅲ層	深鉢	口頸部	LR縄文 LR圧痕 結束第二種	I群2類a	80-1, 3と同一個体
81-3	AE-109	第Ⅲ層	深鉢	底部	結束第二種	I群2類a	80-1, 2と同一個体
81-4	AD-111	第Ⅲ層	深鉢	口頸部	刻目 半隆起線文 結節状浮線文 隆線貼付 隆帯	I群2類g	
81-5	AE-103	第Ⅲ層	深鉢	口頸部	刻目 半隆起線文 結節状浮線文 隆線貼付 隆帯	I群2類g	
81-6	AE-113	第Ⅲ層	深鉢	胴部	LR縄文 結節状浮線文	I群2類g	
82-1	AH-112	第Ⅲ層	深鉢	口頸部	ボタン状貼付 L圧痕	I群2類c	
82-2	AH-112	第Ⅲ層	深鉢	口頸部	R圧痕 (蕨状)	I群2類c	
82-3	AD-106	第Ⅲ層	深鉢	口頸部	隆帯 LR圧痕	I群2類f	
82-4	AH-111	第Ⅲ層	深鉢	口頸部	R圧痕 L圧痕	I群2類f	
82-5	AH-112	第Ⅲ層	深鉢	口頸部	鱗状突起 隆帯 R圧痕 L圧痕	I群2類f	
82-6	AH-111	第Ⅲ層	深鉢	口頸部	隆帯 L圧痕 R圧痕 LR縄文	I群2類e	
82-7	AH-112	第Ⅲ層	深鉢	口頸部	隆帯 L圧痕	I群2類e	



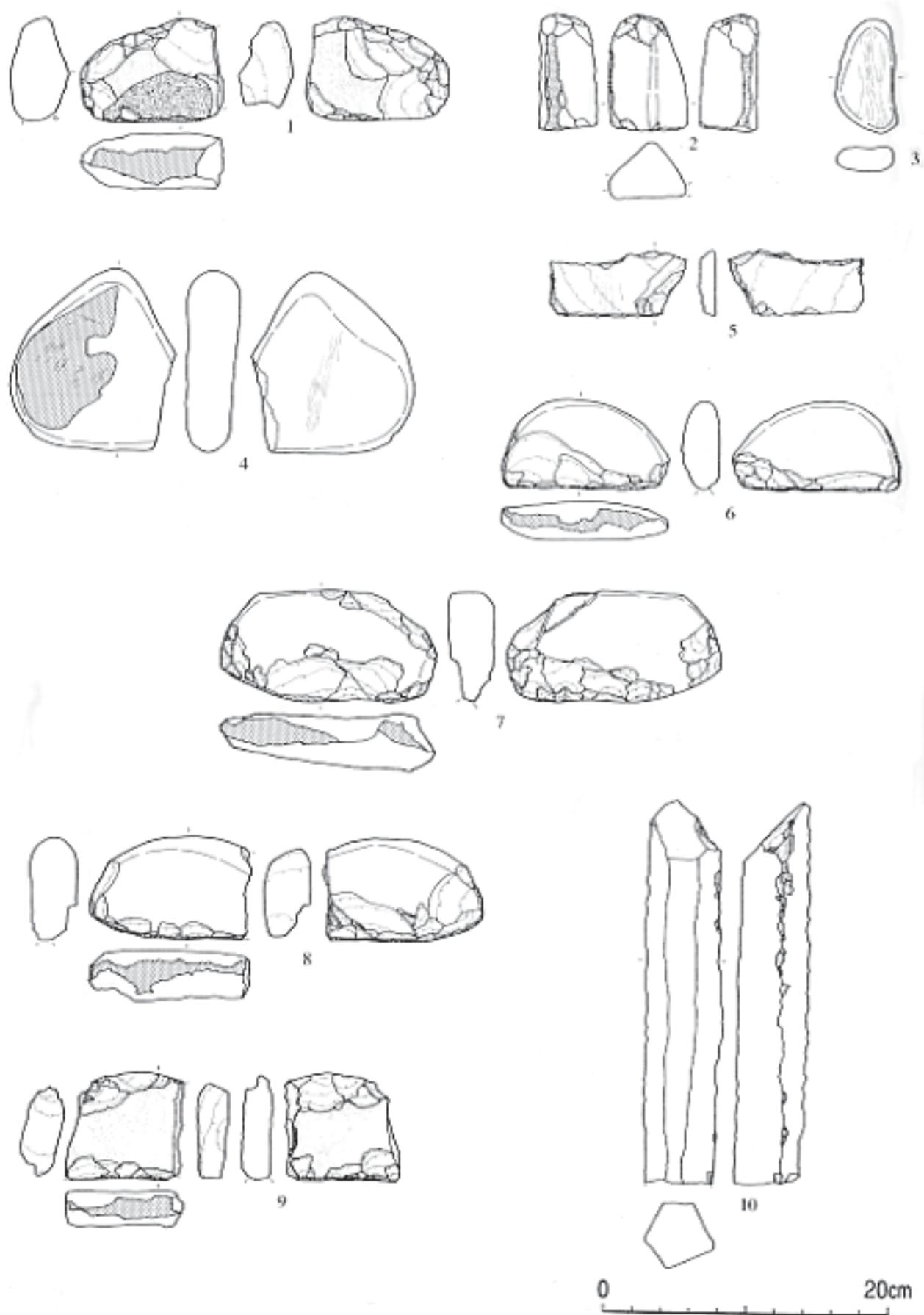
第 83 図 C 区遺物集中ブロック出土石器 1



第84図 C区遺物集中ブロック出土石器2



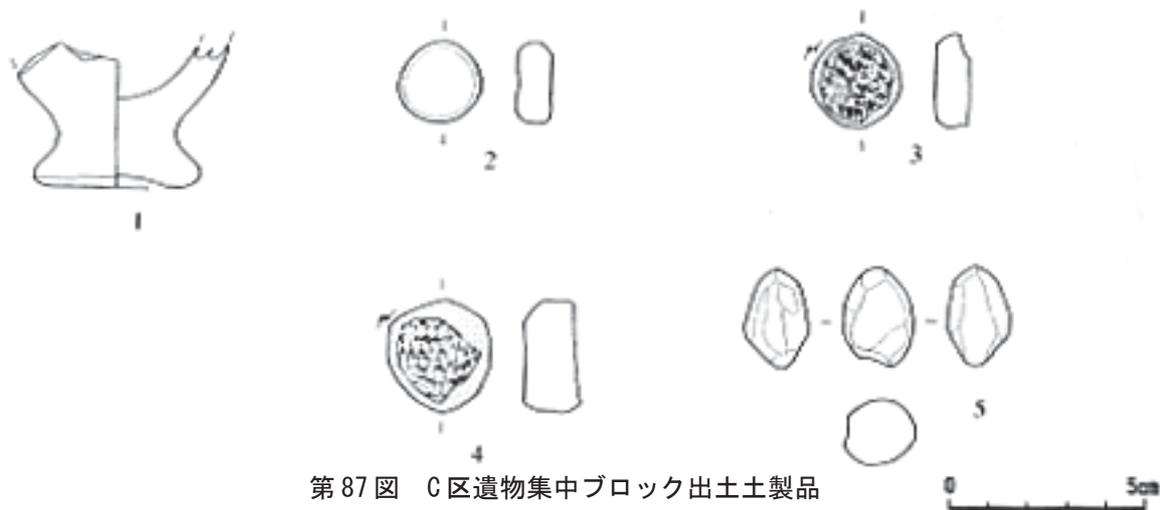
第85図 C区遺物集中ブロック出土石器3



第 86 図 C 区遺物集中ブロック出土石器 4

第45表 C区遺物集中ブロック出土土製品観察表

図版番号	出土地点	層位	最大計測値				石質	分類	備考
			長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)			
83-1	AH-111	Ⅲ	73	27	11	16.5	珪・頁	D-1	
83-2	AE-112	Ⅲ	(33)	31	6	4.0	珪・頁	D-2	
83-3-1	AG-110	Ⅲ	39	35	11	15.2	珪・頁	F	
83-3-2	AG-110	Ⅲ	49	41	12	23.8	珪・頁	F	
83-4	AG-111	Ⅲ	49	31	7	9.2	珪・頁	G-1	
83-5	AE-109	Ⅲ	51	45	11	18.2	珪・頁	G-1	
84-1	AG-112	Ⅲ	44	43	11	16.3	珪・頁	G-1	
84-2	AC-107	Ⅲ	55	12	12	8.5	珪・頁	G-2	
84-3	AE-109	Ⅲ	47	45	10	15.3	珪・頁	G-2	
84-4	AE-112	Ⅲ	40	38	12	13.7	珪・頁	G-4	
84-5	AG-108・109	Ⅲ	95	40	25	63.6	珪・頁	G-2	石籠状の刃部
84-6	AH-112	Ⅲ	47	43	15	17.9	珪・頁	H	
84-7	AG-113	Ⅲ	45	28	11	9.7	珪・頁	H	
85-1	AH-111	Ⅲ	132	76	45	434	石・安	M-1	
85-2	AG-110	Ⅲ	(70)	39	52	192	石・安	M-1	
85-3	AH-111	Ⅲ	103	78	51	516	安	M-1	
85-4	AF-110	Ⅲ	(100)	63	44	356	石・安	M-2	
85-5	AH-111	Ⅲ	129	99	33	510	石・安	M-2	
85-6	AI-113	Ⅲ	154	85	50	806	安	M-3	
85-7	AH-111	Ⅲ	(139)	58	36	342	輝・緑	M-3	
85-8	AF-113	Ⅲ	(91)	(74)	38	410	安	M-3	
85-9	AF-113	Ⅲ	132	72	34	396	安	M-4	
85-10	AE-106	Ⅲ	114	93	67	992	安	M-5	
85-11	AE-109	Ⅲ	127	88	47	740	安	M-5	
86-1	AF-110	Ⅲ	(111)	74	40	482	安	M-5	
86-2	AE-113	Ⅲ	(84)	51	41	250	安	M-5	
86-3	AF-110	Ⅲ	81	44	13	76	石・安	M-6	
86-4	AC-104	Ⅲ	(131)	116	38	660	石・安	M-6	
86-5	AE-109	Ⅲ	97	(47)	12	84	凝	M-6	
86-6	AD-111	Ⅲ	120	65	28	306	安	N-1	
86-7	AH-108・109	Ⅲ	153	80	41	612	変・安	N-1	
86-8	AG-111	Ⅲ	(115)	74	36	438	安	N-1	
86-9	AF-110	Ⅲ	(83)	77	26	242	石・安	N-1	
86-10	AF108	Ⅲ	(273)	56	52	876	石・安	P	



第87図 C区遺物集中ブロック出土土製品

第46表 C区遺物集中ブロック出土土製品観察表

図版番号	出土地点	層位	種類	特徴・計測値 (cm, g) 等
87-1	AG-110	Ⅲ	ミニチュア土器	台付、無文、器高3.8、重さ43.0
87-2	AG-111	Ⅲ	円形土版	無文、長さ2.2、幅2.2、厚さ0.9、重さ4.7
87-3	AG-112	Ⅲ	土器片利用土製品	RL縄文、長さ2.5、幅2.2、厚さ0.9、重さ5.2
87-4	AG-113	Ⅲ	土器片利用土製品	RL縄文、長さ2.7、幅2.8、厚さ1.2、重さ12.0
87-5	AG-114	Ⅲ	焼成粘土塊	球状、長さ2.5、幅1.8、重さ6.8

6. 出土遺物

1) 土器

C区の調査では、遺構内外出土を合わせ、段ボール換算で約80箱の土器が出土している。

出土地点は、竪穴式住居跡、土坑などの遺構内出土遺物と、遺物集中ブロック及び同範囲内の遺構外出土土器を合わせた調査区北側斜面における出土遺物に二分され、調査区北側斜面における出土が多数を占める。

調査区C区の大部分、およそ80ラインから103ラインにかけては、地山となる第V層、第VI層まで近現代の削平を受けており、第III層を主体とする遺物包含層は失われているため、遺物の出土地点は、竪穴式住居跡、土坑、埋設土器遺構等の、遺物集中ブロックを除いた各種遺構内からの出土を除き、削平を受けていない103ライン以北の、主に遺物集中ブロック範囲内とした調査区北側斜面に集中する結果となった。

竪穴式住居跡、土坑等の遺構内出土遺物については、覆土中より、数片程度の破片が出土するものが多数を占めるが、個々の遺構によっては、覆土中に個体が原形を留めて出土するもの、同一個体の破片が原形を留めず、破片のまとまりとして出土するものも存在する。

遺物集中ブロックとした、調査区北側斜面第III層中の出土土器は、個体が横転して潰れた状況を示すなど、個体の原形をある程度確認できる状況で出土するものも多いが、同一範囲内においても第I・II層及び第IV層中の遺構外出土遺物として取り扱った出土土器については、同一個体の破片が集中しているものの個体としての原形を留めるものは少ない。

C区における出土土器は、縄文時代前期末葉から中期初頭にかけての時期のものが主体を占め、胴部破片等で時期が不明確であるものについてもおおむねこの時期のものと思われる。なかでも、縄文時代前期末葉から中期初頭の第I群2類土器が量的な割合では突出する、同じく前期末葉から中期初頭の第I群1類土器と中期初頭の第II群1類土器が、出土量では第I群2類土器と比較した場合、大幅に少なくなるものの、それに次ぐ。その他、第II群2類土器、第III群土器が極僅かに出土している。復元個体数は、遺構内外合わせ、約60個体であった。

C区における出土土器については、各時期別に分類し、遺構内外の出土遺物を合わせ取り扱うこととする。

C区における出土土器の概要は次のとおりである。

第I群 縄文時代前期末葉から中期初頭に属する土器

本群土器は、縄文時代前期末葉から中期初頭に属する土器であり、C区出土土器の内、出土量が突出して多く、主体を占める。時期別に2つに分類した。

1類 円筒下層d1式土器に相当する資料

おおむね円筒深鉢形を呈する器形を持ち、胴部から口縁部にかけて比較的直線的に立ち上がるもので、多くは、口縁部の幅が狭い。口縁部の文様から3細分した。

a 口縁部に結束第一種を横位に数段施文するもの。(第71図1、第79図1、2、第90図1)

口縁部に相当すると思われる口唇部下、幅5～6cmにわたり、結束第一種を2、3段横位に施文するもので、胴部文様には、縦位の単軸、多軸絡条体回転文を施文している。口唇部付近が僅かに内湾する

ものが2点ある。第71図1は、口底径と比較し器高が低く、寸胴の安定した器形を持つ。

b 幅狭の口縁部に、縄、絡条体の側面圧痕を、1条ずつ数条、横位、斜位の組み合わせで施文し、幾何学的な文様を構成するもの。(第90図5)

幅狭の口縁部の無文地上に、横位、斜位を組み合わせ、縄の側面圧痕を施すもので、口縁部と胴部間に太さの異なる縄の側面圧痕を横位に1条施し、区画するものがある。胴部文様としては、縦位の単軸絡条体回転文を施文する。

c 幅狭の口縁部に、縄、絡条体の側面圧痕を、1条ずつ数条、横位平行に施文するもの。(第34図1、第36図4、第54図14、第58図4、第75図1、第79図3～7、第88図1、第90図2～4、6、7)

口唇部下、幅1.5～3cmの口縁部の無文地上に、縄の側面圧痕を横位平行に数条施すもので、まれに、縦位の側面圧痕が加わるものがある。胴部には、縦位の単軸絡条体回転文、縦、横位回転の単節縄文、縦位の条痕文、横位回転の単節縄文と縦位の結節回転文を組み合わせ、結束第一種と単軸絡条体回転文との組み合わせ等を施文している。

2類 円筒下層 d_2 式～円筒上層 a_1 式土器期に相当する資料

おおむね円筒深鉢形を呈する器形を持ち、胴部から口縁部にかけて外反等、屈曲、屈折するもので本群1類と比較すると、口縁部の幅が広い傾向がある。胴部と口頸部の境で屈曲して外反するもの、胴部と口頸部の境で屈折して外反した後、真っすぐ立ち上がるもの、胴部と口頸部の境で屈曲して、口頸部中程に向かい緩く内湾した後、外反するもの等がある、平口縁のものとは4単位の波状口縁のものがある。

口縁部の文様から7細分した。

a 口縁部に縄、絡条体の側面圧痕を横位、斜位、縦位の組み合わせにより施し、幾何学的な文様を構成するもの。(第31図7、第39図1、第54図2、第60図5、7、第76図2、3、第79図8、10、11、第81図1～3、第90図8)

口縁部の無文地上に縄、絡条体の側面圧痕により幾何学的な文様を構成するものである。なかには縦位に2本平行の押圧を有するものもある。胴部には斜縄文と単軸絡条体1類回転との組み合わせや、複節斜縄文と縦位の結節回転文との組み合わせによる施文が見られる。口頸部と胴部の境には刺突、結節回転文等が施され区画文の役割を果たしている。第81図1～3は、円筒形を呈する胴下半部に球状を呈する胴上半部を持った器形で胴部には結束第二種を縦位に施すものである。大木6式併行のものと思われる。

b 口縁部に、縄、絡条体の側面圧痕を1条ずつ、横位平行に施文するもので、縦位の隆帯等、口縁部を区画する貼付を持たないもの。(第21図3、5、第25図2、第27図1、第28図1、5、9、第29図1、第31図2、5、8、第34図3、第35図1、第36図2、第39図4、5、第54図1、4、5、8、11、第55図1、5、7、第56図1、4、第58図9、第60図3、11、第68図2、第70図1、第72図1、第76図1、第77図1、3、第79図12～15、第80図1～3)

口縁部の無文地上に、縄、絡条体の側面圧痕を1条ずつ、ほぼ等間隔で横位平行に押圧施文するもの

である。平縁のものは、口縁に平行に施文され、波状口縁のものは、口縁に沿って湾曲して施文されるもの、平行に施文されるが、波状口縁の各頂点下では口縁側の数条が頂点に向かい湾曲して施文されるものがある。また各頂点下で縦位に2本平行の押圧を有するものも見られる。胴部には結束第一種、単節の斜縄文、単軸絡条体1類、1A類、多軸絡条体、縦位の結束第二種等が施される。口頸部と胴部の境には刺突、刺突と結節回転文、上に刺突を施す低い隆帯等が施され、区画文の役割を果たしている。

第77図3は口縁部の片側半分をL側面圧痕、残り半分をRL側面圧痕と、原体を使い分けて施文している。また、第56図1の浅鉢は、器面片側に注口と想定される孔を有する。

c 口縁部に、縄、絡条体の側面圧痕を1条ずつ、横位平行に施文するもので、縦位の隆帯等、口縁部を区画する貼付を持つもの。(第19図3、6、第21図4、第29図2、第35図2、第36図3、第39図3、第54図3、13、第55図9、11、第56図2、第57図1、第58図1、10、15、第59図1～3、第60図4、第68図1、第69図1、第76図4、第77図2、4、第80図4、5、7、8、第82図1、第89図1、2、第90図20、21、第91図1～7)

口縁部の無文地上に、縄、絡条体や側面圧痕を1条ずつ、ほぼ等間隔で横位平行に押圧施文した他、口縁部に、垂下する縦位の隆帯貼付や円形貼付等により口縁部を区画するものである。波状口縁が多く、前述した2類b同様に、縄、絡条体の側面圧痕は、口縁に沿って湾曲するもの、波状口縁の頂点下で口縁側の数条が頂点に向かい湾曲するものがある。貼付隆帯には、1本の直線、口縁部下で左に屈折するカギ状、逆ノ字状、V字状、1本の直線的な隆帯と口縁部下で短い横位の隆帯を組み合わせた逆T字状、ハ字状と円形貼付及び短い縦位の隆帯を組み合わせたもの等がある。胴部には、単節、複節の横位回転による斜縄文、横位回転による結束第一種、結束第二種、縦位回転による多軸絡条体と結節回転文の組み合わせ等が施される。

d 口縁部に、縄、絡条体の側面圧痕を1条ずつ、横位平行に施文するもので、押圧された条の間に刺突を連続して横位に施すもの。(第21図1、第28図4、第34図2、第80図6、第90図14、16、18)

口縁部の無文地上に、縄、絡条体の側面圧痕を1条ずつ、ほぼ等間隔で横位平行に押圧施文した他、押圧間に半截竹管などによる刺突を連続して横位に施すものである。第21図1は、口縁部に1条ずつ2列、刺突が連続して横位に施されている。第34図2は、胴下半部が円筒形、胴上半部が球状を呈する器形で口唇部には8単位の小突起を有する。横位の縄の側面圧痕間に1列横位に連続して刺突を施している他、8単位の各小突起下には2条縦位に縄の側面圧痕が施されている。胴部には、第21図1は横位回転の結束第一種と単軸絡条体1類、第34図2は単軸絡条体1A類が施されている。

e 口縁部に、数条の集合を1組とした縄、絡条体の側面圧痕を横位に数条施文するもの。(第31図1、第33図1～3、第36図5、第60図6、第67図1、第70図2、第72図2、第80図9、10、第82図6、7、第88図5、第91図7、8、11、第92図1～4)

口縁部の無文地上に、2～3条を1組とした縄の側面圧痕を横位平行に数段施文するもので、本群2類a、bと比較し、やや広い口頸部幅を有し、口頸部が外反するものは、外反の度合いが強い。波状口縁が多く、頂点下には縦位の隆帯、橋状把手等、何らかの貼付が見られるものが多い。胴部には横位の結束第一種、横回転の単節斜縄文、横位の結節回転文が施されている。

f 口縁部に、数条の集合を1組とした縄、絡条体の側面圧痕を横位に数条施文し、その間に縦位の短い側面圧痕を連続して施すもの。(第29図3、第54図13、16、第59図6、第78図1、第80図13～15、第82図3～5、第88図4)

口縁部の無文地上に、2～3条を1組とした縄の側面圧痕を横位平行に数段施文し、その間に縦位の直線あるいは「く」字状を呈する短い側面圧痕を連続して施している。胴部施文が確認できるものには、単節斜縄文、横位に結束第一種が施されている。深鉢の他、浅鉢が1点出土している。

g 口縁部に、結節状浮線文、半隆起線文、細い粘土紐貼付の手法を用いて施文するもの。(第81図4～6)

口縁部に、結節状浮線文、半隆起線文、細い粘土紐貼付等を組み合わせ、横位、格子目状、鋸歯状に文様を構成するものである。

なお、C区出土土器には、口縁部の文様が不明で、時期を明確にできない胴部破片が多数存在する、以下に胴部破片に見られる施文について特徴を記す。いずれも回転による施文であり縦位回転のものには単軸絡条体1類、1A類、多軸絡条体、単独では用いられないが結節回転文、斜位回転のものには、単節縄文がごくわずかに存在する。横位回転のものには単節縄文、複節縄文、結束第1種の羽状縄文、斜縄文、結束第2種がある。また、第38図3の浅鉢は器面下部に斜縄文を施している。2個の貼付を両端にもつが、口縁部施文の有無等摩滅により不明である。

第Ⅱ群 縄文時代中期初頭～中葉に属する土器

1類 円筒上層a₂式土器期に相当する資料(第19図7～11)

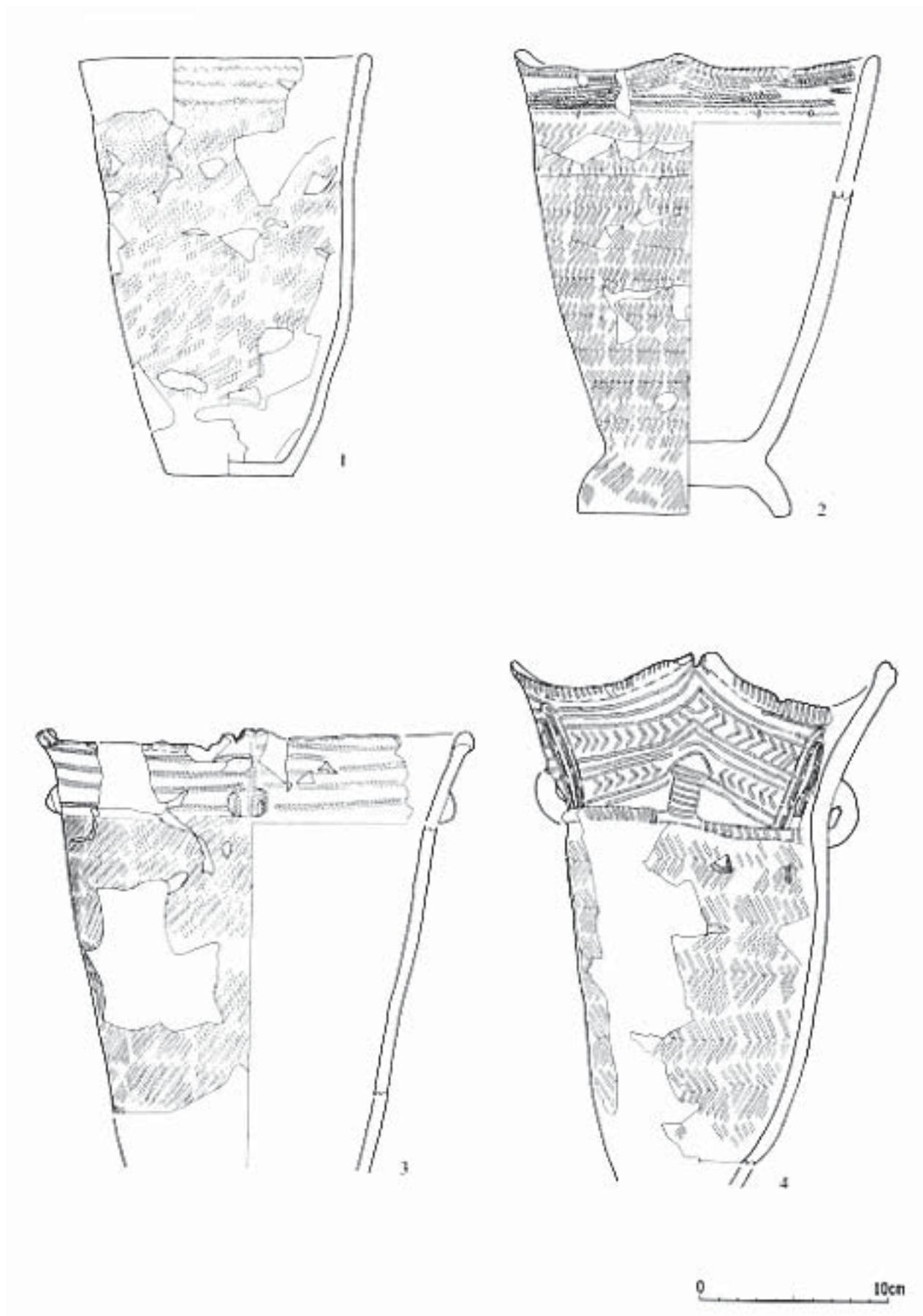
口縁部に、数条1単位の縄を横位平行に押圧施文し、横位の押圧間に鋸歯状、波状に縄側面を押圧するものである。大きく外反する広い口頸部を持ち、口唇部が厚く肥大するものが見られる。口頸部と胴部の間に1条太い隆帯を巡らし、隆帯上には縄の押圧による縦位の刻みを有する。胴部文様としては、横回転による単節斜縄文、結束第一種の横回転による斜縄文、羽状縄文が施される。

2類 円筒上層c式土器期に相当する資料(第22図1)

胴上半部全体に、細い隆帯を貼付し、隆帯間に棒状工具による刺突を施すもの。第2号竪穴式住居跡覆土より胴上半部の破片が出土している。口縁は、平縁で折り返しており、口頸部に4単位の把手を有する。口唇部から口頸部最上段には、細い隆帯を鋸歯状に貼付している他、胴上半部に2列1組で横位、縦位に、また、一条でそれらを連結するように、全面に渡り、同様の細い隆帯を貼付している。隆帯上には縄の回転による文様を施している。隆帯間には、棒状工具による刺突が隆帯に沿うように施されている。胴下半部には結束第一種による羽状縄文が横位に施される。

第Ⅲ群 縄文時代後期の土器(第92図5、6)

遺物集中ブロック範囲内、第Ⅳ層から出土している。器厚が5mm程で、第Ⅰ、Ⅱ群と比較すると極端に薄い。45にはRL斜縄文、46には、RL斜縄文地上に3条の沈線が施されている。



第 88 图 C 区遺構外出土土器 1

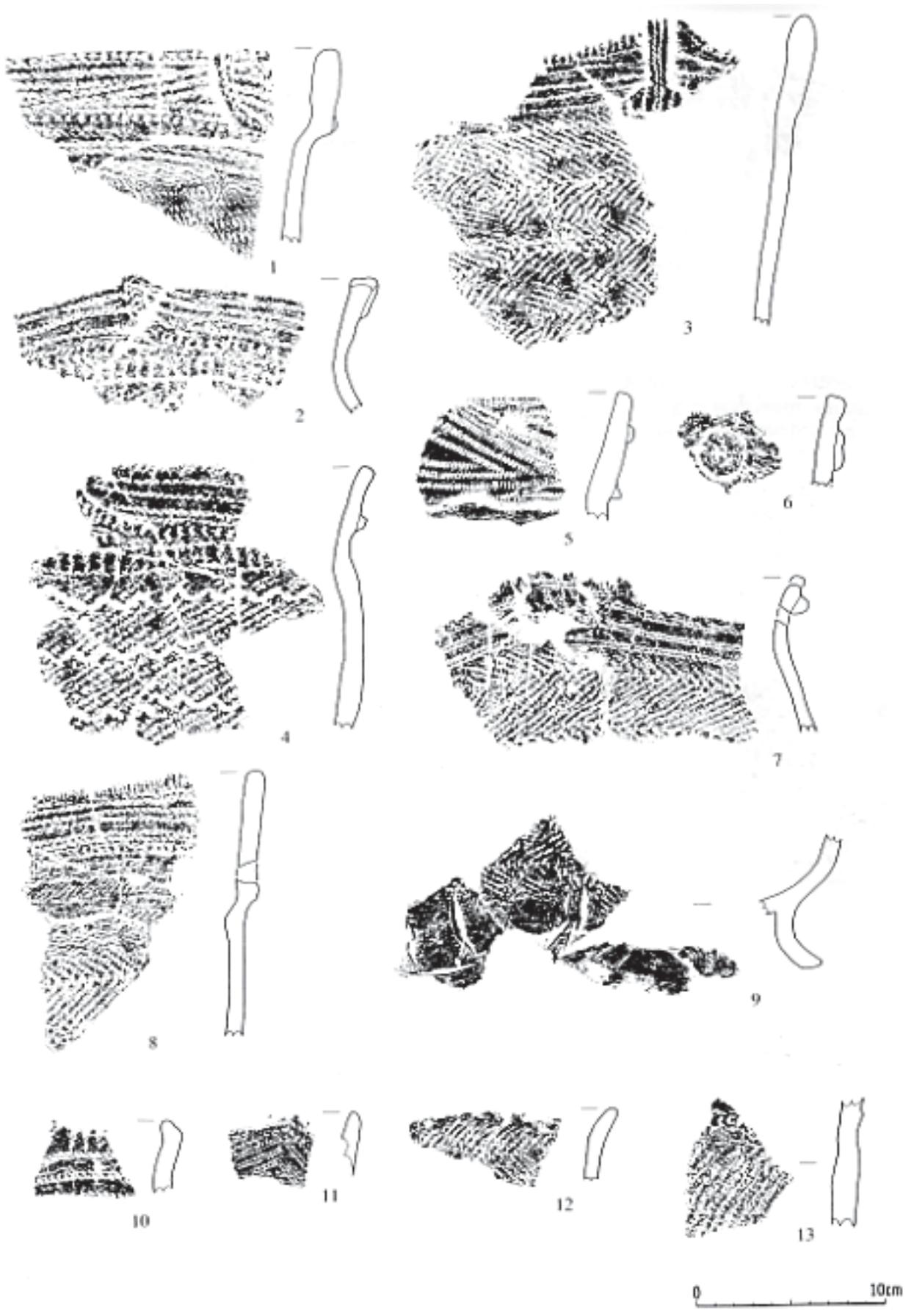


0 10cm

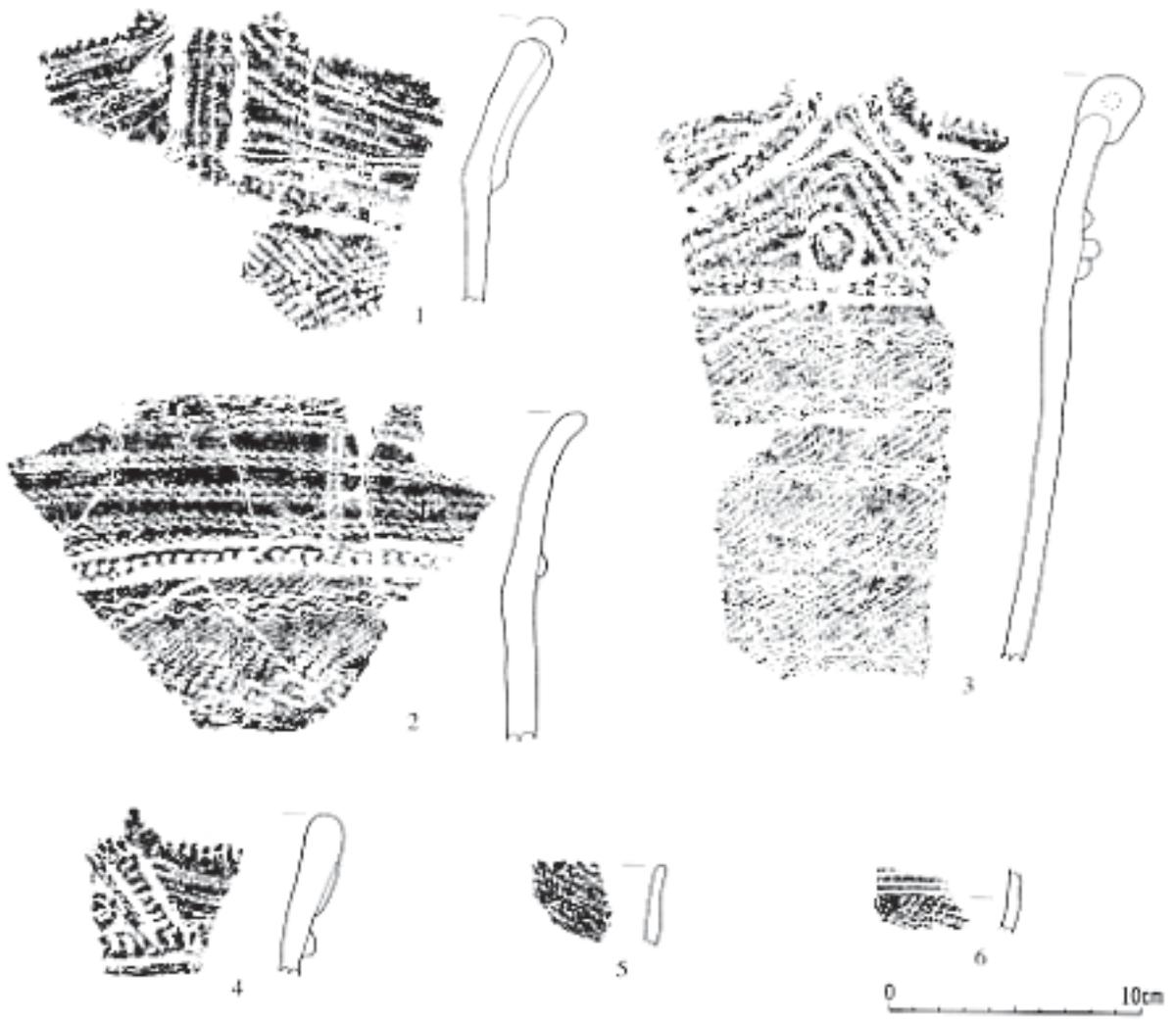
第 89 图 C 区遺構外出土土器 2



第90图 C区遺構外出土器3



第91图 C区遺構外出土土器4



第92图 C区遺構外出土土器5

第47表 C区遺構外出土土器観察表

図版番号	出土地点	層位	器種	部位	文様	分類	備考
88-1	AE-109、110	第I・II層	深鉢	完形	LR圧痕 LR縄文	I群1類c	
88-2	AI-109	第I・II層	台付深鉢	完形	R圧痕 LR圧痕 LR結束第一種 結節回転文	I群2類b	
88-3	AF・G-107	第I・II層	深鉢	略完形	L圧痕 R圧痕 貼付 LR	I群2類e	
88-4	AF-107	第I層	深鉢	略完形	L圧痕 R圧痕 (<字状圧痕) 隆帯 橋状把手 LRRL結束第一種	I群2類f	
89-1	AE-106・107	第I・II層	深鉢	完形	LR圧痕 貼付 隆帯 刺突 結節回転文 R・RL結束第一種	I群2類c	
89-2	AG-109	第I層	深鉢	略完形	R圧痕 隆帯 LR結束第二種	I群2類c	
90-1	AG-109	第I層	深鉢	口頸部	結束第一種	I群1類a	
90-2	AG-111	第IV層	深鉢	口頸部	R圧痕 多軸絡条体1類	I群1類c	
90-3	AG-110	第I層	深鉢	口頸部	絡条体圧痕 LRL縄文	I群1類c	
90-4	AE-118	第IV層	深鉢	口頸部	R圧痕 LR圧痕 結節回転文 L・R単軸絡条体1A類	I群1類c	
90-5	AG-110	第I層	深鉢	口頸部	絡条体圧痕 刺突 多軸絡条体	I群1類b	
90-6	AF-110	第IV層	深鉢	口頸部	絡条体圧痕 LR圧痕	I群1類c	
90-7	AF-110	第II層	深鉢	口頸部	LR圧痕 単軸絡条体1類	I群1類c	
90-8	AG-109	第I層	深鉢	口頸部	絡条体圧痕 LR圧痕	I群	
90-9	AG-109	第II層	深鉢	口頸部	RL縄文 RL圧痕	I群	
90-10	AG-109	第I層	深鉢	口頸部	LR圧痕 LR縄文	I群2類b	
90-11	AG-109	第I層	深鉢	口頸部	LR圧痕 LR縄文	I群2類b	
90-12	AF-109	第II層	深鉢	口頸部	R圧痕 絡条体圧痕 LR縄文	I群2類b	
90-13	AG-109	第I層	深鉢	口頸部	RL縄文 R圧痕 LR縄文	I群2類b	
90-14	AG-110	第I層	深鉢	口頸部	LR圧痕 刺突 LR縄文	I群2類d	
90-15	AG-109	第I層	深鉢	口頸部	RL圧痕 刺突 絡条体圧痕	I群2類b	
90-16	AH-110	第I層	深鉢	口頸部	LR縄文 LR圧痕 刺突	I群2類d	
90-17	AG-107	第II層	深鉢	口頸部	刺突 LR圧痕	I群	
90-18	AH-110	第I層	深鉢	口頸部	RL圧痕 刺突 補修孔 結節回転文	I群2類d	
90-19	AC-106	第IV層	深鉢	口頸部	LR圧痕 小穴	I群2類b	
90-20	AF-110	第I層	深鉢	口頸部	刺突 隆帯 絡条体圧痕 LR圧痕 単軸絡条体1A類	I群2類c	
90-21	AG-108	第II層	深鉢	口頸部	LR縄文 隆帯 LR圧痕 刺突 結節回転文	I群2類c	
91-1	AD-107	第IV層	深鉢	口頸部	隆帯 刺突 LR圧痕 結節回転文 多軸絡条体	I群2類c	
91-2	AI-109	第II層	深鉢	口頸部	LR縄文 隆帯 刺突 LR圧痕 R圧痕	I群2類c	
91-3	AI-107	第I層	深鉢	口頸部	隆帯 R圧痕 結束第一種	I群2類c	
91-4	AI-109	第II層	深鉢	口頸部	LR縄文 LR圧痕 隆帯 刺突 結束第二種	I群2類c	
91-5	AG・H-108	第IV層	深鉢	口頸部	絡条体圧痕 隆帯	I群2類c	口唇部文様不明
91-6	AG-108	第II層	深鉢	口頸部	LR圧痕 ボタン状貼付	I群2類c	
91-7	AF-109	第I層	深鉢	口頸部	貼付 L圧痕 R圧痕 結束第一種	I群2類e	
91-8	AF-109	第I層	深鉢	口頸部	R圧痕 貼付 L圧痕 刺突 結節回転文 結束第一種	I群2類e	
91-9	AH-111	第IV層	台付深鉢	底部	結束第一種	I群	
91-10	AH-111	第I層	深鉢	口頸部	L圧痕	I群	
91-11	AD-114	第IV層	深鉢	口頸部	LR圧痕 L圧痕 R圧痕	I群2類e	
91-12	AF-109	第I層	深鉢	口頸部	LR縄文 結束第一種	I群	
91-13	AH-108	第II層	深鉢	胴部	隆帯 刺突 結節回転文 (0段多条)	I群	
92-1	AG-110	第I層	深鉢	口頸部	隆帯 L圧痕 結束第一種	I群2類e	
92-2	AI-109	第II層	深鉢	口頸部	LR縄文 LR圧痕 隆帯 刺突 結節回転文	I群2類e	
92-3	AI-109	第II層	深鉢	口頸部	隆帯 ボタン状貼付 刺突 絡条体圧痕 結節回転文 LR縄文	I群2類e	
92-4	AG-107	第II層	深鉢	口頸部	釜状突起 隆帯 ボタン状貼付 L圧痕	I群2類e	
92-5	AI-108	第IV層	深鉢	口頸部	LR縄文	III群	
92-6	AI-108	第IV層	深鉢	胴部	沈線 LRL もしくは LR縄文	III群	

2) 石器

C区からは、剥片石器165点、剥片712点、礫石器107点が出土した。剥片を除くとG群、M群の出土が最も多い。63点（剥片を除く剥片石器45点礫石器18点）の石器が発掘調査区域内の近代の攪乱からの出土であり全体の約21%を占める。石器の石材として用いられているものとしては、剥片石器は殆どが珪質頁岩、礫石器は安山岩が最も多く、次いで石英安山岩が多い。

A群 石鏃（第29図4・5・6、第36図7、第61図1・2、第63図3・6・7、第64図1・3、第93図1～6）

遺構内から11点、遺構外から7点出土した。基部形態によって5類型に分類した。2類5点、3類1点、4類8点、欠損により基部形態の不明なもの3点である。

多くの石器がポジ面、ネガ面の区別が不可能なまで器体全面に調整剥離が施されている。ポジ面、ネガ面の区別が可能であった5点については、縦長剥片を素材としているもの3点、横長剥片を素材としているもの2点である。

第64図3は、尖端部が摩滅しており、石錐として転用された可能性がある。

B群 石槍（第62図2）

遺構内から1点出土した。押圧剥離によって両面に縦長の調整剥離を施し整形した後、周縁に細かい調整剥離を施している。

C群 石錐（第61図3）

遺構内から1点出土した。器体全面に調整剥離を施した後、錐部を作出している。錐部の調整は縦長の細かい剥離によるもので、器体に施された調整剥離よりも丁寧に作られている。

D群 石匙（第62図3、第64図2、第83図1、第93図7～10、第94図1～3）

遺構内から2点、遺物集中ブロックから2点、遺構外から7点出土した。形態によって2類型に分類した。1類8点、2類3点である。

第94図2を除く10点が、縦長の剥片を素材としている。つまみがバルブの方向に位置するものが5点、つまみがバルブの反対方向に位置するものが2点、つまみが打撃方向上に位置しないものが3点である。縦型、横型に関わらず、多くの刃部調整は片面からの調整剥離によって作出されている。

E群 石篋（第40図1、第62図4・5、第94図4～7、第96図1）

遺構内から3点、遺構外から6点出土した。主要剥離面が判別可能な4点については、縦長剥片を素材としているもの2点、横長剥片を素材としているもの2点である。9点ともソフトハンマーによる直接打法によるものと考えられる横長で比較的面積の広い調整剥離が器体両側縁に施され整形されている。9点すべての調整剥離は両面に施され、片面のみの調整のものは無い。9点のうち、欠損品を除く7点は弧状の刃部である。刃部に施される調整剥離については、フルーティング様剥離が施されるものと、そうでないものがある。

F群 楔形石器（第83図3）

遺物集中ブロックから2点出土した。2点が接合する接合資料である。2点とも、辺縁に潰れを有す

る。2点に共通する剥離が看取されることから、分割以前の段階でも楔形石器としての機能を果たしていた可能性がある。

G群 不定形石器（第23図1・2、第29図8、第36図8、第40図2・3、第61図6、第62図1・4、第63図1・2・4、第64図4、第83図4～第84図5、第95図2～第99図3）所謂スクレイパーを本群とした。

調整剥離が素材剥片の1側縁の1/2以上に施されている石器を、刃部の形態により1～5類に分類した。1類37点、2類14点、3類10点、4類5点、5類10点、6類16点である。素材剥片の形状を大きく変えることのない、調整剥離が施されている石器が多く、定形的な刃部を有するが、石器全体の形状を定形的に整形する調整剥離が施されていない石器群である。

1類は、遺構内から14点、遺物集中ブロックから5点、遺構外から18点出土した。素材となる剥片の縁辺に調整剥離を施すことによって作出された刃部が、直線状を呈するものである。素材剥片の縁辺の角度を大きく変えることのない調整剥離が施されているものもある。第62図1は、素材剥片の3側縁に異なった形状の刃部が作出されている。左側縁には、緩斜度な刃部が作出されている。右側縁には、比較的横長で幅広の剥離が施されており、その調整剥離の打面付近には細かい階段状剥離を観察できる。下端に作出されている刃部は、石筥に観察されるフルーティング様剥離が施されている。裏面左側縁に施された剥離は、本遺跡から出土した石筥の整形加工にみられる横長で比較的面積の広い調整剥離とは異なる調整であることから石筥とせず、搔器的機能と削器的機能を併せ持つ不定形石器として本類に分類した。

2類は、遺構内から2点、遺物集中ブロックから3点、遺構外から9点出土した。素材となる剥片の側縁に調整剥離を施すことによって作出された刃部が、弓状を呈するものである。第84図5は、厚みのある剥片を素材として、正面左側縁と下端に調整剥離を施し刃部が作出されている。左側縁には比較的横長で幅広の剥離が施されており、その打面付近には慣れたような微細な剥離を観察できる。下端に作出されている刃部は、石筥に観察されるフルーティング様剥離が施されている。

3類は、遺構内から2点、遺物集中ブロックから1点、遺構外から7点出土した。厚めの剥片を素材とし、縁辺から離れる位置を打点とした剥離を連続して施すことによって、抉りの大きい刃部が作出され、刃部平面形状、側面観ともに波形を呈している石器である。刃部は、面積の大きい調整剥離で作出されており、抉りの多くは1回の加撃によって作出されている。決りを入れるための調整剥離は、10点すべてが片面調整による刃部である。刃部に微細剥離を観察できるものもあるが、それら微細剥離は、すべてが調整剥離のネガティブ面に残されている。刃部の頂点が摩滅しているものは無く、刃部の頂点を利用する石錐的機能を有すると考えられるものは無い。

4類は、遺構内から1点、遺構外から4点出土した。調整剥離が石器周縁をほぼ1/2周以上に巡り、円形またはそれに近い方形の剥片を素材としている石器である。

5類は、遺構内から1点、遺構外から9点出土した。縦長の剥片を素材としているものが多い。

6類は、遺構内から2点、遺物集中ブロックから1点、遺構外から13点出土した。欠損部分の如何によってG群の他の類型に属する可能性も考えられるもの、定形石器に属する可能性の考えられるもの等がある。

H群 縁辺に微細剥離を有しスクレイパーとして機能したと思われるもの（第84図6・7、第99図4～第100図1）

遺構内から2点、遺物集中ブロックから5点、遺構外から15点出土した。素材剥片の側縁に微細剥離を有し刃部としているため、素材剥片の形状を変えることはなく、刃部形状は多様である。薄い縁辺に剥離を有し、緩斜度な刃部が作出されているものが多い。

I群 その他の剥片石器（第29図7、第31図9）

遺構内から2点、遺構外から2点出土した。A～Gのどの類型にも属さない石器である。刃部調整のための剥離より面積的に広い調整剥離が施されているが、定形石器となりうる形状ではないもの、あるいは、施される調整が器体の整形か、刃部作出のためのものなのかの判断がつけ難いものである。

J群 石核（第100図2）

遺構内から1点、遺物集中ブロックから1点、遺構外から5点出土した。最大長20mm以上のネガティブバルブをもつ剥離面が複数個残されているものである。

第100図2は、さらなる剥片剥取が可能な大きさであり、打面となりうる面も複数面残存するが、いずれの面からも打撃方向とした場合の加撃の進行方向に層理が入っているため現存以上の剥片剥取作業を断念したと思われる。残存する剥片剥取面は4面であるが、4面相互の新旧関係は不明である。

K群 剥片

遺構内から193点、遺物集中ブロックから143点、遺構外から376点出土した。遺構外からの出土中攪乱等からの出土は121点である。

L群 石斧（第23図3、第40図4・5、第101図1～3）

遺構内から3点、遺構外から3点出土した。なおこれら以外に、本遺跡出土の磨製石斧と比較し、石質、器面の観察とそれらを含め、石斧の機能の性格上本類の破砕片と思われるものが9点ある。

完形品が1点、刃部が残存するものが3点、基部が残存するものが2点ある。刃部のあるものは2点とも円刃、第101図2が片刃、それ以外の3点は両刃である。

製作方法の違いにより2形態に分類した。1類2点、2類4点である。石質は3点が輝緑凝灰岩、1点が閃緑岩、1点が粘板岩、1点が頁岩である。

1類は、遺構内から2点出土した。刃部が残存するものが1点、基部が残存するものが1点である。

第40図4は、側面に擦切痕と思われる表裏からの溝を残す。剥離により整形された後、研磨されている。刃部先端には表裏に微細な剥離が数個観察されるが、それらの稜は摩滅している。

2類は、1類以外の磨製石斧を一括した。遺構内から1点、遺構外から3点出土した。剥離、敲打の後研磨されているものである。3点とも刃部が残存する。

第23図3は刃部には使用によるものと思われる敲打による潰れと剥離が観察される。切断面には破損後の再研磨と側面からの剥離が観察される。第101図1は、剥離と敲打により整形され、刃部が研磨により整形されている。表裏中央には礫面を残す。

M群 敲磨器類（第23図5・6、第30図1～3、第31図10、第40図6、第62図6・7、第63図5、第64図5、第67図1、第85図1～第86図5、第101図4～第102図1）

遺構内から19点、遺物集中ブロックから20点、遺構外から26点出土した。自然礫の稜、及び面に敲打痕、スリ痕、凹み痕を有する石器群である。形状、使用痕が残される部位にはとらわれず、使用痕の種類と組み合わせにより、1～6に分類した。1類10点、2類15点、3類13点、4類6点、5類22点、6類5点である。

1類は、遺構内から1点、遺物集中ブロックから4点、遺構外から5点出土した。厚みのある自然礫を用いているものが多い。使用されている部位は、凹み痕、敲打痕は器面表裏に、スリ痕は、側縁に残されている。

2類は、遺構内から3点、遺物集中ブロックから4点、遺構外から8点出土した。厚みのある自然礫を用いているものが多く、偏平な礫を用いているものは5点である。凹み痕と敲打痕の組み合わせが7点、スリ痕と敲打痕の組み合わせが3点、凹み痕とスリ痕の組み合わせが2点、凹み痕、スリ痕、敲打痕の組み合わせが3点である。凹み痕は器面表裏に残されるが、スリ痕、敲打痕が残される部位は、一様ではない。凹み痕、敲打痕が器面表裏の対照する位置に残されているものが多く、凹み痕は摩滅しているものが多い。

3類は、遺構内から5点、遺物集中ブロックから5点、遺構外から3点出土した。N群に分類した石器と類似する機能面を有するものもあるが、機能面作出のため剥離により器体の厚さを減じていない、平面形状の1側縁が弧状の礫を用いていない、あるいは剥離により弧が作出されていない等のことから、N群には分類しなかった。側面にスリ面と剥離を有し、スリ面と剥離の新旧関係は13点ともスリ面の方が新しい。偏平な礫の側面をスリ面とするもの7点、断面が三角形を呈する礫の側面をスリ面とするもの5点である。

4類は、遺構内から3点、遺物集中ブロックから1点、遺構外から2点出土した。第23図5は、剥離がスリ痕を切り、敲打痕が剥離を切っていることから、スリ石として使用した後、敲き石として転用した可能性も考えられる。第30図3と第62図7以外は、敲打痕とそれに伴うと思われる剥離を石器長軸に有している。

5類は、遺構内から7点、遺物集中ブロックから6点、遺構外から8点出土した。スリ痕、敲打痕、凹み痕が残されている部位は、第85図10以外、スリ痕は石器側縁に残されているが、敲打痕については、石器長軸に残されているもの、石器側縁に残されているもの、器面表裏に残されているものなど、一様ではない。スリ痕を残す石器のスリ痕と剥離の新旧関係については、18点中新旧関係の区別が可能であった10点のうち8点はスリ痕が剥離を切り、2点は、スリ痕と剥離についてスリが切られるもの、剥離が切られるもの両方の新旧関係が認められた。第85図10はスリによって底面にフラットな面が作り出され、石器中央に長軸に沿った帯状の敲打痕が残されること等、北海道式石冠に類似する。

6類は、遺構外から5点出土した。5点とも側面に擦痕を有するものはなく、器面片面か表裏両面に擦痕を有する。著しい線刻を有するものもある。

N群 半円状扁平打製石器あるいはそれに類似する形状のもの（第23図7・8、第30図4～6、第86図6～9、第102図2～第103図8）

遺構内から9点、遺物集中ブロックから5点、遺構外から18点出土した。そのうち遺構内と遺構外の接合資料が1点である。自然礫、板状節理による偏平礫を使用し、弧状の縁辺を有し対辺に直線状のスリ面を有する石器群である。板状節理によるものは32点中5点である。本群の分類に際しては、原礫の

弧状の縁辺を無加工のまま利用したものか、剥離により作出されたものかについてはとらわれないこととした。欠損品が116点と半数を占めるため、形態による分類は行わず直線状の底縁と器体の厚みにより分類を行った。1類点、2類点、3類点、4類1点である。

欠損品16点の折れ面の加撃方向であるが、背面（腹面）からの加撃によるもの5点、底辺からの加撃によるもの7点、弧状の辺からの加撃によるもの2点、底辺とその対辺からの加撃によるもの2点であった。底辺からの加撃による折損が最も多い。この結果を1類から4類の分類別にみると、1類と2類については、底辺からの加撃による折損のものがそれぞれ3点と2点、3類については背面（腹面）からの加撃による折損のものが2点であるが、各分類別に折損面の加撃方向をみた場合は偏差はみられない。

1類は、遺構内から6点、遺物集中ブロックから5点、遺構外から11点出土した。そのうち遺構内と遺構外の接合資料が1点である。他の遺跡の類例にみられる側辺に抉りを有するものは無い。弧状の側辺を打面とする剥離が施されているものは、完形品11点のうち7点、欠損品4点のうち3点である。第23図7、第102図3・6は、スリ面以外の側辺に敲打痕を有する。

第23図8は、2号住居跡と遺物集中ブロックからの2点が接合した。第102図4は頁岩を素材としており、底辺の剥離は細かい階段状剥離が連続する。

2類は、遺構外から3点出土した。完形品2点、欠損品1点である。スリ面以外の側辺に敲打痕を有するものは、完形品1点、欠損品1点である。

3類は、遺構内から5点、遺構外から2点出土した。

4類は、遺構外から1点出土した。折れ面を打面とした剥離を有する。

0群 擦り切り具（第103図9）

遺構外から1点出土した。表裏のスリ面には長軸方向の擦痕が観察できる。下辺に施される剥離の多くはスリ面に切られているものが多い。

P群 搬入礫（第86図10、第104図1・2）

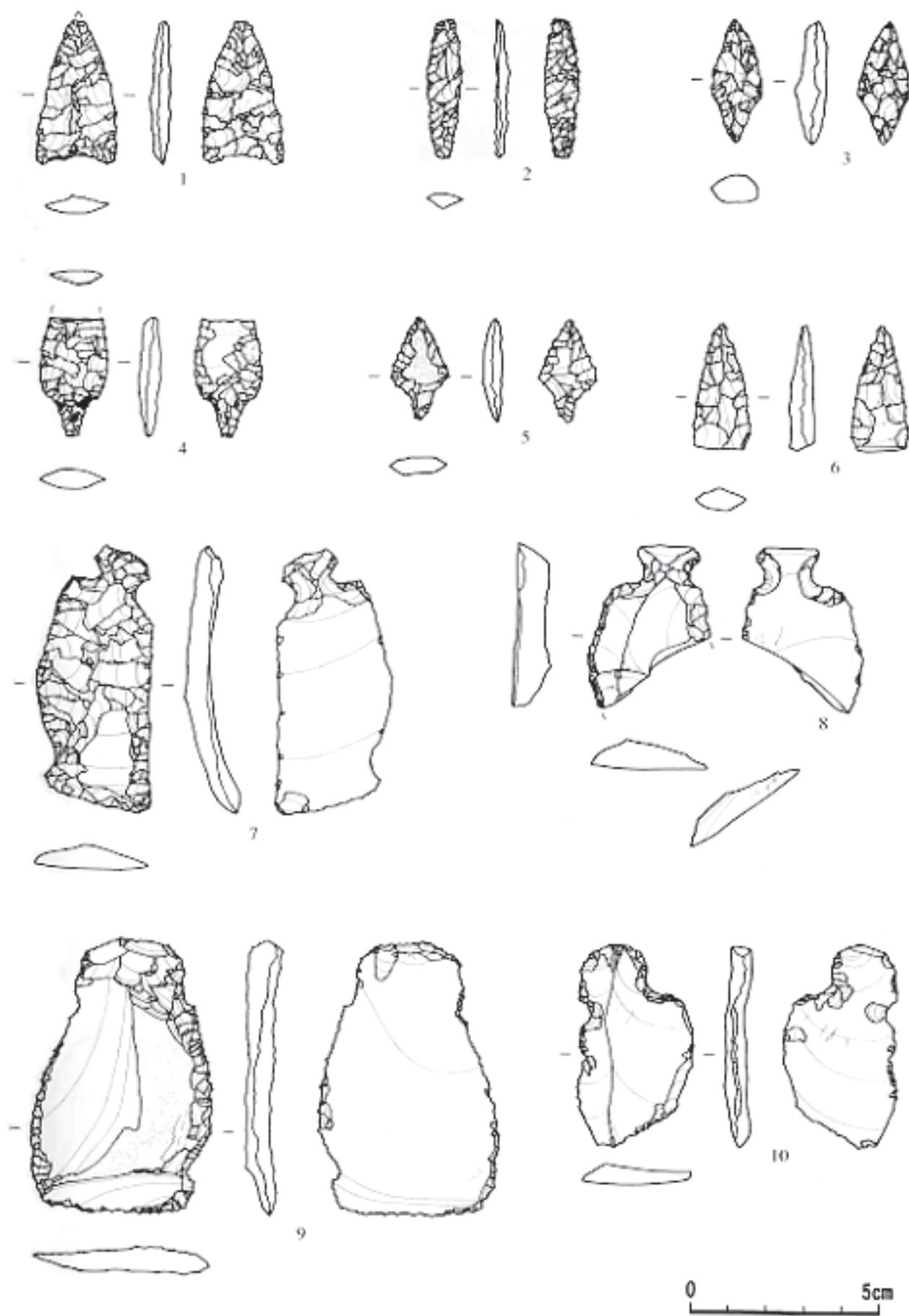
遺物集中ブロックから1点、遺構外から6点出土した。柱状節理の石英安山岩を用いている。第30図1以外の礫面には、スリ・敲打・凹みの痕跡がない。

Q群 石皿・台石（第30図12、第41図7、第62図5、第104図3・4）

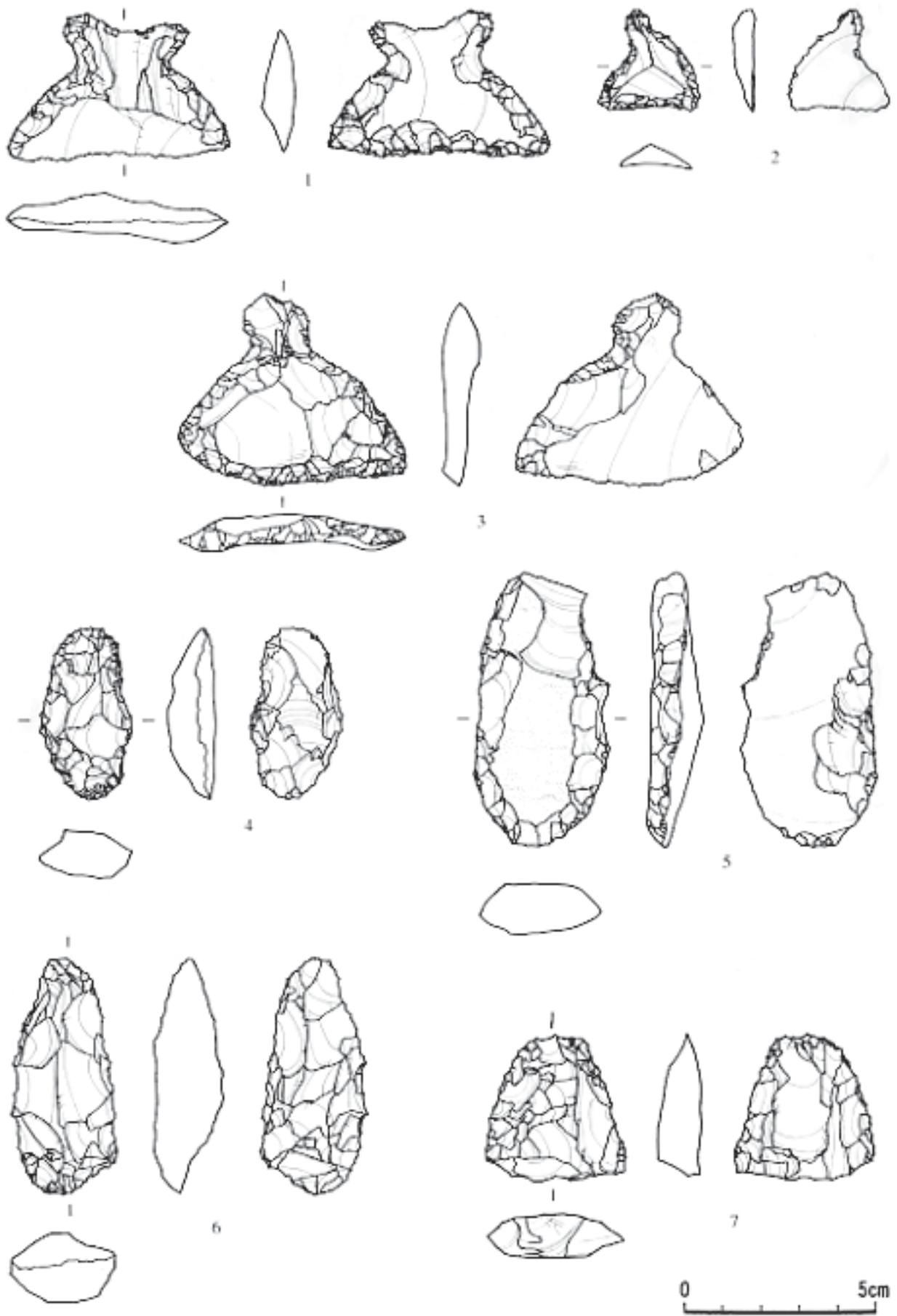
遺構内から3点、遺物集中ブロックから1点、遺構外から2点出土した。大型の礫を用い、器面にスリ痕、敲打痕、凹痕のあるものである。使用面がスリによるものを石皿、敲打によるものを台石とし、それぞれ1類、2類とした。

1類は、遺構内から3点、遺構外から2点出土した。第29図12と第41図7は、器面がスリにより凹状にくぼみ、稜が作り出されている。

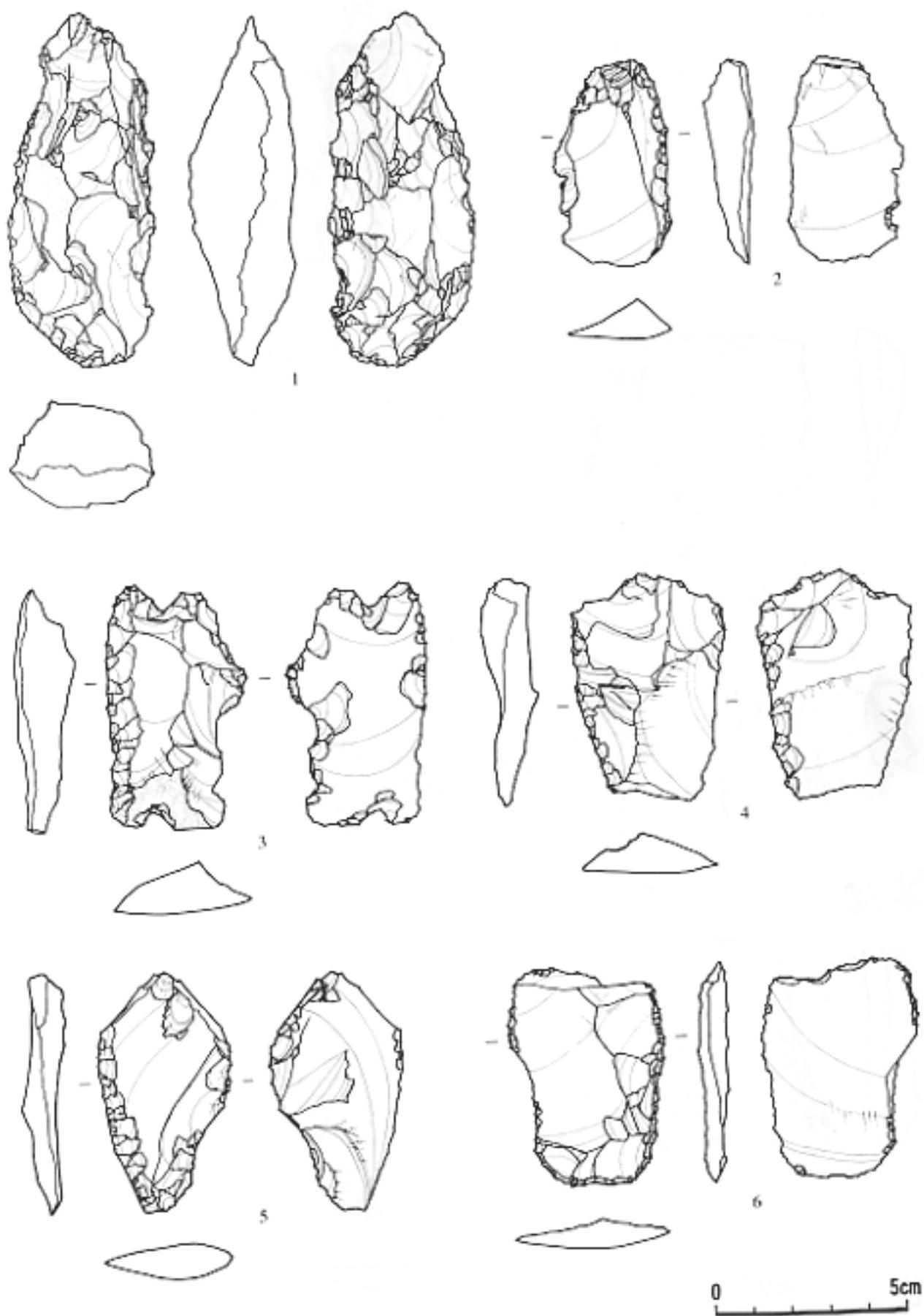
2類は1点出土した。



第93图 C区遺構外出土石器1



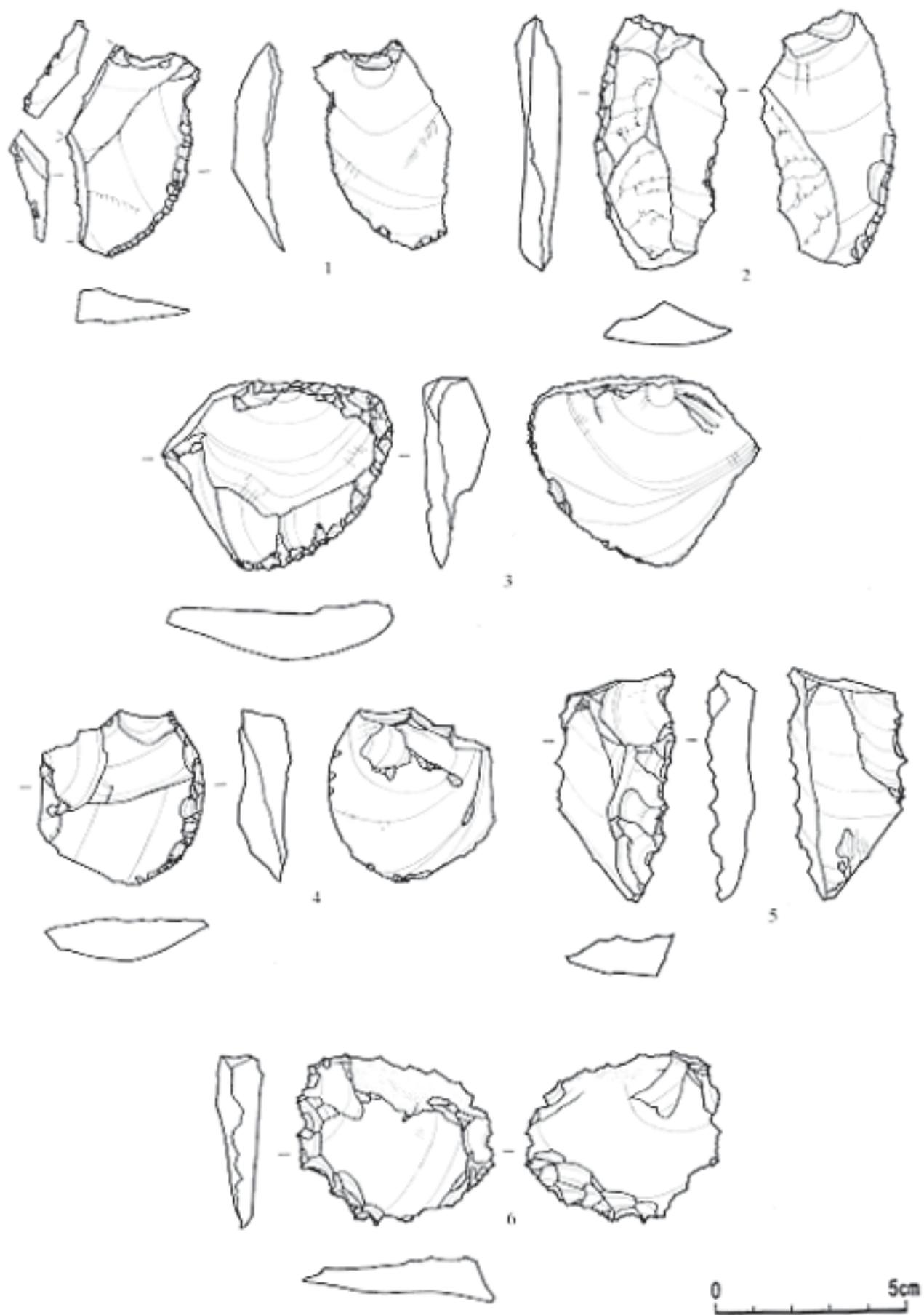
第94图 C区遺構外出土石器2



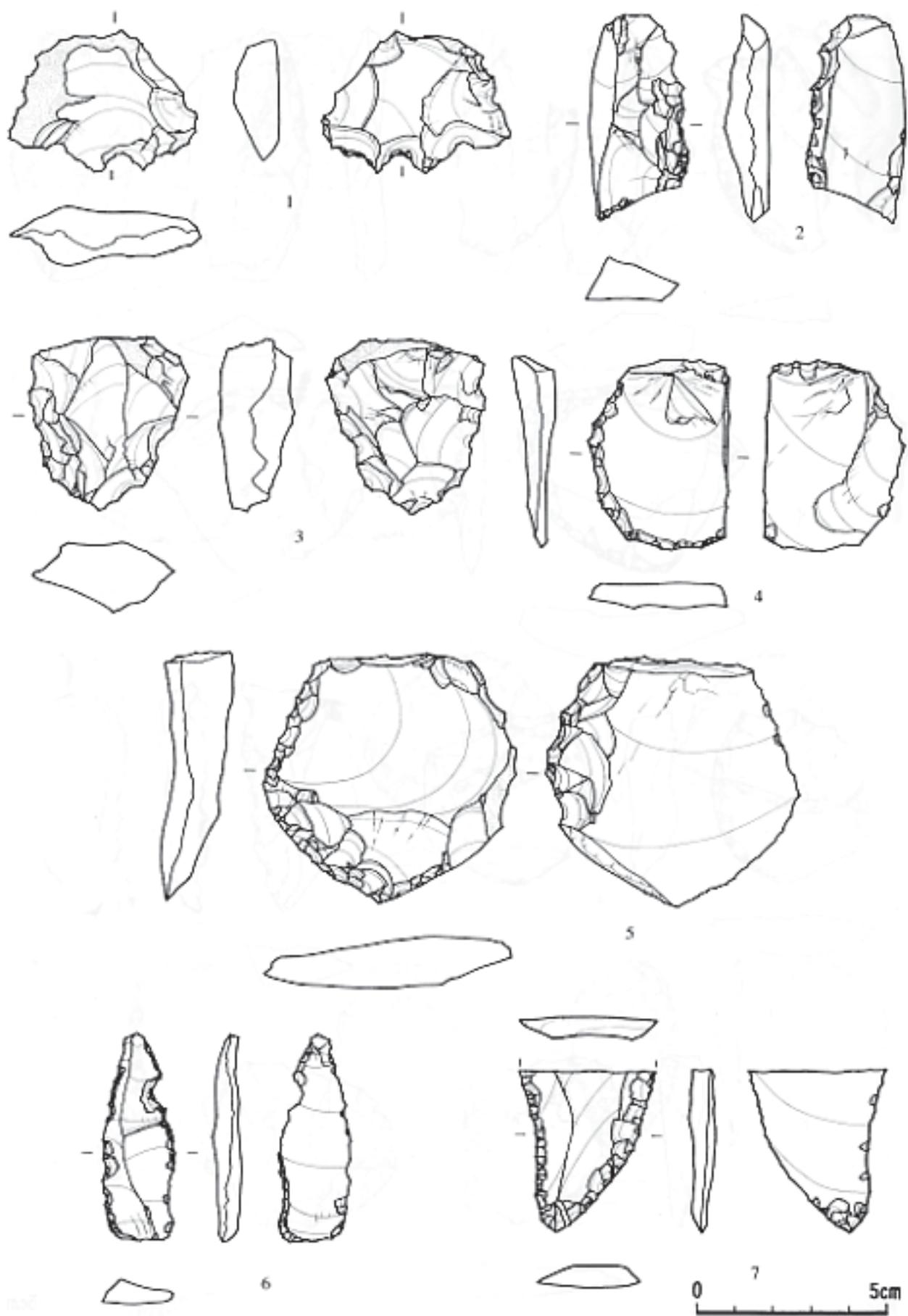
第 95 图 C 区遺構外出土石器 3



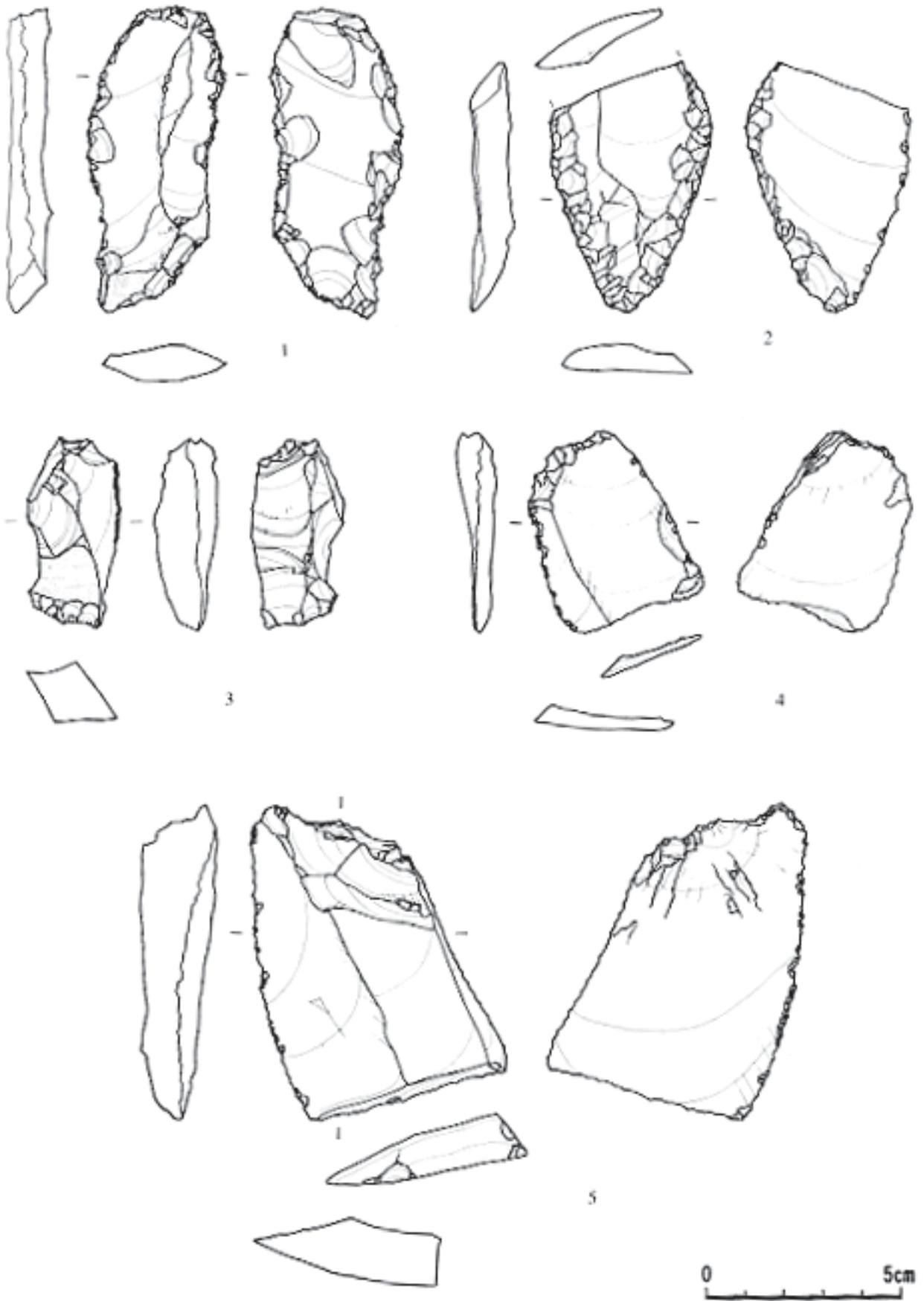
第96图 C区遺構外出土石器4



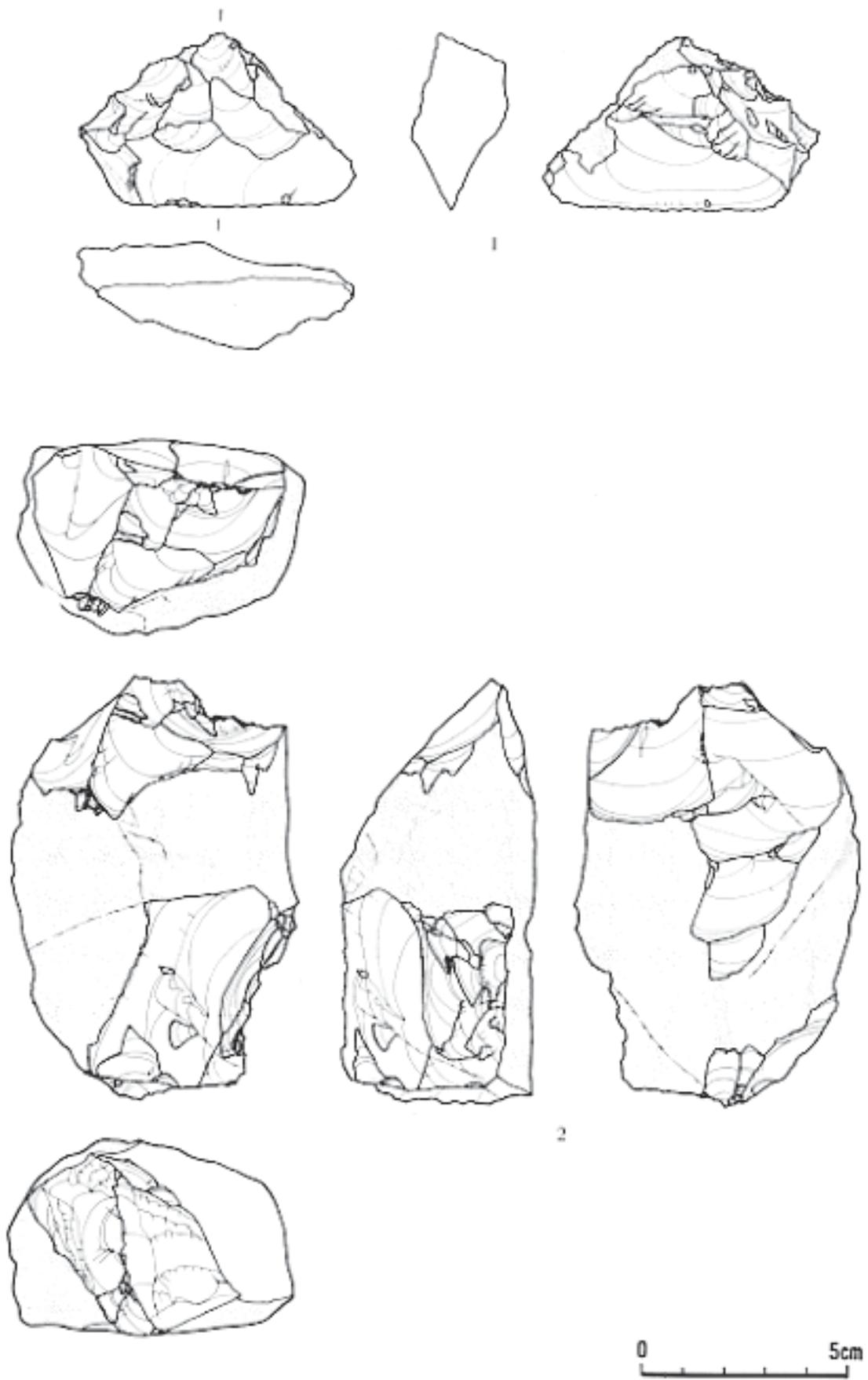
第97图 C区遺構外出土石器5



第98图 C区遺構外出土石器6



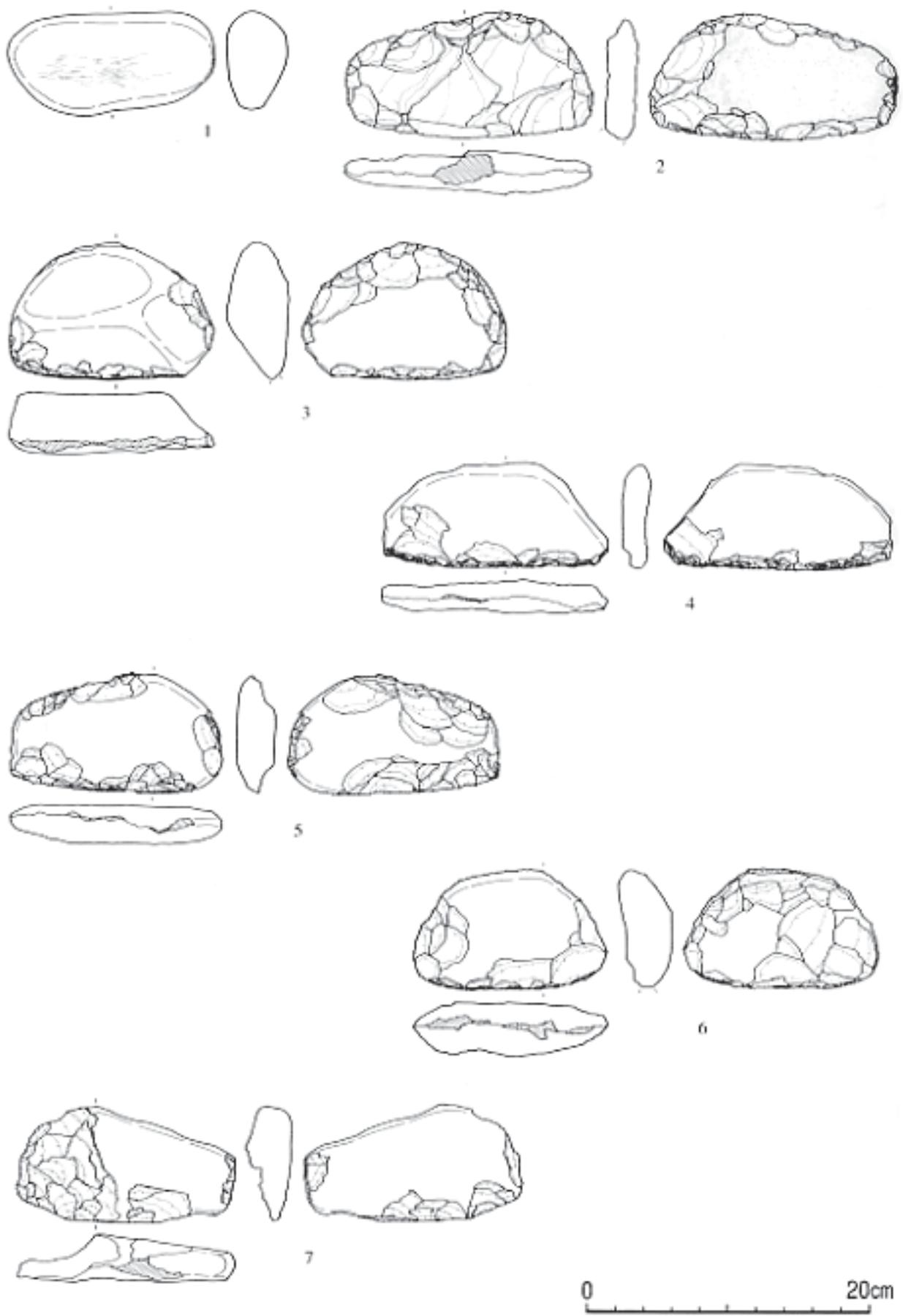
第99图 C区遺構外出土石器7



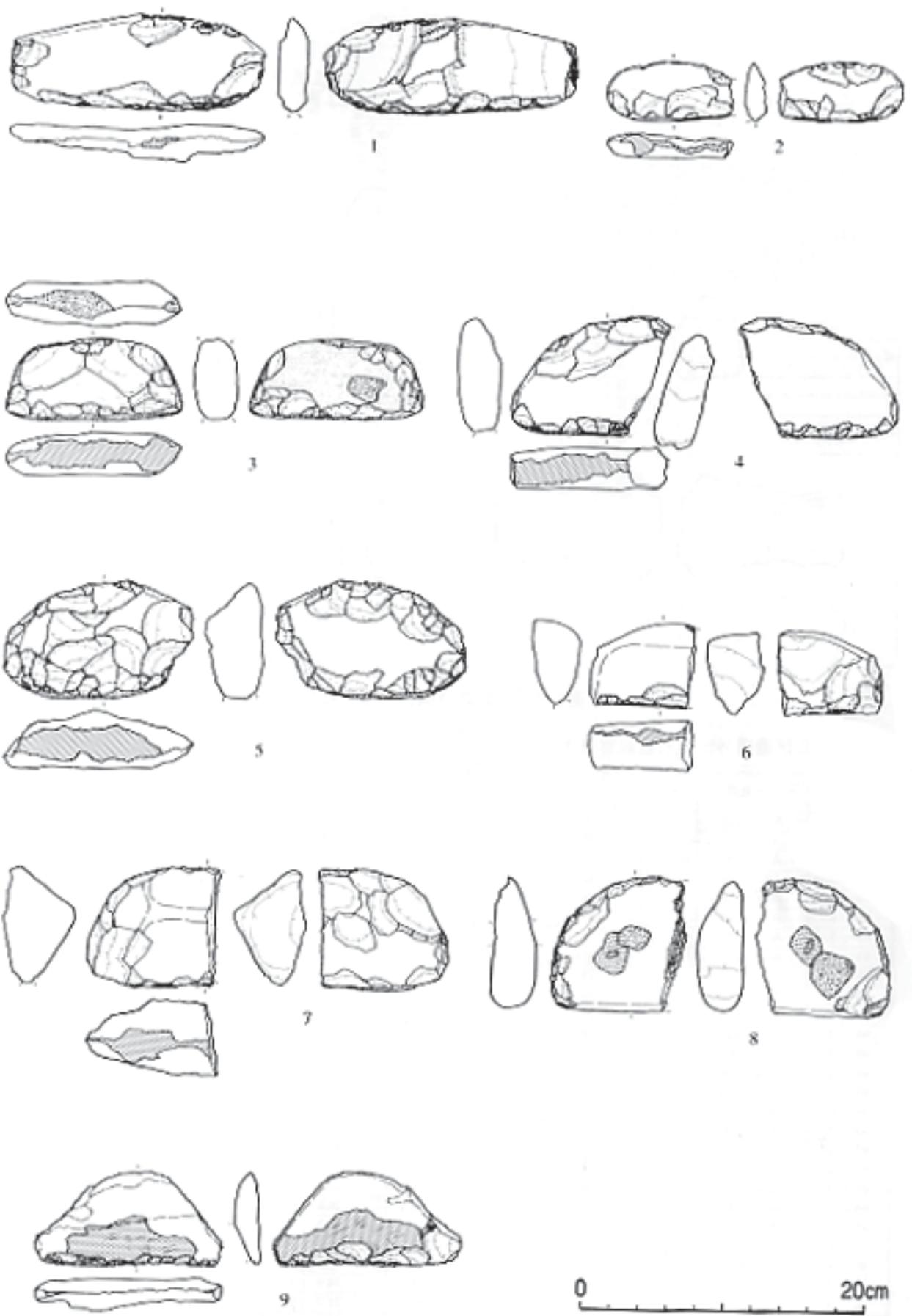
第100图 C区遺構外出土石器8



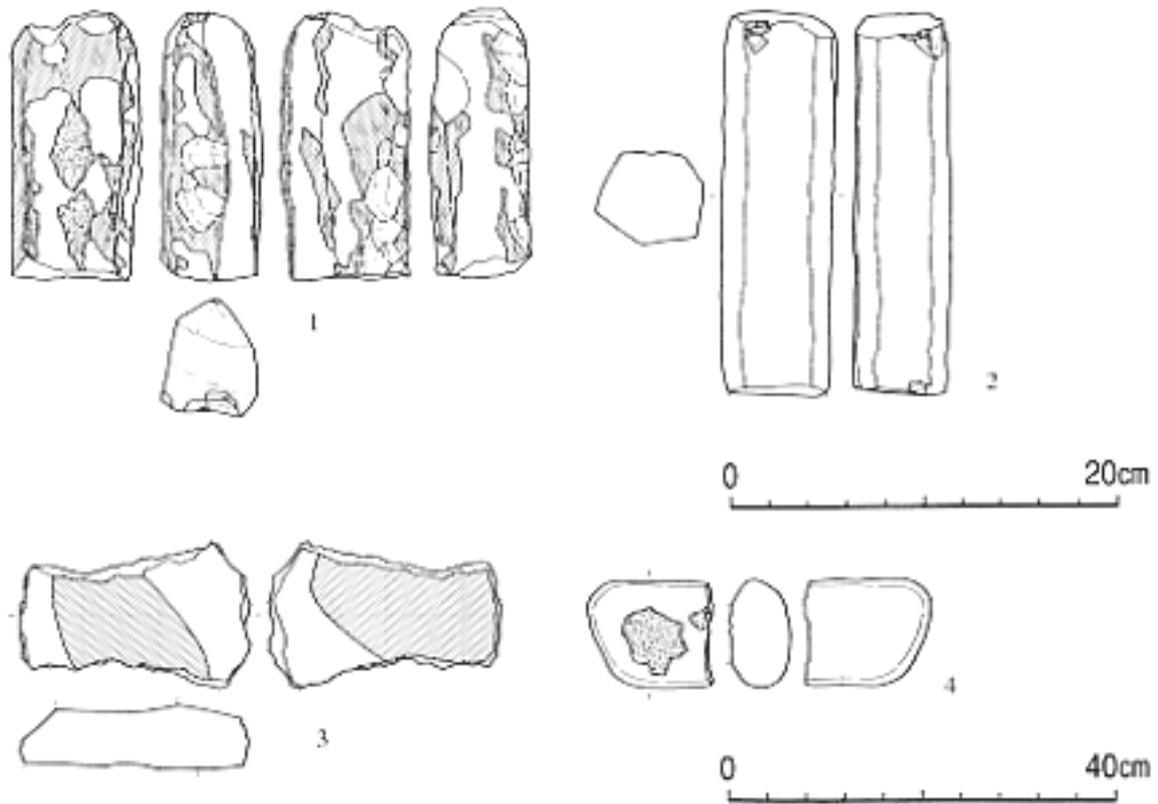
第101图 C区遺構外出土石器9



第102图 C区遺構外出土石器10



第103图 C区遺構外出土石器11



第104図 C区遺構外出土石器12

第48表 C区遺構外出土石器観察表

図版番号	出土地点	層位	最大計測値				石質	分類	備考
			長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)			
93- 1	AG-112	木	(39)	22	4	(3.6)	珪・頁	A-2	
93- 2	不明		38	95	4	1.3	珪・頁	A-2	
93- 3	AH-107	カクラン	34	14	9	3.5	珪・頁	A-4	
93- 4	AG-104	Ⅱ	(32)	18	7	(3.3)	珪・頁	A-4	
93- 5	AH-105	Ⅰ	28	15	4	1.5	珪・頁	A-A	
93- 6	AG-110	Ⅰ	(34)	15	7	(3.1)	珪・頁	A	
93- 7	AG-110	Ⅰ～Ⅲ	73	31	13	16.8	珪・頁	D-1	
93- 8	AD-105	Ⅲ	(45)	(34)	11	(9.4)	珪・頁	D-1	
93- 9	G-97	Ⅰ	75	49	10	34.2	珪・頁	D-1	
93-10	AF-112	カクラン	56	31	7	9.6	珪・頁	D-1	
94- 1	AD-104	Ⅳ	59	40	14	19.8	珪・頁	D-2	
94- 2	AG-111	Ⅰ～Ⅳ	28	27	7	2.4	珪・頁	D-1	
94- 3	AD-83	カクラン	52	61	10	22.5	珪・頁	D-2	
94- 4	AG-109	Ⅱ	46	24	13	13.4	珪・頁	E	
94- 5	AI-109	Ⅱ	75	37	15	37.4	珪・頁	E	
94- 6	AG-110	Ⅰ	66	28	19	29.1	珪・頁	E	
94- 7	AG-108	Ⅱ	(40)	37	12	(17.8)	珪・頁	E	
95- 1	AG-107	Ⅰ	95	39	29	95.5	珪・頁	E	
95- 2	AE-110	Ⅰ	56	31	13	14.8	珪・頁	G-1	
95- 3	AD-111	Ⅱ	66	38	16	29.4	珪・頁	G-1	
95- 4	AG-108	Ⅱ	61	41	14	29.5	珪・頁	G-1	
95- 5	AF-105	Ⅰ	64	35	12	20.2	珪・頁	G-1	
95- 6	AG-108	Ⅱ	60	43	8	1.4	珪・頁	G-1	
96- 1	AF-110	カクラン	42	34	11	12.9	珪・頁	G-1	
96- 2	AG-98	カクラン	68	39	18	34.9	珪・頁	G-1	
96- 3	AG-109	Ⅰ	49	46	13	21.7	珪・頁	G-1	
96- 4	表採		45	56	12	18.1	珪・頁	G-1	
96- 5	AC-107	カクラン	60	49	15	36.3	珪・頁	G-1	
96- 6	AD-114	Ⅳ	51	30	8	10.0	珪・頁	G-2	

第49表 C区遺構外出土石器観察表2

図版番号	出土地点	層位	最大計測値				石質	分類	備考
			長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)			
97- 1	AH-96	カクラン	57	37	13	16.9	珪・頁	G-2	
97- 2	AG-108	Ⅱ	70	36	11	23.8	珪・頁	G-2	
97- 3	AF-108	Ⅰ	62	56	17	41.1	珪・頁	G-2	
97- 4	AI-109	Ⅱ	47	45	14	23.8	珪・頁	G-2	
97- 5	AD-105	カクラン	63	33	13	21.1	珪・頁	G-4	
97- 6	AG-111	Ⅳ	53	47	13	29.9	珪・頁	G-4	
98- 1	AD102	カクラン	68	68	18	78.9	珪・頁	G-3	
98- 2	AC-107	カクラン	50	37	16	23.4	珪・頁	G-4	
98- 3	AG-109	Ⅰ	57	27	13	17.5	珪・頁	G-4	
98- 4	AG-112	Ⅳ	47	43	20	37.2	珪・頁	G-3	
98- 5	AF-106	Ⅱ	52	(33)	13	(17.6)	珪・頁	G-3	
98- 6	AF-108	Ⅱ	57	20	8	6.5	珪・頁	G-5	
98- 7	AE-102	カクラン	(44)	37	7	9.7	珪・頁	G-6	
99- 1	AF-110	木痕	81	37	12	29.8	珪・頁	G-5	
99- 2	AE-108	Ⅱ	(67)	43	12	(20.1)	珪・頁	G-6	
99- 3	AG-111	カクラン	51	(24)	16	(17.5)	珪・頁	G-6	
99- 4	AG-108	Ⅱ	58	45	10	10.2	珪・頁	H	
99- 5	AE-103	Ⅲ	83	71	20	85.7	珪・頁	H	
100- 1	AG-110	Ⅱ	68	44	26	51.8	珪・頁	H	
100- 2	AF-103	Ⅱ	106	71	48	401	珪・頁	J	
101- 1	AE-109	Ⅱ	93	56	37	219	頁	L-2	
101- 2	AH103・104	カクラン	73	43	12	75	粘	L-2	
101- 3	AI-111	Ⅰ	(93)	56	37	(104)	閃	L-2	
101- 4	AG-110	Ⅰ	119	53	36	288	石・安	M-1	
101- 5	AG-112	Ⅰ・Ⅱ	79	64	45	272	安	M-2	
101- 6	AG-112	カクラン	103	81	36	274	石・安	M-1	
101- 7	AE-102	カクラン	(83)	49	27	(180)	凝	M-2	
101- 8	AG-111	Ⅳ	62	59	39	158	石・安	M-2	
101- 9	AG-93	カクラン	118	78	63	602	石・安	M-2	
101-10	AH-112	Ⅳ	(69)	57	30	(130)	石・安	M-2	
101-11	AF-110	Ⅳ	93	57	29	154	流	M-3	
101-12	AH-110	Ⅱ	(113)	95	43	(588)	安	M-4	
101-13	AF-112・113	Ⅰ	92	70	35	314	安	M-4	
101-14	AE-103	カクラン	120	74	34	384	安	M-5	
101-15	AF-110	カクラン	168	88	20	300	珪・頁	M-6	
102- 1	AG-109	Ⅰ	148	75	43	(552)	石・安	M-6	
102- 2	AG-113	カクラン	178	91	32	534	安	N-1	
102- 3	AD-109	Ⅳ	146	110	46	830	安	N-1	
102- 4	AE-92	不明	164	71	22	332	頁	N-1	
102- 5	AD-110	カクラン	152	87	29	470	安	N-1	
102- 6	AE-104	カクラン	139	87	38	614	安	N-1	
102- 7	AG-111	Ⅰ・Ⅱ	160	85	34	476	安	N-1	
103- 1	AI-110	Ⅱ	181	69	26	322	変・安	N-1	
103- 2	AF-109	Ⅱ	89	43	18	78	凝	N-1	
103- 3	AG-107	Ⅱ	(94)	87	54	(496)	安	N-3	
103- 4	AG-110	Ⅱ	(74)	61	36	(230)	安	N-3	
103- 5	AG-109	Ⅳ	124	58	32	320	凝	N-2	
103- 6	AH-114	Ⅳ	(97)	98	34	(404)	安	N-4	
103- 7	AG-111	Ⅰ・Ⅱ	(113)	85	30	(420)	安	N-2	
103- 8	AI-109	Ⅱ	136	85	42	590	安	N-2	
103- 9	AG-108	Ⅰ	139	68	23	190	石・安	0	
104- 1	AG-108	Ⅰ	142	68	63	752	石・安	P	
104- 2	AE-103	カクラン	204	61	51	1236	石・安	P	
104- 3	AE-102	Ⅳ	244	156	66	3465	安	Q-1	
104- 4	AC-106	カクラン	130	112	31	1430	石・安	Q-2	

3) 土製品

C区出土の土製品は、土偶が1点、ミニチュア土器が7点、円形土版が1点、土器片利用土製品が6点、焼成粘土塊が2点、その他の土製品が1点出土した。

ここでは、遺構内と遺構外から出土した土製品について、併せて記述してゆく。

土偶（第105図1）

人間の形態を抽象化して製作された土製品である。従来から板状土偶として呼称されているものが、遺跡外から1点出土した。脚部もしくは腕部と思われる一部が残存し、実測図は脚部を想定した状態で掲げた。主としてLRの側面圧痕（以下、圧痕）が施されている。一辺が突出する面を正面とし、斜行する圧痕及び蕨の芽にも似た圧痕が施されている。裏面は、側面に直交する圧痕、その上下に斜行する圧痕が施されている。側面は、縦位に平行する圧痕が施され、裏面の斜行する圧痕から蕨の芽状を呈する圧痕が伸びている。施文文様の類似性から、第I群2類土器に比定され、縄文時代前期末葉～中期初頭に製作されたものと考えられる。

ミニチュア土器（第19図12、第36図9、第65図1、第65図2、第87図1、第105図2～4）

器高ならびに底径が5cm未満の小型の土器を一括した。第1号竪穴式住居跡から1点（第19図12）、第6号竪穴式住居跡から1点（第36図9）、第1号土坑から1点（第65図1）、第41号土坑から1点（第65図2）、遺物集中ブロックから1点（第87図1）、遺構外から3点（第105図2～4）の計7点出土した。

器形から資料をみた場合、鉢形と台付鉢形を呈するものがあり、成形からみた場合には、底部又は台部の径が3cm未満に推定されるものが手捏ねに（第19図12、第65図2、第105図2～4）、径がそれ以上のものが巻き上げもしくは輪積みによるもの（第36図9、第65図1、第87図1）が認められる。文様は、Rの結節回転文が施されているもの（第105図2）が1点で、その他は無文である。胎土等の観察から、本調査で出土した第I群土器の胎土に類似していることから、縄文時代前期末葉～中期初頭に製作されたものと思われる。

円形土版（第87図2）

平面形が円形を呈する土版である。遺物集中ブロックから1点出土した。中央部が若干くぼんでおり、胎土中に砂粒が多量に含まれている。本資料が第I群2類土器と共伴していることから、縄文時代前期末葉～中期初頭に製作されたものと考えられる。

土器片利用土製品（第87図3・4、第105図5～8）

土器の破片を打ち欠いたり研磨して、円形ならびに三角形に形作られた土製品である。円形を呈するものが遺物集中ブロックから2点（第87図3・4）、遺構外から3点（第105図5～7）の計5点、三角形を呈するものが遺構外から1点（第105図8）出土した。

円形を呈するものでは、その素材を深鉢形土器の胴部破片を選択しており、結果、縄文地のものを使用している。加工状況を見ると、打ち欠きと一部研磨（第105図5）と全周に研磨（第87図3・4、第105図6～7）が施されているものが認められ、後者のうち2点は中心に両面から穿孔され、1点は貫通途中のものである（第105図6）。

三角形を呈するものも、その素材を深鉢形土器を選択しており、波状口縁部の破片を使用している。その為、一辺が丸みを帯びた状態になっており、その口縁部に平行して無節あるいは単節の側面圧痕が施されている。逆三角形の先端部が欠損しているが、そのほかの二辺は打ち欠きにより形作られ、全体的にはハート形の平面形が予想される。

資料はいずれも、胎土等の観察や、一部の資料が第Ⅰ群2類土器と供伴していることから、縄文時代前期末葉～中期初頭に製作されたものと考えられる。

なお、平成7・8年度に刊行した本遺跡の発掘調査概報において、円形を呈する当該資料を「円盤状土製品」として扱ったが、調査の結果、前記の「円形土版」が出土したこともあって、その混同を避けるため、名称を変更した。

焼成粘土塊（第19図13、第87図5）

焼成を受けた不定形の粘土の塊である。第1号竪穴式住居跡から1点（第19図13）、遺物集中ブロックから1点（第87図5）の計2点が出土した。紐状を呈するもの（第19図13）と概ね球状を呈するもの（第87図5）がみられ、前者はやや丁寧なミガキを施した後に、後者は一度握って離したものをそのまま焼きあげている。胎土等の観察、住居跡の埋没過程期（堆積状況）、遺物集中ブロックで第Ⅰ群2類土器と共伴していることから、縄文時代前期末葉～中期初頭に製作されたものと考えられる。

その他の土製品（第105図9）

本遺跡では異質かつ、他遺跡でも現時点で類例を探ることができなかった遺物が遺構外から1点出土した。何かを模倣もしくは抽象化して製作された土製品と思われ、土偶の頭部、動物等を対象としたものとも推定される。ここでは、仮に土偶頭部として想定し記述していくこととする。

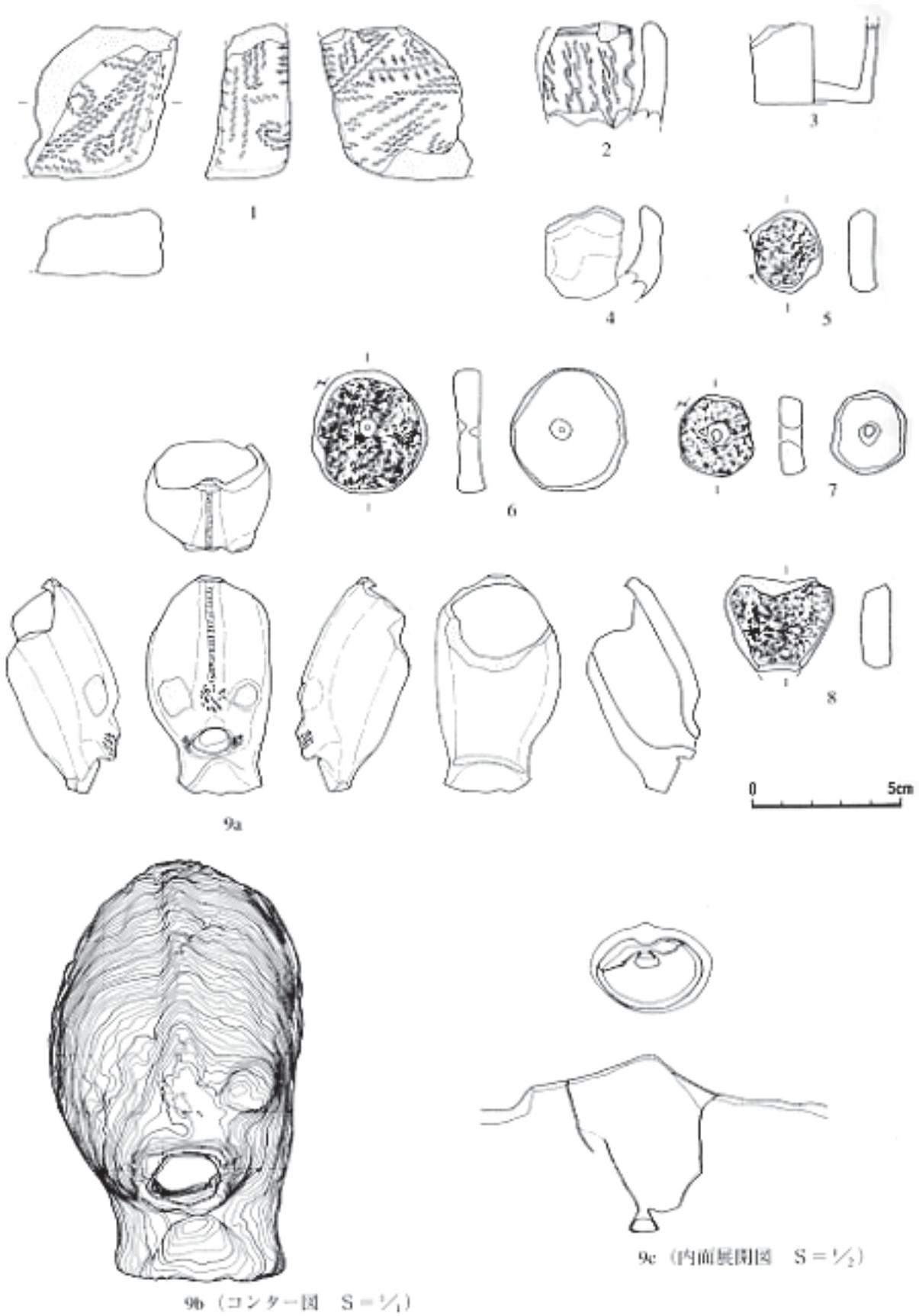
本資料を大まかな部位に分けた場合、首、顔面（頭部下半）、額（頭部上半）、後頭部（裏面）に区分できる。以下、順を追って説明すると、首にあたる部分は、その正面がつまんで折り返されたような突起が施され、ノドボトケとしてもみることができる。裏面は、若干くぼんでおり、そこに赤色顔料が塗布され、その上部に弧状の粘土紐貼付の剥落痕が観察される。

顔面にあたる部分は、突出する口が穿孔され、その両脇に7～8点の刺突がみられる。また、目を突出させて表現しているが、途中で欠損している。鼻は20点程の刺突で表され、額の方へと伸びる鼻筋と共に若干隆起している。額にあたる部分は長く、その上半の一部が欠損し中空であることが断面から観察できる。また、鼻筋が欠損部に近いところまで伸びてきており、線状に隆起している部分に連続する刺突がみられる。鼻筋が切れるその直上には横位の沈線も施されている。後頭部にあたる部分は、全体に縦位方向のナデが施されており、正面まで続く。

製作方法については、2枚の粘土板を使用し、1枚目を顔面として整形、2枚目を側頭部から後頭部として1枚目の粘土板と貼り合わせている。内面を観察すると、1枚目の口としての孔を避けるように2枚目を貼り合わせ、その継ぎ目を擦り消している部分もみられる（第106図9c）。

本資料は、胎土等からみた場合、縄文後期前葉の土器群と類似し、中空という製作技法からみた場合縄文時代後期後葉から弥生時代に相当するものとして考えられるが、類似製品が未だ見当たらないことから、製作時期の詳細については不明である。

（児玉大成）



第105図 C区遺構外出土土製品

第 50 表 C 区遺構外出土土製品観察表

図版番号	出土地点	層位	種類	特徴・計測値 (cm, g) 等
105- 1	AH-114・115	カクラン	土偶	胸部と思われる、LR圧痕、重さ68.2
105- 2	AG-108	I	ミニチュア土器	R回転文、手捏ね、器高3.7、重さ10.5
105- 3	AG-109	I	ミニチュア土器	無文、手捏ね、器高2.7、重さ21.4
105- 4	AG-109	I	ミニチュア土器	無文、手捏ね、器高3.2、重さ7.6
105- 5	AG-112	カクラン	土器片利用土製品	RL縄文、長さ2.8、幅2.4、厚さ0.9、重さ7.6
105- 6	AF-101	カクラン	土器片利用土製品	RL縄文、穿孔途中、長さ4.3、幅4.0、厚さ0.9、重さ19.7
105- 7	AC-107	IV	土器片利用土製品	RL縄文、穿孔、長さ2.9、幅2.5、厚さ0.8、重さ6.6
105- 8	AH-110	I	土器片利用土製品	長さ3.3、幅3.7、厚さ1.0、重さ12.1
105- 9	AG-109	I	その他の土製品	長さ7.4、幅4.4、厚さ3.4、重さ40.2

第4節 D区の調査

D区は調査面積2,252m²であり、遺構は検出されなかった。出土した遺物は非常に少なく、縄文時代前期から後期の土器片が数片、L群2類が1点出土した。134ライン以北はローム面まで削平され盛土されていた。

1. 出土遺物

1) 土器

第I群土器

縄文時代前期末から中期初頭に属する土器群である。胴部破片1点のみの出土である。LR結節第1種が横位に施される。

第III群土器

縄文時代後期中葉から後葉に属する土器群である。胴部破片のみの出土である。胎土に石英が多く含まれる。RL・LR縄文が横位と縦位に施される。

2) 石器

G1類1点とL2類1点の出土である。第106図4は刃部が欠損する。

(沼宮内陽一郎)



第106図 D区遺構外出土土器・石器

第51表 D区遺構外出土土器観察表

図版番号	出土地点	層位	器種	部位	文様	分類	備考
106-1	D区	表採		胴部	結節第一種	I群	
106-2	AC-127	I		胴部	RL縄文・LR縄文	III群	
106-3	AC-127	I		胴部	RL縄文・LR縄文	III群	

第52表 D区遺構外出土石器観察表

図版番号	出土地点	層位	最大計測値				石質	分類	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
106-4	AF-123	I	(85)	49	26	169	閃	L-2	

第IV章 自然科学的分析

桜峯(2)遺跡出土火山灰の蛍光X線分析

奈良教育大学 教授 三 辻 利 一

1. はじめに

青森県内の遺跡で平安時代の地層には化学特性が全く異なる2種類の火山灰が堆積している。一方はK、Rb量が多く、Ca、Sr量が少ない白頭山火山灰であり、他方はK、Rb量が少なく、Ca、Sr量が多い十和田a火山灰である。両者がセットになって堆積している場合は必ず、上位火山灰は白頭山火山灰であり、下位火山灰は十和田a火山灰である。このように、両火山灰は対照的な化学特性をもっているため、たとえ、遺跡に一枚の火山灰しか堆積していなくても、蛍光X線分析によって容易に同定することができる。

本報告では、桜峯(2)遺跡から出土した上位火山灰と下位火山灰の蛍光X線分析の結果について報告する。

2. 分析結果

分析値は表1にまとめられている。全分析値は同時に測定された岩石標準試料JG-1の各元素の蛍光X線強度を使って標準化した値で表示されている。この表示法を使うことによって、微量元素Rb、Srを主成分元素K、Caとほぼ同格に取扱うことができる。これら4元素は母岩の長石類から由来したものと考えられている。

分析結果は図を使って説明する。

図1にはRb-Sr分析図を示す。この分析図は須恵器の地域差を有効に表示する分布図として知られる。図1には白頭山火山灰と十和田a火山灰の多数の試料の分析値を包含するようにして描いた白頭山領域と十和田a領域を示してある。図1をみると、No. 1 (M-90, II上位)は白頭山領域に、また、No. 2 (M-90, II下位)は十和田a領域に分布することがわかる。もし、No. 1が白頭山火山灰、No. 2が十和田a火山灰であるとすれば、両者はそれぞれ、K-Ca分布図やFe、Na因子でも白頭山領域と十和田a領域に対応するはずである。

図2にはK-Ca分布図を示す。予想どおりに、No. 1は白頭山領域に、また、No. 2は十和田a領域に分布することがわかる。

図3、図4には、Fe因子とNa因子での対応を示してある。まず、Fe因子では予想どおり、No. 1は白頭山領域に、また、No. 2は十和田a領域に対応することを示している。さらに、Na因子でもそれぞれ、No. 1は白頭山領域に、No. 2は十和田a領域に対応した。

この結果、K、Ca、Rb、Sr、Fe、Naの全因子でNo. 1は白頭山領域に、また、No. 2は十和田a領域に対応したことになり、それぞれ、白頭山火山灰、十和田a火山灰に同定された。

表1 分析値

			K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	判定
No1	M-90 II	上位火山灰	0.881	0.443	2.45	0.892	0.292	1.02	白頭山火山灰
No2	M-90 II	下位火山灰	0.402	1.19	1.5	0.281	1.1	0.726	十和田a火山灰

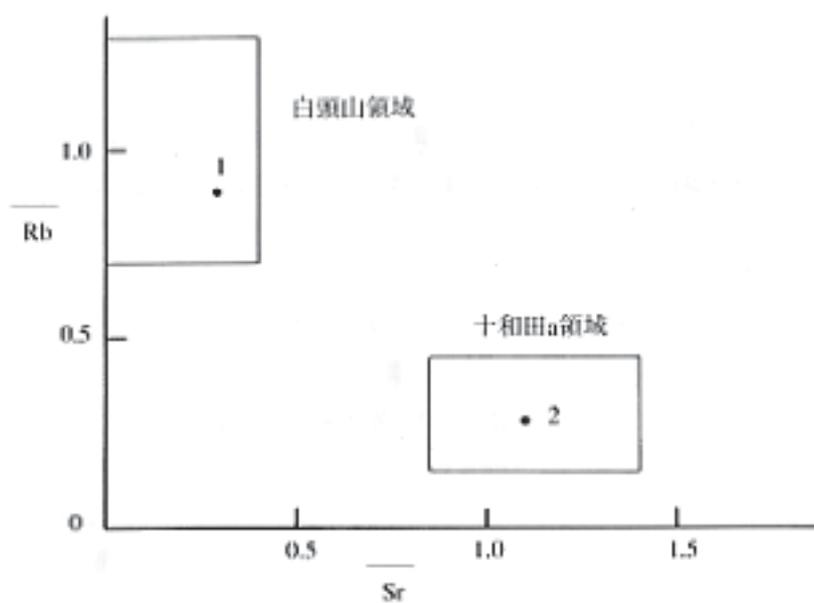


図1 Rb-Sr 分布図

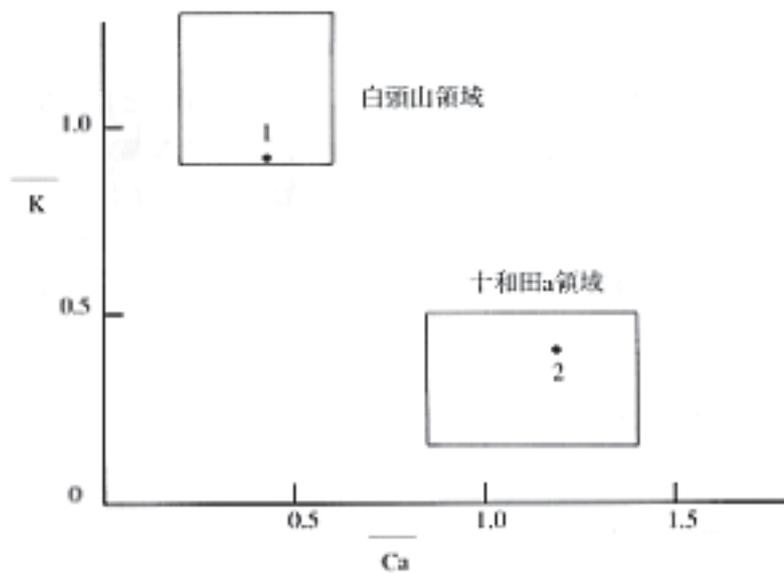


図2 K-Ca 分布図

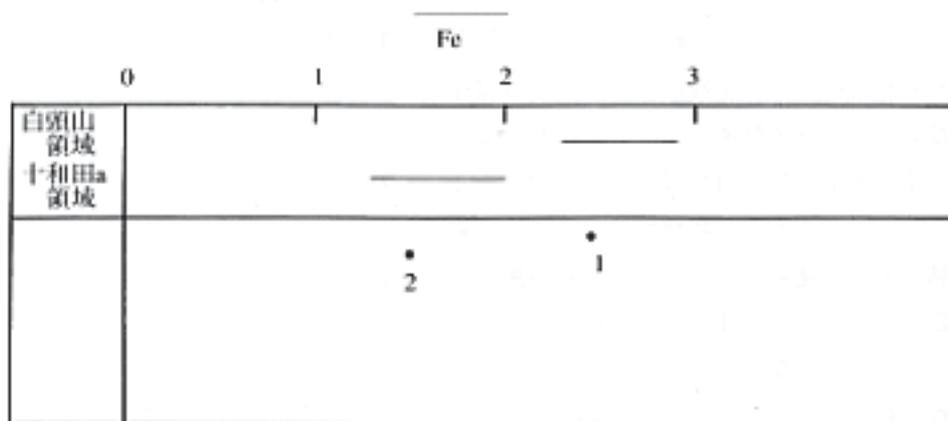


図3 Fe因子の比較

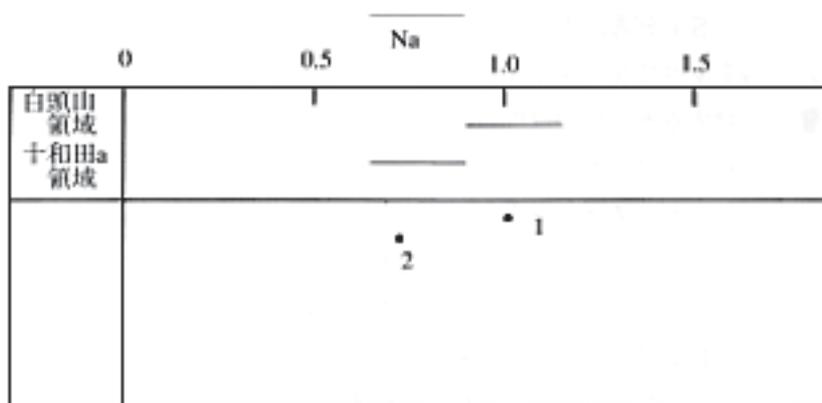


図4 Na因子の比較

注. 青森市埋蔵文化財調査報告書 第26集桜峯(2)遺跡発掘調査報告書の例言5により、桜峯(2)遺跡発掘調査に関する依頼原稿についても本報告書に記載する。

桜峯 (1) 遺跡出土火山灰と須恵器の蛍光 X 線分析

奈良教育大学 教授 三 辻 利 一

1. はじめに

十和田 a 火山灰と白頭山火山灰の化学特性はほぼ確定したので、周囲の土壌による汚染を考慮に入れば、両火山灰の同定は蛍光 X 線分析によって容易にできる。次の問題はこの方法を使って、多数の遺跡から出土する火山灰を分析し、鍵層としての役割を十分果たさせることである。

他方、五所川原窯群出土須恵器の化学特性もほぼ確定しており、青森県内及び、北海道の遺跡から出土する須恵器が五所川原窯群産かどうかを判断することも十分可能である。問題は青森県内の遺跡から出土する搬入品と推定される須恵器の産地問題である。これまでのデータをみる限り、その胎土は単純に一色ではない。少なくとも、数種類はあるようである。しかし、その大半のものには K、Rb 量が多く、日本海側の製品と見られている。これらの搬入品の産地の特定には、同時期の日本海側の地域の窯群の整理が必要であり、昨年度、山形、秋田県下の窯跡出土須恵器が大量に分析された。その整理が終わり次第、その産地はかなりしぼられることになろう。ただ、現段階では五所川原窯群産か、搬入品かの判断に止めておく。

2. 分析結果

今回分析した火山灰と須恵器の分析値は表 1 にまとめられている。この生データに基づいて作成した Rb - Sr 分布図と K - Ca 分布図を図 1、2 に示す。両図とも、分析した火山灰は十和田 a 領域に分布し、十和田 a 火山灰であることを示している。また、Fe 量も十和田 a 領域に対応しており、外見上は白い火山灰である。Na 因子からみても、周辺の土壌による汚染は少なく、したがって図 1、2 においても、十和田 a 領域内に分布した。

次は、3 点の須恵器の Rb - Sr 分布図を図 3 に、K - Ca 分布図を図 4 に示してある。両図には 60 点の五所川原窯群出土須恵器をすべて包含するようにして、五所川原領域を描いてある。No. 1、3 の 2 点は両図とも五所川原領域に対するが、No. 2 は明らかにずれており、外部地域からの搬入品と推定される。五所川原窯群の製品と判断するにはもう一つ重要な因子が対応する必要がある。五所川原窯群の製品には Fe 量が多く、胎土は暗灰色、又はチョコレート色をしている。JG - 1 の標準化値にして、3.0 以上の値をもつ。No. 1、3 はこの点でも十分、五所川原窯群に対応する。Na 因子でも十分対応している。このことから、No. 1、3 の 2 点の須恵器は五所川原窯群産と推定される。

No. 2 は搬入品であるが、K、Rb 量の多さから、秋田県内の製品でもない。山形県の日本海側か、新潟県辺りに産地を求めなければならないだろう。現時点でいえることはここまでである。

表1 分析値

			K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	判定
No1	R-67 I	須恵器	0.345	0.297	3.19	0.461	0.397	0.241	五所川原窯群
No2	AA-55 I	須恵器	0.713	0.133	2.69	0.703	0.409	0.2	外部からの搬入品
No3	AE-78付近	須恵器	0.332	0.352	3.22	0.418	0.384	0.251	五所川原窯群
	AA-54 溝状遺構内	火山灰	0.383	1.21	1.63	0.251	1.05	0.818	十和田a火山灰

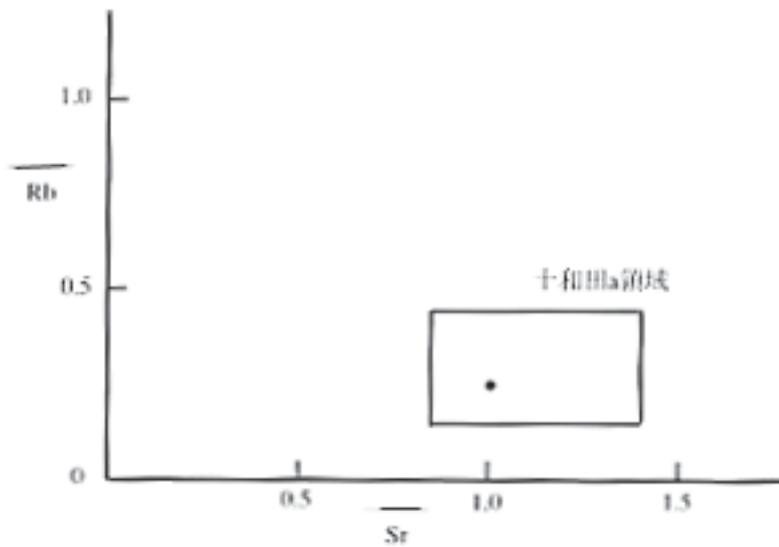


図1 火山灰のRb-Sr 分布図

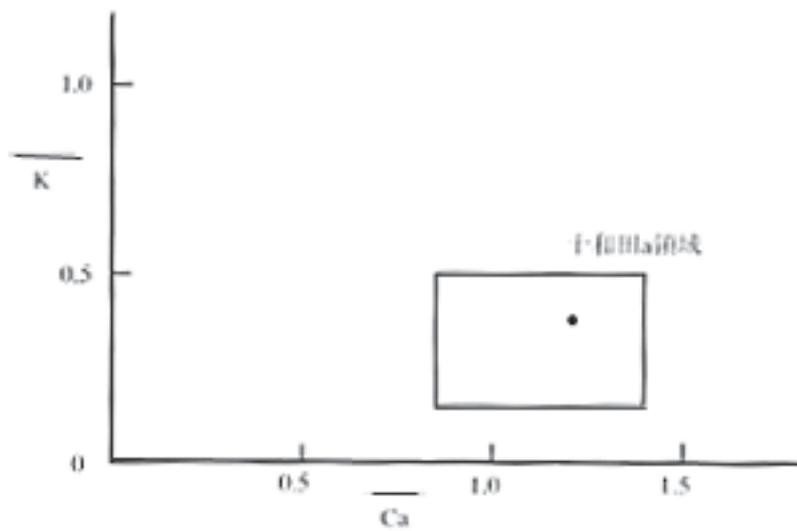


図2 火山灰のK-Ca 分布図

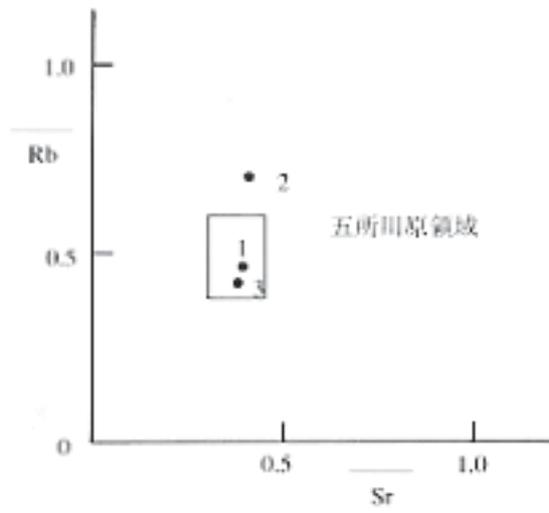


図3 須恵器のRb-Sr 分布図

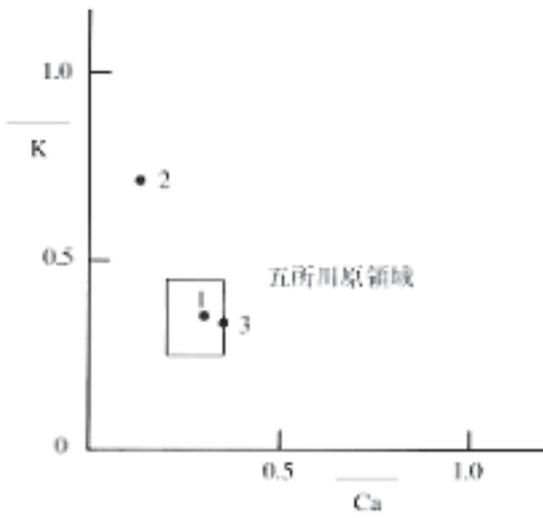


図4 須恵器のK-Ca 分布図

桜峯(1)遺跡出土の黒曜石製遺物の原産地分析

京都大学原子炉実験所 藁科 哲 男

はじめに

石器石材の産地を自然科学的な手法を用いて、客観的に、かつ定量的に推定し、古代の交流、交易および文化圏、交易圏を探ると言う目的で、蛍光X線分析法によりサヌカイトおよび黒曜石遺物の石材産地推定を行なっている。^{1, 2, 3)}

黒曜石、サヌカイトなどの主成分組成は、原産地ごとに大きな差はみられないが、不純物として含有される微量成分組成には異同があると考えられるため、微量成分を中心に元素分析を行ない、これを産地を特定する指標とした。分類の指標とする元素組成を遺物について求め、あらかじめ、各原産地ごとに数十個の原石を分析して求めておいた各原石群の元素組成の平均値、分散などと遺物のそれを対比して産地を推定する。この際多変量解析の手法を用いて、各産地に帰属される確率を求めて産地を同定する。蛍光X線分析法は試料を破壊せずに分析することができて、かつ、試料調整が単純、測定の操作も簡単である。石器のような古代人の日用品で多数の試料を分析しなければ遺跡の正しい性格が分からないという場合にはことさら有利な分析法である。今回分析を行なった青森市桜峯(1)遺跡出土の石匙の産地分析の結果が得られたので報告する。

黒曜石原石の分析

黒曜石原石の風化面を打ち欠き、新鮮面を出し、塊状の試料を作り、エネルギー分散型蛍光X線分析装置によって元素分析を行なう。主に分析した元素はK、Ca、Ti、Mn、Fe、Rb、Sr、Y、Zr、Nbの各元素である。塊試料の形状差による分析値への影響を打ち消すために元素量の比を取り、それでもって産地を特定する指標とした。黒曜石は、Ca/K、Ti/K、Mn/Zr、Fe/Zr、Rb/Zr、Sr/Zr、Y/Zr、Nb/Zrの比量をそれぞれ用いる。

黒曜石の原産地は北海道、東北、北陸、東関東、中信高原、伊豆箱根、伊豆七島の神津島、山陰、九州の各地に分布する。調査を終えた原産地を図1に示す。黒曜石原産地のほとんどすべてがつくされている。元素組成によってこれら原石を分類し表1に示す。この原石群に原産地は不明の遺物で作った遺物群を加えると129個の原石群になる。ここでは北海道地域および一部の東北地域の産地について記述すると、白滝地域の原産地は、北海道紋別郡白滝村に位置し、鹿砦北方2kmの採石場の赤石山の露頭、鹿砦東方約2kmの幌加沢地点、また白土沢、八号沢などより転礫として黒曜石が採取できる。赤石山の大産地の黒曜石は色に関係無く赤石山群(旧白滝第1群)にまとまる。また、あじさいの滝の露頭からは赤石山と肉眼観察では区別できない原石が採取でき、あじさい群を作った(旧白滝第2群)。また、八号沢の黒曜石原石と白土沢の転礫は梨肌の黒曜石で組成はあじさい滝群に似るが石肌で区別できる。

幌加沢よりの転礫の中で70%は幌加沢群になり、あじさい滝群と元素組成から両群を区別できず、残りの30%は赤石山群に一致する。置戸産原石は、北海道常呂郡置戸町の清水の沢林道より採取され、この原石の元素組成は置戸群にまとまる。この原産地は、常呂川に通じる流域にあり、この常呂川流域で黒曜石の円礫が採取されるが現在まだ調査していない。十勝三股産原石は、北海道河東郡上士幌町の十勝三股の十三ノ沢の谷筋および沢の中より原石が採取され、この原石の元素組成は十勝三股群にまとまる。

原産地		分析 個数	元 素 比									
原石群名			Ca/k	Ti/K	Mn/Zr	Fe/Zr	Rb/Zr	Sr/Zr	Y/Zr	Nb/Zr	Al/K	Si/K
北海道	名 寄第一 " 第二	114	0.478±0.011	0.121±0.005	0.035±0.007	2.011±0.063	0.614±0.032	0.574±0.022	0.120±0.017	0.024±0.016	0.033±0.002	0.451±0.010
		35	0.309±0.015	0.103±0.005	0.021±0.006	1.774±0.055	0.696±0.044	0.265±0.011	0.301±0.022	0.026±0.020	0.028±0.007	0.394±0.010
	白 赤 石 山 滝 八 号 沢	130	0.173±0.014	0.061±0.003	0.079±0.013	2.714±0.142	1.340±0.059	0.283±0.019	0.341±0.030	0.073±0.026	0.028±0.002	0.374±0.010
		30	0.138±0.010	0.022±0.002	0.105±0.017	3.123±0.127	1.846±0.065	0.105±0.019	0.475±0.045	0.076±0.046	0.027±0.008	0.359±0.042
	地 棍 加 沢 区 あじさい滝	23	0.139±0.009	0.023±0.001	0.099±0.015	2.975±0.102	1.794±0.077	0.104±0.010	0.470±0.037	0.103±0.027	0.027±0.002	0.369±0.007
		29	0.142±0.010	0.023±0.001	0.101±0.014	3.038±0.076	1.787±0.076	0.115±0.015	0.457±0.035	0.076±0.044	0.027±0.005	0.365±0.011
	近文台第一 " 第二	30	0.819±0.013	0.165±0.006	0.081±0.010	3.266±0.117	0.604±0.031	0.941±0.030	0.165±0.020	0.039±0.016	0.039±0.002	0.457±0.008
		107	0.517±0.011	0.099±0.005	0.067±0.090	2.773±0.097	0.812±0.037	0.818±0.034	0.197±0.024	0.041±0.019	0.035±0.002	0.442±0.009
	" 第三	17	0.514±0.012	0.098±0.005	0.066±0.014	2.765±0.125	0.814±0.068	0.815±0.042	0.199±0.039	0.078±0.008	0.034±0.002	0.443±0.011
		51	0.249±0.017	0.122±0.006	0.078±0.011	1.614±0.068	0.995±0.037	0.458±0.023	0.235±0.024	0.023±0.021	0.022±0.004	0.334±0.013
	秩父別第一 " 第二	25	0.506±0.016	0.098±0.005	0.070±0.011	2.750±0.099	0.805±0.042	0.808±0.032	0.197±0.026	0.027±0.016	0.027±0.003	0.371±0.010
		31	0.253±0.018	0.122±0.006	0.077±0.009	1.613±0.090	1.017±0.045	0.49±0.025	0.233±0.029	0.038±0.018	0.025±0.003	0.370±0.023
	滝 川 第一 " 第二	15	0.510±0.015	0.098±0.005	0.068±0.009	2.740±0.072	0.802±0.019	0.812±0.019	0.192±0.026	0.032±0.023	0.030±0.004	0.393±0.031
		65	0.326±0.008	0.128±0.005	0.045±0.008	1.813±0.062	0.814±0.034	0.454±0.020	0.179±0.023	0.044±0.020	0.030±0.002	0.412±0.010
	置 土	60	0.256±0.018	0.074±0.005	0.068±0.010	2.281±0.087	1.097±0.055	0.434±0.023	0.334±0.029	0.064±0.025	0.029±0.002	0.396±0.013
		41	0.499±0.020	0.124±0.007	0.052±0.010	2.635±0.181	0.802±0.061	0.707±0.044	0.199±0.029	0.039±0.023	0.033±0.002	0.442±0.015
	十 勝 三股 美 蔓 第一 勝 " 第二	28	0.593±0.036	0.144±0.012	0.056±0.010	3.028±0.251	0.762±0.040	0.764±0.051	0.197±0.026	0.038±0.022	0.034±0.002	0.449±0.009
		50	0.254±0.029	0.0070±0.004	0.086±0.010	2.213±0.104	0.969±0.060	0.428±0.021	0.249±0.024	0.058±0.023	0.027±0.002	0.371±0.009
	赤井川第一 " 第二	30	0.258±0.065	0.072±0.002	0.080±0.010	2.207±0.083	0.970±0.045	0.436±0.026	0.245±0.021	0.021±0.029	0.025±0.007	0.371±0.007
		75	0.473±0.019	0.148±0.007	0.060±0.015	1.764±0.072	0.438±0.027	0.607±0.028	0.157±0.020	0.025±0.017	0.032±0.002	0.469±0.013
" 第二	40	0.377±0.009	0.133±0.006	0.055±0.008	1.723±0.066	0.516±0.019	0.513±0.018	0.177±0.016	0.007±0.015	0.030±0.005	0.431±0.010	
	35	0.190±0.015	0.075±0.003	0.040±0.008	1.575±0.0661	1.241±0.046	0.318±0.014	0.141±0.033	0.076±0.021	0.024±0.002	0.348±0.010	
青森県	折 腰 内 出 来 島	27	0.346±0.022	0.132±0.007	0.231±0.019	2.268±0.085	0.865±0.044	1.106±0.056	0.399±0.038	0.179±0.031	0.038±0.003	0.499±0.013
		36	0.080±0.008	0.097±0.011	0.013±0.002	0.697±0.021	0.128±0.008	0.002±0.002	0.064±0.007	0.035±0.004	0.026±0.002	0.379±0.010
	深 六 角 沢 浦 八 森 山	41	0.077±0.005	0.098±0.003	0.013±0.002	0.701±0.018	0.134±0.005	0.002±0.002	0.070±0.005	0.034±0.006	0.027±0.005	0.384±0.009
		28	0.250±0.024	0.069±0.003	0.068±0.012	2.358±0.257	1.168±0.062	0.521±0.063	0.277±0.065	0.076±0.025	0.026±0.002	0.362±0.015
	青 戸 門第一 森 " 第二	28	0.084±0.006	0.104±0.004	0.013±0.002	0.691±0.021	0.123±0.006	0.002±0.002	0.069±0.010	0.033±0.005	0.025±0.002	0.369±0.007
		33	0.344±0.017	0.132±0.007	0.232±0.023	2.261±0.143	0.861±0.052	1.081±0.060	0.390±0.039	0.186±0.037	0.037±0.002	0.496±0.018
	市 鶴 ケ 坂 成 田	47	0.252±0.017	0.068±0.009	0.079±0.033	2.548±0.131	1.149±0.069	0.568±0.108	0.288±0.037	0.049±0.036	0.028±0.005	0.383±0.018
		67	0.253±0.016	0.067±0.008	0.077±0.029	2.519±0.148	1.147±0.065	0.558±0.087	0.286±0.035	0.047±0.040	0.028±0.003	0.385±0.018
	浪 岡	43	0.294±0.009	0.087±0.004	0.220±0.018	1.644±0.081	1.493±0.081	0.930±0.043	0.287±0.039	0.098±0.040	0.029±0.002	0.368±0.008
		45	0.295±0.008	0.087±0.004	0.219±0.017	1.671±0.077	1.503±0.072	0.939±0.054	0.286±0.045	0.108±0.034	0.028±0.006	0.367±0.009
岩手県	雫 石 折 居 花 泉	25	0.636±0.033	0.187±0.012	0.052±0.007	1.764±0.061	0.305±0.016	0.431±0.021	0.209±0.016	0.045±0.014	0.041±0.003	0.594±0.014
		22	0.615±0.055	0.180±0.016	0.058±0.007	1.751±0.062	0.306±0.033	0.421±0.051	0.228±0.079	0.045±0.011	0.041±0.005	0.594±0.055
		30	0.596±0.046	0.177±0.018	0.056±0.008	1.742±0.072	0.314±0.019	0.420±0.025	0.220±0.016	0.044±0.013	0.041±0.003	0.586±0.030
山形県	月 山	44	0.285±0.021	0.123±0.007	0.182±0.016	1.906±0.096	0.966±0.069	1.022±0.071	0.276±0.036	0.119±0.033	0.033±0.002	0.443±0.014
宮城県	湯 倉 塩 釜	21	2.174±0.068	0.349±0.017	0.057±0.005	2.544±0.149	0.116±0.009	0.658±0.024	0.138±0.015	0.020±0.013	0.073±0.003	0.956±0.040
		37	4.828±0.395	1.630±0.104	0.178±0.017	11.362±1.150	0.168±0.018	1.298±0.063	0.155±0.016	0.037±0.018	0.077±0.002	0.720±0.032
新潟県	佐 渡 第一 " 第二	34	0.228±0.013	0.078±0.006	0.020±0.005	1.492±0.079	0.821±0.047	0.288±0.018	0.142±0.018	0.049±0.017	0.024±0.004	0.338±0.013
		12	0.263±0.032	0.097±0.018	0.020±0.006	1.501±0.053	0.717±0.106	0.326±0.029	0.091±0.022	0.046±0.015	0.026±0.002	0.338±0.009
	上 石 川	45	0.321±0.007	0.070±0.003	0.069±0.011	2.051±0.070	0.981±0.042	0.773±0.034	0.182±0.023	0.038±0.027	0.026±0.007	0.359±0.009
		44	0.232±0.011	0.068±0.003	0.169±0.017	2.178±0.110	1.772±0.098	0.772±0.046	0.374±0.047	0.154±0.034	0.027±0.002	0.359±0.009
	大 白 川 金 津	22	0.569±0.012	0.142±0.007	0.033±0.005	1.608±0.049	0.261±0.012	0.332±0.011	0.150±0.015	0.033±0.011	0.036±0.003	0.491±0.014
46		0.331±0.011	0.097±0.037	0.030±0.007	1.711±0.066	0.618±0.027	0.283±0.012	0.181±0.016	0.035±0.018	0.027±0.009	0.402±0.012	
栃木県	高 原 山	40	0.738±0.067	0.200±0.010	0.044±0.007	2.016±0.110	0.381±0.025	0.502±0.028	0.190±0.017	0.023±0.014	0.036±0.002	0.516±0.012
東京都	神 長 浜 第一 津 " 第二	56	0.381±0.014	0.136±0.005	0.102±0.011	1.729±0.079	0.471±0.027	0.689±0.037	0.247±0.021	0.090±0.026	0.036±0.003	0.504±0.012
		23	0.317±0.016	0.120±0.008	0.114±0.014	1.833±0.069	0.615±0.039	0.656±0.050	0.303±0.034	0.107±0.026	0.033±0.002	0.471±0.009
		40	0.318±0.020	0.120±0.005	0.118±0.014	1.805±0.096	0.614±0.036	0.664±0.045	0.291±0.029	0.093±0.039	0.034±0.006	0.476±0.012
神奈川県	箱根・笹塚 "・畑宿 鍛 冶 屋	30	6.765±0.254	2.219±0.057	0.228±0.019	9.282±0.622	0.048±0.017	1.757±0.061	0.252±0.017	0.025±0.019	0.140±0.008	1.528±0.046
		41	2.056±0.064	0.669±0.019	0.076±0.007	2.912±0.104	0.062±0.007	0.680±0.029	0.202±0.011	0.011±0.010	0.080±0.005	1.126±0.031
		31	1.663±0.071	0.381±0.019	0.056±0.007	2.139±0.097	0.073±0.008	0.629±0.025	0.154±0.009	0.011±0.009	0.067±0.005	0.904±0.020
静岡県	上 多 賀 柏 峠 西 小 豆 峠	31	1.329±0.078	0.294±0.018	0.041±0.006	1.697±0.068	0.087±0.009	0.551±0.023	0.138±0.011	0.010±0.009	0.059±0.004	0.856±0.018
		35	1.213±0.164	0.314±0.028	0.031±0.004	1.699±0.167	0.113±0.007	0.391±0.022	0.143±0.007	0.009±0.009	0.047±0.004	0.663±0.020
		40	0.110±0.008	0.052±0.004	0.297±0.038	3.211±0.319	0.829±0.089	0.154±0.030	0.547±0.054	0.087±0.057	0.025±0.014	0.429±0.016
富山県	魚 津 高 二上山第一 岡 " 第二 市 " 第三	12	0.278±0.013	0.065±0.004	0.064±0.008	2.084±0.095	0.906±0.057	0.641±0.046	0.194±0.014	0.102±0.021	0.027±0.002	0.372±0.009
		36	0.319±0.017	0.113±0.006	0.040±0.008	1.720±0.080	0.740±0.052	0.665±0.029	0.121±0.026	0.047±0.031	0.015±0.014	0.392±0.018
		40	0.710±0.017	0.202±0.008	0.054±0.011	1.994±0.152	0.413±0.028	0.840±0.050	0.118±0.025	0.051±0.031	0.020±0.020	0.599±0.024
石川県	比 那	17	0.370±0.014	0.087±0.004	0.060±0.009	2.699±0.167	0.639±0.028	0.534±0.023	0.172±0.028	0.052±0.018	0.032±0.002	0.396±0.017
		21	0.407±0.007	0.123±0.005	0.038±0.006	1.628±0.051	0.643±0.041	0.675±0.030	0.113±0.020	0.061±0.016	0.032±0.002	0.450±0.010
福井県	安 島 三 里 山	21	0.350±0.018	0.123±0.008	0.036±0.006	1.561±0.081	0.608±0.031	0.798±0.039	0.069±0.020	0.062±0.013	0.028±0.002	0.381±0.008
		42	1.481±0.117	0.466±0.021	0.042±0.006	2.005±0.135	0.182±0.011	0.841±0.044	0.105±0.010	0.009±0.008	0.033±0.005	0.459±0.012
群馬県	大 窪 沢	42	1.481±0.117	0.466±0.021	0.042±0.006	2.005±0.135	0.182±0.011	0.841±0.044	0.105±0.010	0.009±0.008	0.033±0.005	0.459±0.012

原産地		分析 個数	元素比										
原石群名			Ca/k	Ti/K	Mn/Zr	Fe/Zr	Rb/Zr	Sr/Zr	Y/Zr	Nb/Zr	Al/K	Si/K	
長野県	霧ヶ峰	171	0.138±0.009	0.066±0.003	0.104±0.011	1.339±0.057	1.076±0.047	0.360±0.023	0.275±0.030	0.112±0.023	0.026±0.002	0.361±0.013	
	和田峠第一	143	0.167±0.028	0.049±0.008	0.117±0.011	1.346±0.085	1.853±0.124	0.112±0.056	0.409±0.048	0.139±0.026	0.025±0.002	0.355±0.016	
	〃第二	17	0.146±0.003	0.032±0.003	0.151±0.010	1.461±0.039	2.449±0.135	0.036±0.012	0.517±0.044	0.186±0.025	0.027±0.002	0.368±0.007	
	〃第三	62	0.248±0.048	0.064±0.012	0.114±0.011	1.520±0.182	1.673±0.140	0.274±0.104	0.374±0.048	0.122±0.024	0.025±0.003	0.348±0.017	
	〃第四	37	0.144±0.017	0.063±0.004	0.094±0.009	1.373±0.085	1.311±0.037	0.206±0.030	0.263±0.038	0.090±0.022	0.023±0.002	0.331±0.019	
	〃第五	47	0.176±0.019	0.075±0.010	0.073±0.011	1.282±0.086	1.053±0.196	0.275±0.058	0.184±0.042	0.066±0.023	0.021±0.002	0.306±0.013	
	〃第六	53	0.156±0.011	0.055±0.005	0.095±0.012	1.333±0.064	1.523±0.093	0.134±0.031	0.279±0.039	0.010±0.017	0.021±0.002	0.313±0.012	
	鷹山、和田	53	0.138±0.004	0.042±0.002	0.123±0.010	1.259±0.041	1.978±0.067	0.045±0.010	0.442±0.039	0.142±0.022	0.026±0.002	0.360±0.010	
	男女倉	119	0.223±0.026	0.102±0.010	0.059±0.008	1.169±0.081	0.701±0.109	0.409±0.052	0.128±0.024	0.053±0.017	0.026±0.002	0.354±0.008	
	麦草峠	68	0.263±0.020	0.138±0.011	0.049±0.008	1.403±0.069	0.532±0.048	0.764±0.031	0.101±0.018	0.056±0.016	0.029±0.002	0.401±0.017	
双子池	83	0.252±0.027	0.129±0.007	0.059±0.010	1.630±0.179	0.669±0.052	0.802±0.058	0.111±0.024	0.037±0.032	0.027±0.007	0.401±0.011		
島根県	加茂	20	0.154±0.008	0.092±0.009	0.018±0.003	0.943±0.029	0.289±0.016	0.006±0.003	0.047±0.010	0.144±0.019	0.022±0.001	0.269±0.017	
	津井	30	0.150±0.008	0.100±0.003	0.015±0.002	0.919±0.033	0.305±0.010	0.013±0.003	0.046±0.013	0.132±0.007	0.022±0.001	0.258±0.006	
	久見	31	0.142±0.004	0.061±0.002	0.020±0.003	0.981±0.048	0.398±0.013	0.001±0.002	0.093±0.015	0.229±0.010	0.023±0.002	0.317±0.006	
大分県	観音崎	41	0.216±0.017	0.045±0.003	0.428±0.057	6.897±0.806	1.829±0.220	1.572±0.180	0.325±0.088	0.622±0.099	0.035±0.002	0.418±0.011	
	姫島	33	0.221±0.021	0.045±0.003	0.450±0.061	7.248±0.668	1.917±0.194	1.660±0.173	0.355±0.057	0.669±0.105	0.035±0.002	0.419±0.009	
	〃第一	32	0.634±0.047	0.140±0.013	0.194±0.026	4.399±0.322	0.614±0.077	3.162±0.189	0.144±0.031	0.240±0.041	0.038±0.002	0.451±0.011	
	〃第三	10	0.013±0.140	0.211±0.026	0.126±0.016	3.491±0.231	0.305±0.067	4.002±0.174	0.109±0.021	0.137±0.028	0.040±0.004	0.471±0.017	
	〃オイ崎	29	1.074±0.110	0.224±0.024	0.122±0.012	3.460±0.301	0.286±0.048	4.010±0.197	0.101±0.022	0.133±0.025	0.040±0.003	0.469±0.014	
〃稲積	25	0.653±0.066	0.141±0.016	0.189±0.030	4.398±0.425	0.605±0.096	3.234±0.264	0.151±0.033	0.245±0.050	0.037±0.002	0.448±0.015		
佐賀県	塚瀬	30	0.313±0.023	0.127±0.009	0.065±0.010	1.489±0.124	0.600±0.051	0.686±0.082	0.175±0.018	0.102±0.020	0.028±0.002	0.371±0.009	
	櫻岳	26	0.214±0.015	0.029±0.001	0.076±0.012	2.694±0.110	1.688±0.085	0.441±0.030	0.293±0.039	0.257±0.029	0.030±0.002	0.356±0.008	
	椎葉川	59	0.414±0.009	0.071±0.003	0.101±0.017	2.947±0.142	1.253±0.081	2.015±0.099	0.147±0.035	0.255±0.040	0.027±0.007	0.388±0.009	
長崎県	老岐	久喜ノ辻	37	0.165±0.012	0.066±0.002	0.034±0.003	1.197±0.030	0.403±0.012	0.005±0.004	0.114±0.012	0.326±0.008	0.024±0.002	0.294±0.008
		君ヶ浦	28	0.161±0.011	0.064±0.002	0.034±0.003	1.209±0.032	0.405±0.008	0.005±0.004	0.119±0.016	0.322±0.010	0.025±0.002	0.294±0.006
		角川	29	0.138±0.010	0.037±0.002	0.056±0.007	1.741±0.083	1.880±0.076	0.012±0.012	0.303±0.038	0.652±0.036	0.026±0.002	0.358±0.010
	島	松浦第一	23	0.218±0.010	0.029±0.002	0.085±0.013	2.692±0.125	1.674±0.064	0.439±0.027	0.284±0.047	0.266±0.028	0.027±0.002	0.359±0.012
		〃第二	17	0.176±0.016	0.030±0.004	0.062±0.022	2.364±0.389	1.607±0.245	0.308±0.074	0.277±0.056	0.210±0.050	0.026±0.002	0.381±0.010
		〃第三	16	0.245±0.019	0.060±0.006	0.045±0.012	1.975±0.240	0.878±0.099	0.421±0.081	0.130±0.030	0.145±0.023	0.026±0.002	0.358±0.013
		〃第四	22	0.287±0.019	0.067±0.004	0.044±0.007	1.906±0.106	0.765±0.074	0.484±0.034	0.115±0.023	0.117±0.018	0.028±0.001	0.367±0.007
		淀姫	44	0.329±0.014	0.080±0.005	0.042±0.007	1.804±0.065	0.539±0.022	0.504±0.035	0.077±0.018	0.117±0.014	0.029±0.002	0.374±0.009
		中町第一	25	0.248±0.017	0.058±0.008	0.057±0.007	1.884±0.085	0.832±0.092	0.403±0.026	0.112±0.021	0.152±0.017	0.026±0.002	0.363±0.007
		〃第二	17	0.327±0.030	0.080±0.017	0.045±0.007	1.832±0.074	0.653±0.088	0.488±0.030	0.090±0.030	0.093±0.023	0.027±0.002	0.358±0.012
		古里第一	40	0.192±0.020	0.027±0.003	0.080±0.016	2.699±0.215	1.780±0.164	0.413±0.065	0.312±0.056	0.259±0.040	0.027±0.002	0.358±0.008
		〃第二	22	0.414±0.012	0.073±0.006	0.102±0.015	2.898±0.204	1.221±0.094	1.951±0.124	0.133±0.047	0.261±0.034	0.031±0.002	0.383±0.010
		〃第三	19	0.257±0.035	0.062±0.009	0.054±0.009	1.939±0.131	0.812±0.113	0.436±0.052	0.101±0.029	0.145±0.037	0.028±0.002	0.364±0.011
		大崎	25	0.161±0.011	0.051±0.002	0.037±0.006	1.718±0.056	0.948±0.030	0.179±0.018	0.191±0.026	0.137±0.019	0.024±0.002	0.340±0.006
熊本県	小国	30	0.317±0.023	0.127±0.005	0.063±0.007	1.441±0.070	0.611±0.032	0.703±0.044	0.175±0.233	0.097±0.017	0.023±0.002	0.320±0.007	
	南関	30	0.261±0.016	0.214±0.007	0.034±0.003	0.788±0.033	0.326±0.012	0.278±0.015	0.069±0.012	0.031±0.009	0.021±0.002	0.243±0.008	
	轟	44	0.258±0.009	0.214±0.006	0.033±0.005	0.794±0.078	0.329±0.017	0.275±0.010	0.066±0.011	0.033±0.009	0.020±0.003	0.243±0.008	
	冠ヶ岳	21	0.261±0.012	0.211±0.008	0.032±0.003	0.780±0.038	0.324±0.011	0.279±0.017	0.064±0.011	0.037±0.006	0.025±0.002	0.277±0.009	
	白浜	78	0.208±0.021	0.101±0.009	0.024±0.006	1.382±0.086	1.021±0.099	0.351±0.037	0.162±0.027	0.027±0.022	0.022±0.007	0.317±0.009	
宮崎県	桑ノ木津留												
	〃第一群	47	0.207±0.015	0.094±0.006	0.070±0.009	1.521±0.075	1.080±0.048	0.418±0.020	0.266±0.034	0.063±0.024	0.020±0.003	0.314±0.011	
〃第二群	33	0.261±0.015	0.094±0.006	0.066±0.010	1.743±0.095	1.242±0.060	0.753±0.039	0.205±0.029	0.047±0.036	0.022±0.002	0.323±0.019		
鹿児島県	日東	42	0.262±0.018	0.143±0.006	0.022±0.004	1.178±0.040	0.712±0.028	0.408±0.025	0.100±0.018	0.029±0.013	0.019±0.001	0.275±0.006	
	五女木	37	0.266±0.021	0.140±0.006	0.019±0.003	1.170±0.064	0.705±0.027	0.405±0.021	0.108±0.015	0.028±0.013	0.019±0.001	0.275±0.006	
	上牛鼻	41	1.629±0.098	0.804±0.037	0.053±0.006	3.342±0.215	0.188±0.013	1.105±0.056	0.087±0.009	0.022±0.009	0.036±0.002	0.391±0.011	
	平木場	34	1.944±0.054	0.912±0.028	0.062±0.005	3.975±0.182	0.184±0.011	1.266±0.049	0.093±0.010	0.021±0.010	0.038±0.003	0.408±0.010	
	竜ヶ水	28	0.514±0.032	0.167±0.008	0.063±0.009	1.524±0.079	0.619±0.038	0.719±0.054	0.115±0.019	0.082±0.016	0.037±0.003	0.523±0.009	
長谷	30	0.553±0.032	0.137±0.006	0.065±0.010	1.815±0.062	0.644±0.028	0.553±0.029	0.146±0.021	0.066±0.020	0.037±0.003	0.524±0.012		
台湾	台東山脈	37	0.510±0.010	0.198±0.007	0.038±0.007	1.862±0.079	0.353±0.019	0.519±0.017	0.123±0.012	0.024±0.017	0.029±0.007	0.407±0.010	
長野県	NK遺物群	57	0.566±0.019	0.163±0.007	0.086±0.011	1.822±0.084	0.467±0.031	1.691±0.064	0.102±0.021	0.041±0.028	0.038±0.003	0.500±0.014	
青森県	HY遺物群	31	0.238±0.011	0.131±0.006	0.048±0.008	1.636±0.066	0.418±0.028	1.441±0.015	0.482±0.024	0.029±0.028	0.020±0.015	0.481±0.068	
北朝鮮	会寧城外遺跡遺物群	70	0.135±0.012	0.062±0.006	0.017±0.003	1.118±0.051	0.585±0.036	0.068±0.019	0.150±0.022	0.372±0.035	0.025±0.004	0.319±0.012	
ロシア	イリスタヤ遺跡遺物群	26	18.888±2.100	6.088±0.868	0.293±0.032	27.963±2.608	0.055±0.017	2.716±0.162	0.163±0.019	0.036±0.030	0.173±0.029	1.674±0.240	
標準試料	JG-1*	127	0.755±0.010	0.202±0.005	0.076±0.011	3.759±0.111	0.993±0.036	1.331±0.046	0.251±0.027	0.105±0.017	0.028±0.002	0.342±0.004	

平均値±標準偏差値、* ガラス質安山岩 NK遺物 (NK) 群：中つ原遺跡、HY遺物 (HY) 群：日和山遺跡出土の産地不明の原石群

a) : Ando, A., Kurasawa, H., Ohmori, T. & Takeda, E. (1974). 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. Geochemical Journal Vol. 8, 175-192.

この十勝三股産原石は十三の沢から音更川さらに十勝川に流れた可能性があり、十勝川から採取される黒曜石円礫の組成は、十勝三股産の原石の組成と相互に近似している。また、上士幌町のサンケオルベ川より採取される黒曜石円礫の組成も十勝三股産原石の組成と相互に近似している。これら組成の近似した原石の原産地は区別できず、遺物石材の産地分析でたとえ、この遺物の原石産地が十勝三股群に同定されたとしても、これら十勝三股、音更川、十勝川、サンケオルベ川の複数の地点を考えなければならない。しかし、この複数の産地をまとめて、十勝地域としても、古代の地域間の交流を考察する場合、問題はないと考えられる。また、清水町、新得町、鹿追町にかけて広がる美蔓台地から産出する黒曜石から2個の美蔓原石群が作られた。この原石は産地近傍の遺跡で使用されている。名寄市の智南地域、智恵文川および忠烈布貯水池から上名寄にかけて黒曜石の円礫が採集される。これらを組成で分類すると88%は名寄第一群に、また12%は名寄第二群にそれぞれなる。旭川市の近文台、嵐山遺跡付近および雨文台北部などから採集される黒曜石の円礫は、20%が近文台第一群、69%が近文台第二群、11%が近文台第三群にそれぞれ分類された。また、滝川市江別乙で採集される親指大の黒曜石の礫は、組成で分類すると約79%が滝川群にまとめられ、21%が近文台第二、三群に組成が一致する。滝川群に一致する組成の原石は、北竜市恵袋別川培本社からも採取される。秩父別町の雨竜川に開析された平野を見下す丘陵中腹の緩斜面から小円礫の黒曜石原石が採取される。産出状況や礫状は滝川産黒曜石と同じで、秩父別第一群は滝川第一群に組成が一致し、第二群も滝川第二群に一致しさらに近文台第二群にも一致する。赤井川産原石は、北海道余市郡赤井川村の土木沢上流域およびこの付近の山腹より採取できる。ここの原石には、少球果の列が何層にも重なり石器の原材として良質とはいえない原石で赤井川第1群を、また、球果の非常に少ない握り拳半分大の良質な原石などで赤井川第2群を作った。これら第1、2群の元素組成は非常に似ていて、遺物を分析したときしばしば、赤井川両群に同定される。豊泉産原石は豊浦町から産出し、組成によって豊泉第1、2群の2群に区別され、豊泉第2群の原石は斑晶が少なく良質な黒曜石である。豊泉産原石の使用圏は道南地方に広がり、一部は青森県に伝播している。出来島群は青森県西津軽郡木造町七里長浜の海岸部より採取された円礫の原石で作られた群で、この出来島群と相互に似た組成の原石は、岩木山の西側を流れ鱒ヶ沢地区に流入する中村川の上流で1点採取され、また、青森市の鶴ヶ坂および西津軽郡森田村鶴ばみ地区より採取されている。青森県西津軽郡深浦町の海岸や同町の六角沢およびこの沢筋に位置する露頭より採取された原石で六角沢群をまた、八森山産出の原石で八森山群をそれぞれ作った。深浦の両群と相互に似た群は青森市戸門地区より産出する黒曜石で作られた戸門第二群である。戸門第一群、成田群、浪岡町泉民の森地区より産出の浪岡群は赤井川産原石の第1、2群と弁別は可能であるが原石の組成は比較的似ている。戸門、浪岡産黒曜石の産出量は非常に少なく、希に石鏃が作れる程度がみられる程度であるが、鷹森山麓の成田地区産出の黒曜石の中には5cm大のものもみられる。

結果と考察

遺跡から出土した石器、石片は風化しているが、黒曜石製のものは風化に対して安定で、表面に薄い水和層が形成されているにすぎないため、表面の泥を水洗するだけで完全な非破壊分析が可能であると考えられる。産地分析で水和層の影響は、軽い元素の分析ほど大きいと考えられるが、影響はほとんど見られない。Ca/K、Ti/Kの両軽元素比量を除いて産地分析を行なった場合、また除かずに産地分析を行なった場合同定される原産地に差はない。他の元素比量についても風化の影響を完全に否定することがで

きないので、得られた確率の数値にはやゝ不確実さを伴うが、遺物の石材産地の判定を誤るようなことはない。今回分析した桜峯(1)遺跡の黒曜石製石器の分析結果を表2に示した。石器の分析結果から石材産地を同定するために元素間の相関を考慮した数理統計の手法を用いて原石群との比較をする。説明を簡単にするためRb/Zrの一変量だけを考えると、表2の試料番号52614番の遺物ではRb/Zrの値は0.936で、鶴ヶ坂群の[平均値]±[標準偏差値]は、 0.861 ± 0.052 である。遺物と原石群の差を標準偏差値(σ)を基準にして考えると遺物は原石群から 1.4σ 離れている。ところで鶴ヶ坂原産地から100ケの原石を採ってきて分析すると、平均値から $\pm 1.4\sigma$ のずれより大きいものが16個ある。すなわち、この遺物が、鶴ヶ坂の原石から作られていたと仮定しても、 1.4σ 以上離れる確率は16%であると言える。だから、鶴ヶ坂群の平均値から 1.4σ しか離れていないときには、この遺物が鶴ヶ坂群の原石から作られたものでないとは、到底言い切れない。ところがこの遺物を戸門第2群に比較すると、戸門第2群の平均値からの隔たりは、約 135σ である。これを確率の言葉で表現すると、戸門第2群の原石を採ってきて分析したとき、平均値から 135σ 以上離れている確率は、千兆の千兆倍の千兆倍の千兆倍個に一個しかないような原石をたまたま採取して、この遺物が作られたとは考えられないから、この遺物は、戸門第2群の原石から作られたものではないと断定できる。これらのことを簡単にまとめて言うと、「この遺物は鶴ヶ坂群に16%、戸門第2群に約ゼロ%の確率でそれぞれ帰属される」。各遺跡の遺物について、この判断を表1のすべての原石群について行ない、低い確率で帰属された原石群を消していくと残るのは、鶴ヶ坂および鶴ヶ坂群に元素組成が似る出来島群だけとなり、鶴ヶ坂または出来島産地の石材が使用されていると判定される。実際はRb/Zrといった唯1ケの変量だけでなく、前述した5ケの変量で取り扱うので変量間の相関を考慮しなければならない。例えばA原産地のA群で、Ca元素とRb元素との間に相関があり、Caの量を計ればRbの量は分析しなくても分かるようなときは、A群の石材で作られた遺物であれば、A群と比較したとき、Ca量が一致すれば当然Rb量も一致するはずである。したがって、もしRb量だけが少しずれている場合には、この試料はA群に属していないと言わなければならない。このことを数量的に導き出せるようにしたのが相関を考慮した多変量統計の手法であるマハラノビスの距離を求めて行なうホテリングのT2検定である。これによって、それぞれの群に帰属する確率を求めて産地を同定する(4, 5)。産地の同定結果は1個の遺物に対して、黒曜石製では129個の推定確率結果が得られている。今回産地分析を行った遺物の産地推定結果については低い確率で帰属された原産地の推定確率は紙面の都合上記入を省略しているが、これら産地の可能性が非常に低いことを確認したという非常に重要な意味を含んでいる、すなわち、出来島または鶴ヶ坂産原石と判定された遺物について、北海道の原産地や信州和田峠産の原石の可能性を考える必要がない結果で、高い確率で同定された産地のみの結果を表3に記入した。出来島群、鶴ヶ坂群の元素組成は非常に似ていて区別できない。また、似た組成の原石は岩木山の西側を流れ鱒ヶ沢地区に流入する中村川の上流で1点採取され、また、西津軽郡森田村鶴ばみ地区より採取された原石の組成も似ていることから、今回分析した遺物の原石産地はこれら広い地域を考える必要があるが、遺跡から最も近い鶴ヶ坂産地の原石を使用していたと推定しても産地分析の結果と矛盾しない。

参考文献

- 1) 藁科哲男・東村武信(1975), 蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定(Ⅱ)。考古学と自然科学, 8: 61-69
- 2) 藁科哲男・東村武信・鎌木義昌(1977)(1978) 蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定(Ⅲ)。(Ⅳ)。考古学と自然科学, 10, 11: 53-81: 33-47
- 3) 藁科哲男・東村武信(1983), 石器原材の産地分析。考古学と自然科学, 16: 59-89
- 4) 東村武信(1976), 産地推定における統計的手法。考古学と自然科学, 9: 77-90
- 5) 東村武信(1990), 考古学と物理化学。学生社

表2 桜峯(1)遺跡出土黒曜石製遺物の元素比分析結果

分析番号	Ca/K	Ti/K	Mn/Zr	Fe/Zr	Rb/Zr	Sr/Zr	Y/Zr	Nb/Zr	Al/K	Si/K
52614	0.329	0.129	0.237	2.205	0.936	0.198	0.433	0.215	0.039	0.504
JG-1	0.767	0.211	0.083	3.851	0.991	1.309	0.29	0.059	0.024	0.335

JG-1: 標準試料—Ando, A., Kurasawa, H., Ohmori, T. & Takeda, E. 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. *Geochemical Journal*, Vol. 8 175-192 (1974)

表3 桜峯(1)遺跡出土の黒曜石製遺物の原材産地推定

分析番号	遺物出土区, 層	原石産地 (確率)	判定	遺物品名 形態
52614	AE-34, IV層	鶴ヶ坂 (64%), 出来島 (39%)	鶴ヶ坂	石匙

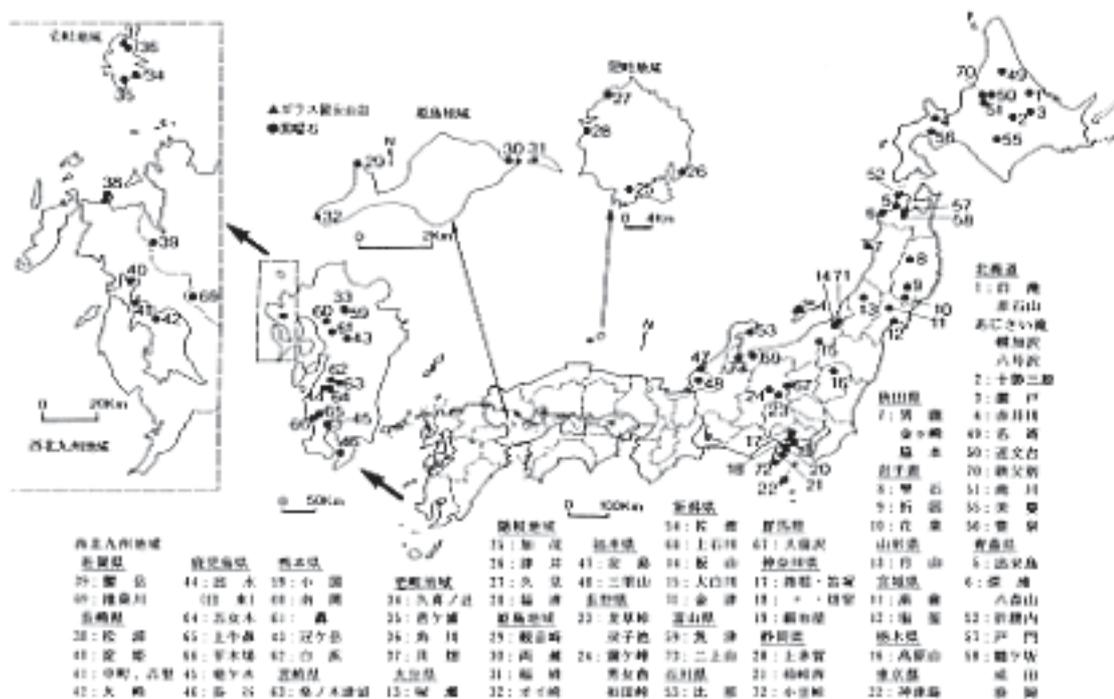


図1 黒曜石原産地

放射性炭素年代測定結果報告

八戸工業大学 助教授 村 中 健

青森市教育委員会より受領した、炭化物試料合計10点について、放射性炭素年代測定の結果を報告する。依頼試料は前処理および化学処理してベンゼンを合成し、これにシンチレーターを加え20mlバイアルを作り測定試料とした。標準試料はNIST 蔞酸標準体 4990Cを化学処理して作成し、また、バックグラウンド試料は市販の化学用大理石から処理作成したものをを用いた。

測定装置はアロカ社製の低バックグラウンド液体シンチレーションカウンターシステムLSC-LB監であり、測定試料、標準試料、バックグラウンド試料について各々合計 2000 分間の測定をおこなった。

年代の算出には 14C 半減期として Libby の半減期 5570 年を用い、また、結果は 1950 年からの年数を BP 年代として表記した。なお、付記した誤差は計数値の 1 σ に相当する年数である。

記

HIT142	: 青森市横内 桜峯 (2) 遺跡出土炭化物試料 A (泥炭) BP 年代: 1040 \pm 60 年
HIT143	: 青森市横内 桜峯 (2) 遺跡出土炭化物試料 B (炭化材) BP 年代: 2770 \pm 60 年
HIT144	: 青森市横内 桜峯 (2) 遺跡出土炭化物試料 C (木炭) BP 年代: 1250 \pm 90 年
HIT155	: 青森市横内 桜峯 (1) 遺跡 AF - 109 出土炭化物試料 BP 年代: M o d e r n
HIT156	: 青森市横内 桜峯 (1) 遺跡第 24 号土坑出土炭化物試料 BP 年代: 4080 \pm 90 年
HIT157	: 青森市横内 桜峯 (1) 遺跡第 6 号土坑出土炭化物試料 BP 年代: 2040 \pm 65 年
HIT170	: 青森市横内 桜峯 (1) 遺跡第 41 号土坑炭化物試料 BP 年代: 4370 \pm 100 年
HIT171	: 青森市横内 桜峯 (1) 遺跡第 56 号土坑出土炭化物試料 BP 年代: 4220 \pm 80 年
HIT172	: 青森市横内 桜峯 (1) 遺跡第 59 号土坑出土炭化物試料 BP 年代: 4180 \pm 80 年
HIT173	: 青森市横内 桜峯 (1) 遺跡第 71 号土坑出土炭化物試料 BP 年代: 4350 \pm 110 年

(注. 青森市埋蔵文化財調査報告書 第26集桜峯(2)遺跡発掘調査報告書の例言5により、桜峯(2)遺跡発掘調査に関する依頼原稿についても本報告書に記載する。)

第V章 分析と考察

北陸系土器（第I群2類g土器）について

本遺跡の調査で出土した土器は、縄文時代前期末葉から中期初頭を主体に、おおむね円筒下層d₁式から円筒上層a₁式に比定されるものが主体を占めるが、これらとは施文文様、施文方法が大きく異なり、いわゆる円筒土器の範疇には含まれない土器も出土している。ここでは本遺跡出土土器分類でI群2類gとした土器について取り上げる。

I群2類g土器は、3点の破片が出土している。ただし本項では、文様の施文手法について検討するため、摩滅が激しい第81図5は、取り上げないこととし、第81図4及び第81図6を用いることとする。

第81図4は、AD-111第II層出土の口縁部片である。平縁で、恐らくは胴部から屈曲し外反するものと思われる。器厚は、5～10mmで口唇部が最も薄く徐々に厚くなる。色調は、外面が灰黄褐色、内面が橙色ないしは明赤褐色、胎土が灰黄褐色である。胎土には繊維は認められず、砂粒が含まれている。口唇部は、幅5mm、平坦で口唇上面には棒状工具の押圧による刻目が連続して施されている。

口縁部の施文は、半隆起線文、結節状浮線文、細い（ソーメン状）隆線の貼付、隆帯の貼付の4手法を用いて構成されており、口唇部の刻目も含め、破片上に施された個々の文様は、12に分解することができる。また、上下の文様要素には切り合いが認められ、個々の施される順序が観察できる。第107図に、破片上の文様の要素及び確認できる施文の順序を示す。

口唇部の刻目を1とし、以下破片上部から順に1から12まで番号で表した場合、施文の順序として確認できたものは、以下A～Dまでの4パターンである。

- A. 3→4→2→1
- B. 3→4→5→6→7→8
- C. 9→10→8
- D. 9→10→11→12

施文の順序を見ると、数の小さいものから大きいものへ、つまり口縁部上部から下部に向かう順序で概ね施文されているが、所々、順序の逆転が認められる。

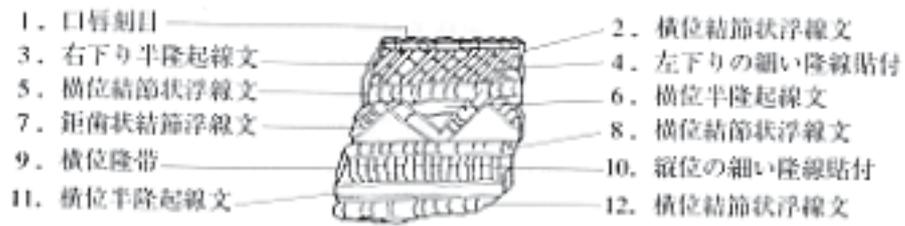
Aに見られるように、口縁部上部では、半隆起線文と細い（ソーメン状）隆線を貼付し、格子目文を作りだした後、その上部に結節状浮線文を施しており、格子目文とその上部の結節状浮線文の施文順が逆転している。また、Cに見られるように、口縁部下部では、隆帯を貼付し、その外面に細い（ソーメン状）隆線を貼付した後、隆帯の上部に結節状浮線文を施しており、隆帯及びその外面の施文と、隆帯上部の結節状浮線文の施文順が逆転している。

これらは、先行して施される格子目文及び隆帯を主とし、その後に施される横位の結節状浮線文、半隆起線文を従とした結果ではないかと考えられる。

主従の組み合わせで1単位を構成するものと仮定すると、口縁部文様は、口縁部上部の格子目文を主体とするもの、口縁部下部の隆帯を主体とするもの、それらに挟れる鋸歯状を呈する結節状浮線文を主体とするものと、3グループ、上中下の3段に別れる。以下はその詳細である。

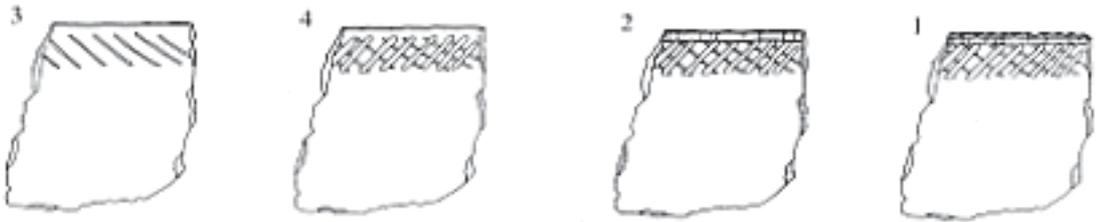
第1に口縁部の上段には、半截竹管の内面を器面にあて、それを引くことによる半隆起線文が、右下

文様の要素

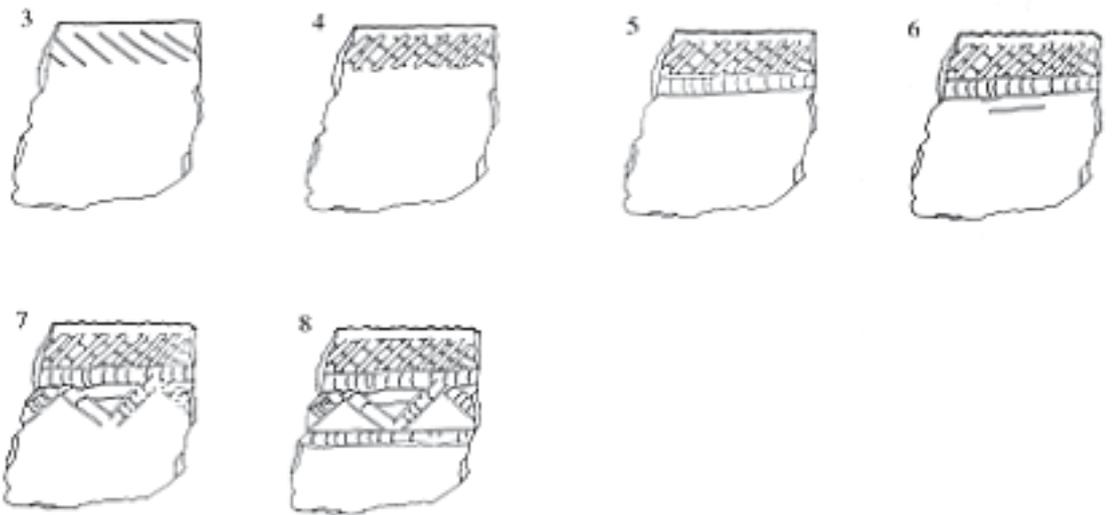


施文の順序

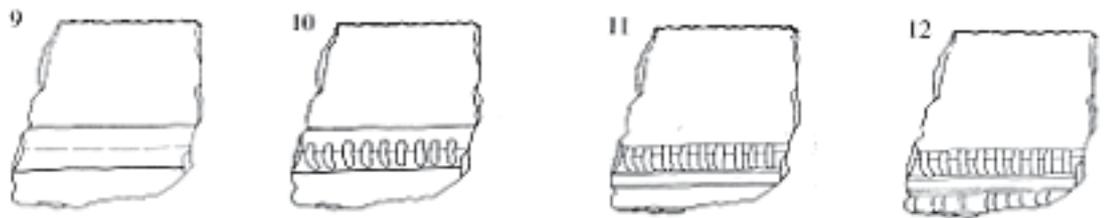
A. 3 → 4 → 2 → 1



B. 3 → 4 → 5 → 6 → 7 → 8



D. 9 → 10 → 11 → 12



第107図 文様の要素及び施文の順序

がりに連続して施され、その上から左下がりに平均幅2mmの細い（ソーメン状）隆線を貼付し、斜格子目文を上下幅10mmにわたり構成しており、その後、斜格子目文の上下には1条ずつ、半截竹管の押し引きによる結節状浮線文が横位に施されている。斜格子目文上の結節状浮線文は口唇部の刻目押圧により若干潰れている。

第2に口縁部の中段には、前述した斜格子目文下部の結節状浮線文直下に横位に1条、あるいは横位に部分的に半隆起線文を施した後、上下幅10mmにわたり無文面上に結節状浮線文を左から右に鋸歯状に施している。そのため最初に施した横位の半隆起線文は、結果として鋸歯状のV字部分の上部にのみ残存している。また、鋸歯状の結節状浮線文は、上段斜格子目文下部の結節状浮線文を切っている。

第3に口縁部の下段には、太めの隆帯を1条、横位に貼付し、隆帯外面には、斜格子目文を構成していたものと同様の、細い（ソーメン状）隆線を連続して縦位に貼付している。隆帯上の隆線貼付後、隆帯の上部に、横位の結節状浮線文を1条、下部に横位の半隆起線文を1条施している。隆帯上部の横位の結節状浮線文は、中段の鋸歯状の結節状浮線文の下部を切っており、また、隆帯下部の横位半隆起線文下には、1条、横位の結節状浮線文が施されているが、これは半隆起線文施文後に施されている。

以上、口縁部の施文について上、中、下の3段に分けて施文の順序を見た場合、中段は上段をきっており、下段は中段を切っているため、各段は、上から順番に単位ごとに施文されている事が解る。半隆起線文、結節状浮線文は各段で施されているが、各段単位ごとの施文が終了するまで次の単位には移っていないと思われる。

なお、口唇部の刻目押圧は、少なくとも斜格子目文を主体とする上段施文後に施されるが、最終的にどの段階で施されるかは不明である。また、隆帯を中心とする下段の文様施文後に、破片最下部に横位に1条、結節状浮線文が施されており、或いは4段目以下の口縁部施文が続くのかも知れないが、口縁部が出土破片の下部にさらに続くのか、直下に胴部が続くのかの判断はできなかった。

次に、第81図6は、AE-113第Ⅲ層出土の胴部破片である。LR斜縄文地上に半截竹管内面の押し引きによる結節状浮線文が1条直線で、2条平行の弧状に施されている。また、結節回転文が直線の結節状浮線文の脇及び破片端部に認められた。外内面の色調及び胎土混入の砂粒等、2に酷似し、本遺跡出土土器には上記2、3の他に結節状浮線文を施すものが存在しないことを考え合わせると、同一個体と思われた。

なお、2及び4の出土地点は、調査区C区の北側斜面であり、別項で前述した遺物集中ブロック範囲内である。同ブロック範囲内からは、数片の例外はあるが、縄文時代前期末葉から中期初頭にかけての時期の土器が出土し、2から4についても、断定はできないが、おおむねこの時期のものと思われる。

口縁部破片及び胴部破片における、施文をまとめると以下の通りである。

- ・口唇部における棒状工具押圧による連続した刻み目
- ・口唇部における右下りに密に施された半隆起線文と左下がりの細い粘土紐貼付による斜格子目文
- ・口縁部における横位、鋸歯状の結節状浮線文
- ・口縁部における隆帯の貼付及び隆帯上部の細い隆線貼付
- ・胴部における斜縄文地上の直線及び弧状の結節状浮線文

以上の各種文様を合わせ持つ土器は、本遺跡周辺では、一般的に見られるものではなく、他地域からの搬入品か、あるいは、他地域から何らかの影響を受けて制作されたものと推測される。

本遺跡出土土器片に見られる、結節状浮線文や半隆起線文、細い粘土紐貼付等の手法は、いわゆる北

陸系とされる土器に見られる手法であるが、北陸において、本遺跡の主体を占める縄文時代前期末から中期初頭の時期、またその前後の時期とされるものには、福浦上層式（註1）、真脇式（註2）、朝日下層式（註3）、新保式（註4）などが挙げられ、それらと比較した場合、特に本遺跡出土土器片の上段に構成される、右下りに密に施された半隆起線文と、左下がりの細い粘土紐貼付により構成される斜格子目文は、中でも北陸地方の縄文時代前期末葉とされる、朝日下層式に特有の手法であると思われる。

朝日下層式は、富山県氷見市の朝日貝塚を標識遺跡とし、石川県能都町の真脇遺跡においても良好な資料が出土している。

本遺跡出土土器片に見られる、口唇部の刻目や鋸歯状の結節状浮線文等他の施文についても、それぞれ真脇式や新保式等、前後の形式にまたがるものはあるが、おおむね朝日下層式においても単位文として個々の施文は存在しており、施文文様の類似という観点から見た場合、本遺跡出土土器片が最も類似するものと思われた。

ただし、本遺跡出土土器片と朝日下層式土器は、施文文様という観点からは以上のように類似点も存在するが、いくつかの差異も見られ、以下の3点が主にあげられる。

1. 地文の有無
2. 外内面の色調及び、器厚の差異
3. 施文される細い（ソーメン状）隆線の差異

1 地文の有無

朝日下層式は、縄文地上に極細の粘土紐を貼り付けることを特徴とし、口縁部文様の多くは地文に縄文が施されている。一方、本遺跡出土破片においては、中段の鋸歯状を呈する結節状浮線文は無文面上に施されている。

2 外内面の色調及び、器厚の差異

本遺跡出土土器片の色調については前述のとおりであるが、朝日貝塚及び真脇遺跡出土の朝日下層式土器は、全体として灰白色を呈し、色調が異なる。本遺跡出土土器片の色調は、むしろ在地の土器である円筒土器に類似する。また、朝日下層式土器の器厚は本遺跡出土土器片と比較した場合明らかに薄く、器厚が異なる。

3 施文される細い（ソーメン状）隆線の差異

朝日下層式に施される極細のソーメン状隆線は、本遺跡出土土器片と比較した場合、より細く、貼付施文されたものは外面が丸みを帯びている。本遺跡出土土器片の細い（ソーメン状）隆線は観察すると扁平につぶれており、稚拙な印象を受ける。

以上の類似点、差異点を合わせ考慮した場合に、本遺跡出土土器片については、特に色調が異なるように思われることから、北陸からの搬入品とは考えづらく、製作地は、本遺跡における在地の土器と同様ではないかと推測される。ただし、施文手法、施文文様が類似することから、何らかの形で朝日下層式土器についての情報が本遺跡もしくはその周辺に伝播した結果が表れたものと考えられると思われる。

（小野貴之）

註1 小島 俊彰 1986「第5群土器 福浦上層式期」『石川県能都町 真脇遺跡』能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団

註2 小島 俊彰 1986「第6群土器 真脇式期」『石川県能都町 真脇遺跡』能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団

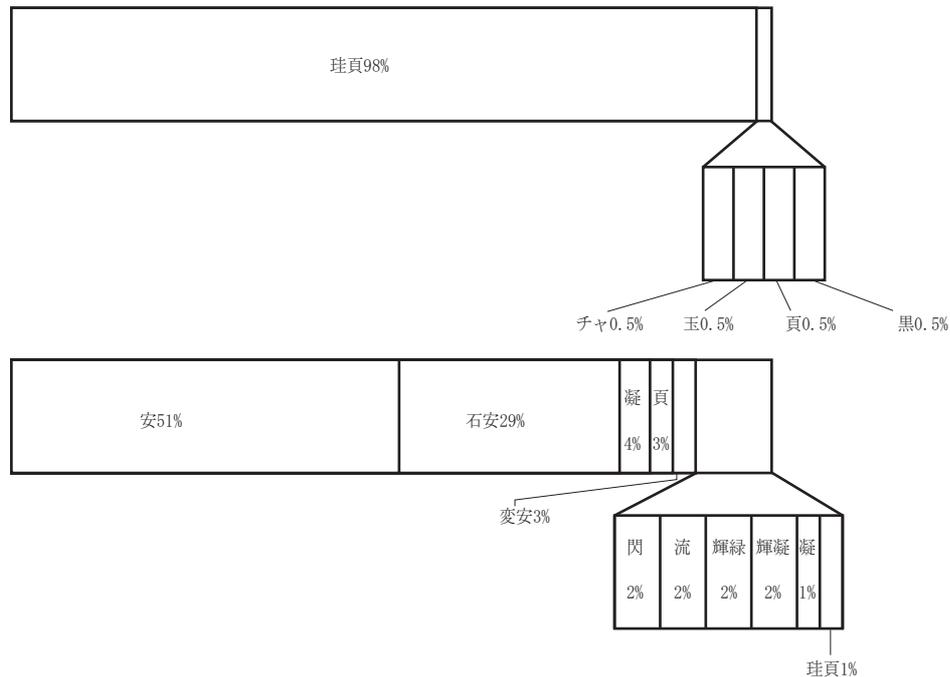
掘調査団

註3 小島 俊彰 1986「第7群土器朝日下層式期」『石川県能都町 真脇遺跡』能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団

註4 加藤三千雄 1986「第8群土器 新保式期」『石川県能都町 真脇遺跡』能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団

出土石器の素材とされた岩石の分布について

2ヵ年にわたる調査で本遺跡からは、剥片石器（剥片を除外）180点、礫石器129点が出土した。それらの石器に用いられた素材の石質の組成比を下図に表す。



第108図 石質組成比

調査によって出土した石器の礫面を概観すると、殆どの礫面が摩耗し角がとれており、転石の採取と思われる。

剥片石器については、殆どが珪質頁岩を素材として用いられている。礫石器については、安山岩が最も多く素材として用いられており51点（42%）、次いで石英安山岩が37点（30%）である。それ以下は、磨製石斧として輝緑凝灰岩が7点（5%）であるが、残りの素材については極めて少量である。

調査範囲内及び遺跡内にはこれらの素材となる原礫を採取可能な露頭、河川等は無く、石器の原材料はすべて他地点からの搬入によるものである。本項では、遺跡周辺の岩石分布から石材の供給源について推察してみたい。

これらの石材の分布を本遺跡が立地する八甲田火山性台地に求めた場合、珪質頁岩については、泥岩の分布として「・・・下湯温泉付近の堤川流域等に分布し、黒色～灰褐色、堅硬出層理は甚だ明瞭である。」（註1）の記載がある。また、少ない情報量であるが筆者は堤川上流（通称荒川）下湯ダム下流域で珪質頁岩を採取している。因に、八甲田火山性台地ではないが、黒色頁岩は「梵珠山地の南・西縁及び浪岡川の中～上流部に」、硬質頁岩は「・・・浪岡川上流～入内峠に」（註2）分布しており、それぞれ源八森層・都谷森層・入内層と呼ばれ、これらの層中には「普遍的にSagariteschitaniiを含むほか、Cyclamminaspp等の有孔虫化石を産する。」「化石は前岩とほぼ類似のものを産出する。」（註3）と記載されている。本遺跡出土の珪質頁岩製の剥片石器にも数点、化石を確認できるものがある。

安山岩、石英安山岩、流紋岩、凝灰岩の分布は八甲田火山性台地に広く分布する。これらを分布地域別に概観すると、駒込川中流域に安山岩、流紋岩、堤川上流下湯温泉付近に安山岩、山地の萱野茶屋、田代平北～東周辺にはそれぞれ石英安山岩、流紋岩が分布する。

次に、本遺跡が立地する八甲田火山性台地に分布しない石材（黒曜石・輝緑岩・輝緑凝灰岩・閃緑岩・粘板岩・変朽安山岩）の供給源を本地域以外に求めた場合の分布状況を見る。

黒曜石については、第IV章第2節のとおり鶴ヶ坂産である。輝緑岩・輝緑凝灰岩は、八甲田火山性台地近隣はもとより、青森市内とその隣接する地域には分布しない。閃緑岩は、平内町大和山、粘板岩は、東岳、さらに離れたところでは夏泊半島に分布する。変朽安山岩は、「東岳付近に分布する先第三系を取り囲むよう（註4）」な分布であり、現在は野内川流域にその転礫をみることができる（註5）。本遺跡では、M群に1点、N群として分類した石器群のうち3点の計4点この変朽安山岩が用いられている。M群に用いられている他の石材として、安山岩、石英安山岩、N群に用いられている他の石材は、安山岩・石英安山岩・頁岩・凝灰岩であるが、変朽安山岩以外は、本遺跡周辺で入手可能と考えられる石材である。共伴する土器から、変朽安山岩を用いたM群、N群と、他の石材を用いているものとは、共伴する土器から時期的な時間差を考え難い。石器の礫面は4点とも河原石と思われ、現在採取可能な野内川と本遺跡は、直線距離でも約10km離れている。その他の石材を本遺跡周辺にもとめた場合、仮に採取地を荒川下湯ダムとした場合の距離は約4kmである。またM群、N群の変朽安山岩が用いられた石器に観察されるスリ、敲打痕、剥離などからこれらの石器により行われた作業内容を、擦る、敲く等に求めたとき、M群、N群の他の石材を用いているものと比較すると、石材を異にすることにより得られたと思われる効果はみられなく、あえて本石材でなければならなかった理由は考え難い。現在の変朽安山岩は東岳付近に分布する先第三系を取り囲む分布であるが、本石材の採取地を野内川に求めるよりは（現時点では確認されていないが）、本遺跡からそれほど離れていない地点に変朽安山岩の採取可能な地点を求めた方が、むしろ自然と思われる。

註1 青森県 1983 『土地分類基本調査 青森東部』

註2 青森県 1983 『土地分類基本調査 青森西部』

註3 註2と同じ

註4 註1と同じ

註5 調査員 工藤一彌氏のご教示による。

半円状扁平打製石器の機能面について

2ヵ年にわたる調査において、本遺跡からは129点の礫石器が出土した。そのうちN群として分類した32点の半円状扁平打製石器、あるいは同器種に類似する形状・機能面を有する石器がある。

それらN群中には、半円状を呈するが器体の厚み、底辺のスリ幅等から半円状扁平打製石器の範疇に含むことがためられるものも少なからず存在するが、それらについて次の理由から別群とすることを疑問視した。即ち本群に分類した石器には、平面形が半円状を呈する礫を素材としている、あるいは周縁に剥離が連続して施され、半円状の形状を作出していると思われること。スリ面とそれを打面とした剥離が施されるM群3類と比較すると、本群には面積的に広い剥離が施され、さらに厚みのある器体であってもそれらの剥離により器体の厚みが減じられているものがある、ということである。これら3点の理由から典型的な半円状扁平打製石器と比較し、器体の厚みという点において若干の相違はみられるが、本器種の製作目的には半円状扁平打製石器の範疇に含まれると考えN群として一括して取り扱い、分類・細分した。

これまで本器種の機能及び用途については、種々の論考が述べられている。草間俊一氏は「いずれも刃をつけた後に打石器として用いた痕が磨滅痕として残っている点から考えると打石器として用いたもの」(註6)と述べ、一方、鈴木孝志氏は「何か擦りつぶすか擦り減らすかの機能を考えさせる」(註7)とし、村越潔氏は「樹皮鞣し、植物性繊維製造具」を想定している(註8)。また、小笠原善範氏は、打ち欠きによる鋭利な刃部形成・使用辺に対し平行方向にある摩擦痕の一定性、摩擦痕幅の狭さから、鈴木氏の「何か擦りつぶすか擦り減らすかの機能」が適切であると報告している(註9)。また、山口義伸氏は、鈴木、村越両氏の見解に基き、石錘の出土量との相関から「漁網用の植物性繊維を製造する道具」としての可能性も想定している(註10)。これらから半円状扁平打製石器の機能面としては、直線状のスリ面を有する辺縁と捉える見解が多いようである。

この機能面と考えられるスリ面についてであるが、半円状扁平打製石器の機能面に残されるスリ面を概観すると面的に細く、同群の石器同志と比較した場合そのスリ面は、幾つかの類型に分けることが可能と思われるほどバリエーションに富む平面観を呈するように思われた。参考までに同じくスリ面を有するいわゆるスリ石の機能面を概観すると、スリ面の平面形状は概して、2本の直線が平行なほぼ同じようなスリ幅であり、石器底面の形状を反映する平面形状を描くものが多く、スリ石の用途としては堅果類等をすり潰す等に用いられたとするのが定説である。

半円状扁平打製石器とスリ石は、スリという同様の使用痕跡を残すが、その機能面の違いから使用の目的には違いがあると思われる。半円状扁平打製石器の用途については、明確な定説が確立されていない現状であるが、機能面の観察からその用途について一つの方向性を見いだすことが可能と考えた。

そこで本項ではまず、遺跡内出土の半円状扁平打製石器の機能面として考えられるスリ面の平面形状について傾向を捉えてみた。

スリ面の残存状況であるが、第Ⅲ章に図示したN群について底辺にスリ面を有さない4類を除く1～3類の底面実測図のみを第109図に図示した。完形品については、底辺の端から端までスリ面を有するものと中央部付近にのみスリ面を有するもの、また逆に中央部にスリ面が残されないものの3パターンの様相を呈する。またスリ面の平面観についてであるが、1類は屈折した線を描き蛇行するような平面観を呈するスリ面である。2類・3類については、点数が少なく欠損品であるが、2類についてはほぼ平行な線を描き、3類については欠損品ではあるが残存する部位については、1類同様の屈折した線を描く。

これら機能面の平面観については、素材の形状に依存するところが大きく、本器種では底辺から施される剥離と、面的に擦られる行為が行われた結果機能面の平面観が左右されるものと思われる。これらの器体に施される剥離は、まず整形のための面積的に広い剥離が施された後、スリ面と切り合う比較的小さい剥離が施され、力の伝達方向に縦位に切り合うが生じる。この縦位に切り合う剥離が、本器種が使用された段階から切り合っていたものか、あるいは使用に伴い切り合っていたのかということは、利器として用いられた本器種の使用のされ方に関与してくるものと考えられる。面積的に広い剥離と比較的小さい剥離の新旧関係についてはすでに明らかであり、この新旧関係から使用された段階からか、使用に伴い切り合い関係を成していったものかを推察することは不可能であるため、機能面に残されるスリ痕と剥離の新旧関係から、これらの剥離が施された段階を探り機能面の形成について推察してみたい。

そこで底辺にスリ面が残されるもの31点のうち、底辺を打点とする剥離と底辺に残されるスリ面との新旧関係を観察した。

完形品の総点数18点中、12点についてはスリ面がいずれの剥離も切っている。残り6点については、部分的にスリ面が剥離により切られている。

欠損品15点については、スリ面がいずれの剥離も切っているものが12点、ほとんどの剥離がスリ面を切っているものが1点、剥離が部分的にスリ面を切っているものが2点である。点数33点のうち、スリ面が剥離を切っているものが25点、殆どの剥離がスリ面を切っているものが1点、部分的にスリ面が剥離により切られているものが6点であった。剥離とスリ面の新旧関係について、第Ⅲ章に図示した本群で剥離がスリ面を切っているものを表したものが第110図である。

第110図から、スリ面を切る剥離は、必ずしもある決まった部位にあるわけではなく、個々の石器により剥離を有する位置に違いがみられる。これらの剥離の状況であるが、6を除きいずれもスリ面を切る剥離が切り合うことのない単発の剥離である。7は、底辺中央部に残されるスリ面（Aとする）を切る剥離（aとする）を有するが、隣接する剥離（bとする）により切られている。さらに、bとその他の剥離の打点は、中央部から端にかけて施されるスリ面（Bとする）により切られている。5に施される剥離を除いては器体中央付近まで及ぶ剥離はなく、スリ面の厚さを大きく減じることのない比較的小さい剥離である。

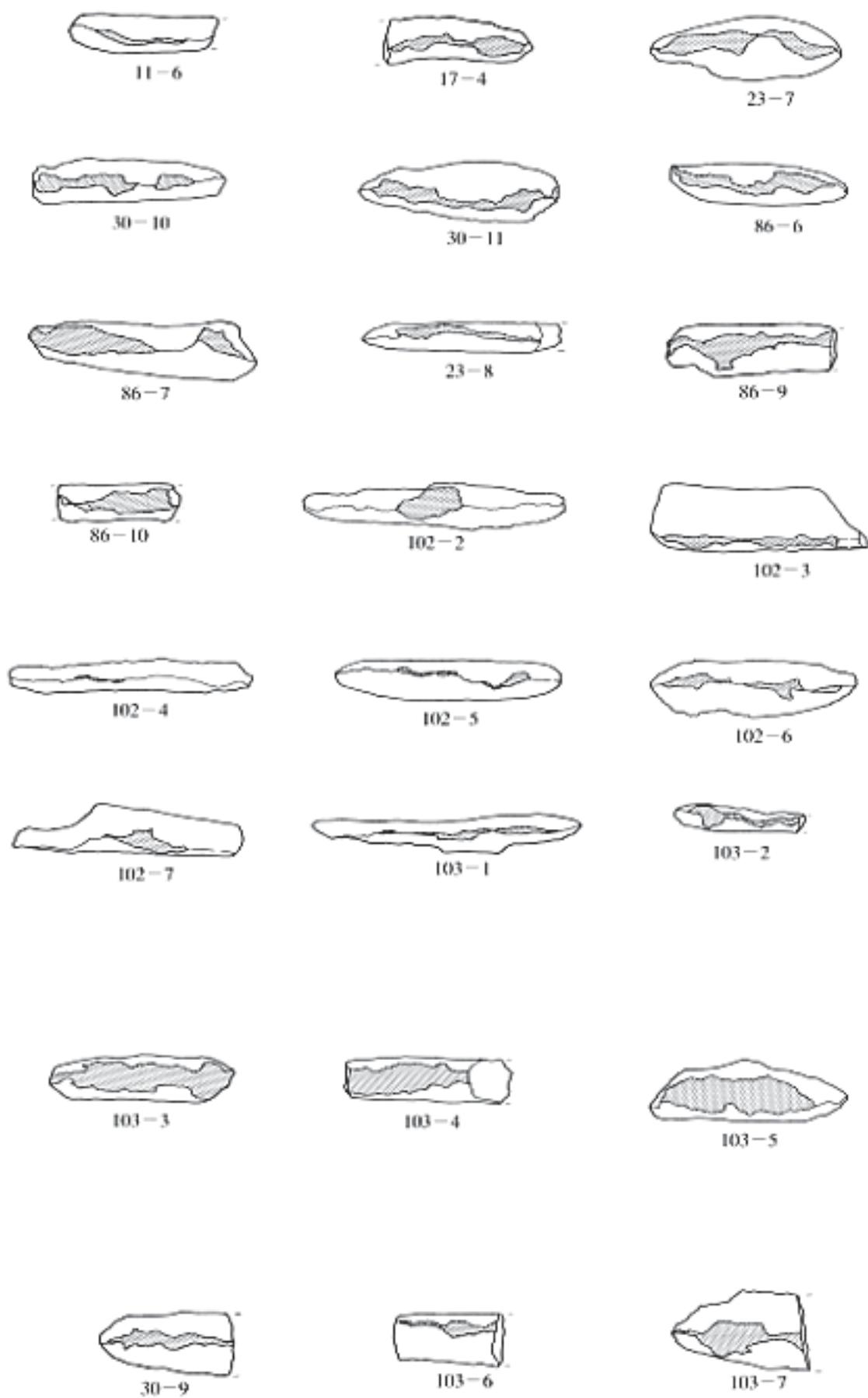
これらの剥離の生成要因として、アクシデンタルな要因による場合を除くと、本器種が利器として底面を機能面とした際に、何か対象物をたたき潰す等の使用の結果による剥離であることが考えられる。

本器種の底辺には敲打が行われた痕跡を看取することができない。またスリ面が剥離を切っているもの、剥離がスリ面を切っているものとを比較すると、その割合は前者の方が多い。また、第110図7については、底辺中央部に残されるスリ面（先出A）を切る剥離（a）を有するが、aと底辺に施される剥離（b）の打点は、スリ面（B）により切られている。このことから、 $A \rightarrow a \rightarrow b \rightarrow B$ の関係となる。

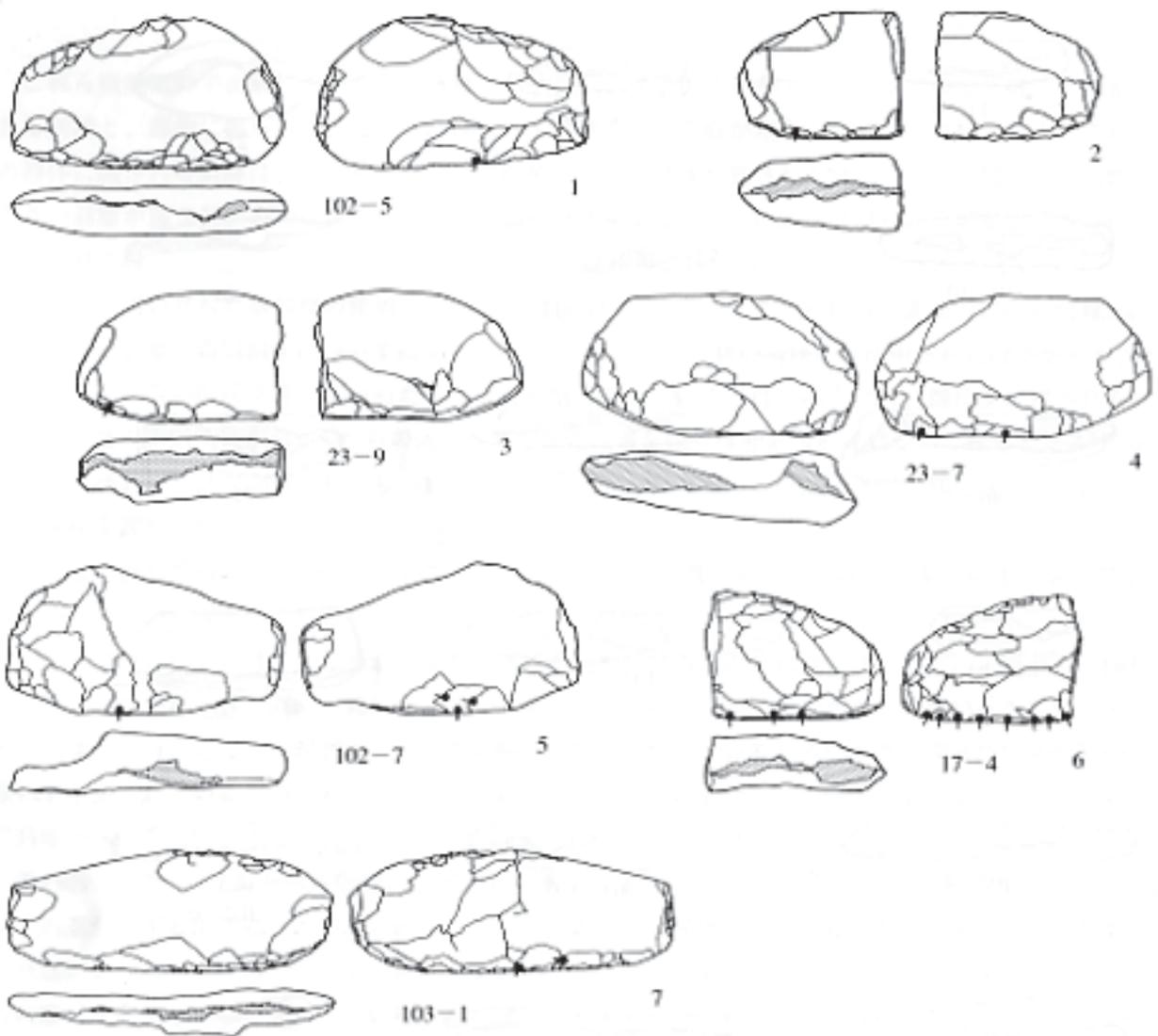
これらを踏まえると、本石器の使われ方は、スリ痕を生じさせる使用であり、剥離が生じる程の衝撃が加えられる使用のされ方は該石器の恒常的な使用方法ではなく、一時的に敲打を行う道具の代用として使用されたか、あるいは本石器を用いた一連の作業工程の中に、敲打を行う作業が1工程含まれた後に、再び擦りの作業が行われたことも想定される。

しかし、ほとんどの剥離がスリ面を切る第110図6の存在を無視できず、これらのスリ面を切る剥離の生成要因が、一概に対象物をたたき潰す等の使用の結果による剥離の可能性だけとは考え難い。

今一度第110図6について記述すると、本器種の作業が擦るといふ行為にウェイトが置かれていたと



第109図 スリ面残存状況



考えられ、本石器もスリ面を有することから主たる使用のされ方が擦るといふ行為にあったと考えられる。スリ面を打点として施される剥離は散発的な剥離ではなく連続する剥離であり、打点には敲打痕が観察されないことから敲打作業により生成された剥離とは考えられない。これらのことから第110図6のスリ面を切る剥離について、敲打によらない剥離と思われるため機能面を上として施される剥離と考えられる。直接あるいは間接的な打撃による剥離である場合は、意図的な剥離であることが考えられ、このことは剥離により機能面に加工または再加工を施すことを伺わせる。

しかしながら、これらスリ面を切る剥離が先に述べたように器体の厚みを大きく減じ得る程ではない小さい剥離であること、これら小剥離が施される（あるいは生じる）以前のスリ面の状況を知り得る術がないことを併せみると、さらなる考察が必要である。

本稿で取り上げた分析結果では、本遺跡出土資料に残される幾つかの情報を一部ではあるが分析した結果、想定可能と思われる本器種を利用した作業時の敲打が行われた可能性、機能面の再生の可能性を記述した。しかしいわゆる敲打痕は、敲打行為が連続して行われた結果残される痕跡であることから、一度の加撃により剥離が施される可能性、また敲打を行った際の対象物の如何によりそこに残される痕跡の程度に差異が生じることも想定可能と思われることから、これについてはさらに見識を深め、且つ、今後の資料の増加を待ち再度稿を起こしてみたい。

註6 草間俊一 1958「岩手県田代遺跡調査報告」『岩手大学学芸学部研究年報』13

註7 鈴木孝志 1958「岩手県岩手郡松尾村水切場遺跡調査概報」『上代文化』28

註8 村越 潔 1976「円筒土器に伴う特殊な石器」『東北考古学の諸問題』

註9 青森県教育委員会 1978『熊沢遺跡』

註10 青森県教育委員会 1990『空沢遺跡』

搬入礫について

柱状節理による棒状で、平面形断面形が四角・多角形を呈する搬入礫が8点出土した。

石質はすべて石英安山岩である。8点とも遺構外からの出土であり、出土層位は、Ⅰ層2点、Ⅱb層1点Ⅲ層2点、攪乱からの出土3点である。8点のうち、破砕片が3点、5点は長さ14cm～27cmで比較的残存状況が良好である。(これら残存状況の良好なものについては、以下便宜上、完形品とする)本石器に看取される人的行為が加えられたと思われる痕跡について挙げてみる。主な痕跡は剥離である。破砕片2点を除く6点について剥離が1側面に連続して施されるが、すべての稜に対して剥離が施されるものではない。また、剥離は素材の平面形状を変え得るものではなく、断面の厚さを減じる効果は得られていないことから、整形、刃部作出の意図を推し量ることは難しい。その他の各痕跡について、第30図1がスリ面と擦痕を有し、敲打・凹みを有する。これらの痕跡と剥離の相互の切り合い関係については、剥離はスリ面に切られ、スリ面は敲打・凹みにより切られている。礫面が若干摩耗していること、スリ面を有することにより他の7点と比較し丸みを帯びているが、本石材を用いた敲磨器類よりは転礫時代の影響は非常に少ないと推測することは難くない。その他の完形品4点については1点についてのみ部分的なスリ面と凹みが看取されるだけである。他の3点の破砕片について、現存するそれらの表面は礫面のままであり、本群を通してのスリ・敲打・凹みの各痕跡が少ないことから主な使用目的として利器としての利用法は想定し難い。

先述のように本石器群の石質は柱状節理の石英安山岩である。石英安山岩は、第V章第2節1で述べたように本遺跡が立地する八甲田火山性台地に分布し、現在筆者の知り得る限りでは堤川流域の下湯温泉付近において、転礫の影響を強く受けて角が取れた河原石状態の本石材の採取が可能である。

しかし、本石器の稜は角張っており、本石材の原産地、またはそれに限りなく近い地点での採取であることは、容易に推測できる。現在確認される本石材の原産地を求めた場合、八甲田山系城ヶ倉がその産地である。(註11)参考までに本遺跡と城ヶ倉とは直線距離にすると約13kmの距離である。

仮に本石材が城ヶ倉より搬入されたとした場合、本遺跡から城ヶ倉までの現在のルートは山地である。当時の人間の移動経路を伺い知ることは困難であるが、徒歩による移動は相当な困難が予想される。仮に高低差の少ないと思われる河川沿いの移動を想定しても移動経路は必然的に堤川上流(通称荒川)経由に限定され移動距離には格段の差が生じる。いずれにしても本石材を携えての移動となると多大な労力が伴うことは容易に想定することができる。

前述のように、主に利器として利用された痕跡が少ないこと、さらに多大な労働力を消費しながら搬入したと思われる本石材の使用法であるが、報告例が少ないため現段階では仮定の域を脱することはないが、何らかの想定が許されるのであれば、前2項と本石器の形状と時間的変遷を加味すると、石棒の原材料としての搬入の想定が可能かも知れない。あるいは石棒祭祀開始時期についての時間的遡上の想定が可能であろう。

(沼宮内陽一郎)

註11 調査員 工藤一彌氏のご教示による。

十腰内 I 式土器に伴う垂飾品について

本調査では、B地区より縄文時代後期前葉の十腰内 I 式土器期に帰属できる垂飾品が3点出土した(第12図3～5)。ここでは、この垂飾品について装飾部位の推定や分布、製作時期を中心に考察する。

①名称について

今回、土製品に分類した中で、本資料だけが形態や製作方法から付される名称ではなく、用途から称したのは、墓と想定した土坑より孔を有する土製品が3点一括で出土し、これを遺体に装着された一つのセットとして考え、この3点を総称して「垂飾品」とした。さらにこれらを単品として捉えた場合には、それぞれが「土版」という名称が与えられ、その形状から菱形を呈するもの(第12図3)は、「方形土版」、楕円形を呈するもの(第12図4、5)は、「円形土版」として分類される(註1)。検討にあたっては、前記の方形土版をさらに細分し、次に以下の定義を設定し、この定義に属されるものを今回の対象とした。

「形状は、概して方形あるいは菱形を呈し、側縁の短軸または長軸の方向に貫通孔を有するものである。文様は、主に沈線文や刺突文などで構成される。」

②機能および用途

第2号土坑の底面に接する層位から、平面形が菱形を呈するものが1点、楕円形を呈するものが2点出土した。本土坑は墓として考えられ、その認定方法(註2)にあたっては、土坑の大きさ・平面・断面形などからみた遺体の埋葬の妥当性や、土坑中の埋土が攪乱状態の単層(註3)であるという必要条件を満たし、また遺物(本資料)の出土状態から土坑墓として判断した。本資料は、死者が装着していたもの、あるいは死後遺体に装着されたものと考えられる。出土位置は、土坑の中央から東寄りに3点が少し離れて出土した。(第12図)。その位置から装着部位を推定すると胸あるいは腹に垂れ下げられたものと思われる。

③資料の分布

ここでは、上記の方形土版が東北北部から北海道南部にかけての遺跡からの出土例が認められることから、その分布について検討する。

管見によれば上記の定義に属される資料は、

青森市桜峯(1)遺跡(本遺跡)から1点

青森市四ツ石遺跡から2点 (註4)

弘前市十腰内遺跡から1点 (註5)

八戸市丹後谷地遺跡から1点 (註6)

秋田県鹿角市大湯環状列から2点(註7・8)

北海道函館市石倉貝塚から1点(註9) の6遺跡8点を数える。

以上の遺跡の分布を見てみると、その範囲は十腰内式土器様式(註10)の分布圏(註11)内にとどまり、遺跡数は少ないものの、青森湾周辺域、岩木川流域、馬淵川流域、秋田県米代川流域、北海道渡島半島域に分布している。

④製作時期

各遺跡で出土した本資料は、共伴する土器から縄文時代後期前葉、土器型式でいえば十腰内 I B 式土器(註12)期に製作された可能性が考えられる。

桜峯(1)遺跡では、縄文時代前期末葉～中期初頭の円筒下層 d₂ 式～円筒上層 a 式土器を主体としてい

るが、後期の土器では、十腰内 I B～十腰内 II 式を中心としている。本資料の出土地点である B 地区では、後期の土器が主体的で、十腰内 I B 式が主に出土している。

四ツ石遺跡では、少ない面積の調査区から十腰内 IB 式を主体とする土器と共に出土し、丹後谷地遺跡でも、捨て場 2 と称される遺物が集中するブロックから出土しており、このブロックの中には十腰内 I B 式土器を中心に含まれていた。

大湯環状列石においても、大湯 II 式（註 13）と称され十腰内 I B 式土器に比定される土器を主体とする調査区から出土している。また、十腰内遺跡や石倉貝塚でも、十腰内 I B 式土器が出土している。

以上のような出土例からみて、十腰内 I B 式土器期に製作された可能性が高いという帰結を導き出した。

（児玉 大成）

註 1 本資料の分類にあたっては、成田滋彦 1996「後期土版考」『研究紀要』1 青森県埋蔵文化調査センターによった。

註 2 岡村道雄 1993「埋葬にかかわる遺物の出土状態からみた縄文時代の墓葬礼」『論苑考古学』天山舎

註 3 「第 III 章第 2 節」の事実記載では 8 層に分層したが、それぞれがブロックとして捉えることができ、一度に埋め戻された状況を呈している。

註 4 青森市教育委員会 1965『四ツ石遺跡調査概報』

註 5 今井富士雄・磯崎正彦 1968「十腰内遺跡」『岩木山』

註 6 八戸市教育委員会 1986「丹後谷地遺跡」

註 7 鹿角市教育委員会 1993『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書（9）』

註 8 鹿角市教育委員会 1996『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書（12）』

註 9 函館市教育委員会 佐藤智雄氏のご教示による。資料を実際に見せていただいた。

註 10 成田滋彦 1989「入江・十腰内式土器様式」『縄文土器大観』4 小学館

註 11 註 10 の分布図を参照した。

註 12 註 10 と同じ

註 13 秋元信夫 1986「大湯環状列石周辺遺跡出土土器の変遷」『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書（2）』鹿角市教育委員会

ま と め

立 地

桜峯(1)遺跡は、青森市内横内字桜峯を中心に、横内字鏡山、雲谷字山吹等複数の地番にまたがり所在しており、地形的には、青森市内の南～東部に広がる火山性台地において、東西を横内川と合子沢川の2つの河川に挟まれながら、北側に位置する市内平野部に対し、北西に緩く傾斜する台地上に位置している。本遺跡の標高は、おおむね100～120mであり、市内所在の遺跡の中では比較的高位に位置する。今回の調査では、道路建設予定地が対象のためA～D区画の4区に区分けしたが、A区及びB区南半が位置する標高120m付近は平坦な台地で、そこからD区にむかつては緩やかに下る斜面であるが、D区西側は急な崖状の斜面となっている。

検出遺構

今回の調査で検出した遺構は、竪穴式住居跡7軒、土坑54基、埋設土器遺構11基、柱穴状ピット20基、溝状遺構1基、遺物集中ブロック1である。各調査区の内訳は、A区で土坑1基、B区で土坑3基、溝状遺構1基、C区で竪穴式住居跡7軒、土坑50基、埋設土器遺構11基、柱穴状ピット20基、遺物集中ブロック1である。D区では遺構を検出していない。

以上のように遺構の大半はC区において検出し、C区の中でも西側に台地が舌状に突き出す部分に集中しており、集落の一部と思われる。複数の調査区外へ広がる遺構も確認しており、主に舌状部分の突端方向である西側に集落が広がるものと推定される。調査区内においては、東側に向け徐々に遺構の密度は薄くなる傾向にあり、集落の中では縁辺部に相当する。また、竪穴式住居跡、土坑等の各遺構は、B区においては、検出した3基の土坑等、まとまりを見せず散発的に分布している。C区においては、全体として竪穴式住居跡、土坑等の各遺構が種別に一定の範囲にまとまり検出される傾向が見られた。なお、C区検出土坑の大半は、いわゆるフラスコ状土坑であり、中でもC区第70号土坑は、フラスコ状を呈する土坑の底面をさらに掘りこみ、同じくフラスコ状を呈する土坑が造られており、いわゆる二重フラスコ(子持ちフラスコ)と思われる。

出土遺物

調査で出土した遺物には、土器、石器、土製品があり、その量は、段ボール換算で約100箱である。土器は、縄文時代前期～晩期、続縄文、平安時代と幅広い時期にわたり出土しているが、主体を占めるのは、縄文時代前期末葉～中期初頭の時期の土器であり、各区において出土している。量的にはC区の出土が他区と比較して多い。出土土器の中には、在地の土器である円筒土器以外に、破片3点ではあるが、施文方法、施文文様から北陸の影響を受けたと考えられる土器も含まれている。縄文時代後期以降の時期については、各区において僅かな出土である。

調査各区の出土状況の特徴としては、主体を占める縄文時代前期末葉から中期初頭の土器についてもA、B区は小破片が点在して出土する散布地的な様相を呈するのに村し、C区では、面積の大半が近現代の削平を受け遺物包含層が残っていないものの削平を免れた北側斜面や遺構内を中心に復元個体も多数存在している。縄文時代後期以降の土器は、調査各区において全体に散発的な出土であるが、後期に関しては、A、B区の境界付近において比較的多く分布している。

遺跡の特徴

本遺跡の特徴としては、ひとつには、市内に分布する他の遺跡と比べ標高約100mと比較的標高の高い本遺跡においても、竪穴式住居跡やフラスコ状土坑が検出され、時期的には縄文時代前期末葉から中期初頭を主体とし、長期間ではないものの、集落が営まれていた事が挙げられる。

また、検出した土坑には、1基ではあるが、秋田県などで報告例のある、二重フラスコ（子持ちフラスコ）があった。本報告書では、これについて詳しく触れていないが、本県における類例の増加を待ちたい。

ふたつめに、他の文化圏との交流の断片として、在地の円筒土器に加えて、北陸の前期末葉とされる朝日下層式土器に施文文様が類似する、半隆起線文と細いソーメン状の隆線貼付による斜格子目文を施した土器が、決して規模の大きくない本遺跡の集落において出土した事は特徴の二点目と考えられる。

本遺跡の調査から報告書刊行に至るまで計4年間にわたり、ご指導ご協力を賜った多くの方々に、深くお礼申し上げます。

最後になりましたが、桜峯(1)、(2)遺跡の発掘調査を通じて、ご指導いただいております八戸工業高等専門学校名誉教授の小山陽造先生が去る平成9年8月5日、おしまれつつ、ご逝去なされました。現地調査においては、柔和に温かくご指導いただいたことに改めて、深くお礼申し上げますとともに、謹んで、ご冥福をお祈り申し上げます。

(担当者一同)

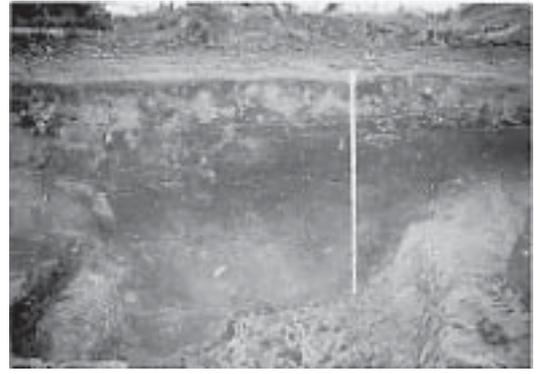
引用・参考文献

- 青森県教育委員会 1977 第 38 集 『熊沢遺跡発掘調査報告書』
- 青森県教育委員会 1979 第 53 集 『大鱈町砂沢平遺跡発掘調査報告書』
- 青森県教育委員会 1979 第 55 集 『大面遺跡発掘調査報告書』
- 青森県教育委員会 1980 第 59 集 『板留(2)遺跡発掘調査報告書』
- 青森県教育委員会 1980 第 63 集 『鷹架遺跡発掘調査報告書』
- 青森県教育委員会 1983 第 82 集 『和野前山遺跡発掘調査報告書』
- 青森県教育委員会 1985 第 97 集 『大石平遺跡(監)発掘調査報告書』
- 青森県教育委員会 1985 第 103 集 『大石平遺跡(企)発掘調査報告書』
- 青森県教育委員会 1987 第 113 集 『上尾駱(1)遺跡 C 地区発掘調査報告書』
- 青森県教育委員会 1985 第 119 集 『館野遺跡』
- 青森県教育委員会 1991 第 142 集 『鳴沢遺跡・鶴喰(9)遺跡』
- 青森県教育委員会 1992 第 144 集 『沢堀込遺跡発掘調査報告書』
- 青森県教育委員会 1993 第 154 集 『小奥戸(1)遺跡発掘調査報告書』
- 青森県教育委員会 1995 第 180 集 『熊ヶ平遺跡発掘調査報告書』
- 青森県教育委員会 1996 第 192 集 『戸沢川代・熊ヶ平遺跡発掘調査報告書』
- 青森県教育委員会 1996 第 195 集 『上田遺跡発掘調査報告書』
- 青森県教育委員会 1997 第 221 集 『津山遺跡発掘調査報告書』
- 青森市教育委員会 1965 青森市の文化財 2 『四ツ石遺跡調査概報』
- 青森市教育委員会 1986 青森市の埋蔵文化財 『田茂木野遺跡発掘調査報告書』
- 青森市教育委員会 1995 第 24 集 『横内遺跡・横内(2)遺跡発掘調査報告書』
- 青森市教育委員会 1995 第 26 集 『桜峯(2)遺跡発掘調査報告書』
- 青森市教育委員会 1996 第 30 集 『小牧野遺跡発掘調査報告書』
- 青森市教育委員会 1997 第 34 集 『葛野(2)遺跡発掘調査報告書』
- 青森市教育委員会 1997 第 35 集 『小牧野遺跡発掘調査報告書(監)』
- 青森市教育委員会 1998 第 37 集 『新町野遺跡発掘調査報告書』
- 青森市教育委員会 1998 第 41 集 『野木遺跡発掘調査概報』
- 青森山田高等学校考古学研究会 1980 『撚糸文』 9
- 青森山田高等学校考古学研究会 1986 『撚糸文』 16
- 秋田県教育委員会 1988 第 166 集 『東北縦貫自動車道秋田線発掘調査報告書(監)』
- 秋田市教育委員会 1976 『小阿地』
- 益富壽之助 1987 『原色岩石図鑑』 保育社
- 江坂輝彌 1970 『石神遺跡』 ニュー・サイエンス社
- 鹿角市教育委員会 1986 31 『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(2)』
- 群馬県教育委員会 1991 第 123 集 『飯土井中央遺跡発掘調査報告書』
- 小島俊彰 1985 「朝日貝塚の朝日下層式土器再見」 『大境』 9
- 五所川原市教育委員会 1989 第 12 集 『観音林遺跡(第七次発掘調査報告書)』
- 鈴木克彦 1997 「東北地方北部における十腰内土器様式の編年学的研究」 『考古学雑誌』 81 - 4
- 鈴木道之助 1991 『石器入門事典縄文』 柏書房
- 東北大学文学部考古学研究会 1995 『縄文時代晩期貝塚の研究 2 中沢目貝塚(監)』
- 七飯町教育委員会 1979 『峠下聖山遺跡』
- 成田滋彦 1989 「入江・十腰内式土器様式」 『縄文土器大観』 4 小学館
- 能登町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団 1986 『石川県能登町真脇遺跡』
- 秦 昭繁 1991 「特殊な剥離技法をもつ東日本の石匙—松原型石匙の分布と製作時期について—」 『考古学雑誌』 76-4
- 村越 潔 1974 『円筒土器文化』 雄山閣
- 山本暉久 1988 「石棒」 『縄文文化の研究』 9 雄山閣
- 吉田政行・五十嵐彰他 1996 「剥片の諸属性とハンマー素材の関連」 『日本考古学協会第 62 回総会研究発表要旨』

写 真 图 版



A区基本層序



A区第1号土坑セクション



A区第1号土坑完掘状況



A区遺構外遺物出土状況



A区全景



B区基本層序



B区第1号土坑セクション



B区第1号土坑完掘状況

写真1



B区第2号土坑完掘状況



B区第2号土坑遺物出土状況



B区第3号土坑完掘状況



B区遺構外遺物出土状況



C区調査前風景



C区第1号竪穴式住居跡完掘状況



C区第2号竪穴式住居跡セクション



C区第2号竪穴式住居跡セクション

写真2



C区第2号竪穴式住居跡埋設土器セクション



C区第2号竪穴式住居跡完掘状況



C区第3号竪穴式住居跡セクション



C区第3号竪穴式住居跡土器埋設炉



C区第3号竪穴式住居跡貼床下埋設土器



C区第3号(右)第4号(左)竪穴式住居跡完掘状況

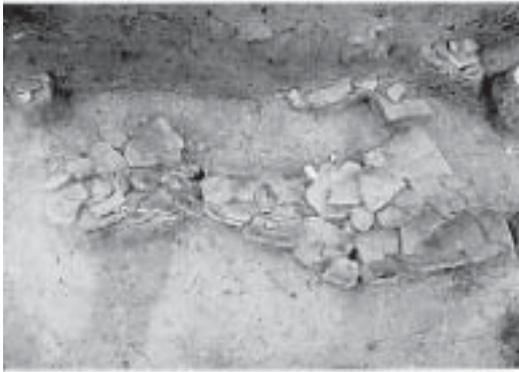


C区第4号竪穴式住居跡遺物出土状況



C区第5号(左)第6号(右)竪穴式住居跡セクション

写真3



C区第6号竖穴式住居跡遺物出土状況



C区第6号竖穴式住居跡完掘状況



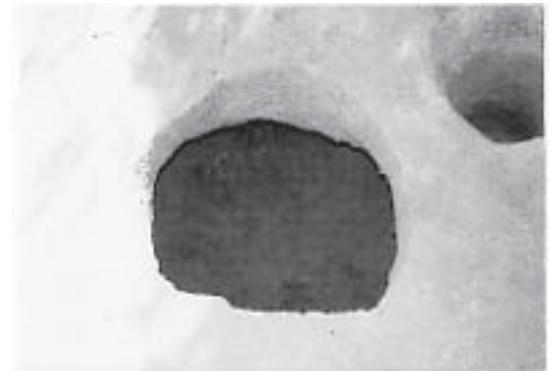
C区第5号(左)第6号(右)竖穴式住居跡完掘状況



C区第7号竖穴式住居跡完掘状況



C区第7号竖穴式住居跡埋設土器



C区第2号土坑完掘状況

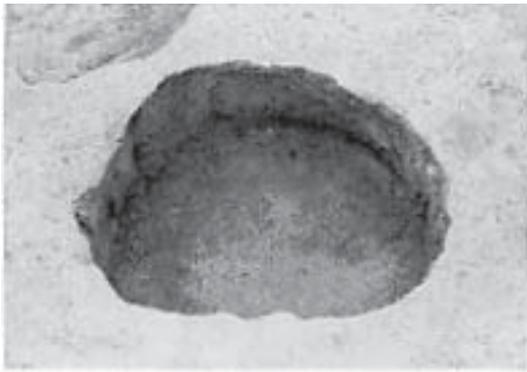


C区第4号土坑完掘状況

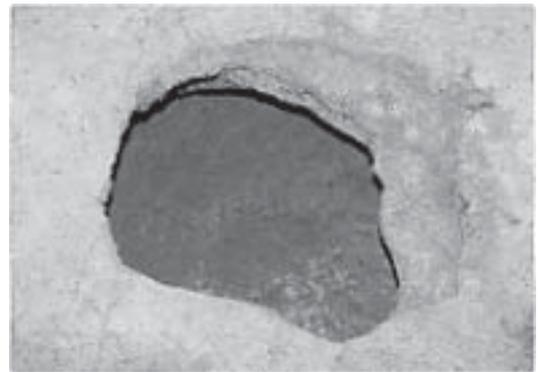


C区第5号土坑完全掘状況

写真4



C区第6号土坑完掘状況



C区第7号土坑完掘状況



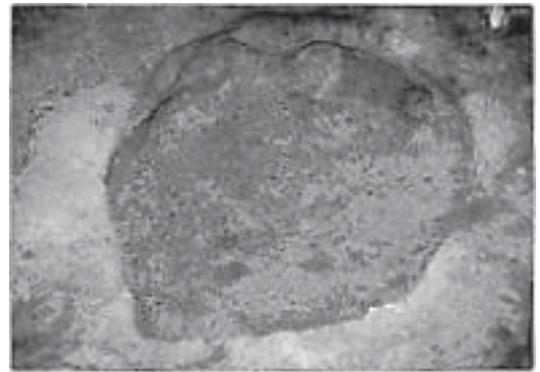
C区第8号土坑完掘状況



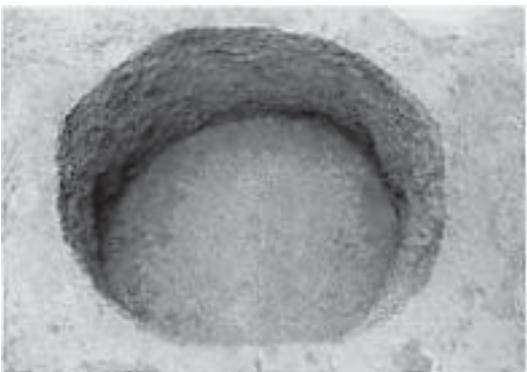
C区第9号土坑完掘状況



C区第10号(左)第11号(右)土坑セクション



C区第23号土坑完掘状況



C区第24号土坑完掘状況



C区第28号土坑セクション

写真5



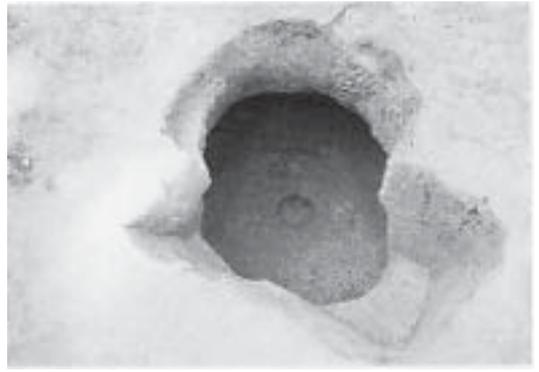
C区第29号(左)第32号(右上)第35号(右下)土坑完掘状況



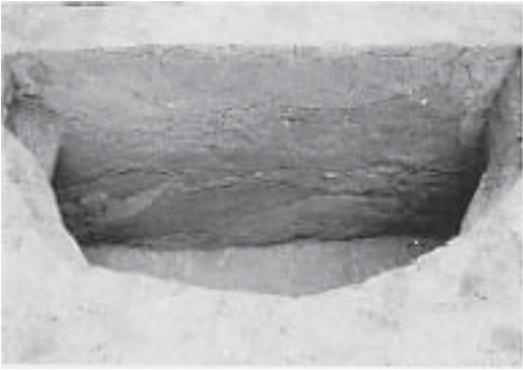
C区第30号土坑完掘状況



C区第34号土坑セクション



C区第41号土坑完掘状況



C区第46号土坑セクション



C区第49号土坑セクション



C区第55号(中)第51号(左)第52号(右)土坑完掘状況

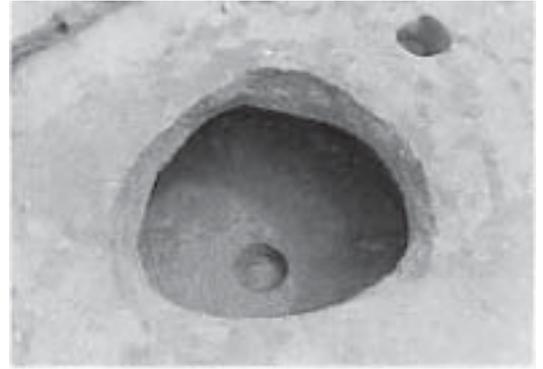


C区第55号土坑セクション

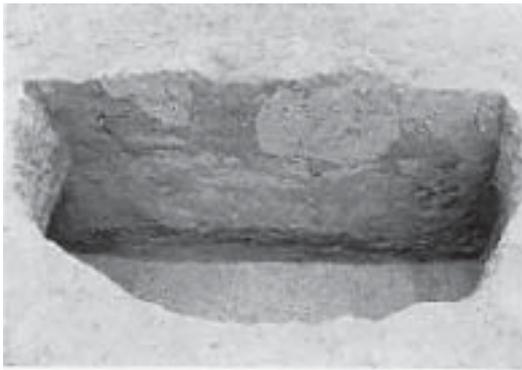
写真6



C区第56号土坑セクション



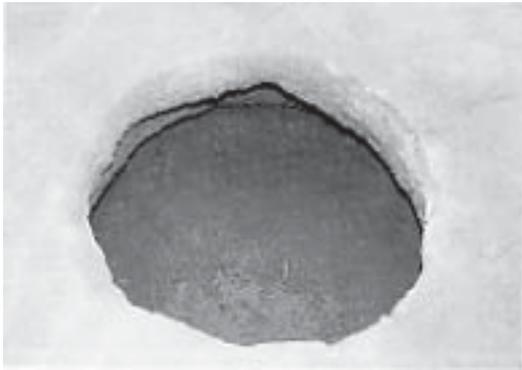
C区第57号土坑完掘状況



C区第59号土坑セクション



C区第65号土坑完掘状況



C区第67号土坑完掘状況



C区第68号土坑セクション

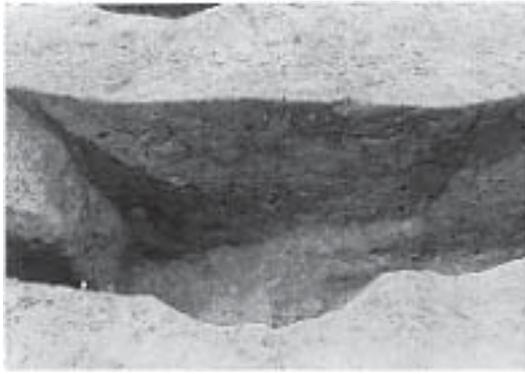


C区第70号(左)第71号(右)土坑セクション



C区第72号土坑セクション

写真7



C区第73号土坑セクション



C区第4号埋設土器遺構セクション



C区第5号埋設土器遺構セクション



C区第8号埋設土器遺構セクション



C区第9号埋設土器遺構セクション



C区遺構外遺物出土状況



C区遺構外遺物出土状況



作業風景

写真8

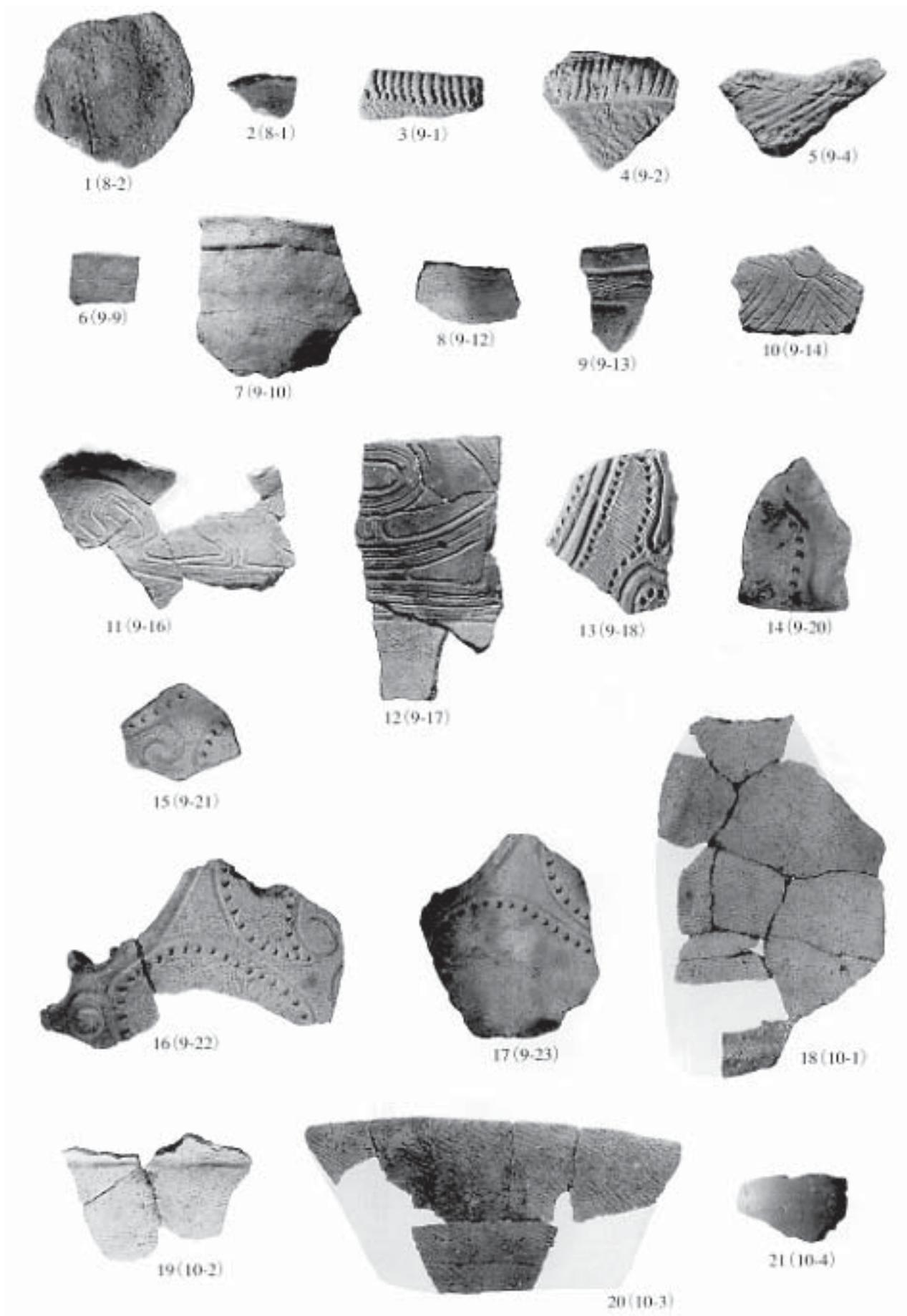


写真9 A区出土土器

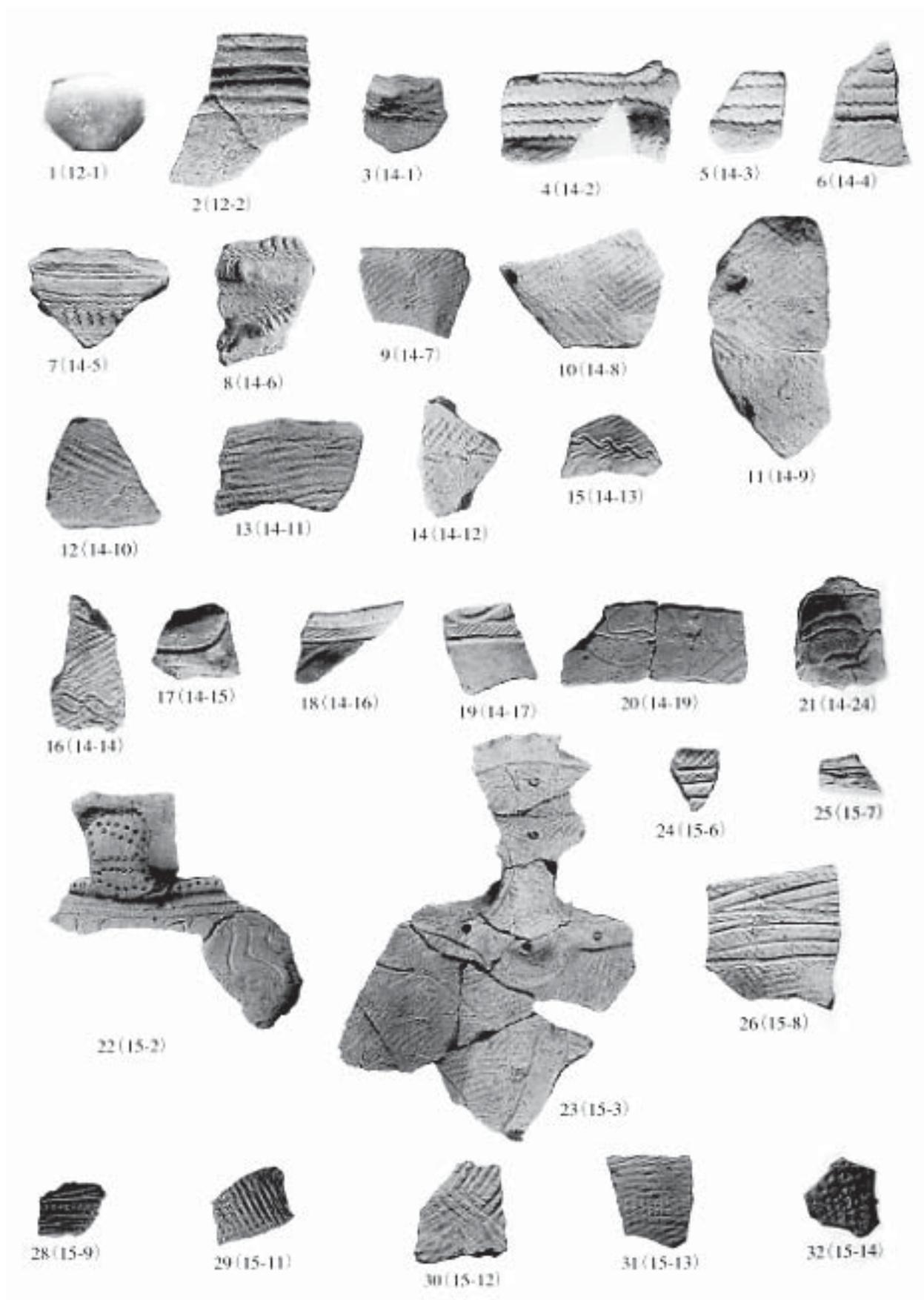


写真10 B区出土土器

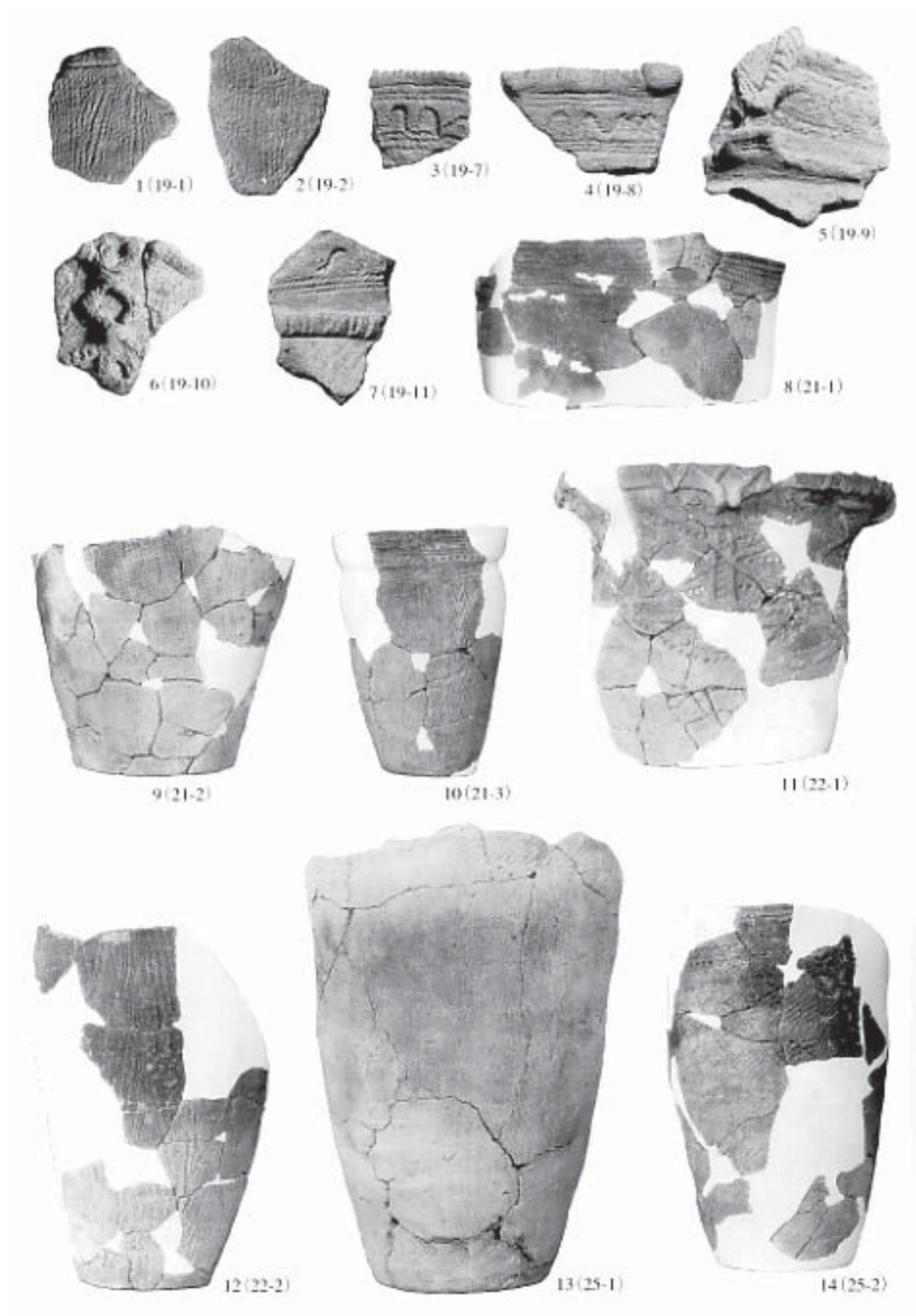


写真11 C区出土土器1

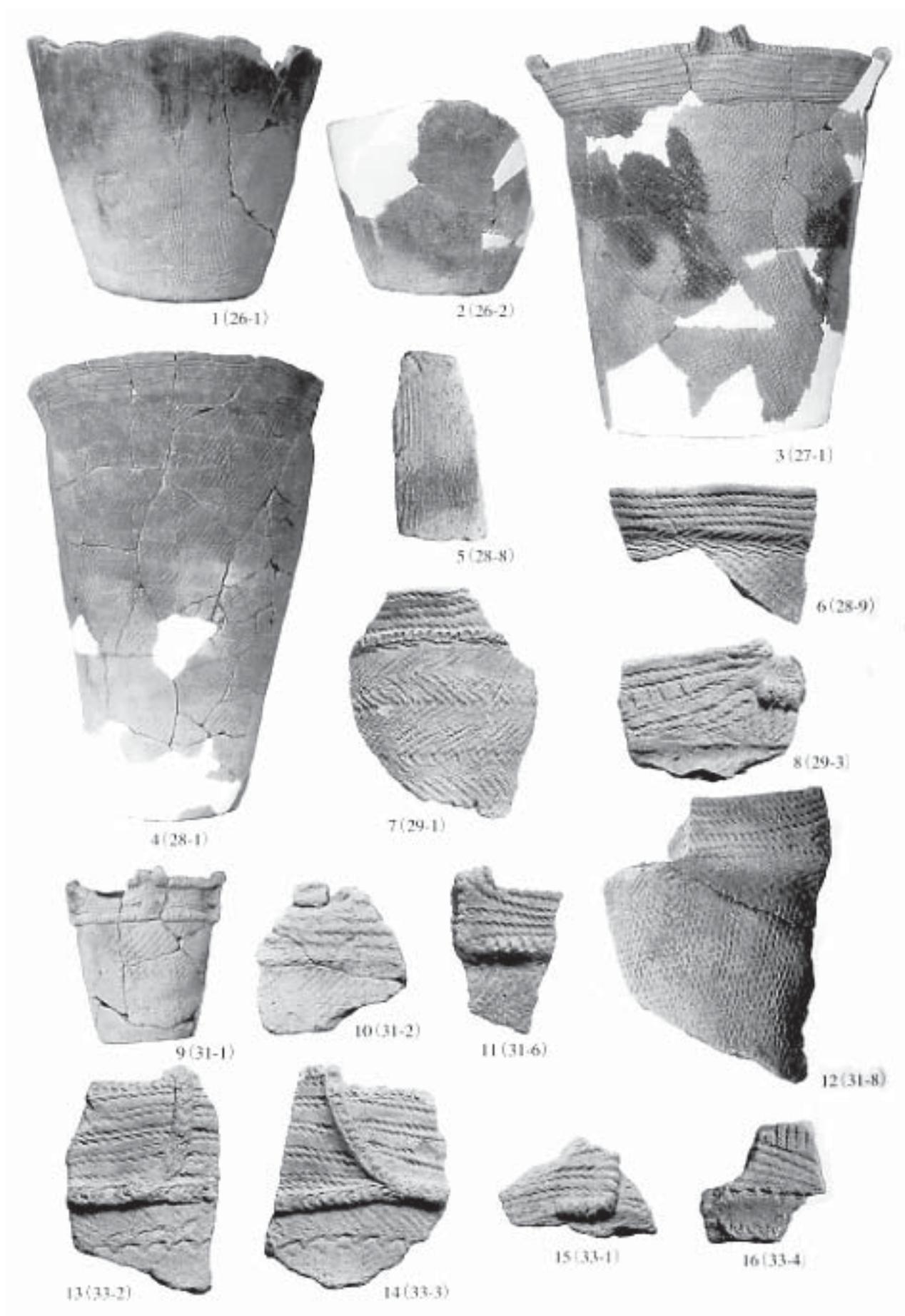


写真12 C区出土土器2

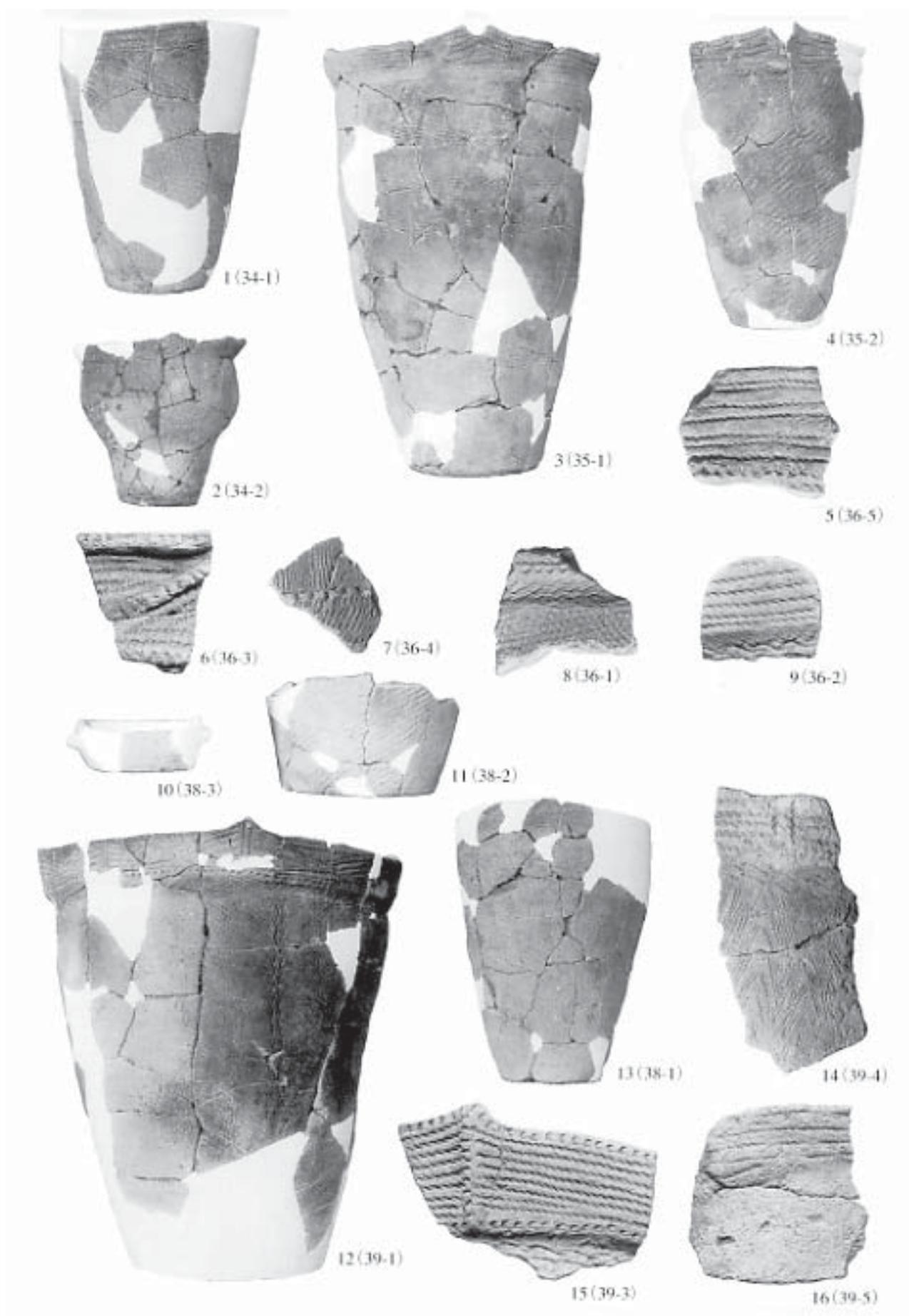


写真13 C区出土土器3

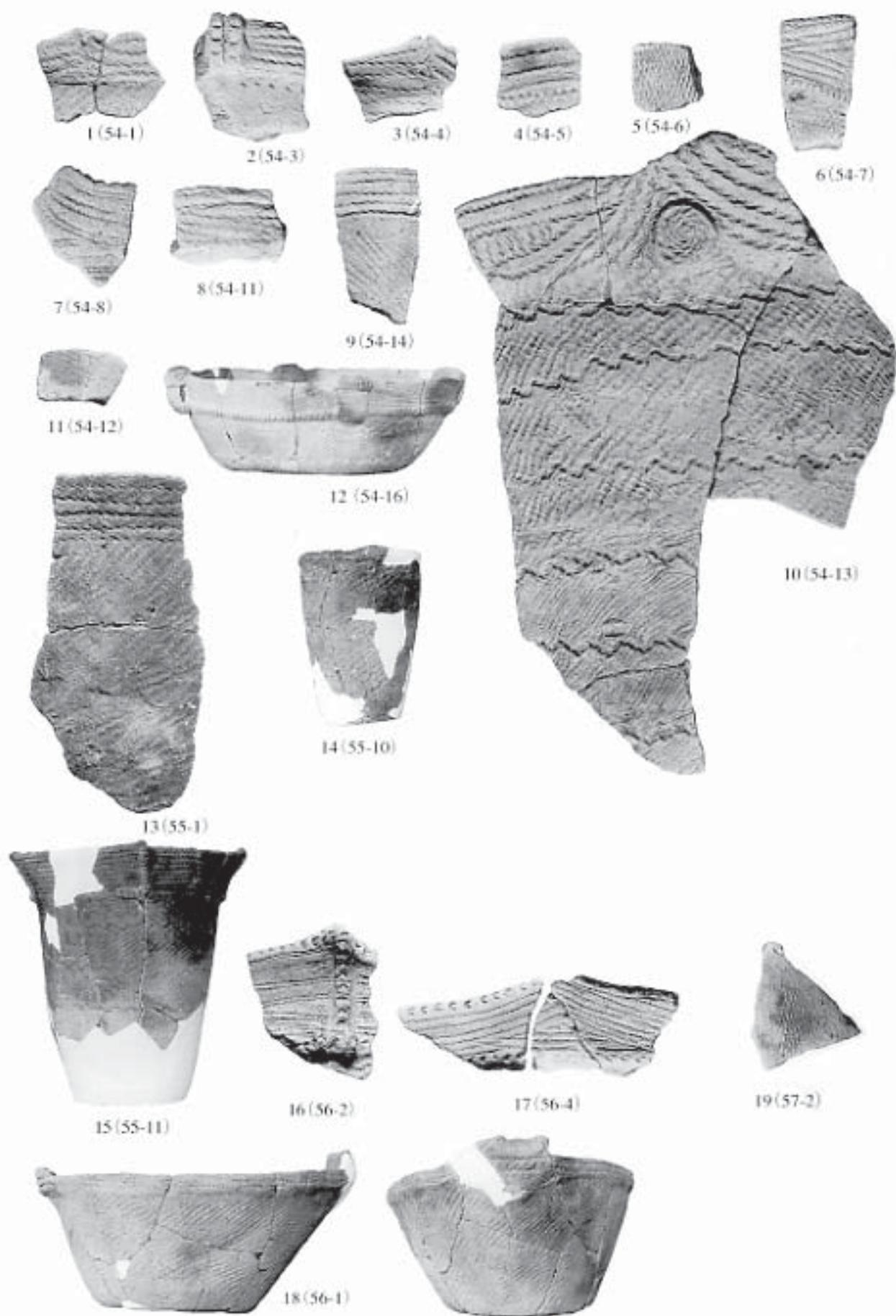


写真14 C区出土土器4

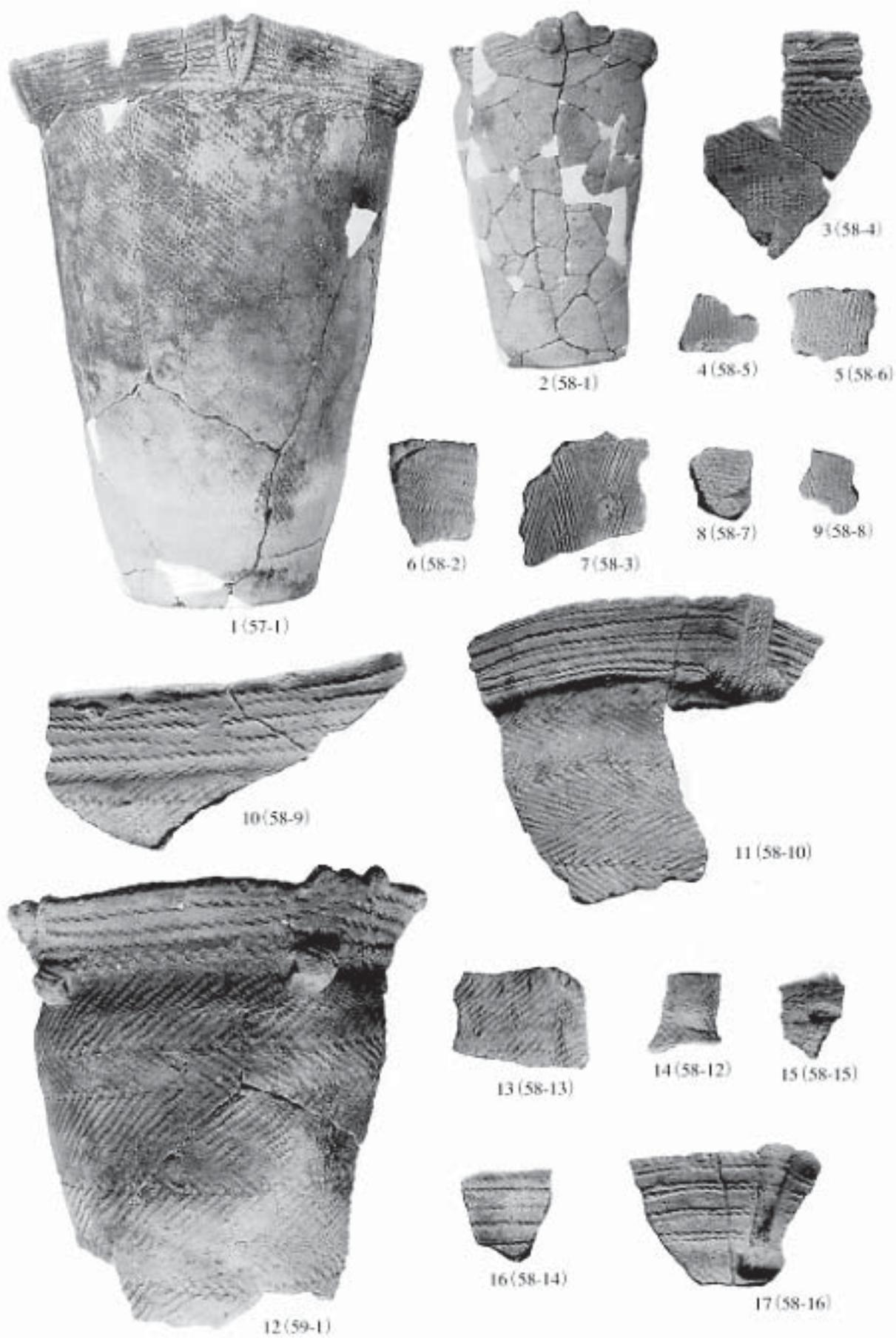


写真15 写真5

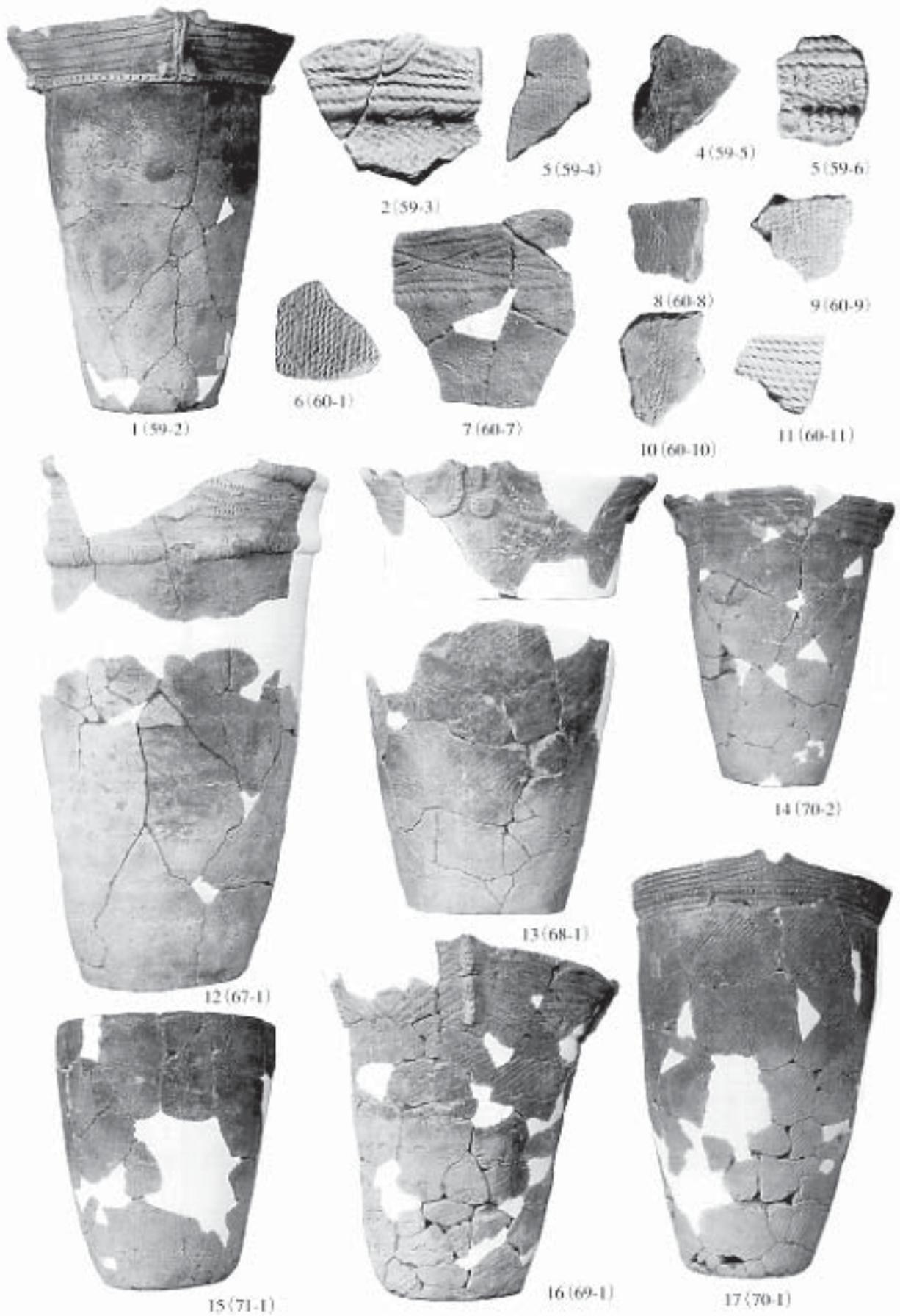


写真 16 C区出土土器 6

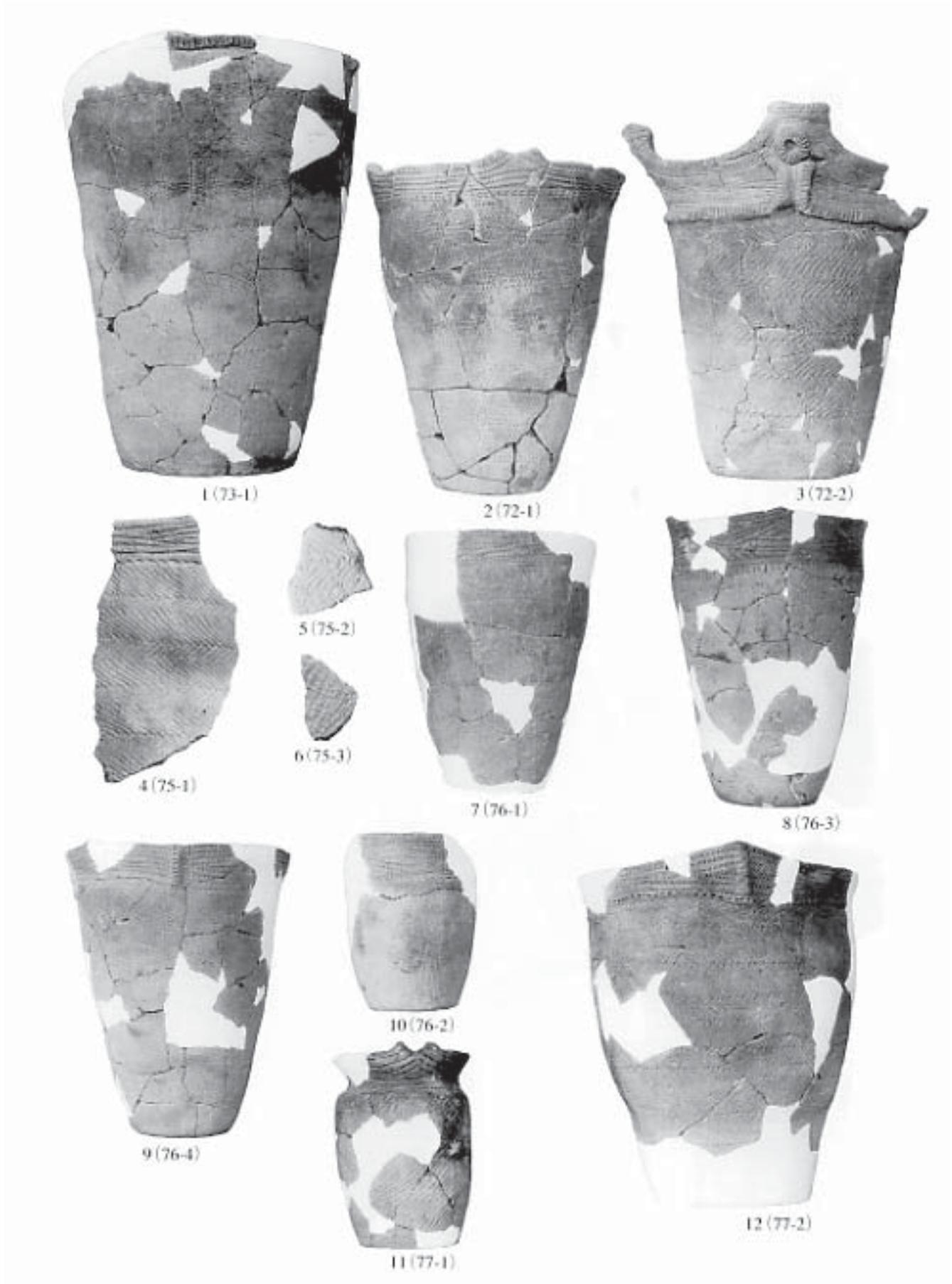


写真17 C区出土土器7

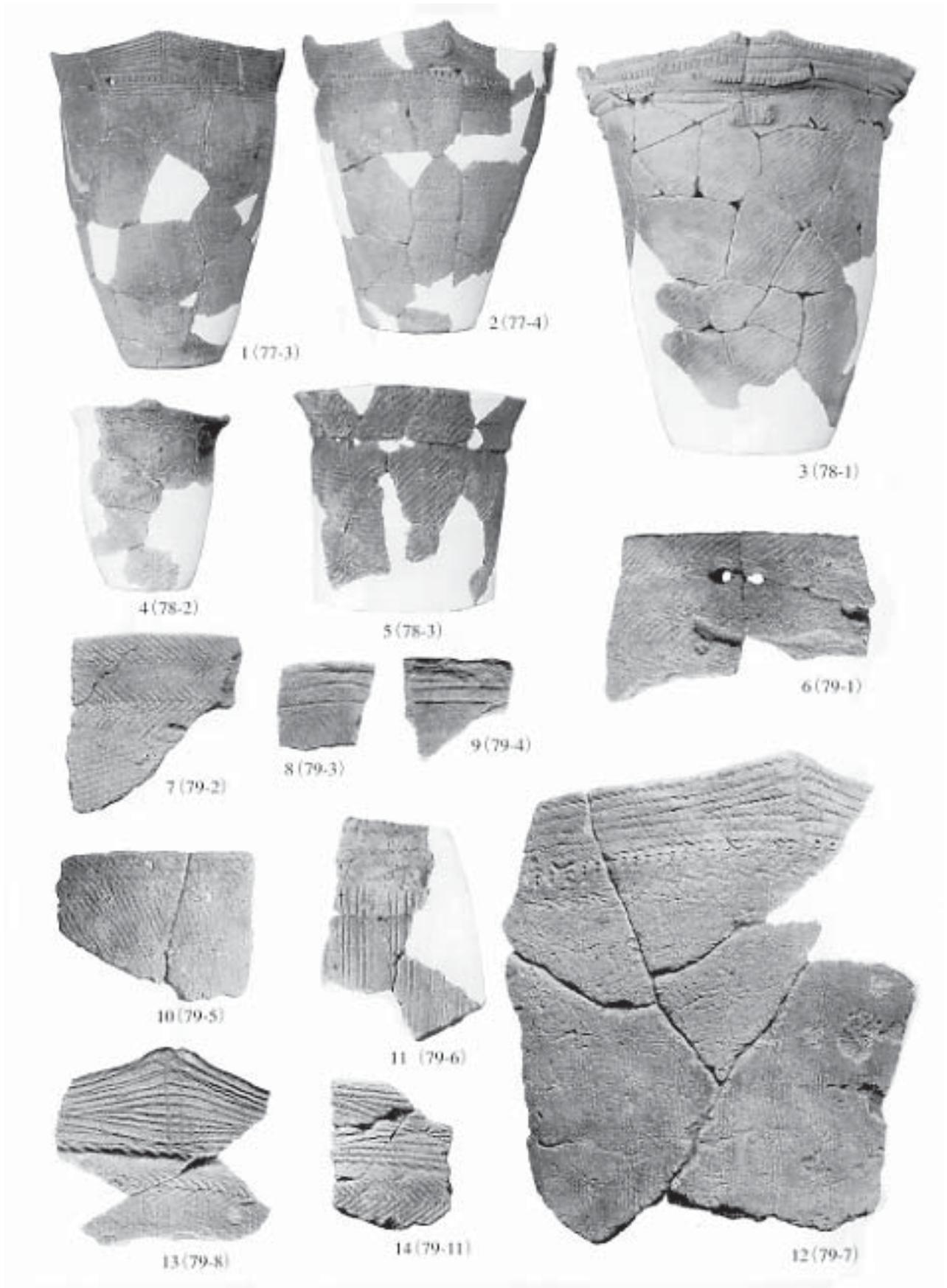


写真 18 C区出土土器 8

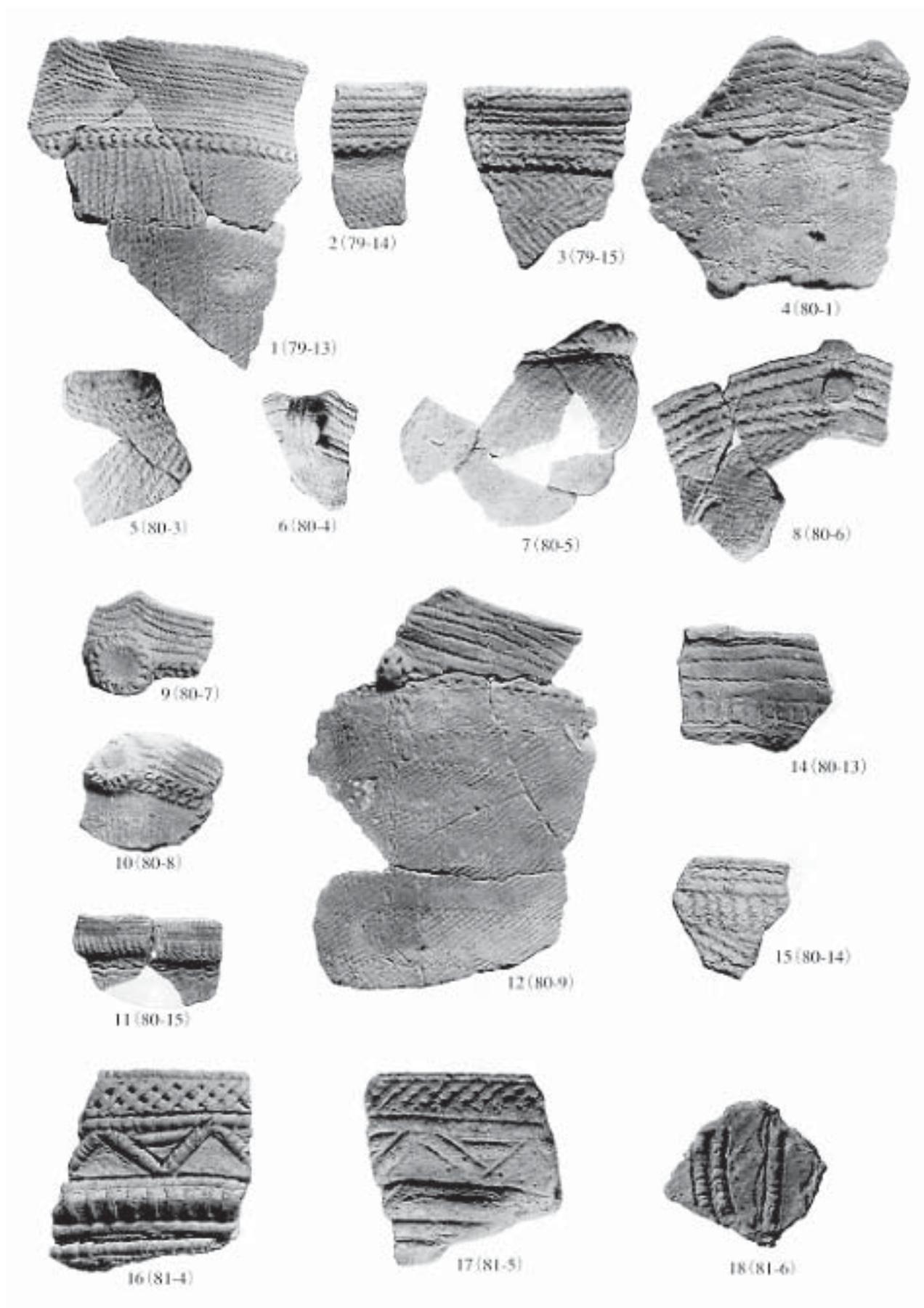


写真19 C区出土土器9

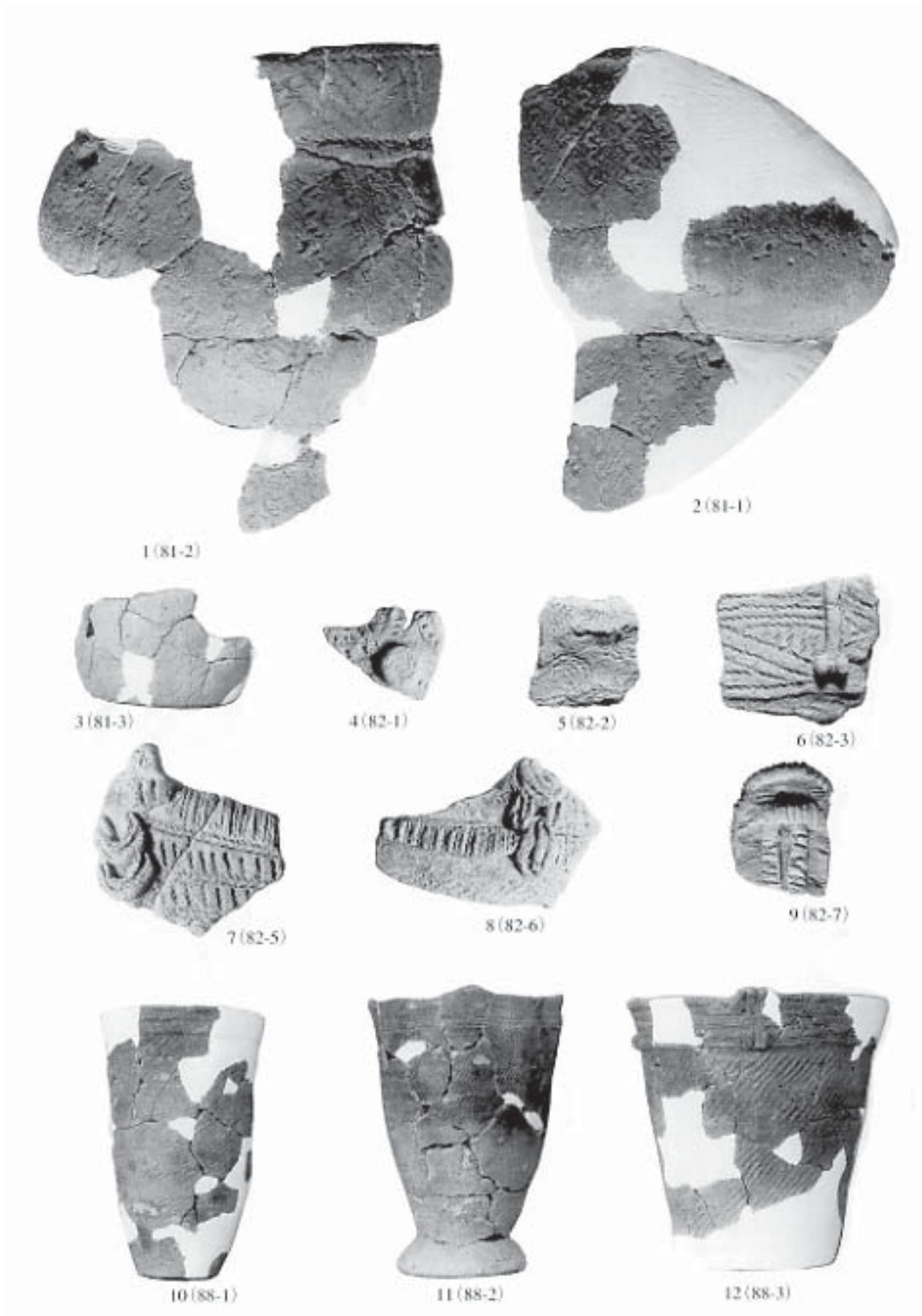


写真20 C区出土土器10

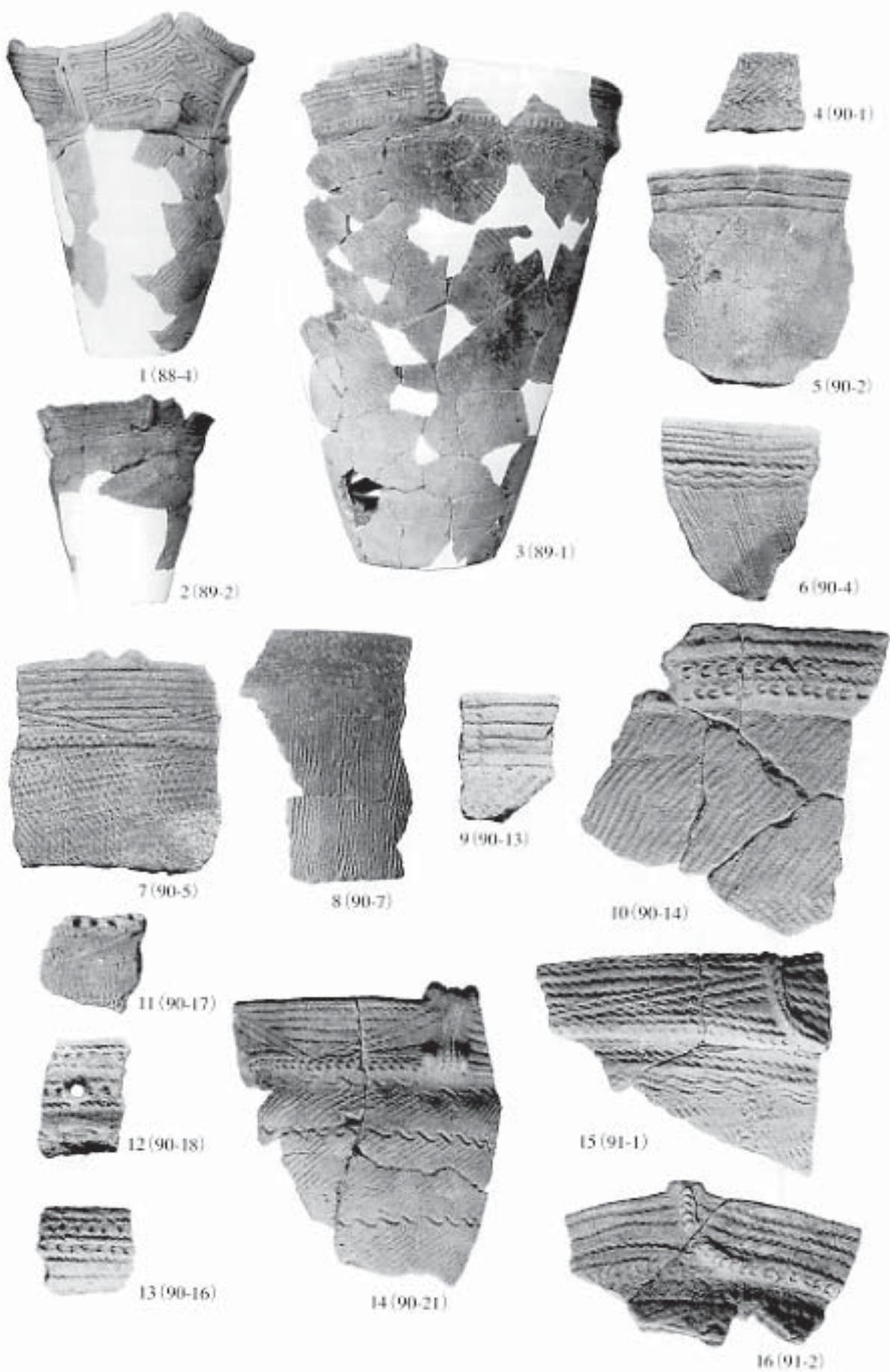


写真21 C区出土土器11

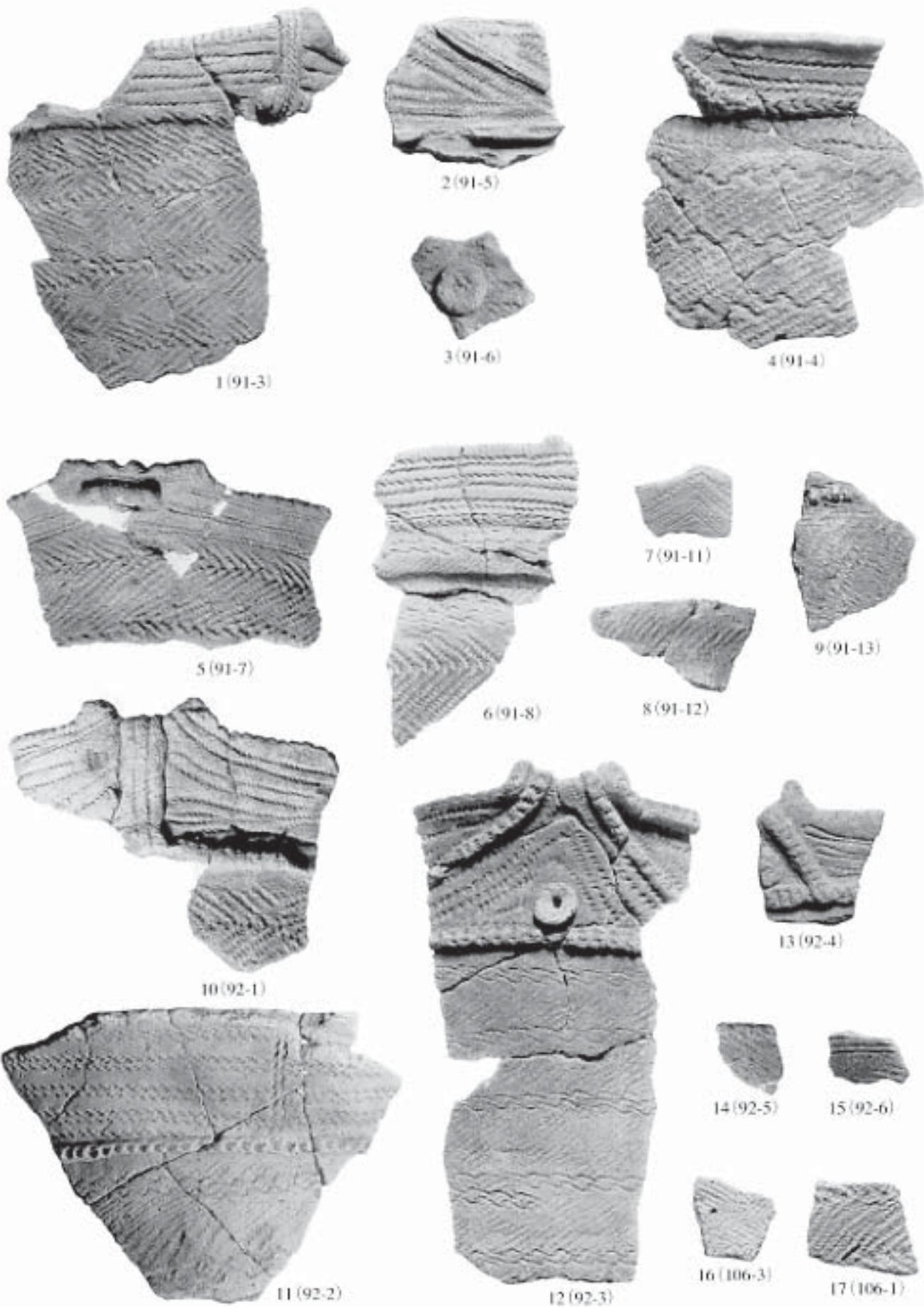


写真 22 C区・D区出土土器 12

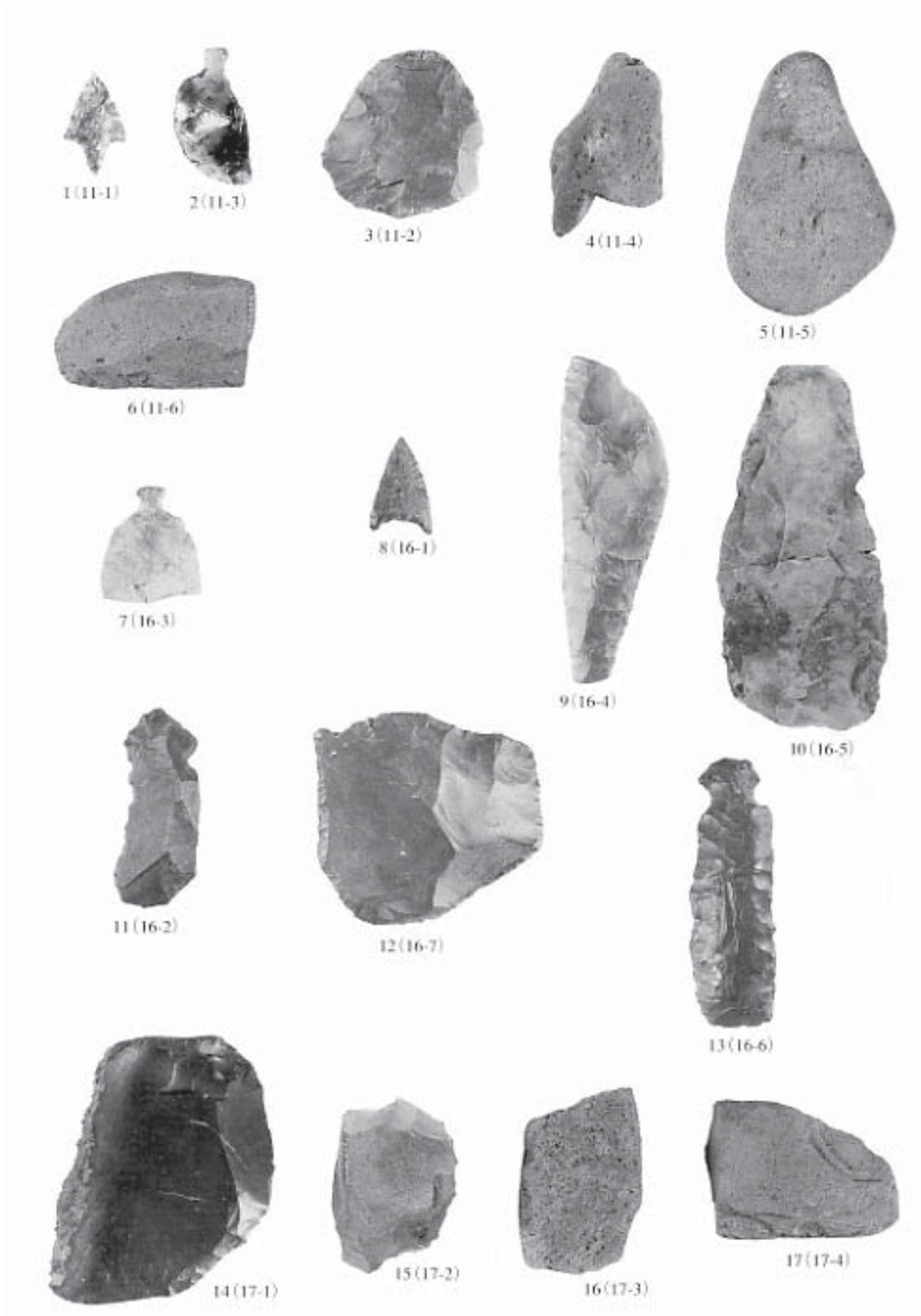


写真 23 A区・B区出土石器

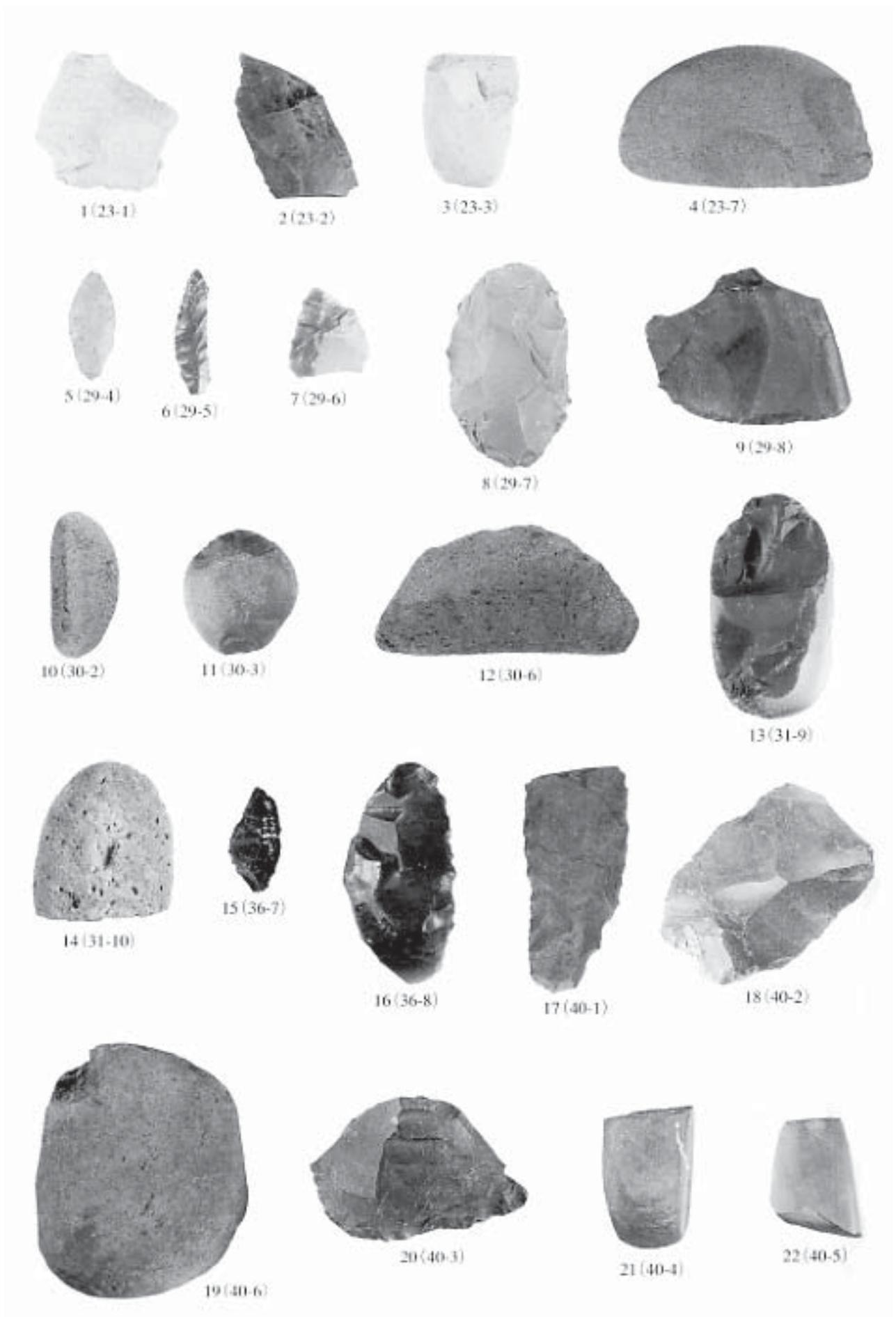


写真24 C区出土石器1

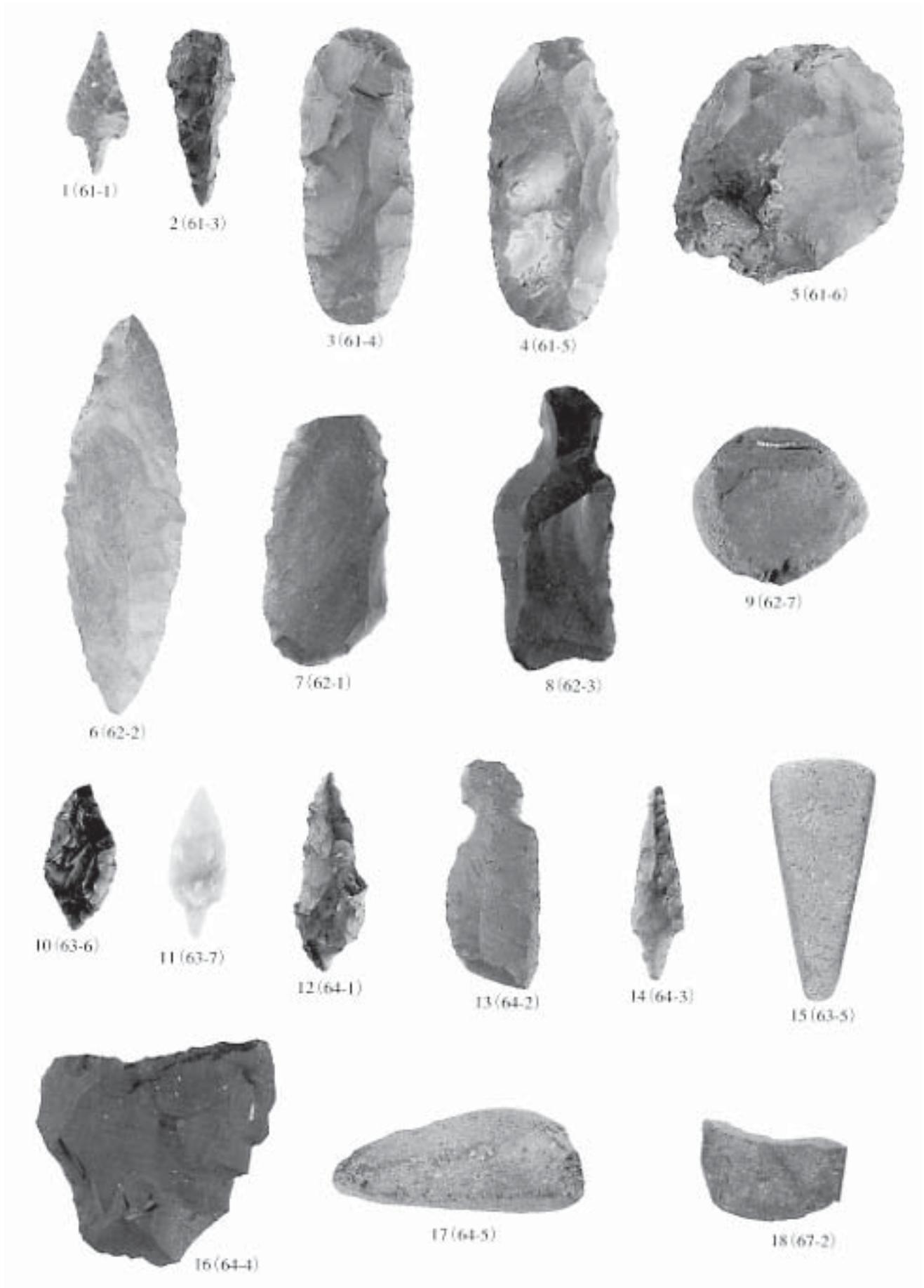


写真 25 C区出土石器 2

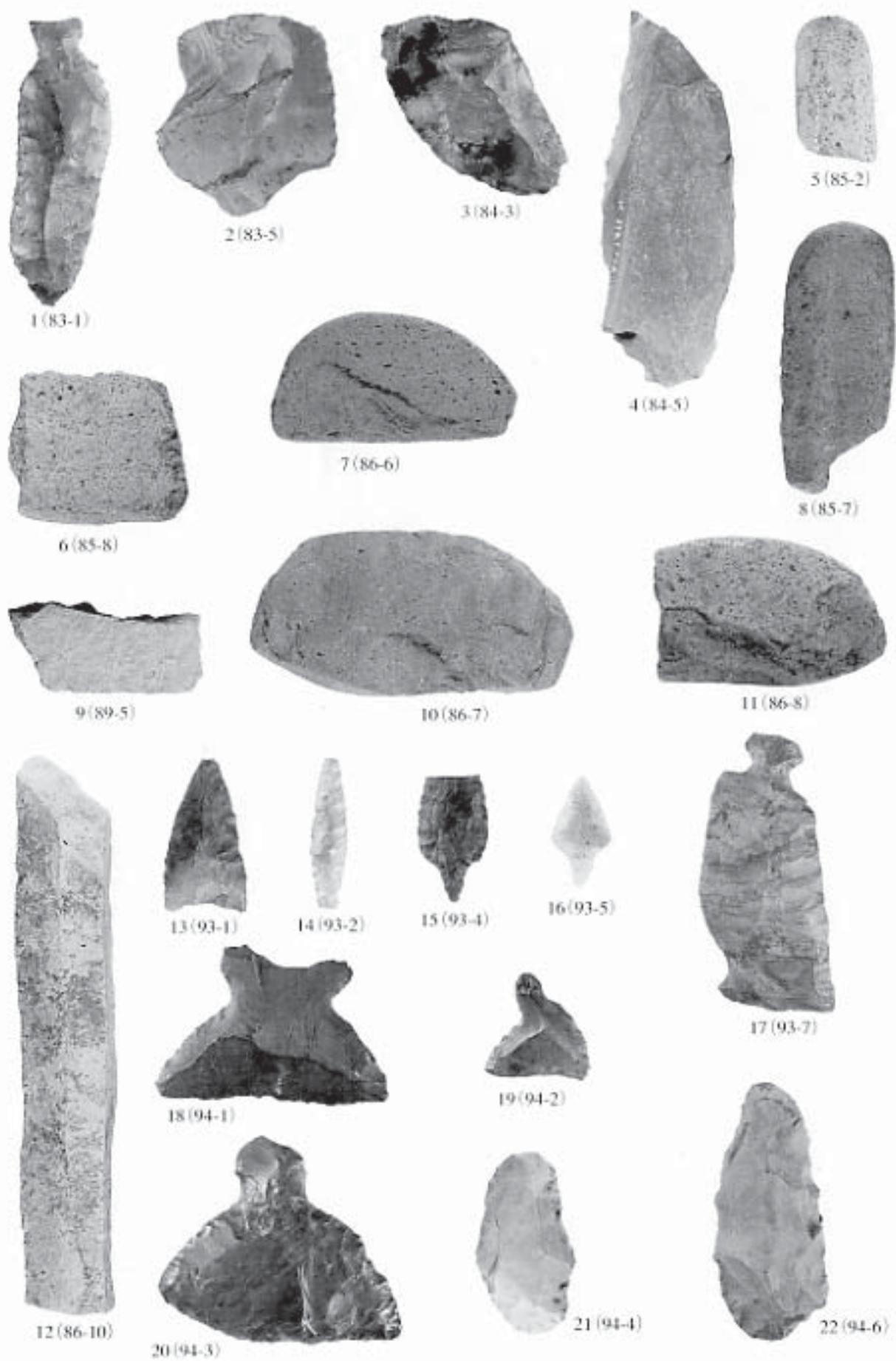


写真 26 C区出土石器 3

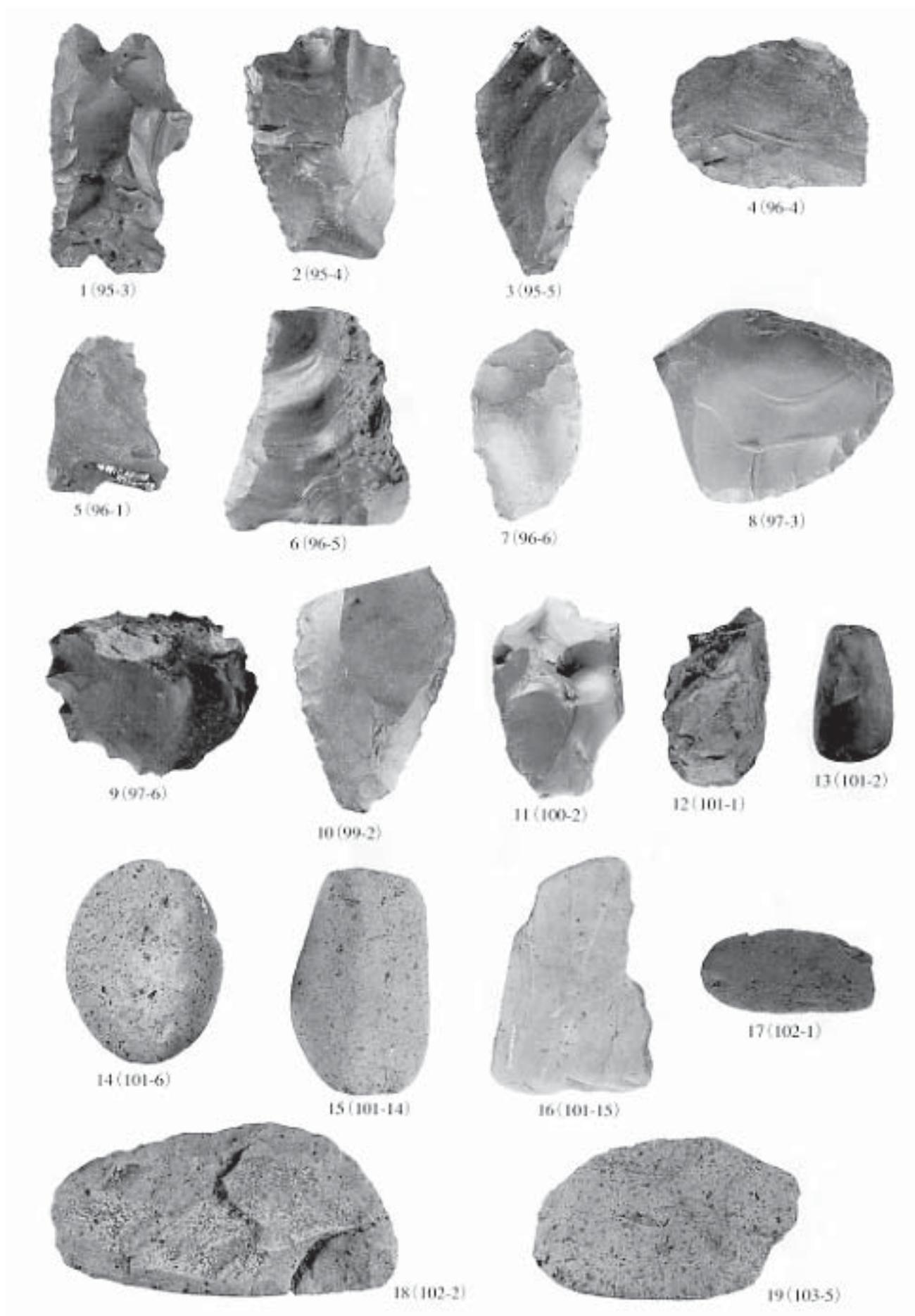


写真 27 C区出土石器 4

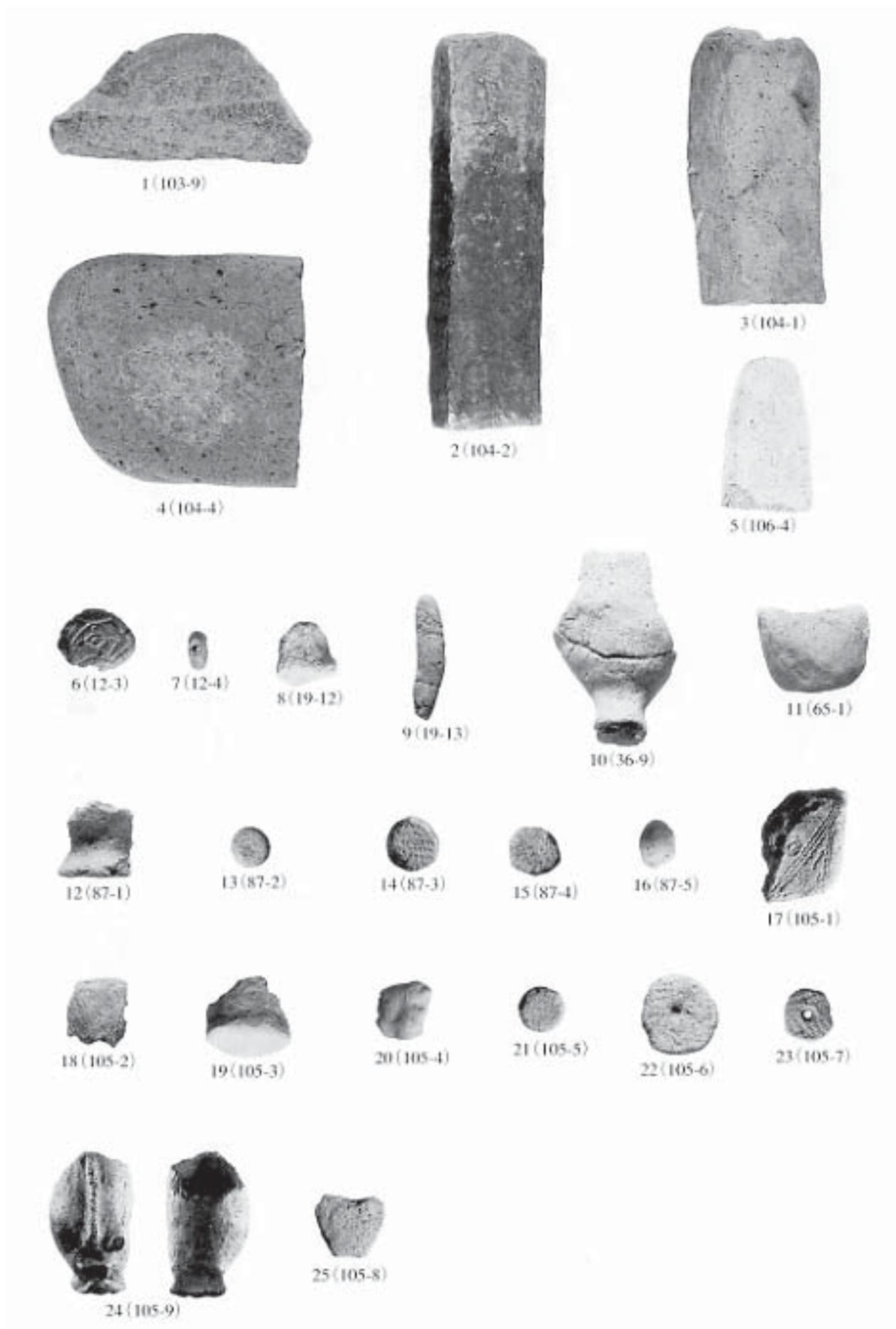


写真 28 C・D区出土石器及びB・C区出土土製品

ふりがな	さくらみねかつこいちいせきはつかつちょうさほうこくしよ							
書名	桜峯 (1) 遺跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	青森市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第36集							
編著者名	小野貴之、沼宮内陽一郎、木村淳一、児玉大成							
編集機関	青森市教育委員会							
所在地	〒030-8555 青森県青森市中央一丁目22-5 TEL0177-34-1111							
発行年月日	西暦 1998年3月20日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				m ²	
さくらみねかつこいち 桜峯 (1)	あおもりけんあおもりし 青森県青森市 よこうちあざくらみね 横内字桜峯 81-10ほか	02201	207	40° 44' 58"	140° 44' 22"	19940511 ～ 1028 (1年次) 19950515 ～ 1031 (2年次) 19960513 ～ 1025 (3年次)	12,343	道路建設 (国道103号横内バイパス改良工事事業) に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
桜峯 (1)	集落跡	縄文	竪穴住居跡 7軒 土坑 54基 埋設土器遺構 11基 柱穴状ピット 20基 遺物集中ブロック 1 溝状遺構 1条	土器 石器 土製品	北陸系土器 二重フラスコ			

既刊埋蔵文化財関係報告書一覧

青森市の文化財	1	1962『三内霊園遺跡調査概報』
〃	2	1965『四ッ石遺跡調査概報』
〃	3	1967『玉清水遺跡調査概報』
〃	4	1970『三内丸山遺跡調査概報』
〃	5	1971『野木和遺跡調査報告書』
〃	6	1971『玉清水Ⅲ遺跡発掘調査報告書』
〃	7	1971『大浦遺跡調査報告書』
〃	8	1973『孫内遺跡発掘調査報告書』
		1979『螢沢遺跡』
		1983『四戸橋遺跡調査報告書』
青森市の埋蔵文化財		1983『山野峠遺跡』
〃		1985『長森遺跡発掘調査報告書』
〃		1986『田茂木野遺跡発掘調査報告書』
〃		1986『横内城遺跡発掘調査報告書』
〃		1988『三内丸山Ⅰ遺跡発掘調査報告書』
青森市埋蔵文化財調査報告書第16集		1991『山吹(1)遺跡発掘調査報告書』
〃	第17集	1992『埋蔵文化財出土遺物調査報告書』
〃	第18集	1993『三内丸山(2)遺跡発掘調査概報』
〃	第19集	1993『市内遺跡発掘調査報告書』
〃	第20集	1994『小牧野遺跡発掘調査概報』
〃	第21集	1994『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第22集	1994『小三内遺跡発掘調査報告書』
〃	第23集	1994『三内丸山(2)遺跡・小三内遺跡発掘調査報告書』
〃	第24集	1995『横内遺跡・横内(2)遺跡発掘調査報告書』
〃	第25集	1995『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第26集	1995『桜峯(2)遺跡発掘調査報告書』
〃	第27集	1996『桜峯(1)遺跡発掘調査概報』
〃	第28集	1996『三内丸山(2)遺跡発掘調査報告書』
〃	第29集	1996『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第30集	1996『小牧野遺跡発掘調査報告書』
〃	第31集	1997『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第32集	1997『桜峯(1)遺跡発掘調査概報Ⅱ』
〃	第33集	1997『新町野遺跡試掘調査報告書』
〃	第34集	1997『葛野(2)遺跡発掘調査報告書』
〃	第35集	1997『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
〃	第36集	1998『桜峯(1)遺跡発掘調査報告書』
〃	第37集	1998『新町野遺跡発掘調査報告書』
〃	第38集	1998『野木遺跡発掘調査報告書』
〃	第39集	1998『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第40集	1998『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
〃	第41集	1998『野木遺跡発掘調査概報』
〃	第42集	1998『熊沢遺跡発掘調査概報』

青森市埋蔵文化財調査報告書第36集

桜峯(1)遺跡発掘調査報告書

発行年月日 平成 10年 3月 20日

発行 青森市教育委員会

〒030-8555 青森市中央一丁目22-5

TEL 0177-34-1111

印刷 東北印刷工業株式会社

〒030-0902 青森市合浦一丁目2-12

TEL 0177-42-2221
